財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第394集

細谷南遺跡
細谷八幡遺跡

国道354号太田バイパス道路特殊改良一種
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

２００７

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第394集

細谷南遺跡
細谷八幡遺跡

国道354号太田バイパス道路特殊改良一種
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

２００７

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

遺跡遠景（南・利根川上空から）

発掘調査前の遺跡を西から望む

序

国道354号線太田バイパスは太田市南部の交通渋滞解消のため計画されたものですが、その東延伸部が着工されることになり、平成13年度から当事業団が発掘調査を実施してきました。その事業用地内には細谷南遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡の４遺跡がありますが、本書ではそのうち細谷南遺跡と細谷八幡遺跡の発掘調査の成果を報告しております。

両遺跡とも集落遺跡であり、細谷南遺跡では古墳時代から奈良・平安時代、細谷八幡遺跡では平安時代の竪穴住居跡を数多く調査しております。得られた成果は本地域の古代史を解明する上で貴重なものであり、今後の研究資料として役立つものと確信しております。

最後になりますが、群馬県県土整備局、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化課、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書の発刊に際し、心から感謝申し上げると共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成19年２月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　高　橋　勇　夫

例　　言

1　本書は、国道354号太田バイパス道路特殊改良（一種）事業に伴って実施された、埋蔵文化財発掘調査の報告書の第１集であり、細谷南遺跡・細谷八幡遺跡の２遺跡を収めた。同事業ではほかに細谷合ノ谷遺跡、福沢新田遺跡の発掘調査を行っているが、これらの遺跡の報告書は第２集として刊行する予定である。

2　細谷南遺跡・細谷八幡遺跡は群馬県太田市細谷町に所在する。

3　遺跡の発掘調査及び整理事業については、群馬県太田土木事務所の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　調査・整理体制及び期間は下記の通りである。発掘調査期間中には同事業の細谷合ノ谷遺跡・福沢新田遺跡の調査を同時に行っている場合がある。

○発掘調査

平成13年度　（細谷南遺跡・平成13年９月10日～平成14年３月31日）

理　事　長　小野宇三郎

調 査 担 当　高井佳弘・庭山邦幸・斎藤利子・橋本　淳

事　務　局　吉田　豊・赤山容造・水田　稔・津金澤吉茂・佐藤明人・柳岡良宏・田中賢一

平成14年度　（細谷八幡遺跡・平成15年１月８日～平成15年３月31日）

理　事　長　小野宇三郎

調 査 担 当　池田政志・小保方香理

事　務　局　吉田　豊・神保侑史・能登　健・真下高幸・佐藤明人・笠原秀樹・柳岡良宏・中澤恵子

平成15年度　（細谷八幡遺跡・平成15年７月１日～平成16年１月31日）

理　事　長　小野宇三郎

調 査 担 当　今井和久・平方篤行・森田真一

事　務　局　住谷永市・神保侑史・平野進一・真下高幸・中沢　悟・笠原秀樹・柳岡良宏・北野静美
中澤恵子・金子三枝子

平成16年度　（細谷南遺跡・平成16年６月１日～平成16年12月28日）

理　事　長　小野宇三郎

調 査 担 当　平方篤行・森田真一

事　務　局　住谷永市・神保侑史・平野進一・真下高幸・中沢　悟・笠原秀樹・今泉大作・柳岡良宏
清水秀紀・中澤恵子・金子三枝子

平成17年度　（細谷八幡遺跡・平成17年４月１日～平成17年８月26日）
（細谷南遺跡・細谷八幡遺跡・平成18年１月13日～平成18年２月３日）

理　事　長　小野宇三郎・高橋勇夫

調 査 担 当　石塚久則・柿沼弘之・山田精一・佐藤亨彦・田村　博・森田真一

事　務　局　木村裕紀・津金澤吉茂・平野進一・真下高幸・笠原秀樹・柳岡良宏・中澤恵子

○整理事業

平成17年度　（平成17年８月１日～平成18年３月31日、平成17年12月１日からは２班で実施。）

理　事　長　小野宇三郎・高橋勇夫

整理担当　金井　武・森田真一

整理嘱託員　鈴木幹子

整理補助員　阿部和子・飯田文子・大勝桂子・清水ゆり子・星野智恵美・樋口宣之・丸橋富美子
伊東悦子・関口照子・大竹由美子・狩野清美

事務局　木村裕紀・津金澤吉茂・矢崎俊夫・西田健彦・中束耕志・宮前結城雄・国定　均
相京建史・竹内　宏・石井　清・須田朋子・今泉大作・栗原幸代・吉田有光・清水秀紀
佐藤聖行・今井もと子・内山佳子・本間久美子・北原かおり・狩野真子

平成18年度（平成18年4月1日～平成19年3月31日）

理事長　高橋勇夫

整理担当　高井佳弘

整理嘱託員　鈴木幹子

整理補助員　丸橋富美子・小林町子・関口照子・大竹由美子・狩野清美

事務局　木村裕紀・津金澤吉茂・萩原　勉・西田健彦・中束耕志・笠原秀樹・石井　清・関　晴彦
須田朋子・今泉大作・栗原幸代・斉藤恵利子・柳岡良宏・佐藤聖行・今井もと子
内山佳子・本間久美子・北原かおり・狩野真子

5　調査面積は以下の通りである。

細谷南遺跡　5,530㎡（平成13年度5,324㎡　平成16年度49㎡　平成17年度157㎡）

細谷八幡遺跡　5,951㎡（平成14年度3,242㎡　平成15年度349㎡　平成17年度2,360㎡）

6　遺構の写真撮影は各発掘調査担当者、遺物写真撮影は当事業団主幹佐藤元彦が行った。その他、空中写真は株式会社シン技術コンサルに委託した。

7　プラントオパール分析・テフラ分析については株式会社古環境研究所に委託し、その報告書は第5章第1節・第2節に掲載した。

8　本書の編集、執筆分担は以下の通りである。なお、土器の観察については、坂口一（当事業団主任専門員）の教示をうけた。

編集　金井　武・森田真一・高井佳弘

本文執筆　第4章第2節～第4節　森田真一　　第5章第1・2節　株式会社古環境研究所
第5章第3節　檜崎修一郎　　その他　高井佳弘

遺物観察　細谷南遺跡　金井　武・高井佳弘　　細谷八幡遺跡　森田真一・高井佳弘

9　本遺跡の記録保存資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

10　発掘調査・整理にあたっては、下記の方々・機関にご協力、ご教示をいただいた。記して感謝致します。（敬称略・順不同）

群馬県教育委員会・太田市教育委員会・宮田　毅

凡　　例

1　本文中に使用した方位はすべて国土座標(2002．４改正前の日本測地系)の第Ⅸ系を使用している。グリッド名称は特に遺跡特有のものはもうけず、国土座標系の下３桁（下記・例参照）を用いるが、本文中で遺構の位置を示す場合には国土座標系をそのまま示したところが多い。

例　　X＝29750　Y＝－43100　の場合、750－100

2　調査区名は、細谷南遺跡では調査した順にＡ区～Ｆ区まで、細谷八幡遺跡では３区画に分かれているので北からＡ区～Ｃ区と付けた。区名には特に意味はない。

3　遺構名称・番号は、細谷南遺跡では区に関わらず遺構の種類毎に続き番号を付したが、細谷八幡遺跡では同様な番号を各区毎に付している。このため、細谷八幡遺跡では区が異なると同一番号の遺構ができてしまうこととなったが、その区別のため遺構番号の前に区名を追加して区別することにした。(例　Ａ区の３号住居＝Ａ－３号住居、Ｂ区の３号住居＝Ｂ－３号住居)

4　本書におけるテフラの略号は以下の通り

As－Ａ　浅間山噴出Ａ軽石（天明３年・1783）　As－Ｂ　浅間山噴出Ｂ軽石（天仁元年・1108）

5　遺構図中のスクリーントーンは以下の通りである。その他の場合は各図中に注記した。

焼土範囲

6　遺構・遺物図面の縮尺は基本的には以下の通りであるが、それぞれの場合に適したものを採用した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

竪穴住居・掘立柱建物１/60　竈１/30　土坑・井戸１/40　溝平面１/80か１/100

溝断面１/40か１/50

土師器・須恵器・縄文土器・石器（砥石・石皿等）１/３　紡錘車１/２　土錘・石器１/１

7　遺物写真の縮尺は基本的に実測図と同様とした。

目　　次

口絵・カラー図版
序
例　言
凡　例
目　次
抄　録

第1章　調査の経緯・方法・経過 …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の方法と経過 …… 3
第2章　遺跡をとりまく環境 …… 9
第1節　自然環境 …… 9
第2節　歴史的環境 …… 9
第3章　細谷南遺跡 …… 14
第1節　遺跡の概要 …… 14
第2節　竪穴住居跡 …… 16
第3節　掘立柱建物 …… 79
第4節　土　　坑 …… 88
第5節　溝 …… 102
第6節　井　　戸 …… 124
第7節　ピ ッ ト …… 131
第8節　水 田 跡 …… 134
第9節　自然河川跡 …… 135
第10節　遺構外出土の遺物 …… 137
遺物観察表 …… 140
第4章　細谷八幡遺跡 …… 171
第1節　遺跡の概要 …… 171
第2節　A区の調査 …… 172
1　竪穴住居跡 …… 172
2　土　　坑 …… 186
3　溝 …… 198

第3節　B区の調査 ……204
1　竪穴住居跡 ……204
2　土坑・粘土採掘坑 ……244
3　溝 ……255
4　井　　戸 ……276
第4節　C区の調査 ……278
1　竪穴住居跡 ……278
2　溝 ……279
第5節　遺構外出土の遺物 ……281
遺物観察表 ……284

第5章　自然科学分析 ……305

第1節　群馬県細谷南遺跡における自然科学分析 ……305
1　細谷南遺跡の土層とテフラ ……305
2　細谷南遺跡におけるプラントオパール分析 ……308
第2節　群馬県細谷八幡遺跡の火山灰分析 ……311
第3節　細谷八幡遺跡出土馬骨 ……318

第6章　ま と め ……328

写真図版

付図　1　細谷南遺跡A～D区・細谷八幡遺跡B区全体図（1/200）
2　細谷南遺跡A区全体図（1/100）
3　細谷南遺跡D区全体図（1/100）
4　細谷八幡遺跡A区・C区全体図（1/200）

報告書抄録

書名ふりがな	ほそやみなみいせき・ほそやはちまんいせき
書名	細谷南遺跡・細谷八幡遺跡
副書名	国道354号太田バイパス道路特殊改良一種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	394
編著者名	金井武/森田真一/高井佳弘
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20070228
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2

遺跡名ふりがな	ほそやみなみいせき
遺跡名	細谷南遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしほそやまち
遺跡所在地	群馬県太田市細谷町
市町村コード	10205
遺跡番号	0036
北緯（日本測地系）	361604
東経（日本測地系）	1392112
北緯（世界測地系）	361615
東経（世界測地系）	1392100
調査期間	20010910-20020331/20040601-20041228/20060113-20060203
調査面積	5530
調査原因	道路建設工事
種別	集落
主な時代	古墳/奈良/平安
遺跡概要	集落－古墳－竪穴住居－土師器＋須恵器／集落－奈良＋平安－竪穴住居＋掘立柱建物＋土坑＋溝－土師器＋須恵器＋灰釉陶器
特記事項	平安時代の溝から土器が多数出土

遺跡名ふりがな	ほそやはちまんいせき
遺跡名	細谷八幡遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしほそやまち
遺跡所在地	群馬県太田市細谷町
市町村コード	10205
遺跡番号	0395
北緯（日本測地系）	361604
東経（日本測地系）	1392127
北緯（世界測地系）	361615
東経（世界測地系）	1392115
調査期間	20030108-20030331/20030701-20040131/20050401-20050826/20060113-20060203
調査面積	5951
調査原因	道路建設工事
種別	集落
主な時代	平安
遺跡概要	集落－平安－竪穴住居＋土坑＋溝－土師器＋須恵器
特記事項	9世紀後半を中心とした短期間の集落跡

第１章　調査の経緯・方法・経過

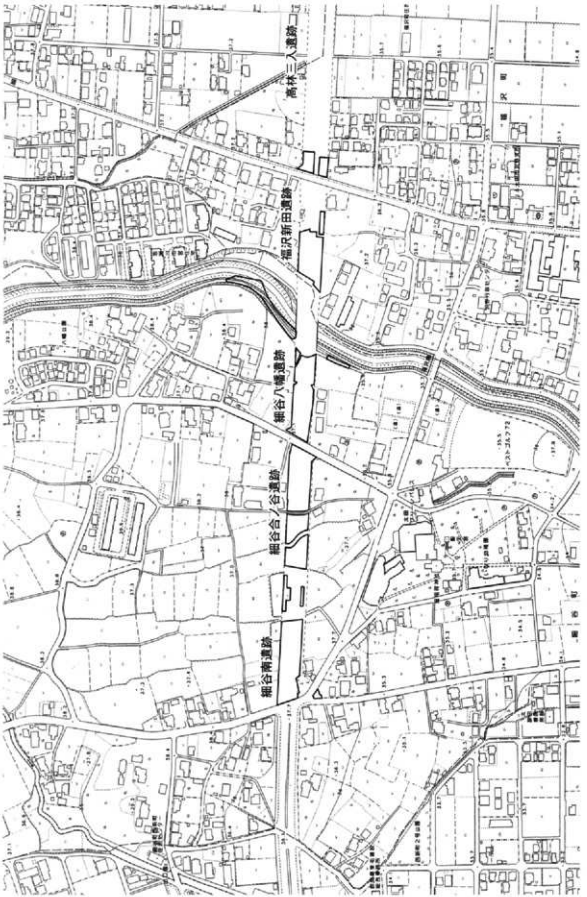
第１節　調査に至る経緯

太田市の南部を走る国道354号太田バイパスは、1981年に市道細谷・牛沢線以西が開通していたが、その東側延伸部分の建設が群馬県土木部によって計画され、平成11年度に県教育委員会文化財保護課（現文化課）に埋蔵文化財についての照会があった。文化財保護課では平成12年２月に、事業対象地のうち用地買収の終了した西端部分の試掘調査を行ったところ、住居跡などの遺跡の存在を確認したため、本調査が必要と判断した。事業対象地は東西約700mに及び、遺跡は西側から細谷南遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡に分けられ（第２図）、それらの調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団が行うこととなった。

本調査は、試掘調査の結果を受けて、平成13年度にはまず事業用地の最も西側にある細谷南遺跡の調査から開始し、次いで年度末に最も東側の福沢新田遺跡の発掘調査に着手した。この福沢新田遺跡は平成14年度にも継続して調査を行った。その後、用地買収の進捗に伴い、平成14年度は細谷八幡遺跡、平成15年度は福沢新田遺跡、細谷八幡遺跡、細谷合ノ谷遺跡の３遺跡、平成16年度は福沢新田遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷南遺跡の３遺跡、平成17年度は細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡、細谷南遺跡の３遺跡の発掘調査を行った。

なお、本事業の東側延伸部は（都）3.3.2東毛幹線道路改良事業であり、それに伴う発掘調査の成果は、すでに2005年に『高林三入遺跡・八反田遺跡』として当事業団から刊行されている。

第１図　遺跡位置図（１／200,000）　国土地理院20万分の１地勢図「宇都宮」使用



第2図　調査区位置図（1／5,000）

太田市発行　1/2,500地形図69・69（2006）使用

第2節　調査の方法と経過

1　調査の方法

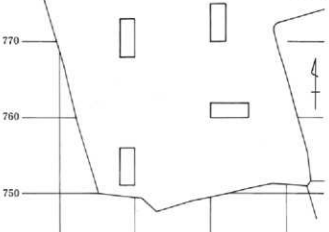
細谷南遺跡

細谷南遺跡の調査は平成13、16、17年度に行われたが、16年度はトレンチ調査、17年度は小面積の調査であり、中心となるのは平成13年度の調査である。

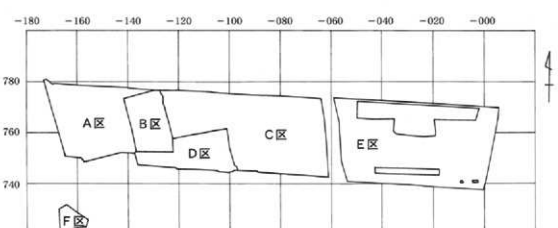
調査対象地は西側から延びる低台地が低地に移行する部分であるが、台地部のうちのかなりの部分が水田造成のために人為的に掘り下げられてしまっている。そのため調査前の地形は、畑の区画（台地上）と、水田の区画（低地）とが、大きな段差をもちながら隣接する地形となっていた。そのために平成13年度の調査はそれぞれの区画を単位として行うこととし、便宜的にA～E区と呼称することとして調査を進めた(第4図)。平成17年度の調査区は南に少し離れており、ここはF区と名付けることにした。

調査方法は特殊な点はなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

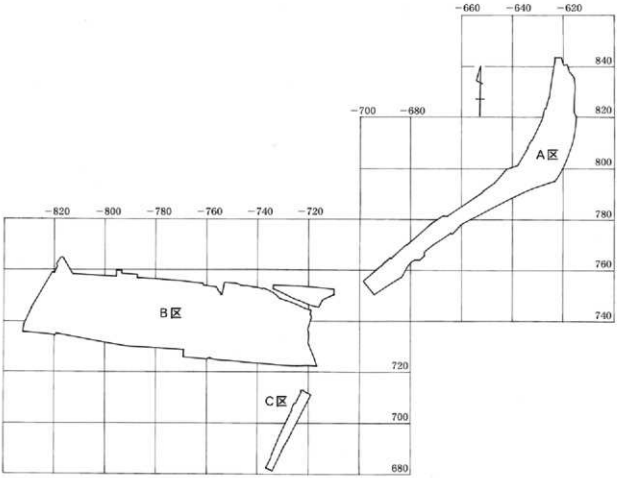
表土除去は基本的にバックホーを用いた。表土除去終了後は遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は住居跡、掘立柱建物のほか、土坑、溝、ピットであり、それぞれに適した方法を用いた。遺構名は調査区にかかわらず、全て続き番号で表した。遺構の平面実測は基本的に平板を用いて行い、縮尺は1/10、1/20、1/40を遺構の性格に合わせて適宜使



第3図　細谷南遺跡　旧石器試掘トレンチ配置図（1／500）



第4図　細谷南遺跡　調査区・グリッド設定図（1／1,500）



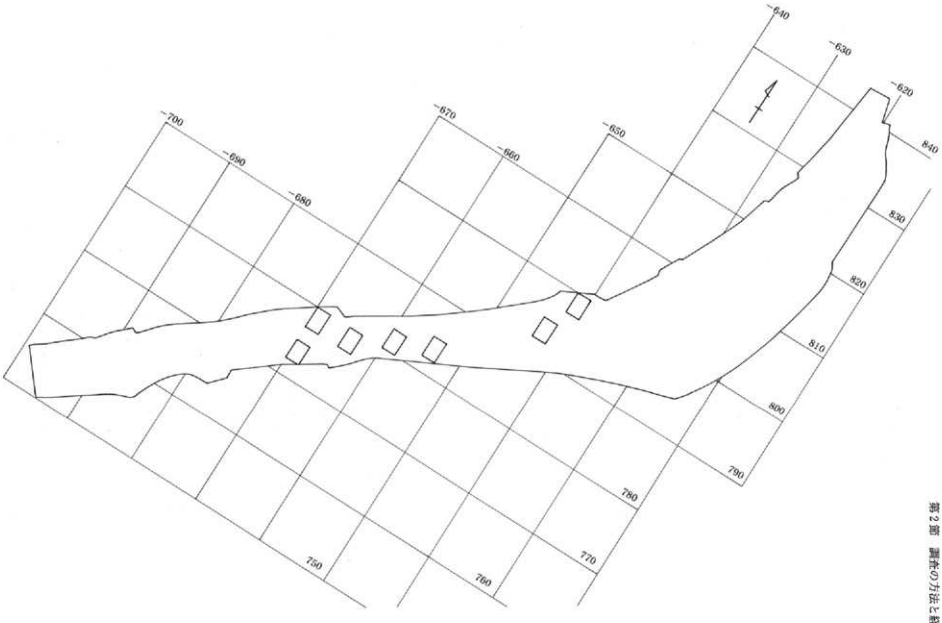
第５図　細谷八幡遺跡　調査区・グリッド設定図（１／1,500）

用した。調査に用いたグリッドは遺跡特有のものを設定することはせず、国土座標Ⅸ系（旧国土座標系）を用い、Ｘ・Ｙ座標について、その下３桁を用いて表すことにした（例Ｘ＝29700、Ｙ＝－43100の場合、700-100）。遺構調査終了後、ロームの残りの良好なＡ区については旧石器の試掘調査を行った（第３図）が、遺物は出土しなかった。遺構写真の撮影は、35㎜モノクロとリバーサルを併用し、適宜６×７版モノクロも撮影した。平成13年度のＡ区全景については、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

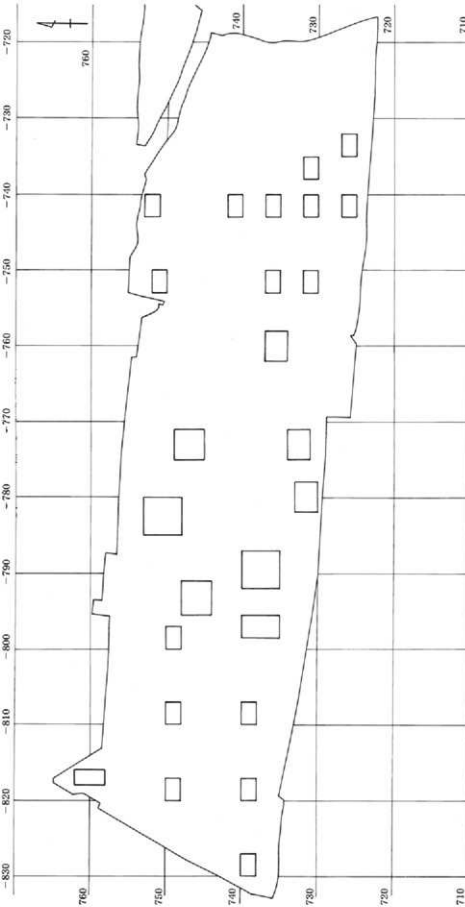
細谷八幡遺跡

細谷八幡遺跡の調査は用地買収の進展を待ちながら、平成14年、15年、17年の各年度に行った。調査対象地は蛇川の河川改修部分とバイパス本体部分に分かれているほか、全体を数回に分けて調査している。それぞれの調査区の呼び名については、各年度で便宜的に付けているが、本報告書ではそれらを整理して、Ａ～Ｃ区と呼称することにした（第５図）。地形的にはほぼ全域が平坦な台地上にあり、細谷南遺跡のような地形の変化はない。

調査方法は基本的に細谷南遺跡と同様であり、大きく異なる部分はない。遺構の平面実測の大部分は測量業者に委託した。旧石器の試掘調査は、Ａ区とＢ区とで行った（第６・７図）が、遺物は出土しなかった。ロームに含まれる火山灰の同定については、株式会社古環境研究所に分析を依頼し、その結果は第５章に掲載した。また、Ｂ区の17年度調査区部分では、６×７版のリバーサル写真の撮影も行っている。



第6図　細谷八幡遺跡A区　旧石器試掘トレンチ配置図（1／500）



第7図　鋳谷八幡遺跡B区　旧石器試掘トレンチ配置図（1／500）

2　調査の経過

平成13年度

平成13年度の調査は細谷南遺跡のみである。

既に開通済みの354号線バイパスが市道に突き当たる部分を西端とし、そこから東へ約180m分で行った。プレハブ用地の選定・整地・建設などの準備作業を9月中に行い、現場における作業は10月1日より開始した。10月1日は機材搬入作業を行い、重機による表土掘削は翌2日より開始した。重機や作業員の進入路の関係から、調査は西側に位置するA区の西端部から始めた。この部分は低台地上で畑地として利用されていた場所であるが、遺構確認面はかなり浅く、そのため後世の攪乱が数多く入り、遺構の残存状態はきわめて悪かった。9日からは作業員を入れての本格作業を開始し、遺構確認作業を行い、確認された遺構から順次調査を開始した。このA区は低台地上ではあるものの、水はけが悪く、しかも10月中は雨が多かったため、水中ポンプによる排水作業にかなりの時間を取られることとなった。調査は、まず後世の攪乱を片付け、中世以降と思われる溝を掘り下げ、それらの作業が終了した部分から住居、土坑、ピットなどの調査に入った。

11月20日からは東に隣接する低地部分の表土掘削を開始し、A区の調査と平行してB区、C区西半部の調査を開始した。しかし、この部分は本来低台地であったところが、水田造成のために掘り下げられてしまった部分であり、そのため、遺構の残りはきわめて悪く、ピットや井戸などが疎らに残るだけであった。ただしC区西半部では、その東部で南北の大溝（11号溝）が見つかり、多くの土器が出土した。B区は遺構の数が少なかったため、12月7日には井戸を除いて調査を終了し、その後はA区調査のための排土置き場とした。

南側中央に位置するD区は12月5日より表土除去を開始し、10日から遺構確認作業に入った。この部分も低台地上であるため、多くの遺構が見られたが、やはり攪乱が数多く入り、遺構の残存度は悪かった。

D区の表土除去作業に引き続き、12月10日からE区北端部の表土除去を行った。調査区に沿って幅5～7mのみ表土を除去し調査を行ったが、明確な遺構は見られなかった。中央部付近でAs－Bの純層が見られ、プラントオパール分析（第5章第1節）の結果からも、その下層に水田跡があったものと思われるが、残っていた範囲がきわめて狭く、畦と思われる高まりも確認できなかった。さらに北端に幅1mのトレンチを入れ、下層を調査したところ、中央に南北方向の溝状の遺構があることが分かった。（この溝状の遺構については、3月1日から調査を行い、自然河川跡であることを確認した。）

平成14年は1月7日から開始した。A区・D区は引き続き遺構の調査を行い、C区は東半部の表土除去を開始した。C区東半部はAs－B下水田の耕土と思われる黒色土が広く残っており、その下層にも遺構の存在が予想されたため、2面調査となった。1面目の調査は1月24日まで行い、25日からは2面目の調査に移った。2面には掘立柱建物1棟のほか、井戸、ピット、溝などの遺構が見つかったが、基本的には低地部であるため、遺構の数は多くなかった。

A区は1月31日に全体の空撮を行い、その後補足調査と実測、井戸の調査を行った。井戸については原沢ボーリング株式会社に委託し、A区からB、C区までの8基の調査を2月8日から行った。これらの調査が終了した後、3月5日より旧石器時代の試掘調査を行い、調査は終了した。

D区はA区・C区の調査を優先するために断続的に調査を行ったが、2月20日以降はここを中心として作業を行い、3月13日には測量を含めてすべての作業を終了した。なお、調査が終盤に差し掛かった2月23日には、地元の方々の要望により、現地説明会を行った。見学者は56名であった。

埋め戻し作業は2月20日から27日までC区で行った後、3月14日より全域で行った。その後、プレハブの撤去、農地への復旧作業を行い、現地での調査

は３月26日にすべて終了した。

平成14年度

平成14年度は細谷八幡遺跡の調査のみである。

調査は河川改修部分のＡ区から開始した。平成15年に入って準備作業を行い、１月28日に北側から表土除去を開始した。遺構確認は31日から開始し、初日から住居２軒、溝１条のほか、土坑多数を確認した。２月３日からは遺構の調査に着手し、遺構確認の範囲は順次南側に移行した。表土除去は４日で終了し、以後遺構の調査に専念した。本線部分にあたるＢ区は、東半分が14年度の調査範囲である。２月14日にトレンチを入れて土層を確認し、18日より表土除去を開始した(24日終了)。Ｂ区の遺構確認は19日から行い、遺構調査は26日に着手した。以後Ａ区とＢ区とを並行して調査した。その後、Ａ区北西に調査区が追加となり、３月５・６日に表土除去を行い、直ちに遺構確認、遺構調査を行った。旧石器の試掘調査は、Ａ区では３月12日から、Ｂ区では21日から開始し、遺構調査と並行して行ったが、旧石器時代の遺物の出土は全くなかった。遺構調査はＡ区が３月20日、Ｂ区が24日に終了し、当年度の調査が終了した。

平成15年度

平成15年度は細谷八幡遺跡Ｃ区の調査を行った。

この年度の調査は７月１日から翌平成16年１月31日まで、福沢新田遺跡、細谷合ノ谷遺跡の調査を主として行い、そのうち細谷八幡遺跡は９月16日から10月６日までの期間に調査した。

９月16日に表土除去を行った後、17日から遺構確認作業を開始した。多くの攪乱が入り、遺構の残りはよくなかったが、竪穴住居１軒と溝３条を確認し、直ちに調査に入った。これらの遺構の調査は10月２日に終了し、６日に埋め戻しを行った。

平成16年度

平成16年度は細谷南遺跡で試掘調査を行った。

この年度は６月１日から12月28日まで、主に福沢新田遺跡、細谷合ノ谷遺跡を調査した。その間、細谷南遺跡Ｅ区の新たな買収地に対して、遺構確認のため試掘調査を行った。その位置はＥ区南東部隅であり、第４図右下隅に小さく示した地点である。この試掘調査では遺構を全く確認できなかったため、この地区の本調査は必要ないものと判断した。

平成17年度

平成17年度は細谷八幡遺跡Ｂ区西半部、細谷南遺跡Ｆ区の調査を行った。

４月～８月には細谷八幡遺跡Ｂ区西半部の調査を行った。調査の都合上、対象地を東西に二分し、まず西側から調査を行うこととした。現地での作業は、年度当初の準備を経て、４月14日から行い、表土除去は19日から開始し、28日まで継続して行った。遺構確認は19日に着手し、確認できた遺構から順次調査に入った。遺構調査は５月中旬にはほぼ終了し、23日からは旧石器の試掘調査も並行して行った。その結果、旧石器は全く出土せず、最後に北壁を中心として一部拡張して遺構調査を行い、27日には調査を終了した。埋め戻しは６月１・２日に行った。

６月からは東側（Ｂ区の中央部分にあたる）の調査に入り、表土除去は３日から８日まで行った。遺構調査は西側調査区隣接部から着手し、随時東側に広げていった。遺構の数は多くなかったが、攪乱が非常に多く、調査は難航した。29日からは福沢新田遺跡６区の調査が開始され、以後２遺跡を並行して調査することになった。７月は降雨、台風で現場作業が遅れる場合もあったが、７月末には遺構調査をほぼ終了し、８月には旧石器の試掘調査を行った。その結果、旧石器は出土せず、18日には現場での作業を終了した。以後撤収作業を行った。

細谷南遺跡Ｆ区の調査は平成18年１月13日より開始した。表土除去は13・16日に行い、16日から遺構確認・調査を開始した。調査は27日に終了し、以後全景写真撮影、全体平面実測、旧石器試掘調査（遺物出土なし）を行い、２月２日に撤収した。

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　自然環境

太田市は群馬県の南東部に位置している。関東地方北部の山地が関東平野に移行したところにあるので、市域の大部分は平坦な地形であるが、中央部には金山・八王子丘陵が突出している。南北には西・北部から流れ下る大河川、すなわち、利根川と渡良瀬川があり、これが埼玉県、栃木県との県境になっている。地形的には、この金山・八王子丘陵を中心として、西側は大間々扇状地、南側は台地と谷底平野とが広がり、さらに南には利根川が東西に流れている（第８図）。

太田バイパス関連の４遺跡は由良台地と呼ばれる台地上にあるが、この台地は大間々扇状地の岩宿面といわれる面に相当する。大間々扇状地はみどり市大間々町を扇央として南に広がり、太田市から伊勢崎市にかけての海抜50～60m付近を扇端とする広大な扇状地で、由良台地はその南東端にあたる位置にある。この台地は北西から南東に向かって緩やかに高度を下げるが、遺跡はその南端に近い位置にあり、南東方向には低地が広がっていて、細谷南遺跡東側にも浅い谷が入っている。これらの低地・谷は地形的には谷底平野に分類されている。遺跡の標高は37.7～37.0mで、台地上にはほぼ平坦で起伏が少ない。

第２節　歴史的環境

太田市周辺は多くの遺跡に恵まれ、古くから考古学の調査・研究の盛んだった地域である。特に古墳時代には東国一の規模を誇る天神山古墳を初めとした多くの古墳が存在する。ここでは、細谷南遺跡・細谷八幡遺跡の周辺に限り、各時代の遺跡を概観したい。（以下の記述の中で、遺跡名の前に付いているアルファベットや数字は第９図「周辺の遺跡」の番号と一致している。）

まず旧石器時代については、これまでさほど調査例が多くなかった。しかし太田バイパスの関連調査では、そのうちのいくつかの遺跡で旧石器が出土し、資料が増加している。D福沢新田遺跡では黒曜石製の掻器、黒色頁岩製の石刃、B細谷合ノ谷遺跡では黒曜石製のナイフ形石器が出土している。また、23高林三入遺跡では敷カ所の石器ブロックが検出され、特にB区ではナイフ形石器、石核、剝片が計200点以上出土している。44高林西原古墳群でも石器の出土が３ブロック見られ、まとまった資料が得られている。本書で報告する２遺跡では旧石器の出土はない。

縄文時代の遺跡も多くはない。51梁場遺跡では草創期の爪形文土器が出土している。早期では撚糸文土器が梁場遺跡、古戸遺跡、41牛沢遺跡で発見されている。中期は梁場遺跡で中期後半の埋甕が発見されている。後期は寄木戸遺跡、B細谷合ノ谷遺跡などがあり、このうち細谷合ノ谷遺跡で後期前葉の竪穴住居、埋甕などが確認されている。細谷南・細谷八幡の両遺跡では縄文時代の土器・石器が出土しているが、遺構は見られないので、周辺に遺跡の存在が推定される。

弥生時代の遺跡は少なく、この地域のひとつの特徴である。この時期の土器片が見つかることはあるが、遺構は確認されていない。

古墳時代は、数多くの遺跡が存在する。前期の遺跡では、上野地域の古墳時代前期を代表する土器である、石田川式土器の標識遺跡である32石田川遺跡がある。昭和27年（1952）の石田川河川改修工事に伴う土取り工事によって発見され、緊急調査された。その際、東海系の特徴を示す土器の一群が発見され、「石田川式」と命名された。同じく前期の遺跡とし

第8図　周辺地形分類図（1／50,000）

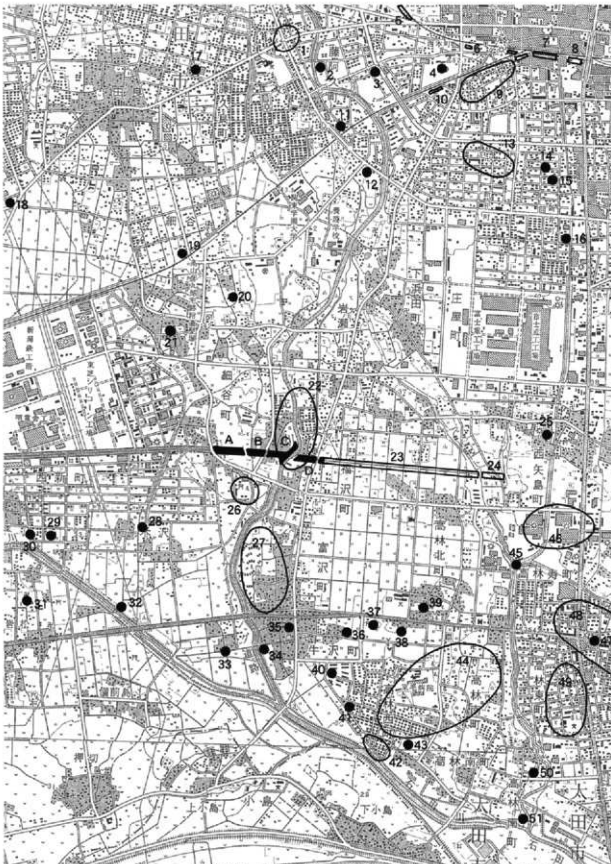
ては、38高林遺跡がある。高林遺跡は昭和34年(1959)に明治大学の大塚初重、小林三郎らによって発掘された遺跡であり、学史的にもよく知られた遺跡である。古墳では、当地域で最初に出現したと考えられている33頼母子古墳がある。円墳あるいは前方後円墳と考えられているが、既に削平されて現存しない。出土遺物には銅鏃30点、三角縁神獣鏡などの銅鏡3面などが知られている。この頼母子古墳の後を受ける古墳としては、37朝子塚古墳がある。本格的な調査は行われていないが、全長124mの前方後円墳であり、4世紀後半のものと考えられている。細谷八幡遺跡の南にある27宮沢古墳群では前期の方形周溝墓や円形周溝墓が確認されている。中期から後期にかけては、この地域には多くの群集墳が営まれる。細谷八幡遺跡に一部重なる位置には22岩瀬川古墳群があり、南近接地には26細谷古墳群がある。本遺跡の南東の高林台地上には、44高林古墳群や48東矢島古墳群がある。前者は帆立貝形古墳や円墳など多数からなり、後者は調査が行われていないが、6基の前方後円墳を中心として多くの古墳があったことが分かっている。その他、6世紀代の1藤阿久古墳群、詳細は不明だが、後期の9浜町古墳群、全て円墳からなる6世紀後半から7世紀代の13新井古墳群などが本遺跡の北から北東に離れてある。このように、本地域には数多くの群集墳があり、県内でも有数の古墳密集地帯ということができる。本遺跡では古墳そのものはなく、ごく少数の埴輪片が出土しているだけである。古墳時代の集落跡の調査は3舞台A・D遺跡、12川窪遺跡、50高林梁場遺跡などがある。細谷南遺跡の集落は古墳時代前期から始まっている。

奈良・平安時代では、東矢島古墳群の中に47東矢島廃寺があることが特筆される。この付近には東山道武蔵路が通っていると推定されるので、古代では要衝の地であり、そこに古代寺院が建立されていることはきわめて重要な事実である。大きな古墳群の存在は、そのような有力者の存在があったからだと思われる。しかし、東矢島廃寺は瓦の出土が知られているのみで、遺構は全く不明であり、現在ではその位置すら明確ではなくなってしまっている。集落跡では49高林向野遺跡、50高林梁場遺跡などが調査されている。なお、東山道武蔵路の有力な推定地が24八反田遺跡として調査されたが、そこには道路跡が発見されず、まだ武蔵路の位置は確定していない。

中近世ではこの地域にも多くの館、城の跡が知られている。本遺跡の近くには15新井館跡、25矢島館跡、31岩松館跡、34午沢館跡、45高林城跡があり、25、31、34の存続期間は16世紀である。堀や土居、戸口などが残っているものもあるが、残存状態はいずれもよくない。太田バイパス関連の各遺跡では、福沢新田遺跡で中近世の遺物が数多く出土するものの、細谷南遺跡、細谷八幡遺跡では数が少ない。ただし細谷南遺跡の台地部で見つかっている溝の多くは中近世まで遡ると思われ、その時代の屋敷などの区画である可能性がある。

参考文献（番号は遺跡一覧表の「主な文献」に一致）

(1)　『考古学集刊第3巻下』東京考古学会　1968
(2)　尾崎喜左雄・今井信夫・松島栄治『石田川』1968
(3)　『高林162号古墳報告書』　太田市教育委員会　1969
(4)　『群馬県遺跡台帳東毛編』　群馬県教育委員会　1971
(5)　『米沢二ツ山古墳』　群馬県教育委員会　1971
(6)　『沢野村第63号墳発掘調査概報』太田市教育委員会　1977
(7)　『群馬県史資料編3』　1981
(8)　『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会　1989
(9)　『群馬県史通史編』群馬県　1990
(10)　『太田市文化財地図』太田市教育委員会　1991
(11)　『西原古墳群』東毛病院沿舎遺跡調査会　1993
(12)　『埋蔵文化財発掘調査年報4』太田市教育委員会　1994
(13)　『市内遺跡X』太田市教育委員会　1994
(14)　『太田市史通史編・原始古代』太田市　1996
(15)　『年報20』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
(16)　『群馬県文化財情報システム』群馬県教育委員会　2001
(17)　『年報21』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
(18)　『梁場遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(19)　『年報・鳥山下遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(20)　『年報22』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(21)　『年報23』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004
(22)　『高林三入遺跡・八反田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(23)　『浜町遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(24)　『年報24』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(25)　『塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
(26)　『高林西原古墳群』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006



第９図　周辺の遺跡（１／25,000）

国土地理院２万５千分の１地形図
「上野場」「足利南部」「深谷」「妻沼」使用

第１表　周辺の遺跡

	遺跡名	主な時代	遺構の内容	主な文献
A	細谷南遺跡	古墳～平安	古墳・奈良・平安の竪穴住居。	本書
B	細谷合ノ谷遺跡	旧石器・縄文～平安	旧石器ナイフ形石器。縄文後期竪穴住居、埋甕、土坑。	(21)(24)
C	細谷八幡遺跡	奈良・平安	奈良・平安の竪穴住居。	本書
D	福沢新田遺跡	旧石器～中世	旧石器黒曜石製の掻器。平安竪穴住居。中世溝。	(20)(21)
1	藤阿久古墳群	古墳	径15mほどの円墳が多く、横穴式石室か。６世紀代。	(14)
2	藤阿久大道北遺跡	古墳	古墳時代の竪穴住居。	(10)
3	舞台Ａ・Ｄ遺跡	古墳後～平安	古墳後期の大規模集落。	(14)
4	稲荷山古墳	古墳	径20mの円墳。形象埴輪は太田高校で保管。	(14)
5	三島木遺跡	縄文・奈良・平安・中世	奈良・平安の土坑、中世の掘立柱建物。	(25)
6	稲荷前遺跡	平安	平安時代の竪穴住居。	(25)
7	浜町遺跡	古墳・平安	古墳～平安の竪穴住居。中世の溝、井戸。	(23)
8	宮内遺跡	縄文～中世	縄文前期包含層。古墳～平安の竪穴住居。	(25)
9	浜町古墳群	古墳	古墳後期。詳細不明。	(16)
10	塚畑遺跡	縄文・古墳・平安	縄文中期土坑。古墳～平安の竪穴住居。	(25)
11	舞台Ｃ遺跡	古墳後期	古墳後期の集落。	(14)
12	川窪遺跡	古墳前～平安	古墳前～後期、及び平安の集落跡。	(14)
13	新井古墳群	古墳	６世紀後半から７世紀にかけての古墳群。八幡神社古墳は横穴式石室。	(14)
14	五（御）殿稲荷古墳	古墳	円墳。	(４)
15	新井館跡	中世	館跡。	(８)
16	稲荷塚古墳	古墳	全長50mの前方後円墳か。刀、馬具、玉、鈴など。	(14)
17	天狗林遺跡	古墳	古墳時代後期の集落。	(12)
18	五反田遺跡	古墳	前期竪穴住居。	(14)
19	細谷清川遺跡	古墳	古墳時代の集落。	(16)
20	細谷東遺跡	古墳・奈良	古墳・奈良の集落。	(16)
21	細谷中遺跡	古墳～平安	古墳～平安の集落。	(16)
22	岩瀬川古墳群	古墳	後期の古墳群。	(14)
23	高林三入遺跡	古墳	古墳前期～中期の集落。	(22)
24	八反田遺跡	古墳～中世	土坑・溝などを調査。	(22)
25	矢島館跡	中世	堀、土居跡。	(８)
26	細谷古墳群	古墳	冠稲荷神社内に５基が残存。	(４)
27	宮沢古墳群	古墳	前期・後期の集落と古墳群。方形周溝墓や円形周溝墓も。	(14)
28	米沢中遺跡	古墳	前期の遺跡。舟形土製品が出土。	(14)
29	米沢二ツ山古墳	古墳	５世紀後半の前方後円墳。鶏形埴輪。	(５)
30	米沢西遺跡	古墳	前期竪穴住居。	(５)
31	岩松館跡	中世	堀、土居、戸口、櫓台跡。	(８)
32	石田川遺跡	古墳	前期集落。石田川式土器の標識遺跡として有名。	(２)
33	熊母子古墳	古墳	前期古墳（円墳か）。剣鏡30本、剣鏡３面、刀身一振など。	(14)
34	牛沢館跡	中世	堀、土居、戸口跡。	(８)
35	沢野村27号墳	古墳	41mの帆立貝形古墳。５世紀末～６世紀初め。	(14)
36	鍋旭塚古墳	古墳	５世紀前半（沢野村45号墳）の円墳。削平され現存しない。	(14)
37	朝子塚古墳	古墳	４世紀後半の前方後円墳。形象埴輪（家形、盾形）、円筒埴輪。	(14)
38	高林遺跡	古墳	前期竪穴住居、石田川式土器。	(１)
39	沢野村102号墳	古墳	終末期（７世紀前半）の複室構造横穴石室を持つ円墳か。	(３)
40	小谷場古墳群	古墳	戦後削平。『総覧』では17基。中～後期の古墳群。	(14)
41	牛沢遺跡	縄文	縄文早期撚糸文土器。	(14)
42	小谷場遺跡	古墳～平安	平安の竪穴住居（９世紀）。	(14)
43	沢野村96号墳	古墳	後期（６世紀後半）の円墳。	(14)
44	高林古墳群	古墳	古墳時代中期～後期の古墳群。	(11)(14)
45	高林城跡	中世	遺構消滅。	(８)
46	西矢島古墳群	古墳	47号は前方後円墳。他は円墳からなる後期の古墳群。	(14)
47	東矢島廃寺	奈良・平安	古代の瓦出土。寺院跡と推定。	(14)
48	東矢島古墳群	古墳	６基の前方後円墳と多数の円墳からなる後期の古墳群。	(14)
49	高林向野遺跡	奈良・平安	平安の集落、緑釉陶器。	(14)
50	高林窯場遺跡	古墳後期～平安	古墳後期と平安の集落、緑釉陶器。	(13)
51	窯場遺跡	縄文・古墳	縄文草創期爪形文土器、中期埋甕。平安竪穴住居。	(18)

第３章　細谷南遺跡

第１節　遺跡の概要

細谷南遺跡は台地から低地に移る場所にあり、西半部が台地上、東半部が低地となるため、遺構にも各種のものがみられる。

Ａ区・Ｄ区は台地上であり、発掘調査前には畑として利用されていたため、上面の削平が著しく、さらに数多くの攪乱が入っており、遺構の残りはかなり悪かった。この両区で見つかった遺構は竪穴住居38軒、掘立柱建物６棟、土坑36基、溝10条、井戸２基である。

竪穴住居は全域から濃密に見つかっている。最も古いものはＤ区の30号住居であり、３世紀末から４世紀初頭のものと考えられる。次に位置するのはＡ区の９号住居で４世紀後半と考えられ、この２軒が古墳時代前期に遡るものである。その後５世紀代のものは見られないが、６世紀になると住居が急増し、その後９世紀代までのものが大部分を占める。各住居は互いに切り合っているものが多く、さらにその他の遺構や攪乱によって壊されているものがほとんどである。また、削平によって床面まで破壊されているものも数軒あるなど、残りは非常に悪かった。

掘立柱建物はＡ区に４棟、Ｄ区に２棟がある。Ａ区の４棟は２棟ずつ同一場所で建て替えられている。北東側の２・３号掘立柱建物は総柱建物であり、南西側の１・４号掘立柱建物は側柱建物である。柱穴は方形を基本とし、柱痕跡は明確に残っているものが多い。Ｄ区の２棟は調査区の南端近くで見つかったため、一部分の調査にとどまった。西側の５号は３本の柱穴のみしか見つかっていない。東側には柱穴がないのが確認できるので、建物は西側にのびるものと思われる。東側の７号は北・東の２辺が見つかっているのみで、西、南にどれほど延びるかは不明である。以上６棟の掘立柱建物は、柱穴の形態や建物の方向が似ており、かなり近い時期のものであると思われる。

溝は10条あるが、そのうちＡ区の８・９号とＤ区の14号の３本は平安時代に遡る可能性がある。３本ともほかの溝に比べてやや幅が広く、浅い傾向がある。残りの７条は出土遺物などから近世のものと考えられるが、北西隅の５号溝は小面積の調査なので詳細不明である。東西に延びる６・７号溝は約２ｍ離れて並行しており、道路側溝の可能性がある。この２本は狭く浅いが、残る１～４号の４条はいずれも深さがあり、ほかの溝とは性格が異なるものと思われる。走向方向は４本とも近く、また、２～４号は途中で直角に曲がるなど、特徴が似ている。これら４本が組み合って、何らかの区画を形成していた可能性が強いものと思われる。

土坑は数多いが、時期・性格とも不明なものが多い。それらのうち、Ａ区にある26号は中世の火葬土坑であると思われる。Ｄ区の74号は「氷室」と推定されている土坑に類似している。

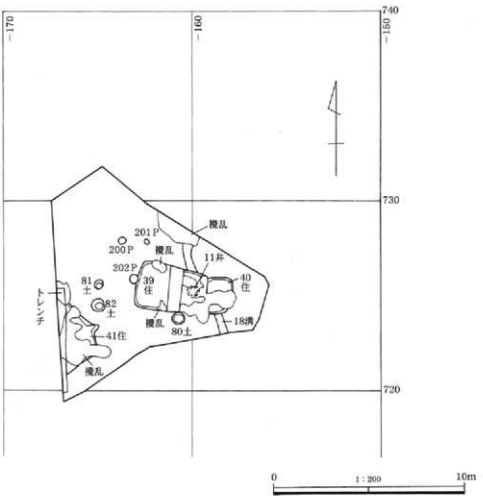
Ｂ区は本来台地であったところが人為的に掘り下げられ、水田として利用されていた部分である。そのため、もともとはＡ区・Ｄ区と同様の遺構が広がっていたものと思われるが、遺構確認面の高さはＡ区・Ｄ区に比べて70～80cmも低くなっているので、浅い遺構は全て削平されてしまったものと思われる。調査できた遺構は５基の井戸のほかはピットのみであった。ピットは70cm以上削平されているわけなので、本来非常に深いピットであり、特別の用途が考えられるが、配置などに規則性は見られず、その性格は明らかにできなかった。

Ｃ区は台地から低地に移行する部分であるが、その西半部は削平を受けて低くされている。この部分も本来はＤ区と同じ高さの台地が広がっていたものと推定される。Ｄ区との確認面の高さの差は40～50

cmほどであるが、本遺跡の竪穴住居はいずれも浅いので、それらはこの削平によって全て削平されたらしく、残っていた遺構は少数のピットのみであった。Ｃ区の中央部には南北方向の11号溝があり、９～11世紀代の遺物が多く出土したが、この付近から低地となり、以東にはAs－Ｂと、その下層の水田耕土とが残っていた。As－Ｂは途切れ途切れに残るだけであるが、Ｅ区の中央部では旧河道のわずかな凹みに３～５cm程度の純層が残っていた。この下層には黒色の粘質土が広がり、水田耕土であると思われる。実際、プラントオパール分析（第５章第１節）の結果、イネが検出されており、この面に水田があったことは確実であるが、Ｃ区で大畦の痕跡らしいものが見られる以外、畦畔などは見つからず、明確な水田跡を確認することはできなかった。Ｃ区ではこの水田耕作土の下面の調査を行ったが、低地にはいってすぐの部分で１棟の掘立柱建物と、井戸２基を確認した。本来このあたりまで集落が広がっていたものと考えられる。

さらに東のＥ区では、前述のAs－Ｂ下水田の耕土が広がるものの、畦畔などは見つからなかった。中央部には南北方向の凹みが見つかり、その下層に自然河川があることが確認できたものの、遺構は見つからず、一部分の調査にとどめることとした。

Ｆ区は南に離れた場所にあり、平成17年度に調査を行った。攪乱が数多く入り残りが非常に悪かったが、竪穴住居３軒、土坑３基、溝１条、井戸１基を調査した。Ａ区・Ｄ区で見つかっている集落の延長部分であると思われる。



第10図　細谷南遺跡Ｆ区全体図（１／200）

第２節　竪穴住居跡

１号住居（第11・12・13図、第５表、PL.２・29）

Ａ区西端中央にあり、西半分が調査区外となる。

位置　Ｘ＝29758～764、Ｙ＝－43165～169

重複遺構　東側の２号住居と重複するほか、１号溝とは南東隅のごく一部が重複している。２号住居とは埋土断面の観察より本住居の方が古く、１号溝とは平面確認によりやはり本住居の方が古いことが確認できた。

形態　西側の大半が調査区外となるため、全体の形態は不明だが、正方形に近い方形になるものと思われる。

方位　Ｎ－63°－Ｅ

規模　(2.34)×4.85m

面積　(5.43) ㎡

壁高　きわめて浅く、深いところでも10cm程度しか残っていない。

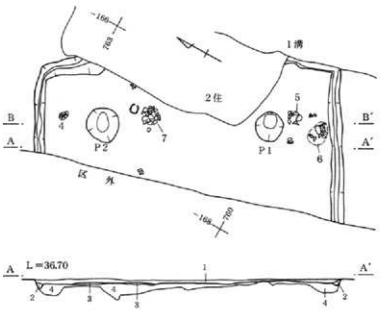
床面　掘方底面から最厚で20cm程度埋め戻し、床面とする。一部にローム土からなる貼り床が残存している。

柱穴　南東隅（Ｐ１）と北東隅（Ｐ２）を確認した。本来は各隅に１本ずつあるものと思われる。Ｐ１とＰ２とは50cm以上の深さがあり、しっかりとした柱穴である。

Ｐ１　径45×43cm、深さ58cm

Ｐ２　径55×52cm、深さ55cm

貯蔵穴　床面の調査では確認できなかったが、掘方の調査で見つかった、住居北東隅の小土坑が貯蔵穴ではないかと思われる。大きさは掘方底面で計測して55×65cmの楕円形であり、深さは13cmである。内部から１の土師器坏が出土している。



１号住居
1　暗灰褐色土　焼土、ローム粒を含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。
3　暗黄褐色土　（貼り床）ローム質の土。固くしまっている。
4　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。

0　1:60　2m

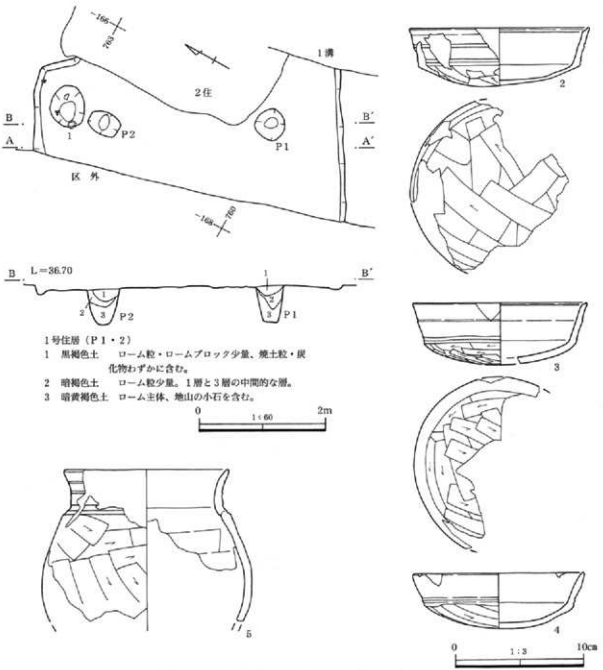
第11図　１号住居平・断面図、出土遺物（１）

周溝　調査した範囲では全周する。幅15～25㎝、深さは５～７㎝であり、明瞭な周溝である。

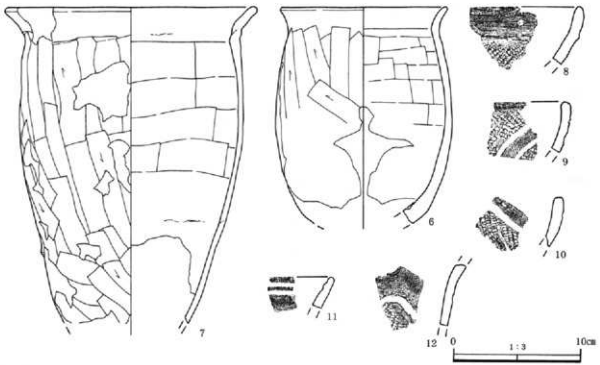
竈　調査した範囲内では見つかっていない。２号住居に近い部分の覆土には、少ないながらも焼土粒が含まれているため、この２号住居で破壊された東壁の中央付近に作られていた可能性が高いものと思われるが、時期のやや近い４号住居は北西向きに作られているので、本住居も北壁に竈がある可能性も残されている。

遺物　床面上に甕を中心とした土器がつぶれる形で出土した。それらのうち、掲載できたのは土師器坏４点、土師器甕３点と混入品の縄文土器片５点である。

所見　出土した土器から、６世紀前半の住居と考えられる。



第12図　１号住居掘方平・断面図、出土遺物（２）



第13図　１号住居出土遺物（３）

２号住居（第14・15図、第５表、PL.２・29）

Ａ区西端中央付近、１号住居の東側にあり、重複関係にある。

位置　X＝29760～764、Y＝－43161～167

重複遺構　西側に１号住居と重複する。中央部には南北方向の１号溝が重複して大きく壊され、住居は東西に分断されている。土層の断面観察から、１号住居より新しく、１号溝よりは古いことが確認できた。

形態　東西に長い長方形である。

方位　N－86°－E

規模　4.22×3.38m

面積　(14.58) ㎡

壁高　１号住居と同様にきわめて浅く、５～10cmしか残っていない。

床面　掘方底面はかなり凹凸があり、そこから暗褐色土を５～20cm埋め戻し、床面を作っている。一部にローム土からなる貼り床が残存し、それは固く締まっていた。

柱穴　確認できなかった。

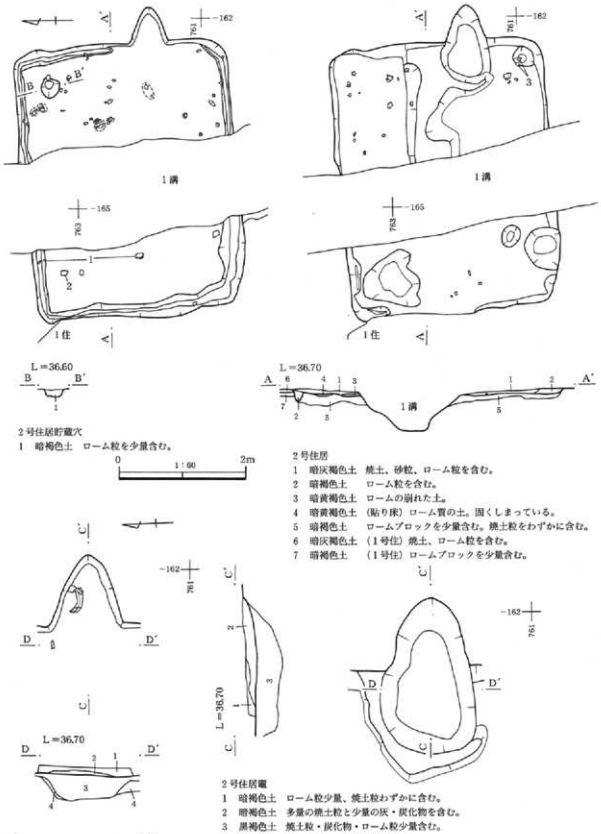
貯蔵穴　北東隅にある小土坑が貯蔵穴である可能性があるが、径約30cmの円形で、深さは10cmと浅く、やや小規模である。

周溝　竈前を除いて全周する。幅は大部分で10～15cmである。南西隅付近のみ30～40cmと広くなってしまうが、これは崩れたためであろう。深さは４～７cmで、南西隅付近はやや深く10cmのところもあり、明瞭な周溝である。

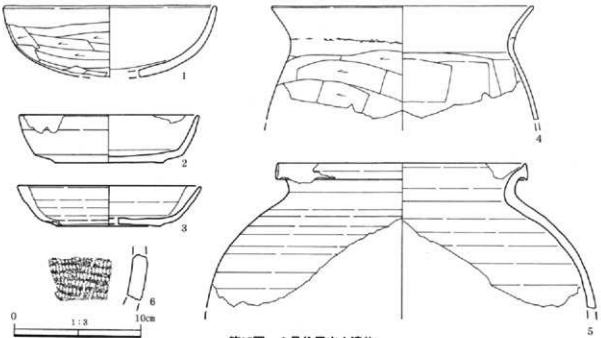
竈　東壁中央やや南寄りにある。焚き口幅53cm、燃焼部長さ58cmである。焼土粒が多く見られ、比較的よく使用されているようである。竈内からは４の土師器甕が出土した。

遺物　床面全体に土器片が散布していたが、掲載できたのは土師器坏１点、須恵器坏２点、土師器甕１点、須恵器甕１点と、混入品の縄文土器片１点である。

所見　出土遺物から、本住居の時期は８世紀後半と考えられる。



第14図　２号住居・掘方・竈平・断面図



第15図　2号住居出土遺物

3号住居（第16・17図、第5表、PL.3・30）

A区西端付近のやや南寄りにある。他の住居との切り合いはない。

位置　X＝29757～761、Y＝－43155～161

重複遺構　北壁に5号土坑、2号井戸が重複。遺構確認時の所見から、本住居の方が古い。5号土坑は本住居を切っているが、深さは掘方よりも浅い。掘方の平面図で切り合い関係が逆転しているように見えるのはそのためである。

形態　東西に長い長方形だが、東壁がやや不整形である。

方位　N－86°－E

規模　5.05×3.01m

面積　(14.40) m²

壁高　遺存状態が悪く、南東隅付近から南壁にかけてはほとんど壁が残っていない。北壁と西壁では比較的残りがいいが、それでも5～10cm程度残っているだけである。

床面　掘方底面は、中央部と、竈から北壁にかけての部分に、土坑状に深くなっているところがあり、それらを埋め戻して床面を作っている。南壁の東端近くに見られる焼土は26号土坑（中世の火葬土坑か）の底部の延長部分である可能性が強く（93ページ）、本来は本住居のものではないと思われる。

柱穴　確認できなかった。

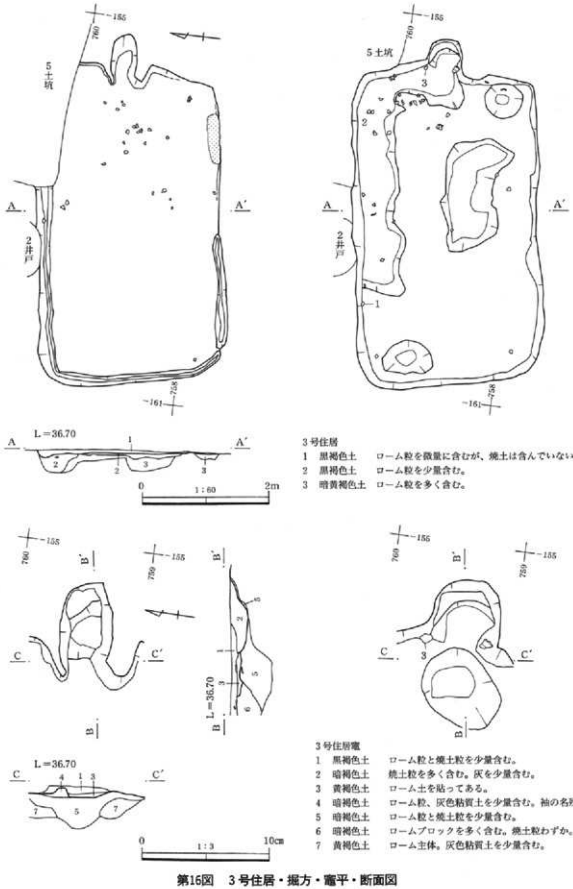
貯蔵穴　床面の調査では確認できなかったが、掘方の調査で住居南東隅部から見つかっている小土坑が、貯蔵穴である可能性があるものと思われる。掘方底面で測って53×60cmの楕円形であり、深さは36cmである。

周溝　北壁、西壁、南壁西半に残っている。本来は全周していたものと思われるが、削平されてしまったらしい。

竈　東壁中央にある。袖の痕跡がかろうじて残っていた。焚き口幅30cm、全長76cmである。

遺物　竈に近い東半部から比較的多くの土器片が出土したが、いずれも小破片であり、掲載できたのは土師器坏2点、土師器甕2点、砥石1点、混入品と思われる石器1点だけである。1の坏はその他の土器と比べてやや時期が古く、8世紀前半に遡る可能性があり、混入品であると思われる。

所見　出土遺物から、本住居の時期は9世紀前半であると思われる。



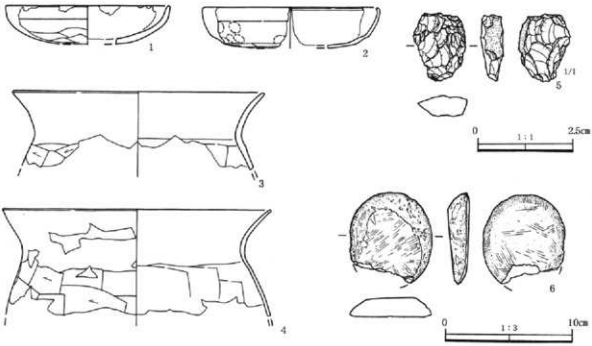
3号住居

1　黒褐色土　ローム粒を微量に含むが、焼土は含んでいない。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　暗黄褐色土　ローム粒を多く含む。

3号住居竈

1　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土　焼土粒を多く含む。灰を少量含む。
3　黄褐色土　ローム土を貼ってある。
4　暗褐色土　ローム粒、灰色粘質土を少量含む。袖の名残。
5　暗褐色土　ローム粒と焼土粒を少量含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。焼土粒わずか。
7　黄褐色土　ローム主体。灰色粘質土を少量含む。

第15図　3号住居・掘方・竈平・断面図



第17図　3号住居出土遺物

4号住居（第18・19図、第5表、PL.3・30）

A区北西隅付近にあり、住居の北隅のごく一部が調査区外となる。他の遺構との切り合いが激しく、かなりの部分を破壊されているが、全体の形はかろうじて分かる。

位置　X＝29773～779、Y＝－43164～170

重複遺構　中央部に1号溝と12号土坑、北東～東側に5号住居、10号土坑が重複する。断面観察・平面観察より、本住居は溝・土坑よりも古く、5号住居よりも新しいことが確認できた。

形態　北隅が調査区外となるが、ほぼ正方形に近い形態であると思われる。

方位　N－43°－W

規模　3.90×4.06m

面積　(16.31) m²

壁高　全体に残りが悪く、5～6cm程度しかないところが大部分である。

床面　南側は地山をそのまま床面とし、北側は掘方底面がやや深く、そこから15cmほど埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

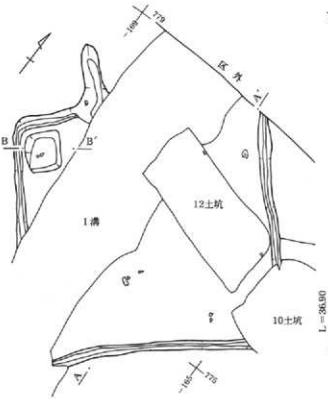
貯蔵穴　住居西隅にある。63×56cmの長方形で、深さは48cmである。内部からは少量の土器が出土しただけである。

周溝　調査範囲内では全周する。幅10～20cmで、深さ5～7cmであり、明瞭な周溝である。

竈　北西壁の中央やや西寄りにある。この方向に竈が確認された住居は本住居のみである。焚き口部分を1号溝に破壊され残りはよくない。左側に袖の痕跡と思われる部分があり、その先端から計測すると全長は120cmである。覆土には焼土が少なかったが、灰が多く含まれていた。2の土師器甕は竈の覆土中から出土している。

遺物　出土遺物は少なく、報告できる個体は土師器坏と甕が1点ずつのみである。その他に混入品の縄文土器片が1点ある。

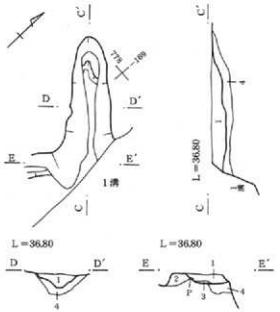
所見　出土遺物が少ないので、時期を確定するのは困難であるが、坏・甕とも6世紀中頃のものであるので、それが本住居の時期であると思われる。

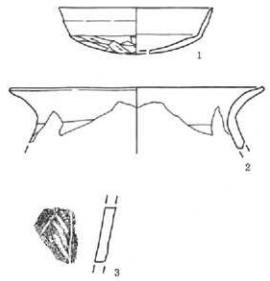


4号住居貯蔵穴
1　黒褐色土　　黄色軽石とローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。
3　暗褐色粘質土　ローム粒をわずかに含む。

4号住居
1　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　　ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　　ロームブロックを少量含む。

0　1:60　2m



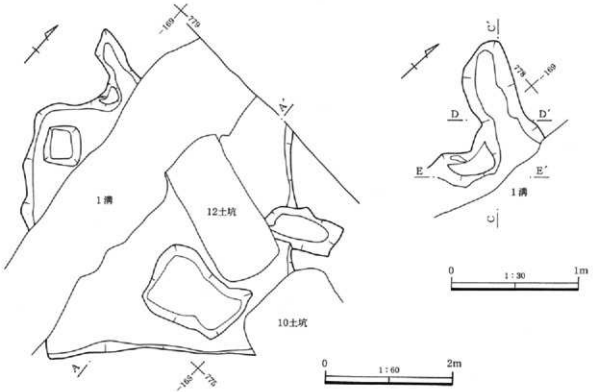


4号住居竈
1　暗褐色土　　焼土粒少量。灰を多く含む。ローム粒わずかに含む。
2　暗褐色土　　焼土粒わずか。ローム粒少量。
3　灰色粘質土　灰を含む。
4　暗褐色土　　粘土粒とローム粒をわずかに含む。

0　1:30　1m

0　1:3　10cm

第18図　４号住居・竈平・断面図、出土遺物



第19図　4号住居掘方・竈平面図

5号住居（第20・21図、第5表、PL.3・30）

調査区北西隅近くにあるが、大部分が調査区外となる上、他の遺構との切り合いも激しかったため、一部分の調査にとどまった。

位置　X＝29777～779、Y＝－43163～167

重複遺構　南西側に4号住居、北東に20号土坑、南東壁中央に24号ピットと重複する。断面観察・平面観察より、本住居はいずれの遺構よりも古いことが確認できた。

形態　北側は調査区外となるほか、南西側は4号住居に切られているため、調査できたのは南西壁のみであり、全体の形態は不明である。

方位　N－62°－E

規模　(1.64)×(1.50) m

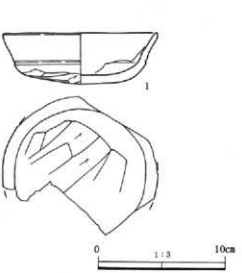
面積　(2.26) m²

壁高　わずか4～5cm程度しか残っていない。

床面　掘方底面から5～12cm埋め戻して床面を作っている。

柱穴　調査区内では確認できなかった。掘方の調査時にも見つかっていないが、小面積の調査にとどまったので、本来なかったかどうかは明らかではない。

貯蔵穴　調査区内では確認できなかった。



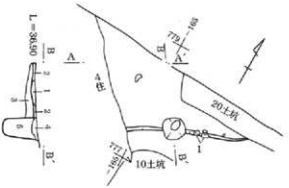
第20図　5号住居出土遺物

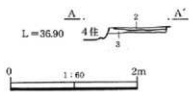
周溝　調査区内では確認できなかった。

竈　調査区内では確認できなかった。

遺物　出土遺物は非常に少なく、報告できる個体は土師器坏1点のみで、それは住居南西壁際から出土した。

所見　出土した坏は6世紀中頃のものと思われ、それがこの住居の時期とすると、西側に重複する4号住居ときわめて近接する時期のものとなる。





5号住居
1　焼土
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
3　褐色土　ローム地山に近い。2層と3層の境が床面になると思われる。
4　黒褐色土　(24号ピット) ローム粒を多く含む。
5　黒褐色土　(24号ピット) ローム粒を少量含む。しまりよい。

第21図　5号住居・掘方平・断面図

6号住居（第22図、第5表、PL.4・30）

A区西端付近の中央にある。他の住居との切り合いはないが、1号溝、6号溝、7号溝の3本の溝に切られ、残りはよくなかった。

位置　X＝29764～769、Y＝－43160～166

重複遺構　西側に南北方向の1号溝、中央部に東西方向の6号溝、7号溝が重複する。7号溝は浅いため、床面は掘り込んでいるものの、掘方底面までは破壊していない。本住居は平面観察によりこれらの溝よりも古いことが確認できた。

形態　北西隅が1号溝に破壊されているものの、長方形であると思われる。

方位　N－57°－E

規模　(4.60)×2.94m

面積　(11.80) m²

壁高　10cm

床面　掘方底面から5～12cm埋め戻し、一部にローム土からなる貼り床を施して床面とする。床面は固く締まり、明瞭である。掘方底面の北半部には粘土が薄く貼られたようになっていた部分があったが、用途不明である。

柱穴　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

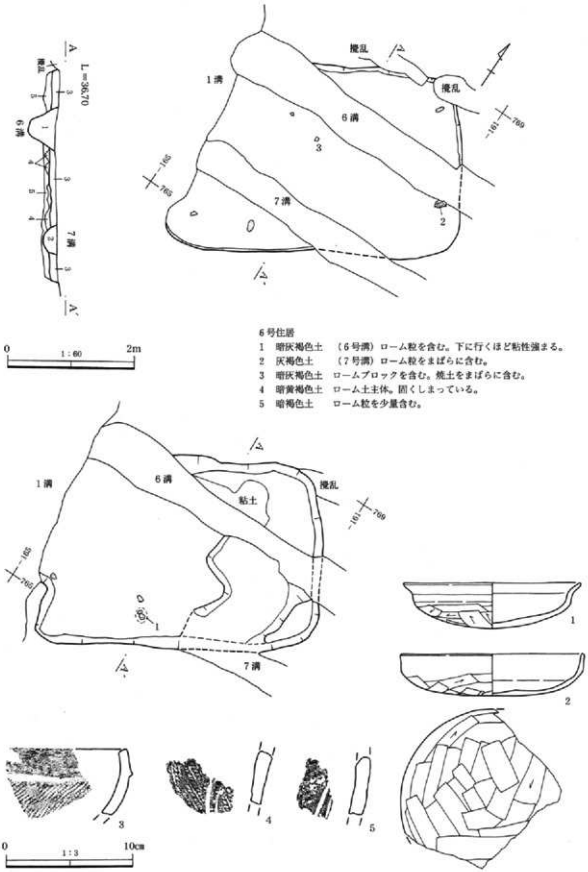
貯蔵穴　確認できなかった。本来存在しなかった可能性もあるが、溝で破壊された部分に存在したことも考えられる。

周溝　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

竈　調査範囲内では確認できなかった。1号溝か6号溝で破壊された部分に存在した可能性が高いが、焼土の散布も少なく、確定できなかった。

遺物　出土遺物は少なく、報告できる個体は土師器坏2点と縄文土器片3点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、土師器が8世紀中頃のものと思われるので、それがこの住居の時期であると思われる。



第22図　6号住居・撹方平・断面図、出土遺物

7号住居（第23図、第5表、PL.4・30）

A区の中央やや東寄りにある。この付近は上面からの攪乱が数多く入り、遺構確認が難しかった。本住居も削平が著しく床面が全く残っていなかったため、掘方のみの調査となった。

位置　X＝29763～768、Y＝－43146～151

重複遺構　北壁に東西方向の6号溝、西半部に南北方向の8号溝と重複するほか、西半部に30号・45号ピット、東半に2号・3号掘立柱建物、南西隅に1号掘立柱建物、南壁に29号ピットが重複する。本住居は6号溝、8号溝とピットよりも古い。掘立柱建物とは、断面観察（A－A′セクション）により、3号掘立柱建物よりも古いことは明らかであるが、1号、2号との新旧関係は確認できなかった。

形態　北壁を6号溝で壊されているため不明であるが、南北にやや長い長方形であると思われる。

方位　N－11°－W

規模　(3.73)×3.86m

面積　(14.72) ㎡

壁高　削平されており、全く残っていない。

床面　削平されており、全く残っていない。確認面から掘方底面までは10～15cmあるので、それ以上の厚さを埋め戻して床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

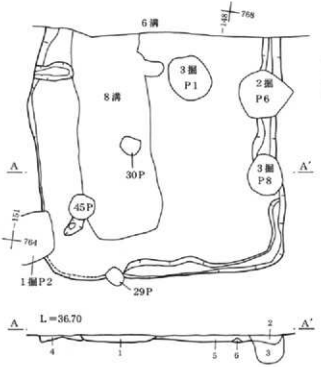
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　東壁・南壁で痕跡を確認した。西壁には同様な痕跡が認められなかったので、全周したかどうかは不明である。規模は掘方底面で測って幅15～30cm、深さは8～14cmである。

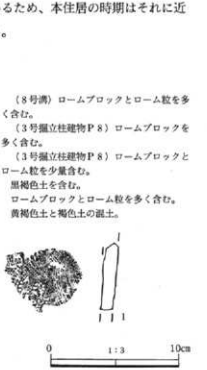
竈　確認できなかった。北壁全体が6号溝によって破壊されているので、そこにあった可能性も考えられる。

遺物　出土遺物は非常に少なく、土師器坏・甕の小片が出土しているのみである。掲載した1は縄文土器片であり、混入品である。

所見　残存度が悪く、掘方のみが残っていた。出土遺物は小片ばかりであるが、7世紀中頃のものが多く含まれているため、本住居の時期はそれに近い頃と思われる。



7号住居
1　暗褐色土　（8号溝）ロームブロックとローム粒を多く含む。
2　暗褐色土　（3号掘立柱建物P8）ロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　（3号掘立柱建物P8）ロームブロックとローム粒を少量含む。
4　黄褐色土　黒褐色土を含む。
5　暗褐色土　ロームブロックとローム粒を多く含む。
6　黄褐色土　黄褐色土と褐色土の混土。



第23図　7号住居掘方平・断面図、出土遺物

8号住居（第24図、第5表、PL.4・30）

A区の東側やや北よりにある。他の住居との切り合いはないが、東壁を2号溝に切られる。

位置　X＝29768～771、Y＝－43145～149

重複遺構　東壁に2号溝が重複する。本住居が古い。2号掘立柱建物、3号掘立柱建物と重複し、それらの柱穴は本住居の掘方調査によって見つかったため、本住居が新しいことが確認できた。

形態　東西に長い長方形だが、東壁を2号溝によって破壊されているため、長軸方向の長さは不明である。

方位　N－88°－E

規模　(3.32)×2.04m

面積　(6.45) m²

壁高　比較的残りがよく、高いところでは15～20cmある。

床面　掘方底面の高さは一定しないが、大きく深く掘るところはなく、やや低く掘られた南西隅も5cm程度のレベル差しかない。この低くなった部分にローム混じりの暗褐色土を埋め戻して床面を作るが、東半部は地山をそのまま床面としている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

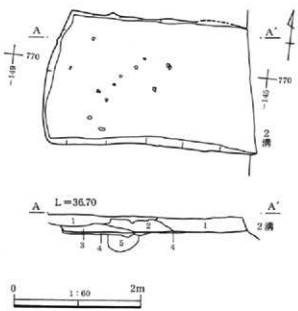
貯蔵穴　確認できなかった。本来存在しなかったか、あるいは2号溝に破壊されたものと考えられる。

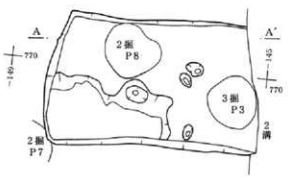
周溝　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

竈　調査範囲内では確認できなかった。2号溝で破壊された東壁に存在した可能性が高い。

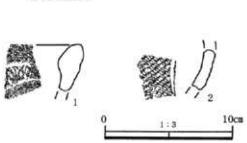
遺物　土師器・須恵器の破片が出土したが、いずれも小片ばかりであり、掲載できる個体はない。1・2は縄文土器片であり、混入品である。

所見　出土遺物が小破片ばかりなので、時期を特定することは難しい。8世紀前半から9世紀後半の遺物が混じるが、攪乱も多く入っているため、本住居に帰属する土器を確実に抽出することは困難である。





8号住居
1　暗褐色土　ローム粒を多く含む。黒色土粒を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒を多く含む。炭化物を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
5　黒褐色土　（2号掘立柱建物P8）ロームブロック・ローム粒を少量含む。



第24図　8号住居・掘方平・断面図、出土遺物

9号住居（第25・26図、第5表、PL.4・30）

A区南西隅付近にある。西壁が調査区外となるほか、中央部を1号溝に切られる。

位置　X＝29750～755、Y＝－43161～166

重複遺構　中央部に南北方向の1号溝が重複する。平面観察から本住居が古いことが確認できた。北側にある9号溝は接しているのみで重複はしていない。

形態　西側が調査区外となるため、詳細は不明であるが、ほぼ正方形になるものと推定される。

方位　N－12°－W

規模　3.86×（3.75）m

面積　（13.62）m²

壁高　5～10cm

床面　掘方底面から10～20cmほど黒褐色土を埋め戻し、床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。

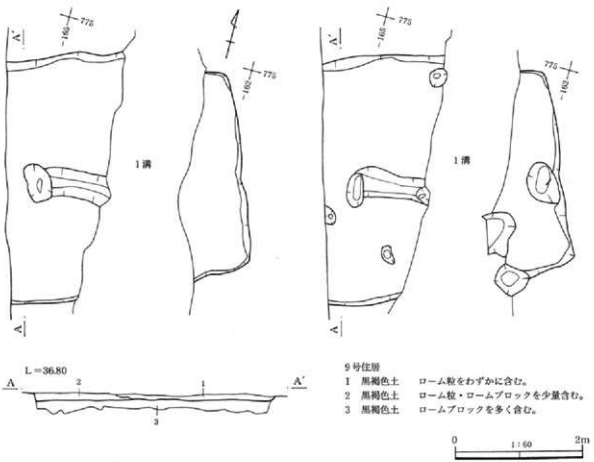
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

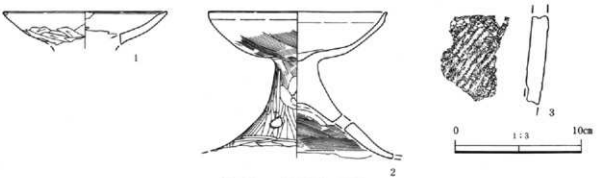
炉　出土遺物からみて炉が存在したものと思われるが、確認できなかった。床面の中央やや西よりにあるピットと溝状の掘り込みは、焼土や炭化物などが見られないため、炉ではない。中央部を1号溝によって切られているため、それによって破壊された可能性が高いと考えられる。

遺物　出土遺物は小破片が多く、掲載できたのは土師器の高坏2点のみである。他に縄文土器片が1点ある。

所見　出土遺物から本住居の時期は4世紀後半と思われ、今回の調査の中では30号住居に次いで古い時期のものである。



第25図　9号住居・掘方平・断面図



第26図　9号住居出土遺物

10号住居（第27～29図、第5表、PL. 5・30）

A区南西隅近くにある。東と北に他の遺構が重複する。この付近は浅い攪乱が多く入っているために遺構確認が難しく、当初は西側の9号住居と切り合っているものと考えたが、掘方の調査の結果、両住居の間にはわずかな空間があることが判明した。

位置　X＝29752～756、Y＝－43157～162

重複遺構　東壁の竈付近に11号住居が、北壁に9号溝が重複する。本住居は11号住居よりも新しく、9号溝よりも古いことが断面観察、平面観察により確認できた。

形態　北壁が9号溝に破壊されているため不明だが、正方形に近い方形と考えられる。

方位　N－88°－E

規模　3.24×（2.89）m

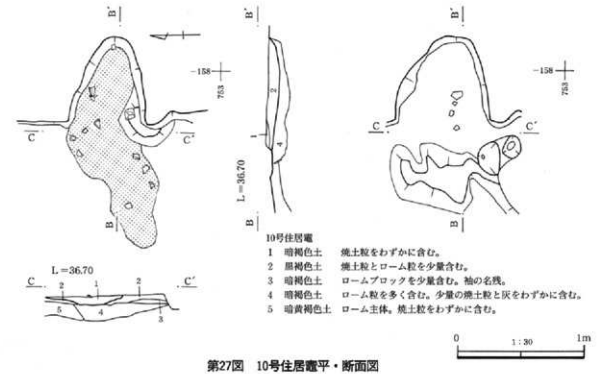
面積　（9.77）m²

壁高　南壁中央は残りがよく、10cmの高さがあるが、東壁では3cm程度しかなく、西壁は削平されて全く残っていない。

床面　掘方底面はピット状に深くなっているところがあるものの、ほぼ平坦であり、それを暗褐色土で18～10cm埋め戻して床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　南東隅（竈の右側となる）にある小土坑が貯蔵穴であると思われる。50×60cmの楕円形で、深さは26cmである。



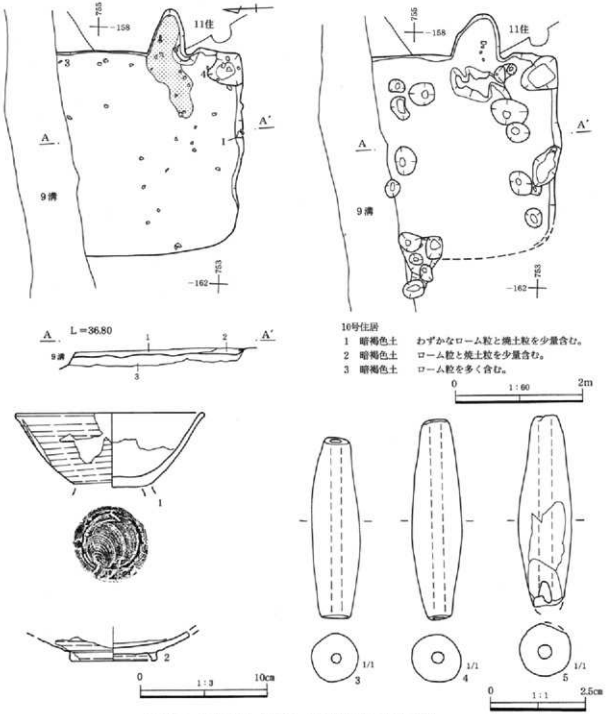
第27図　10号住居竈平・断面図

周溝　確認できなかった。

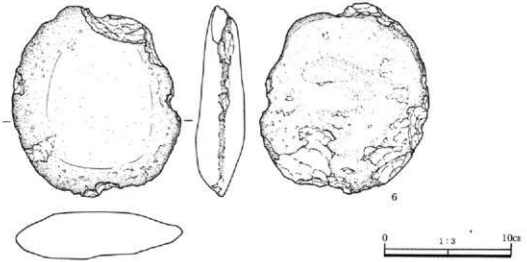
竈　東壁の中央やや南寄りにある。焚き口幅41cm、長さ71cmである。右側には袖の痕跡と思われる高まりが残っていたが、全体に残りが悪く、覆土の焼土も少なかった。竈前面には焼土が散っている部分がある。

遺物　全体に土器片が散らばって出土したが、報告できるのは須恵器壺、灰釉陶器皿各1点ずつと土錘3点のみである。2の灰釉陶器は竈掘方から出土した。その他磨石1点が出土した。

所見　出土遺物は少ないが、本住居の時期は9世紀後半と考えられる。



第28図　10号住居・掘方平・断面図、出土遺物（1）



第29図　10号住居出土遺物（２）

11号住居（第30図、第５表、PL.５・31）

Ａ区南西隅近くにある。削平がひどく、床面が残っていなかったため、掘方のみの調査となった。

位置　X＝29750～758、Y＝－43152～159

重複遺構　西隅に10号住居、北隅に９号溝が重複し、断面観察・平面観察により、いずれよりも本住居が古いことが確認できた。

形態　東隅付近がややゆがんでいるが、ほぼ正方形に近い方形である。

方位　N－58°－E

規模　5.20×5.08m

面積　(25.60) ㎡

壁高　削平のため全く残っていない。

床面　削平のため全く残っていない。掘方底面は西半分が低く、その部分では最も深いところで確認面から30cmある。それを暗褐色土で埋め戻し、床面を作っているらしい。

柱穴　掘方底面に凹凸が多かったため、調査時は明確に確認できなかったが、図面上で検討すると、第30図でＰ１～３としたものが、その位置から考えて柱穴である可能性が高いものと思われる。西隅はやや大きな土坑が掘られているため、これによって破壊されていると考えられる。Ｐ１～３の掘方底面からの計測値は以下の通りである。Ｐ３のみやや浅いが、確認面からは42cmの深さがあるので、柱穴としては十分な深さとなる。

Ｐ１　径33×40cm　深さ37cm

Ｐ２　径44×50cm　深さ32cm

Ｐ３　径22×30cm　深さ17cm

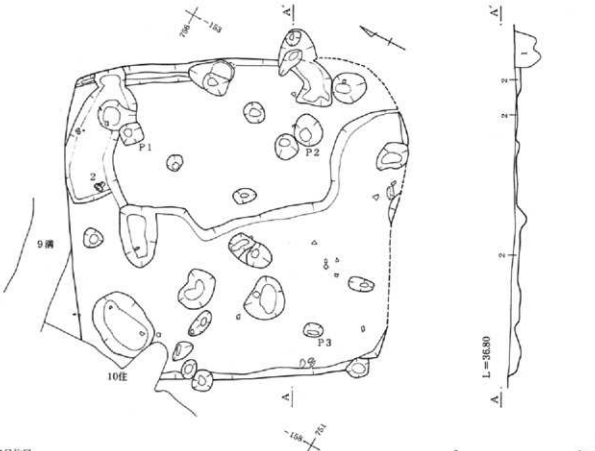
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　北隅付近にその痕跡と思われる溝を確認しているので、本来は全周していた可能性が考えられる。この部分では28～30cm、深さ３～７cmである。

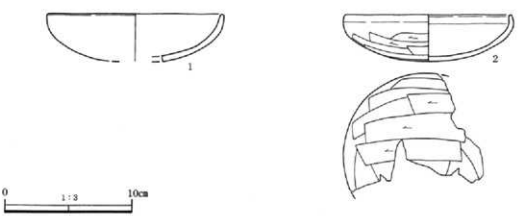
竈　完全に削平されてしまったらしく、確認できなかった。東隅付近にある竈の痕跡状の小ピットは住居よりも新しいピットであり、焼土も含まれていないので、竈ではない。

遺物　出土遺物は少なく、報告できるのは土師器坏２点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、土師器坏２点は８世紀前半のものであると思われるので、これが本住居の時期であると思われる。



11号住居
1　暗灰褐色土　ロームブロック少量含む。
2　暗灰褐色土　ローム粒・ロームブロック少量、焼土粒わずかに含む。



第30図　11号住居掘方平・断面図、出土遺物

12号住居（第31・32図、第5表、PL.5・31）

A区の北部にある。この付近は浅い攪乱が特に多かったため、確認面では住居の形を確定することが難しかった。

位置　X＝29772～776、Y＝－43154～159

重複遺構　北西側に16号住居、北側に17号住居が重複する。断面観察・平面観察により、いずれも本住居の方が新しいことが確認できた。

形態　東西方向にやや長い長方形。

方位　N－62°－E

規模　3.00×2.70m

面積　7.81m²

壁高　4～20cm。上層に浅い攪乱が多く入っていたため壁が破壊されたところがあり、残存高の差が大きい。

床面　掘方底面には土坑、ピット状の凹みが数多くあり、それを暗褐色土で埋め戻して床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。掘方底面の調査の時にも確認できなかったので、本来存在しなかったものと思われる。

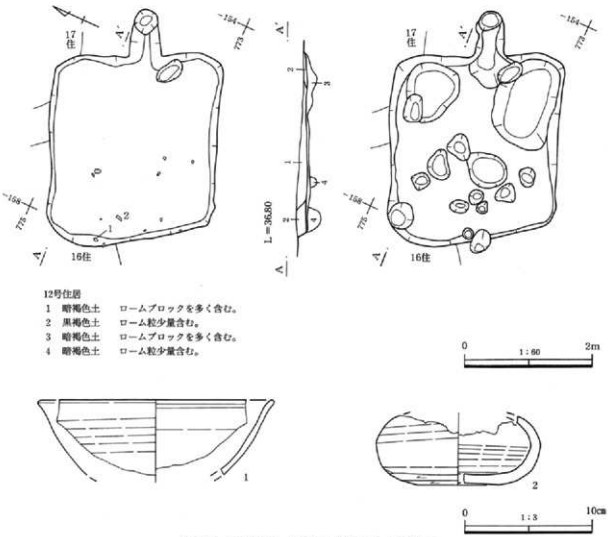
貯蔵穴　確認できなかった。竈の右側に見えている小土坑は住居よりも新しいものであり、本住居に伴うものではない。

周溝　確認できなかった。本来なかったものと思われる。

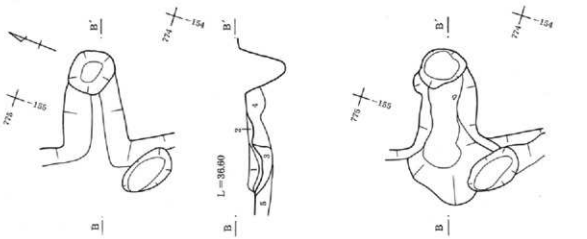
竈　東壁中央にある。焚き口幅は25cmであり、細く長い。長さは煙道部分に新しいピットが入ってしまっているため不明であるが、80cm前後あったものと思われる。覆土には焼土・炭化物が多く含まれている。

遺物　特に西半分からの出土が多いが、小破片が多く、報告できるのは須恵器壺と短頸壺各1点のみである。いずれも西壁近くから出土している。

所見　出土遺物が少ないが、本住居の時期は、須恵器壺から9世紀前半と考えられる。



第31図　12号住居・掘方平・断面図、出土遺物



12号住居竈
1　暗褐色土　　ローム粒と灰を少量含む。焼土粒はわずか。
2　暗褐色土　　炭・焼土粒を多く含む。
3　黒褐色土
4　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む。住居掘方の土に近い。
5　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む。

第32図　12号住居竈平・断面図

13号住居（第33・34図、第５表、PL.６・31）

Ａ区西端近くの中央やや北寄りにある。溝や土坑に大きく破壊されており、西側の一部分と東側の壁のごく一部が確認できたにすぎない。

位置　X＝29767～774、Y＝－43165～170

重複遺構　全体に14号住居と重複しているほか、中央部に南北方向の１号溝、東隅に23号土坑が重複し、残りが非常に悪い。断面観察・平面観察から、１号溝、23号土坑よりも古く、14号住居よりも新しいものと思われる。

形態　ほぼ正方形と思われる。

方位　N－47°－W

規模　(3.10)×(3.06) m

面積　(9.32) m²

壁高　西隅付近は残りがよく、６～14cmある。

床面　床面は西隅近くの一部しか残っていない。掘方は浅く、地山を床面としている部分が多い。

柱穴　確認できなかった。

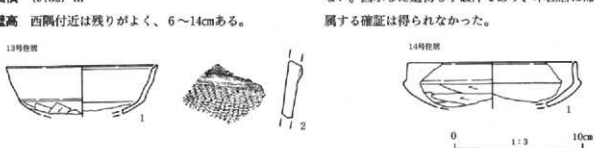
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　床面の残る西隅付近では全周する。幅10～35cm、深さは４～７cmである。

竈　確認できなかった。破壊されている部分が多いので、そこにあったものと考えられる。

遺物　出土遺物はきわめて少なく、数点しか出土していない。報告できるのは土師器坏１点、縄文土器１点のみである。

所見　14号住居と大きく重複し、一部しか残っていないうえ、出土遺物も少なく、詳細は明らかではない。図示した遺物も小破片であり、本住居に帰属する確証は得られなかった。



第33図　13号・14号住居出土遺物

14号住居（第33・34図、第5表、PL.6・31）

13号住居と重複した住居であり、やはり溝・土坑で大きく破壊され、残りは非常に悪い。

位置　X＝29767～773、Y＝－43164～170

重複遺構　西半分に13号住居と1号溝、東中央に23号土坑、東壁に22号土坑が重複する。本住居はいずれの遺構よりも古いと考えられる。

形態　東壁とその周辺しか残っておらず、確定的な形態は不明であるが、やや歪んだ長方形と考えられる。

方位　N－44°－W

規模　(4.42)×(4.28) m

面積　(17.50) m²

壁高　北隅付近で15cm残っている。

床面　掘方底面は凹凸があり、それを5～10cm埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。

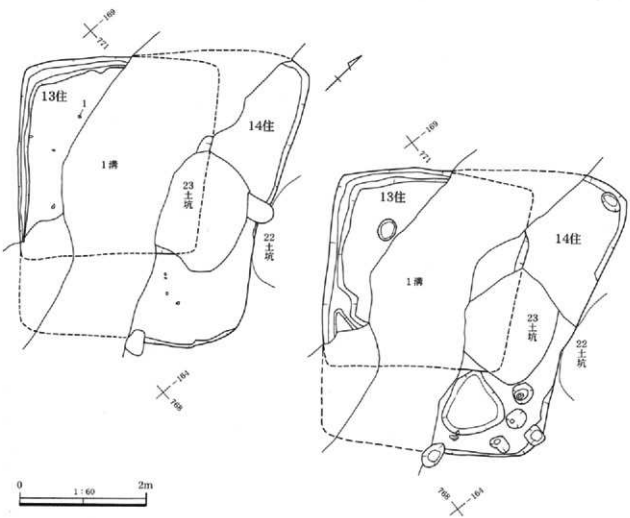
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　確認できなかった。他の遺構に破壊されている部分が多いので、そこにあったものと考えられる。

遺物　土師器甕・坏の破片が少なからず出土しているが、小破片ばかりであり、報告できるのは土師器坏1点のみである。

所見　一部分しか残っていないため、詳細は不明であるが、出土遺物から、本住居の時期は6世紀前半から中頃にかけてのものであると思われる。



第34図　13号・14号住居・掘方平面図

15号住居（第35・36図、第5表、PL. 6・31）

A区の北西部にある。12号住居と同様、この付近は削平と浅い攪乱が非常に多く、確認面からは住居の形が不明確で、調査は難航した。

位置　X＝29770～774、Y＝－43157～162

重複遺構　北壁に16号住居が重複する。平面観察、断面観察から、本住居の方が新しいことが確認できた。

形態　東西にやや長い長方形。

方位　N－88°－E

規模　3.46×3.16m

面積　10.58㎡

壁高　北壁と東壁の大部分は削平されていて残っていなかったが、南壁と西壁では比較的残りがよく、最大13cmあった。

床面　掘方底面はかなりの凹凸があるが、それをローム・ブロックを多く含む暗褐色土で埋め戻し、床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。掘方底面の調査の時にも確認できなかったので、本来存在しなかったものと思われる。

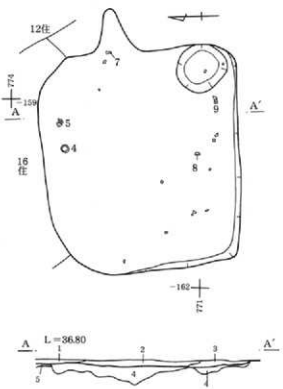
貯蔵穴　南東隅にある。70×80cmのやや楕円に近い円形で、深さは15cmである。

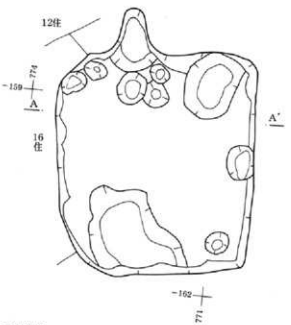
周溝　確認できなかった。

竈　東壁中央やや北寄りにある。この付近は壁が完全に削平されていたため、平面的には竈の痕跡しか確認できなかった。その面で計測して、焚き口幅70cm、長さ64cmである。竈掘方の覆土には焼土を多く含んでいた。

遺物　報告できる遺物は土師器坏6点、小型甕3点である。土師器坏には6世紀前半代の古いタイプが含まれている（4～6）が、これはおそらく16号住居のものが混入したものであり、その他の土器が本住居に帰属するものと思われる。

所見　出土遺物の大半は9世紀後半のものであり、これがこの住居の時期であると思われる。

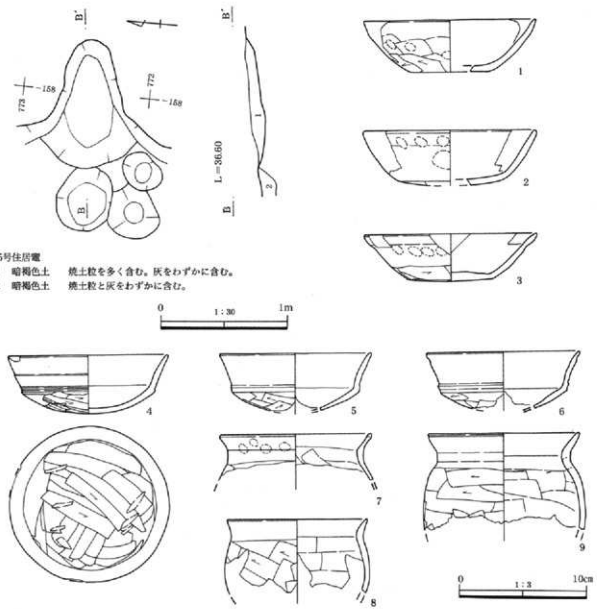




15号住居
1　灰褐色土　浅い攪乱と思われる。
2　暗褐色土　ローム粒少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
5　暗黄褐色土　（16号住）ハードロームブロックを主体とする。

0　1:60　2m

第35図　15号住居・掘方平・断面図



15号住居竈
1　暗褐色土　　焼土粒を多く含む。灰をわずかに含む。
2　暗褐色土　　焼土粒と灰をわずかに含む。

第36図　15号住居竈掘方平・断面図、出土遺物

16号住居（第37～39図、第5表、PL. 6・31・32）
A区北西部にある。

位置　X＝29773～778、Y＝－43157～163

重複遺構　南隅に15号住居、東側に12号住居と重複し、いずれも本住居の方が古い。さらに北・西側に8号井戸といくつかの土坑が重複するが、いずれも本住居の方が古い。

形態　正方形に近いが、北東－南西方向がやや長い。

方位　N－39°－W

規模　4.76×（4.50）m

面積　（20.86）㎡

壁高　北東壁で3～11cm、北西壁と南西壁で9～10cmである。

床面　住居中央付近は掘方が浅く、地山を直接床面とするか、あるいは2～5cm程度埋め戻しているが、その他の部分は掘方底面に凹凸があり、最大で10cmほど埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。

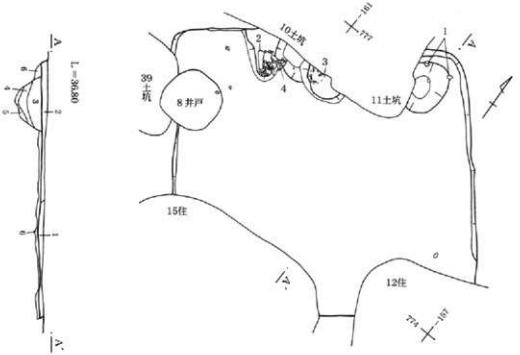
貯蔵穴　北隅にある。85×70cmの楕円形で深さは40cmである。

周溝　床面の調査時には確認できなかったが、掘方底面の調査でその痕跡を北東壁で確認したので、本来全周していた可能性が高いものと思われる。規模は掘方底面で計測して幅20～30cm、深さは3～5cmである。

竈　北西壁中央付近で確認できたが、10号土坑で大きく破壊され、残っていたのは袖と燃焼部の一部である。袖は甕を心材にして構築されている。焚き口幅は45cm、長さは不明である。

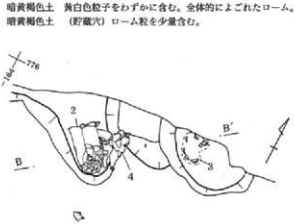
遺物　掲載できたのは土師器の坏1点と甕4点である。いずれも竈と貯蔵穴付近から出土している。土師器甕4点は全て竈からの出土であり、袖の心材として再利用されていたものである。土師器坏は貯蔵穴のすぐ脇から出土した。その他縄文土器3点も出土している。

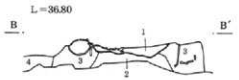
所見　出土土器から、本住居の時期は6世紀中頃と考えられる。前述したように、15号住居の4～6も本来は本住居のものであろう。



16号住居
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。焼土粒わずかに含む。
2　暗黄褐色土　黄白色粒子をわずかに含む。全体的によごれたローム。
3　暗黄褐色土　（貯蔵穴）ローム粒を少量含む。
4　暗黄褐色土　（貯蔵穴）ローム粒を多く含む。
5　暗褐色土　（貯蔵穴）ローム粒を少量含む。
6　暗黄褐色土　ハードロームブロックを主体とする。

0　1：60　2m

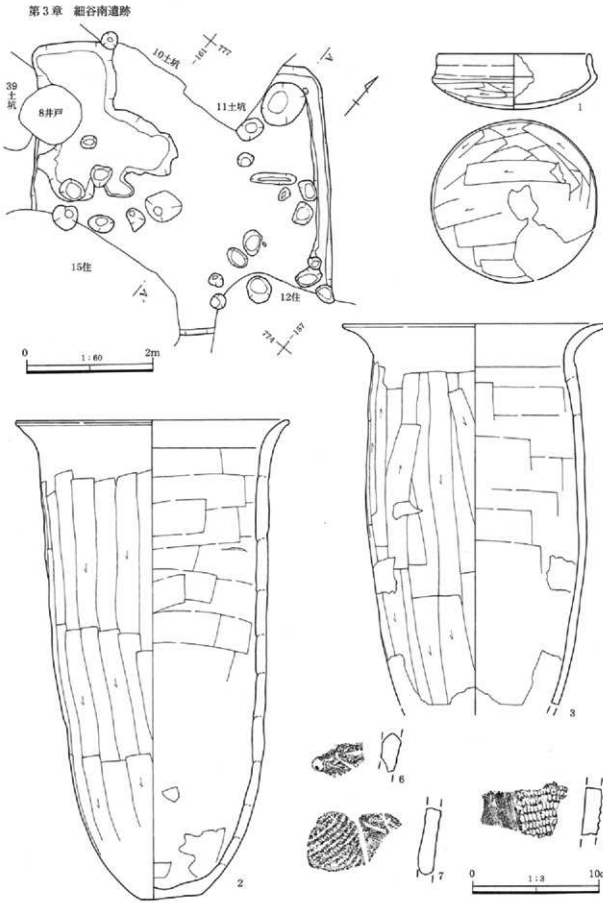




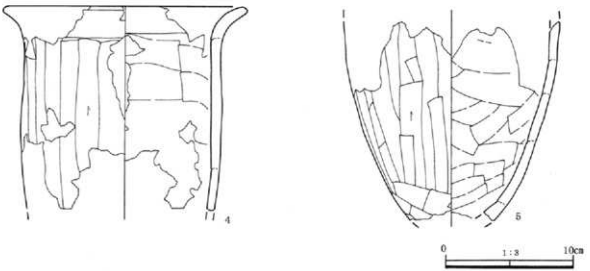
16号住居竈
1　暗黄褐色土　焼土粒ごくわずか。灰色粘土粒をわずかに含む。
2　暗黄褐色土　ロームを多く含む。
3　暗褐色土　ローム粒少量、灰色粘質土を多く含む。
4　暗黄褐色土　ロームを多く含む。

0　1：30　1m

第37図　16号住居・竈平・断面図



第38図　16号住居掘方平面図、出土遺物（1）



第39図　16号住居出土遺物（２）

17号住居（第40・41図、第５表、PL.７・32）

Ａ区北端中央付近にある。北側の大半が調査区外となるため、全形が不明である。住居のセクション図に見るように、この付近では表土・旧耕作土が30cmほどであり、その下面が遺構確認面となるが、その面から住居の床面まではごく浅く、厚いところでも15cm程度しかない。本遺跡において後世の削平が激しかったことを示す事実である。

位置　X＝29775～779、Y＝－43151～159

重複遺構　南西隅に12号住居が重複する。南東隅には８号溝が重複するが、21号住居は接するのみで重複していない。いずれの遺構とも重複部分はごくわずかであるが、平面観察の結果と出土遺物から、本住居が古いと判断できた。

形態　北側が調査区外となるため全体の形態は不明である。

方位　N－71°－E

規模　5.70×（3.25）m

面積　（14.02）㎡

壁高　南壁は完全に削平されていたが、西壁では最大で15cm残っていた。

床面　地山がそのまま床面になっていた部分が多いが、西壁付近を中心として10～20cm低く掘られていたところがあり、その部分は暗褐色土で埋め戻して床面としている。

柱穴　南東隅と南西隅に見つかっている。南東隅にはＰ１とＰ２の２基のピットがあるが、深さから考えてＰ２が柱穴であろう。各ピットの規模は以下の通りである。

Ｐ１　径35cm　　深さ25cm

Ｐ２　径40×45cm　深さ62cm

Ｐ３　径66×74cm　深さ85cm

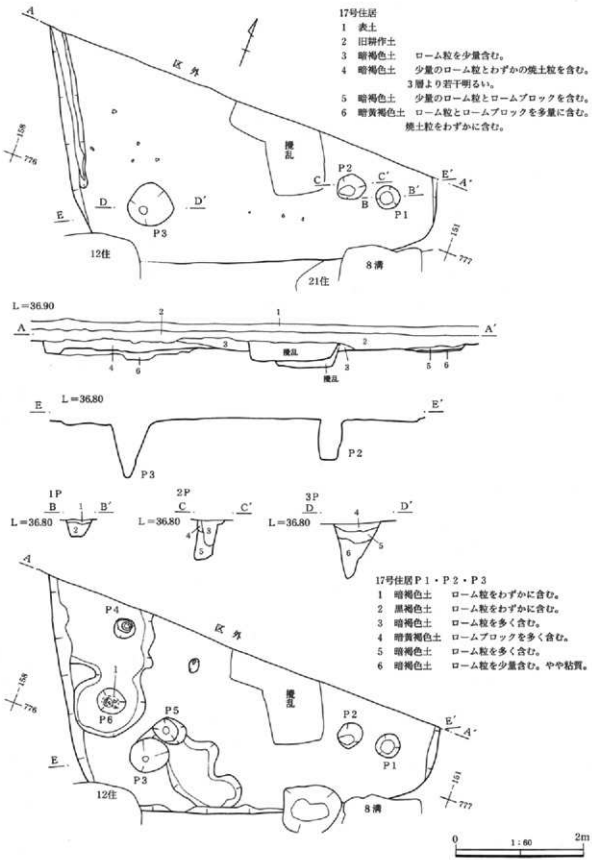
貯蔵穴　調査した範囲からは確認できなかった。

周溝　西壁のみに残っていた。幅15～25cm、深さ６～９cmである。東壁では全く確認できなかったので、本来全周したものかどうかは明らかではない。

竈　調査範囲内では確認できなかった。

遺物　出土遺物は小破片ばかりであり、報告できるのは土師器坩１点と縄文土器破片２点のみである。１の坩は掘方に掘られたピットの中から出土したものである。

所見　出土遺物が少ないのでやや不明確であるが、本住居の時期は６世紀前半である可能性が強いものと思われる。



第40図　17号住居・掘方平・断面図

第41図　17号住居出土遺物

18号住居（第42・43図、第5表、PL.7・31）

A区東部中央付近にある。上面を削平されて床面が全く残っていなかったほか、多くの遺構と重複して残りは非常に悪かった。

位置　X＝29760～765、Y＝－43140～147

重複遺構　北側に19号住居、東側に23号住居・2号溝と重複するほか、中央に35号土坑、北西隅付近に3号掘立柱建物の柱穴と重複する。本住居は2号溝よりも古く、23号住居、3号掘立柱建物、35号土坑よりも新しい。19号住居との重複部分は掘方が浅くなっており、ほとんど残っていなかったが、出土遺物からみて、本住居が新しいものと考えられる。

形態　ほぼ正方形に近い。

方位　N－84°－E

規模　4.14×3.91m

面積　(17.11) m²

壁高　削平されて全く残っていない。

床面　削平されて全く残っていない。

柱穴　確認できなかった。

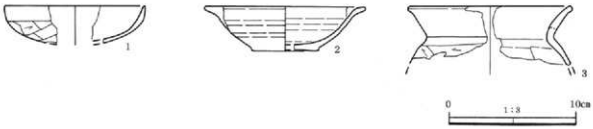
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

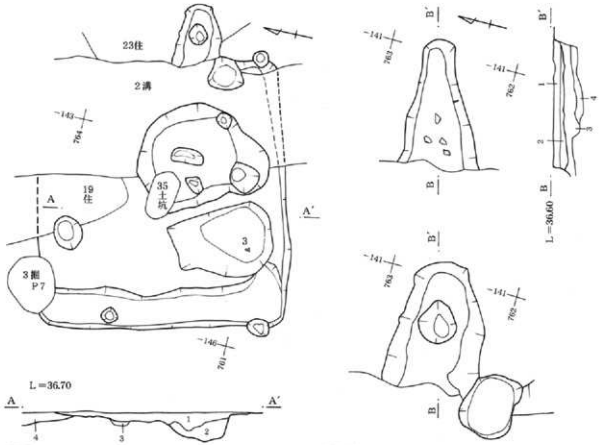
竈　東壁中央やや南寄りにある。大部分を2号溝に破壊されていたため、煙道部分のみが1m残っていた。覆土には焼土は少ないが、灰を大量に含んでいた。

遺物　遺物は少なく、報告できるものは土師器坏1点、須恵器坏1点、土師器の小型甕1点のみである。土師器は7世紀後半、須恵器は9世紀後半のものと思われる。

所見　本住居の時期は、掘方から出土している遺物から、9世紀後半以降のものと思われる。



第42図　18号住居出土遺物



18号住居
1　暗褐色土　ロームブロックとローム粒を少量含む。
2　暗黄褐色土　ロームブロックとローム粒を多量に含む。
3　暗褐色土　(35土坑) ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　(19住) ローム粒を少量、炭・焼土粒わずかに含む。

18号住居竈
1　暗褐色土　焼土粒と灰を少量、ローム粒をわずかに含む。
2　暗黄褐色土　焼土粒とローム粒を少量、灰を多量に含む。
3　暗褐色土　焼土粒とローム粒をわずかに含む。灰を少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む。

第43図　18号住居掘方・竈平・断面図

19号住居（第44図、第5表、PL.7・32）

A区東端中央にある。重複遺構が多く、残りは非常に悪い。

位置　X＝29763～768、Y＝－43140～146

重複遺構　東壁が3号溝で破壊されているほか、中央に2号溝、北東に24号住居、南西に18号住居が重複し、さらに北半分に2号・3号掘立柱建物が重複する。本住居は2棟の掘立柱建物よりも新しいが、2条の溝と18号・24号住居よりも古い。18号住居とは、重複部分の18号住居掘方が浅くなっていたため、新旧関係がやや分かりにくかったが、出土遺物から本住居が古いものと思われる。なお、南側の23号住居とは接しているのみである。

形態　東壁が完全に破壊されているため明確ではないが、長方形であると思われる。

方位　N－65°－W

規模　3.88×（4.56）m

面積　（18.57）m²

壁高　西壁の残りがややよく、6～11cmの高さがある。

床面　掘方底面から10～15cm埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

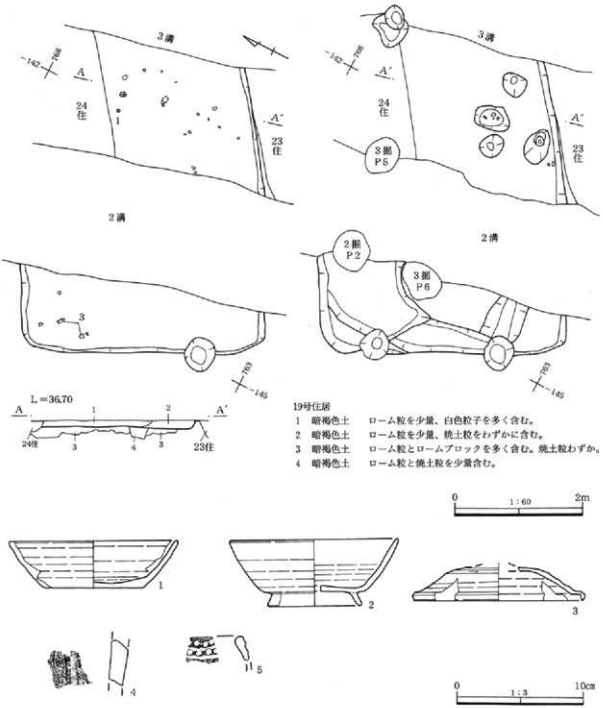
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

竈　確認できなかった。破壊された東壁にあった可能性が高い。

遺物　東半部・北西隅部から土器片が出土したが、いずれも小破片であり、報告できるのは須恵器坏１点、須恵器高台付埦１点、須恵器蓋１点のほか、縄文土器片２点である。

所見　遺構の大部分を破壊されており、詳細は不明な点が多い。住居の時期は出土遺物から９世紀前半であると思われる。



第44図　19号住居・掘方平・断面図、出土遺物

20号住居（第45図、PL.７）

Ａ区中央北寄りにある。非常に残りが悪く、掘方の最底部と思われる四角い痕跡が見られたのみで、それによって住居跡であると判断した。出土遺物も少なく、詳細は不明である。

位置　Ｘ＝29769～774、Ｙ＝－43150～155

重複遺構　東側に８号溝、北東部に21号住居が重複する。平面観察・断面観察から８号溝の方が新しいことは確実であるが、本住居と21号住居との重複部分は残りがあまりに悪く、前後関係は明確にできなかった。

形態　東側を８号溝で破壊されているため不明であるが、やや歪んだ正方形になるものと思われる。

方位　不明。

規模　(3.82)×3.58m

面積　(11.85) ㎡

壁高　削平のため残っていない。

床面　削平のため残っていない。

柱穴　確認できなかった。

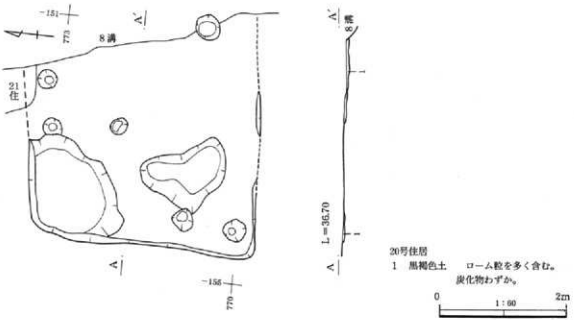
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　確認できなかった。

遺物　出土した遺物は非常に少なく、報告できるものはない。

所見　出土遺物が少なく、時期を特定することはできない。



第45図　20号住居掘方平・断面図

21号住居（第46図、第５表、PL.７・32）

Ａ区北端中央やや東寄りにある。北隅の一部が調査区外となる。

位置　Ｘ＝29773～778、Ｙ＝－43147～154

重複遺構　西半分に８号溝、南東部に40号土坑が重複する。いずれも本住居の方が古い。北西の17号住居とは接するのみで重複していない。南東の28号住居とはわずかに重複するが、新旧関係は把握できなかった。

形態　やや長い長方形。

方位　Ｎ－68°－Ｅ

規模　5.48×3.24m

面積　(16.92) ㎡

壁高　５～10cm

床面　掘方底面は浅い。全体に凹凸をならす程度に埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

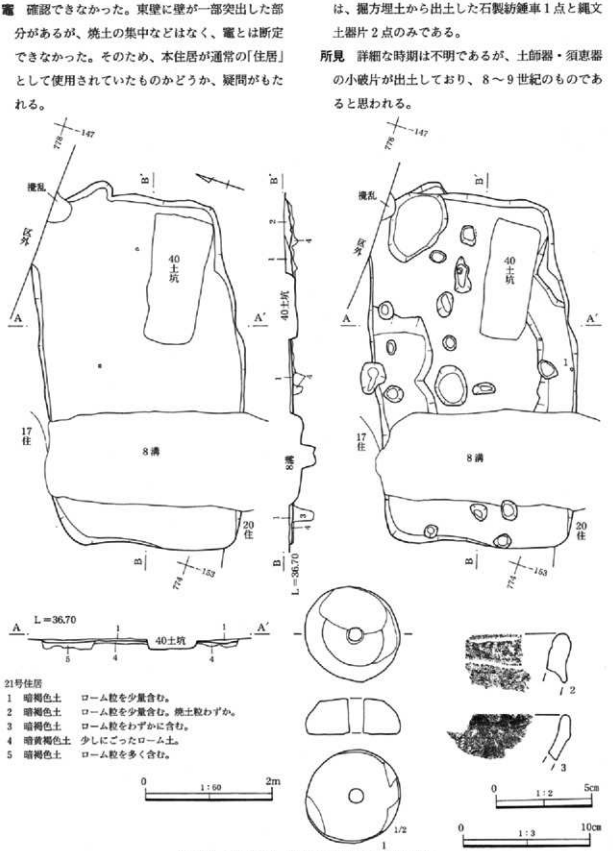
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　確認できなかった。東壁に壁が一部突出した部分があるが、焼土の集中などはなく、竈とは断定できなかった。そのため、本住居が通常の「住居」として使用されていたものかどうか、疑問がもたれる。

遺物　出土した遺物は非常に少ない。報告できるのは、掘方埋土から出土した石製紡錘車１点と縄文土器片２点のみである。

所見　詳細な時期は不明であるが、土師器・須恵器の小破片が出土しており、８～９世紀のものであると思われる。



第46図　21号住居・掘方平・断面図、出土遺物

22号住居（第47・48図、第5表、PL.8・32）

A区東端部の南にある。東西両端を溝で破壊され、中央部のみが残っていた。

位置　X＝29754～760、Y＝－43137～143

重複遺構　西側に2号溝、東側に3号溝が重複して大きく破壊されている。

形態　中央部分のみが残っているだけなので不明である。

方位　N－66°－Wか

規模　(1.98)×4.60m

面積　(8.97) m²

壁高　北壁、南壁の中央部のみが残っている状態であるが、いずれも4～9cmの高さがある。

床面　掘方は北壁・南壁にそってやや深く掘り、中央部が浅くなっている。それらをロームを含む黒褐色土や暗黄褐色土で埋め戻して床面をつくっている。ローム土からなる貼り床が残っている部分もある。

柱穴　確認できなかった。

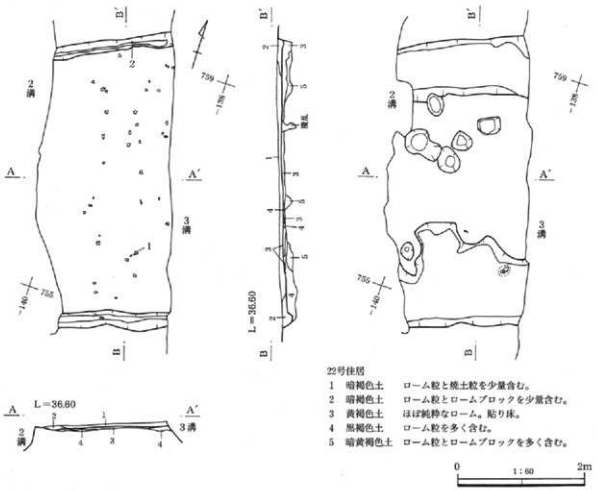
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　北壁・南壁両方とも周溝があるので、本来は全周した可能性が強い。幅15～20cm、深さは4～10cmであり、比較的明瞭な周溝である。

竈　確認できなかった。

遺物　住居全体に土師器の破片が散ていたがみな小破片であり、報告できるのは土師器坏1点と、混入品の石器1点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、土師器坏の年代から、本住居の時期は9世紀前半と思われる。



第47図　22号住居・掘方平・断面図

第48図　22号住居出土遺物

23号住居（第49・50図、第5表、PL.7・33）

A区東端の中央やや南にある。東側の大部分が破壊されているため、西側の一部分のみの調査にとどまった。

位置　X＝29760～766、Y＝－43139～143

重複遺構　西側に18号住居の竈と重複し、本住居が古い。北側にある19号住居とはわずかな空間を挟んで重複していない。

形態　北西隅と東側の大部分が破壊されているため不明である。

方位　N－44°－W

規模　(4.82)×(2.36) m

面積　(7.95) m²

壁高　北西壁、南西壁とも壁の残りはよく、10～18cm残っている。

床面　掘方は西隅の床下土坑やピット状に掘られている部分を除いて浅く平坦である。それらの凹凸を埋めるように暗褐色土で埋め戻し、床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。

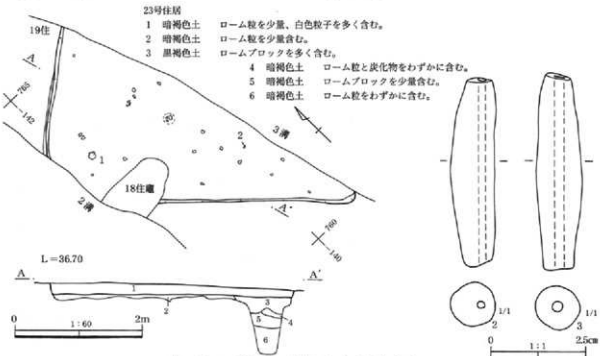
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。本来存在しなかったものと思われる。

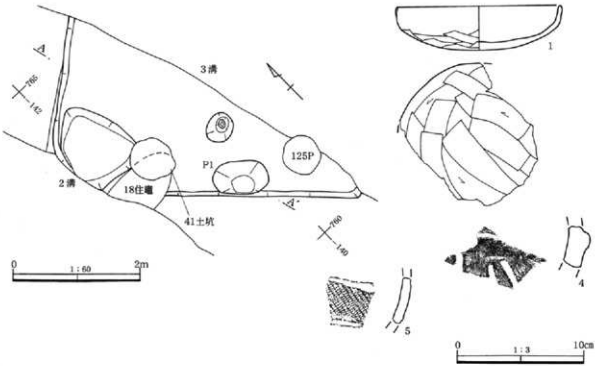
竈　調査した範囲内には確認できなった。

遺物　全体に破片が散っていたが、小破片が多く、報告できるのは土師器坏1点、土錘2点、縄文土器片2点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、土師器坏は8世紀後半のものと思われ、それがこの住居の時期であると思われる。



第49図　23号住居平・断面図、出土遺物（1）



第50図　23号住居掘方平面図、出土遺物（２）

24号住居（第51図、第５表、PL.７・８・33）

Ａ区東端中央やや北寄りにある。東西両端を破壊されているほか、浅い攪乱や多くの遺構によって破壊されており、残りは非常に悪かった。

位置　X＝29766～772、Y＝－43141～144

重複遺構　西側に２号溝、東側に３号溝が重複し、いずれよりも本住居の方が古い。南側には19号住居が重複する。断面観察の結果、本住居が新しいことが確認できた。さらに２号・３号掘立柱建物とも重複しているが、それらの柱穴は本住居の掘方調査の際、掘方覆土をすべて除去した後に見つかっているため、本住居の方が新しいことは確実である。

形態　東西両端が破壊され、中央部分しか残っていないので不明であるが、時期的にも隣接する19号住居と同様に、長方形であると思われる。

方位　N－19°－Wか

規模　(3.48)×(2.02) m

面積　(7.47) m²

壁高　北壁は他の遺構との重複がなかったため、比較的残りがよく、10～16cmの高さがあった。

床面　掘方には土坑状に掘られている部分が多く、それらを埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。調査できた部分が少ないため、本来存在しなかったかどうかは明確にできなかった。

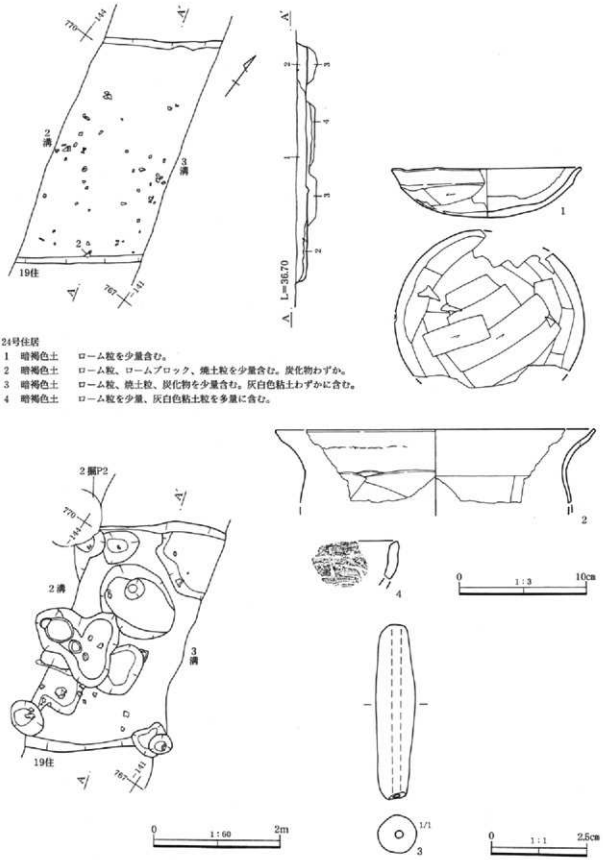
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

竈　確認できなかったが、他の住居の例から見て、東側に存在したものと思われる。

遺物　床面の全域に多数の土器片が散らばるように出土したが、いずれも小破片であり、報告できるのは土師器坏１点、土師器甕１点、土錘１点のほか、縄文土器片１点である。

所見　中央部分の調査にとどまったため、不明な点の多い住居である。時期は出土遺物から９世紀前半と思われるが、小破片には９世紀後半かと思われるものも含まれているので、９世紀前半でも比較的新しい時期のものであると思われる。



24号住居

1　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。

2　暗褐色土　　ローム粒、ロームブロック、焼土粒を少量含む。炭化物わずか。

3　暗褐色土　　ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含む。灰白色粘土わずかに含む。

4　暗褐色土　　ローム粒を少量、灰白色粘土粒を多量に含む。

第51図　24号住居・掘方平・断面図、出土遺物

25号住居（第52図、第5表、PL.8・33）

D区北端にあるごく小型の住居である。北壁を破壊されているため全形が不明であるが、北西隅らしい部分が見えるので、破壊されているのは北壁とわずかな部分のみだと考えられる。ただしあまりに小型であるため、通常の住居として使用されていたものか疑問が持たれる。

位置　X＝29756～759、Y＝－43116～119

重複遺構　重複遺構はないが、北壁を農地造成のため破壊されている。

形態　北壁を破壊されているため不明であるが、西壁が北側で屈曲しており、その部分で北壁につながれば、正方形に近い方形になると考えられる。

方位　ほぼ東西南北に揃う。

規模　(1.98)×2.30m

面積　(4.37) m²

壁高　他の住居に比べて残りがよく、南壁は15cm前後残っている。

床面　地山を直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。

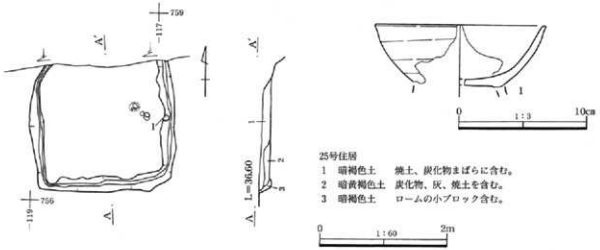
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　確認できなかった。

遺物　東側から少数出土したが、小破片が大部分で、報告できるのは須恵器高台付埦のみである。この埦は東壁際から出土した。

所見　住居としては小型であり、竈も確認できていないことから、通常の住居かどうか疑問がある。出土遺物が少ないが、須恵器の時期は9世紀後半であると思われ、それがこの住居の時期であろう。



第52図　25号住居平・断面図、出土遺物

26号住居（第53・54図、第5表、PL.8・9・33）

D区の西端近くにある。本遺跡では比較的大型の住居であるが、多くの遺構と重複するため残りは非常に悪かった。

位置　X＝29746～751、Y＝－43126～135

重複遺構　中央に1号竪穴状遺構、東半部に14号溝、西半部に5号掘立柱建物と重複する。本住居は1号竪穴状遺構、14号溝(新)、5号掘立柱建物よりも古く、14号溝(古)よりも新しいことが、平面・断面観察で確認できた。

形態　南壁が調査区外となるため不明である。

方位　N－77°－E

規模　6.74×(4.75) m

面積　(29.49) m²

壁高　5～17cmだが、東壁の残りが特によい。

床面　掘方底面には凹凸があり、それらを10～20cm埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　部分的に残っていた。幅20～30cm、深さは5

～10cmである。

竈　確認できなかったが、掘方調査時に東壁近くで焼土を多く含むピット（Ｐ１）を確認しており、新段階の14号溝に破壊された可能性がある。

遺物　遺物の出土は全体に少なく、報告できるのは土師器壺１点と土錘１点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、本住居の時期は７世紀前半であると考えられる。

１号竪穴状遺構（第53～55図、第５表、PL.８・９・33）

26号住居の中央にある遺構である。確認時にほぼ方形であったため竪穴住居として調査を開始したが、床面がなく、竈などの施設もないので通常の「住居」とは思えなかった。そのため、竪穴状遺構と名付けて報告する。

位置　X＝29746～750、Y＝－43128～134

重複遺構　26号住居の中央にある。断面観察から本遺構が新しいことが確認できた。

形態　北西隅に突出部があるが、東西にやや長い長方形である。

方位　N－78°－E

規模　3.43×2.85m

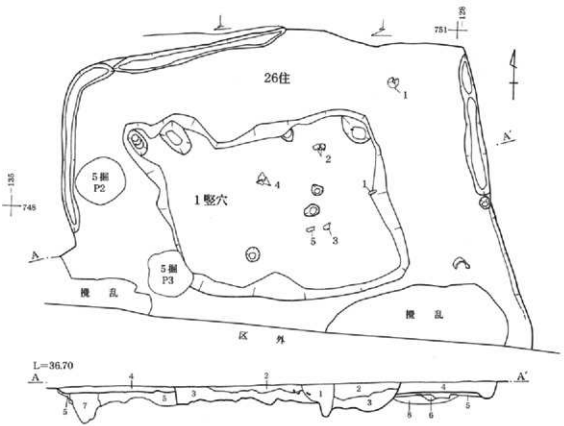
壁高　確認面から計測すると30～40cm。

床面　硬化した床面はなく、全体に凹凸があり柔らかい。

柱穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

貯蔵穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

周溝　確認できなかった。本来存在しないものと思



26号住居・１号竪穴状遺構

1　暗褐色土　（ピット埋土）ロームブロックを多く含む。
2　暗褐色土　（１号竪穴状遺構）ローム粒を含む。焼土・炭化物まばら。
3　暗褐色土　（１号竪穴状遺構）ロームブロックを多く含む。炭化物含む。
4　暗褐色土　（26号住）焼土・炭化物・ローム粒を含む。
5　暗褐色土　（26号住）ロームブロックを多く含む。
6　黄褐色土　（26号住）ロームの崩れた土。
7　暗褐色土　（26号住）ローム粒を含む。
8　暗灰褐色土　（14号溝）ローム粒を少量含む。

0　1:60　2m

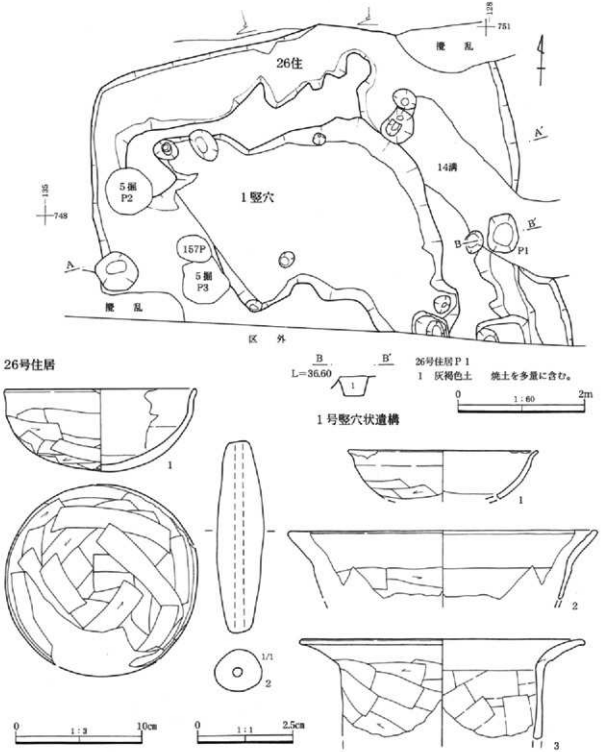
第53図　26号住居・１号竪穴状遺構平・断面図

われる。

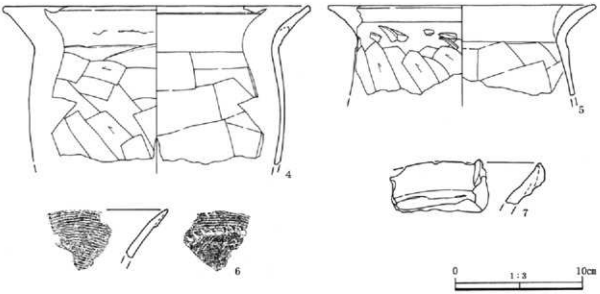
竈　存在しない。

遺物　土師器埦1点、鉢1点、甕4点、壺1点が報告できた個体であるが、いずれもかなり小さな破片であり、この遺構に帰属するものかどうかはやや不安がある。

所見　平面的な形態は竪穴住居に近かったが、既述のとおり、住居として用いられたとは思えず、方形の土坑と見た方がよいと思われる。時期は出土遺物から7世紀後半と思われる。



第54図　26号住居・1号竪穴状遺構掘方平・断面図、26号住居・1号竪穴状遺構出土遺物（1）



第55図　1号竪穴状遺構出土遺物（2）

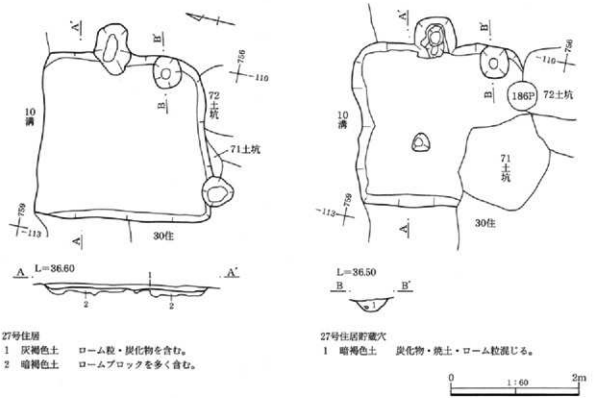
27号住居（第56・57図、第5表、PL.9・33）

D区の北端中央やや東寄りにある小型の住居である。北壁の位置がちょうど農地造成の削平の境にあたっており、北壁はなくなっているものの、掘方は残っていて全体の規模が判明する。

位置　X＝29756～760、Y＝－43109～113

重複遺構　南西隅に30号住居が重複するほか、南側に71号・72号土坑、186号ピットが重複する。本住居はそれらの中で最も新しい。

形態　ほぼ正方形である。



27号住居
1　灰褐色土　　ローム粒・炭化物を含む。
2　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む。

27号住居貯蔵穴
1　暗褐色土　　炭化物・焼土・ローム粒混じる。

第56図　27号住居・掘方平・断面図

方位　N－81°－E

規模　2.61×2.58m

面積　7.08㎡

壁高　5～9㎝

床面　掘方は全体に凹凸があり、それをならすように、暗褐色土で10cm程度埋め戻し床面としている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

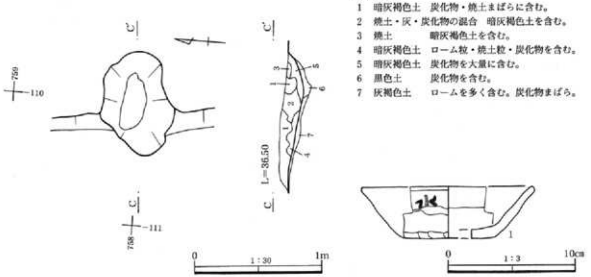
貯蔵穴　東壁南側、竈の右側にある小土坑が貯蔵穴であると思われる。43×50cmの楕円形で、深さは18cmである。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁中央にある。焚き口幅40cm、全長65cmであり、使用面は浅く凹んでいた。覆土には炭化物が多く含まれていた。

遺物　出土遺物はきわめて少ない。報告できるのは墨書のある土師器坏の小破片1点のみである。「水」と判読できるが、下端が欠失している。

所見　出土遺物が少ないが、9世紀後半のものと思われる。



第57図　27号住居竈平・断面図、出土遺物

28号住居（第58・59図、第5表、PL.9・33）

A区北東隅近くにある。中央部を2号溝によって分断されている。

位置　X＝29771～776、Y＝－43142～149

重複遺構　中央に2号溝が大きく重複するほか、北西隅に21号住居がわずかに重複する。本住居は2号溝よりも古いことが平面観察によって確認できたが、21号住居との新旧関係は不明である。その他、北壁に45号土坑、西壁に44号土坑が重複し、いずれも本住居が古い。竈付近には31号土坑、169号ピットが重複し、本住居は31号土坑よりも古く、169号ピットよりも新しい。さらに掘方調査によって中央部に住居よりも古い50号・52号土坑が見つかった。北側に位置する29号住居は、その位置から考えて本住居と重複している可能性が高いが、重複部分が2号溝によって破壊されており、その状態は不明である。

形態　東西方向に長い長方形。

方位　N－78°－E

規模　5.22×3.58m

面積　(19.40) ㎡

壁高　全体に残りがよく、12～20cmある。

床面　掘方底面は住居東側、南側が深く掘られており、それらを最大35cm埋め戻して床面をつくって

いる。ロームを主体とする土からなる貼り床が部分的に残っている。

柱穴　確認できなかった。

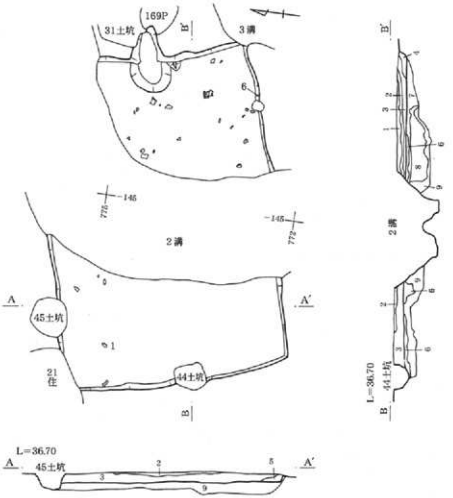
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁中央にある。煙道の先端部分を31号土坑で破壊されている。焚き口幅は30cm、長さは53cmである。使用面はゆるく凹み、覆土には焼土・炭化物が多く含まれている。

遺物　東半分を中心に出土している。報告できるのは土師器坏1点と須恵器坏4点、土錘1点であるが、土器には新旧の時期のものが含まれ、2～4が8世紀前半、1・5は9世紀後半のものと思われ、後者が本住居に伴うものであろう。

所見　本住居の時期は、出土遺物から9世紀後半であると思われる。

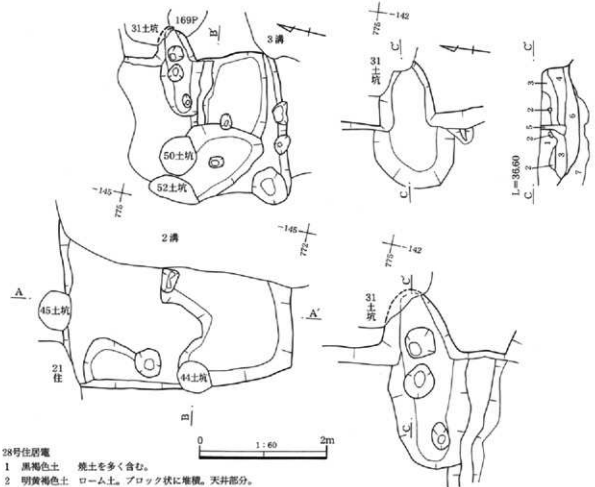


28号住居

1　暗褐色土　ローム粒と焼土粒を含む。ややもろく粒子が細かい。
2　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を少量含む。ややもろい。
3　黒褐色土　ローム粒と3cm大のロームブロックを少量、焼土粒をわずかに含む。
4　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を少量含む。
5　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6　明黄褐色土　ローム土にやや黒褐色土がまざる。床面で固くしまっている。
7　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を含む。
8　黒褐色土　焼土粒と、ロームブロック・ローム粒子を含む。
9　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒を少量含む。焼土粒わずか。

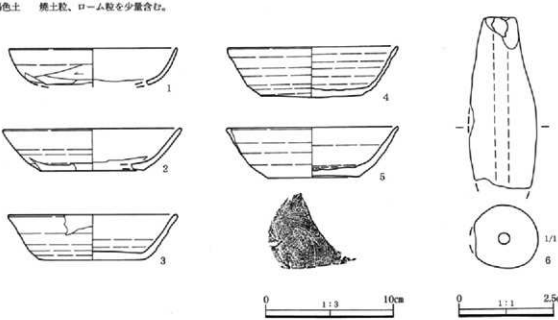
0　1:60　2m

第58図　28号住居平・断面図



28号住居竈

1　黒褐色土　焼土を多く含む。
2　明黄褐色土　ローム土。ブロック状に堆積。天井部分。
3　灰褐色土　焼土と炭化物を多量に含む。灰を少量含む。
4　黒褐色土　焼土を少量含む。ローム粒をわずかに含む。
5　黒褐色土　焼土が少量まじる。木の根。
6　黒褐色土　焼土を含む。ローム粒、ロームブロック、炭化物を少量含む。
7　黒褐色土　焼土粒、ローム粒を少量含む。



第59図　28号住居掘方・竈平・断面図、出土遺物

29号住居（第60図、第５表、PL.９・33）

Ａ区北東隅近くにある。掘方のみの調査を行ったが、表土除去の際に床面まで破壊してしまったらしく、調査区の北壁に設定したセクションには床面が確認できる。平面的には、北側が調査区外となるうえ、南側も２号住居で破壊されるため、ごく一部分しか調査できなかった。

位置　Ｘ＝29776～778、Ｙ＝－43141～146

重複遺構　南側に２号溝が重複する。断面観察から本住居が古いことが確認できる。さらに西壁には172号ピットが重複し、本住居が古い。

形態　西壁の一部しか残っていないため全体の形態は不明である。

方位　Ｎ－77°－Ｅか

規模　不明

面積　（2.48）㎡

壁高　調査区の北壁に設定したセクション図を見ると、この部分では本来28cmの壁高が残っていたらしい。

床面　掘方はピットが掘られている以外は浅く、凹凸をならすように暗褐色土を埋め戻し、床面としている。地山が床面となっている部分もあるが、それはごく一部である。

柱穴　確認できなかった。

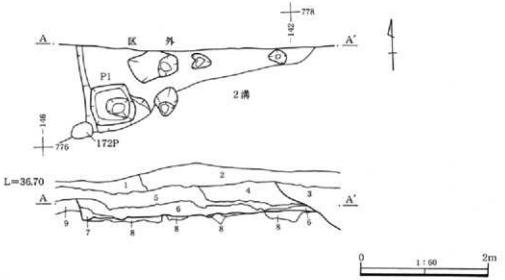
貯蔵穴　確認できなかったが、西壁近くに残るＰ１は62～68cmの方形で、深さは50cmあり、何らかの役割を持ったピットであると思われる。

周溝　確認できなかった。

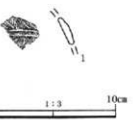
竈　確認できなかった。

遺物　出土遺物は非常に少なく、報告できたのは土師器甕の小破片１点のみであるが、混入品であり、本住居に伴う遺物ではない。

所見　出土遺物は少ないが、小破片の土師器・須恵器から、９世紀代の住居と考えられる。



29号住居
1　暗褐色土　　表土。砂礫を30%含む。
2　褐色土　　表土。砂礫を30%含む。しまりがよい。
3　暗褐色土　　（２号溝）ロームブロックと焼土粒をわずかに含む。
4　暗褐色土　　焼土粒をわずかに含む。
5　暗褐色土　　ローム粒とロームブロックを少量含む。焼土粒わずかに含む。
6　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む。
7　暗灰褐色土　ロームブロック・ローム粒をわずかに含む。
8　暗褐色土　　やや黄色味が強い。ロームブロック・ローム粒を多く含む。焼土粒わずか。
9　暗褐色土　　ロームブロック・ローム粒をわずかに含む。



第60図　29号住居掘方平・断面図、出土遺物

30号住居（第61・62図、第5表、PL.10・34）

D区中央やや北寄りにある。本遺跡の中では比較的大型の住居であるが、床面が削平されており、掘方のみの調査となった。

位置　X＝29751～758、Y＝－43110～117

重複遺構　北東隅に27号住居、71号土坑と重複する。本住居の方がいずれの遺構よりも古い。

形態　ほぼ正方形

方位　N－10°－W

規模　5.60×5.43m

面積　(30.06) m²

壁高　削平のため残っていない。

床面　削平のため残っていない。

柱穴　四隅にある。いずれも2時期あり、内側の深いものが古い柱穴であり、それを外側に柱半分ずらして新しい柱穴を掘り直している。それぞれの規模は以下の通りである。新段階の柱穴の深さはかなり浅いように感じるが、これは掘方底面からの計測値であり、床面からはより深くなるはずである。

旧段階の柱穴

P 1	径70×56cm	深さ60cm
P 2	径60×55cm	深さ58cm
P 3	径62×50cm	深さ55cm
P 4	径67×57cm	深さ56cm

新段階の柱穴

P 1	径50cm	深さ32cm
P 2	径50cm	深さ25cm
P 3	径44cm	深さ34cm
P 4	径40cm	深さ33cm

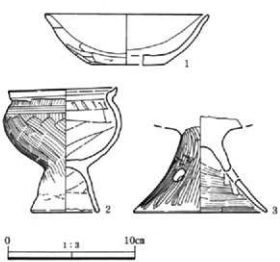
貯蔵穴　確認できなかった。

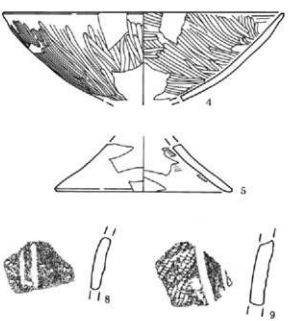
周溝　明確な周溝は確認できなかったが、掘方底面は壁際を幅0.6～1.0mほど深く掘る傾向があり、ここに周溝があった可能性もある。

炉　出土遺物から考えて炉があると思われるが、床面が削平されたときに破壊されたらしく、痕跡も残っていなかった。

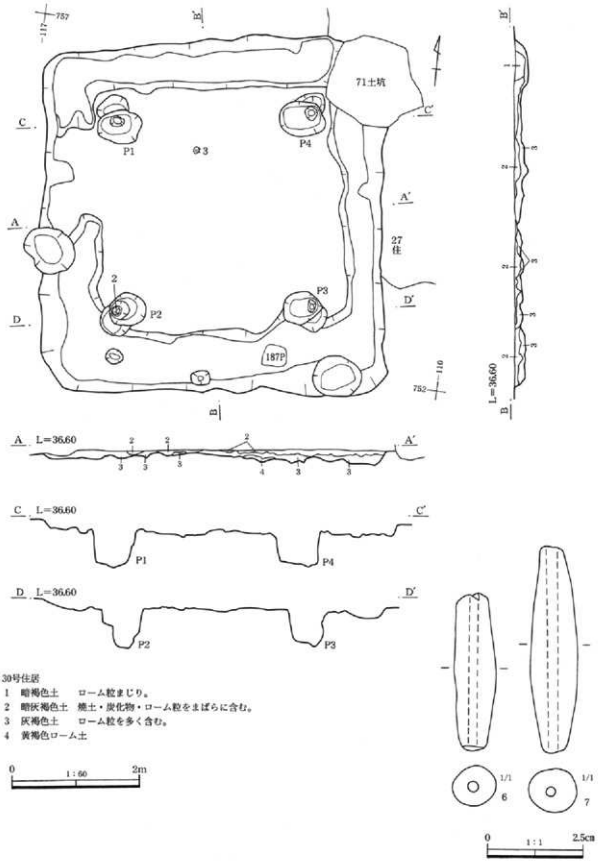
遺物　出土遺物は少ないが、土師器坏1点、高坏3点、小型台付甕1点、土錘2点を掲載できた。このうち1の土師器坏のみは9世紀代のもので時期が新しく、混入品である。そのほか縄文土器片2点がある。

所見　出土遺物からみて、3世紀末から4世紀初頭の住居であると思われ、今回の調査区では最古の住居となる。本遺跡では縄文土器を除いてこの住居を遡るような遺物は出土していないので、古代の集落はこの時期から始まっているものと思われる。





第61図　30号住居出土遺物（1）



30号住居
1　暗褐色土　　ローム粒まじり。
2　暗灰褐色土　焼土・炭化物・ローム粒をまばらに含む。
3　灰褐色土　　ローム粒を多く含む。
4　黄褐色ローム土

0　1:60　2m

第62図　30号住居掘方平・断面図、出土遺物（２）

31号住居（第63・64図、第5表、PL.10・11・34）

D区の東端近くにある。南側が調査区外となるものの、この付近は深い攪乱が少なく、ほかの遺構とも重複していないため、本遺跡の他の住居に比べて残りがよい。竈部分が調査区際となるため、南側を可能な限り拡張して調査した。

位置　X＝29744～747、Y＝－43100～105

重複遺構　なし。

形態　南壁が調査区外となるため不明である。北壁がやや歪んでいるのか、隅の角度が直角にならないのが特徴的である。

方位　N－90°－E

規模　3.21×（2.73）m

面積　（8.75）m²

壁高　比較的残りがよく、15～23cmある。A－A′セクションで壁高が低く見えるのは、ちょうどこの部分の上層に近現代の溝が浅く入っているためである。

床面　掘方底面は壁際を中心に深く掘ってある部分があり、それを埋め戻して床面としているが、大部分は地山を床面としている。

柱穴　確認できなかった。本来なかったものと思われる。

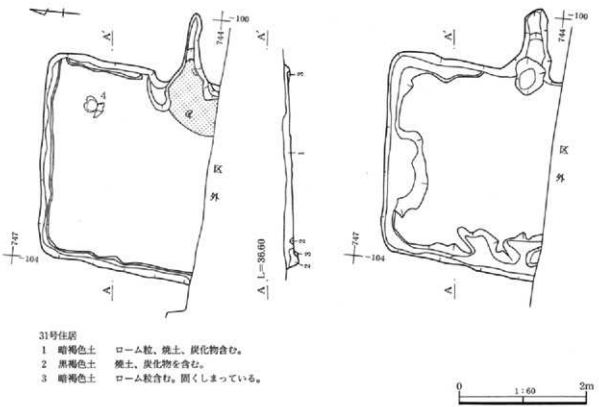
貯蔵穴　確認できなかった。調査区外となった部分にある可能性が高い。

周溝　調査範囲内では竈部分を除いてほぼ全周する。幅は15cm程度、深さは5～10cmであり、明瞭な周溝である。

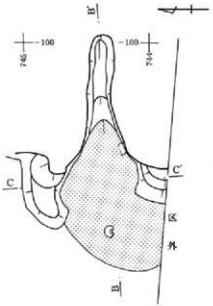
竈　東壁にある。袖の痕跡が残り、燃焼部から竈前面にかけての床面に焼土・炭化物が散っている。焚き口幅は60cm、長さは124cmであり、煙道が長くのびている。

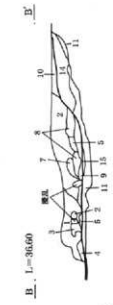
遺物　報告できるのは土師器坏1点、須恵器坏1点、甕2点、土錘1点と縄文土器1点である。

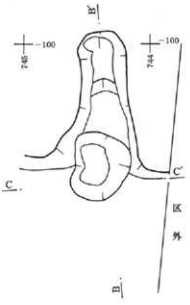
所見　出土遺物から本住居の時期は9世紀後半であると思われる。

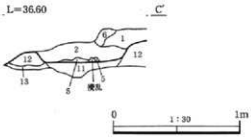


第63図　31号住居・掘方平・断面図



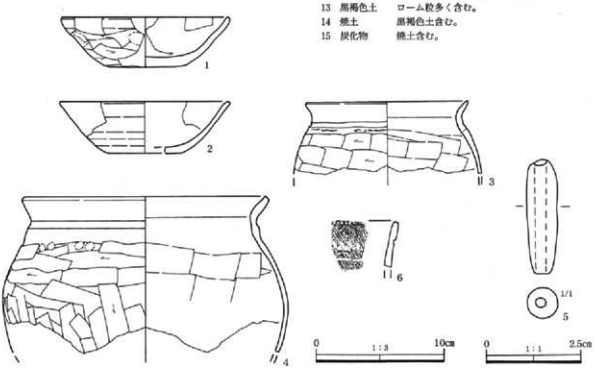






31号住居竈

1　暗褐色土　　ローム粒、炭化物含む。
2　暗褐色土　　ローム粒、焼土、炭化物、灰白色粘土含む。
3　黄白色粘質土　粘土化している部分が多い。
4　黒褐色土　　ローム粒含む。
5　灰白色粘質土　下層が焼土化している。
6　暗褐色土　　ローム粒多く含む。
7　灰色シルト　暗褐色土、焼土含む。
8　暗褐色土　　焼土、炭化物含む。
9　焼土と炭化物の層。
10　焼土
11　黒褐色土　　まばらな焼土と大量の炭化物含む。
12　暗褐色土　　（カマド袖）灰白色シルト含む。
13　黒褐色土　　ローム粒多く含む。
14　焼土　　黒褐色土含む。
15　炭化物　　焼土含む。



第64図　31号住居竈平・断面図、出土遺物

32号住居（第65・66図、第5表、PL.11・12・34）

D区南端中央部にある。この付近には32号・34～38号の6軒の住居が複雑に重複しているほか、図示しなかった浅い攪乱が数多く存在し、新旧関係の把握がかなり難しかった。

位置　X＝29745～749、Y＝－43113～118

重複遺構　東側に38号住居が重複しているが、平面観察・断面観察によって本住居が新しいことが確認できた。なお、南東部には後世の浅い掘り込みが入っていてその部分の壁を壊してしまっている（断面図の2層）。

形態　南壁が調査区外となるため不明である。

方位　N－85°－E

規模　2.92×（2.80）m

面積　（8.04）㎡

壁高　南東部を除いて残りがよく、大部分は17～24cmある。

床面　大部分は地山を直接床面とする。南東側には下層に38号住居が重複するが、その部分も特に貼り床などを施していない。

柱穴　確認できなかった。本来なかったものと思われる。

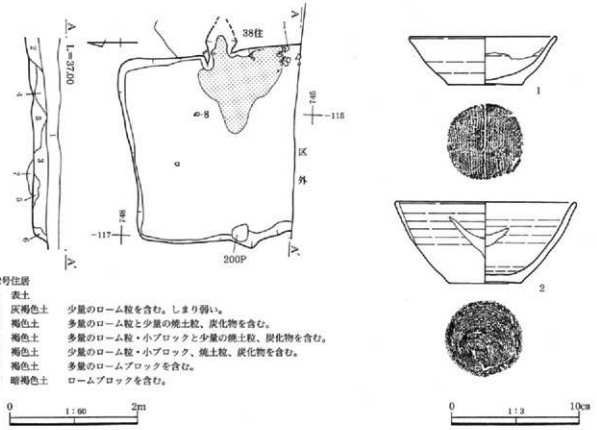
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁にある。煙道部分に浅い攪乱が入っていたため、破壊されてしまっているが、それ以外の部分は残りがよかった。竈前の床面には焼土・炭化物が広く散っている。焚き口幅は25cm、長さは推定で60cmである。

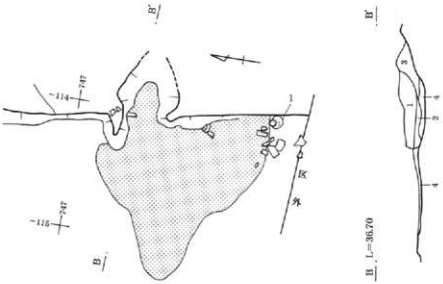
遺物　出土遺物は比較的多く、報告できるのは、須恵器坏1点、埦1点、高台付埦2点、蓋1点、土師器甕1点、台付甕2点、灰釉陶器埦1点である。これらのうち6・7・9は時期が古く、明らかに混入品である。

所見　本住居の時期は出土遺物から11世紀前半であると思われる。



32号住居
1　表土
2　灰褐色土　少量のローム粒を含む。しまり弱い。
3　褐色土　多量のローム粒と少量の焼土粒、炭化物を含む。
4　褐色土　多量のローム粒・小ブロックと少量の焼土粒、炭化物を含む。
5　褐色土　少量のローム粒・小ブロック、焼土粒、炭化物を含む。
6　褐色土　多量のロームブロックを含む。
7　暗褐色土　ロームブロックを含む。

第65図　32号住居平・断面図、出土遺物（1）


B'
B
B'
B
B'
B

33号住居（第67・68図、第５表、PL.11・12・35）

Ｄ区の南端中央やや西にある。南西隅のごくわずかな部分が調査区外となっていたが、調査区を拡張して全体を調査することができた。北側は14号溝と重複して破壊されるが、平面図を見ると、14号溝と接するあたりから壁が屈曲するように見えるので、北壁は14号溝にわずかに入る位置にあったらしく、破壊されたのはわずかな面積だけであったと思われる。

位置　Ｘ＝29745～749、Ｙ＝－43117～121

重複遺構　北端が東西方向の14号溝と重複する。溝の項で詳述するように、14号溝には新旧２時期の溝があったようだが、新しい時期の溝は本住居より新しい。また、７号掘立柱建物とも重複するが、その柱穴（Ｐ１）は床面をはがして掘方調査を行った際に見つかっているので、本住居の方が新しいことが確認できた。

形態　南北に長い長方形。

方位　Ｎ－76°－Ｅ

規模　(2.88)×2.70m

面積　7.68㎡

壁高　８～15cm

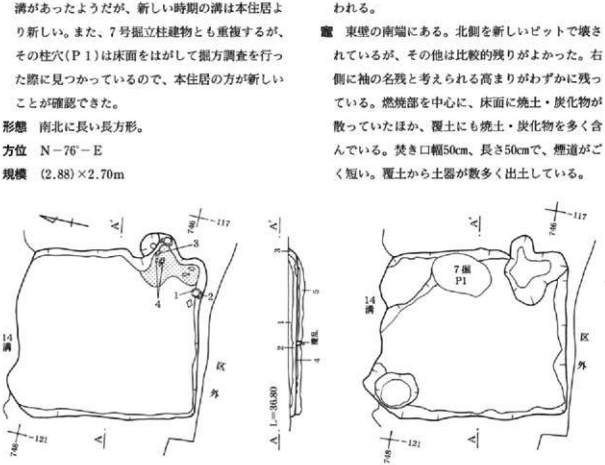
床面　掘方底面は凹凸が少なく、それを暗褐色土で全体に５～10cmほど埋め戻し、さらにその上にローム粒を多く含んだ暗褐色土で貼り床を施している。貼り床は非常に固くしまっており、明瞭な床面であった。

柱穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

貯蔵穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

周溝　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

竈　東壁の南端にある。北側を新しいピットで壊されているが、その他は比較的残りがよかった。右側に袖の名残と考えられる高まりがわずかに残っている。燃焼部を中心に、床面に焼土・炭化物が散っていたほか、覆土にも焼土・炭化物を多く含んでいる。焚き口幅50cm、長さ50cmで、煙道がごく短い。覆土から土器が数多く出土している。



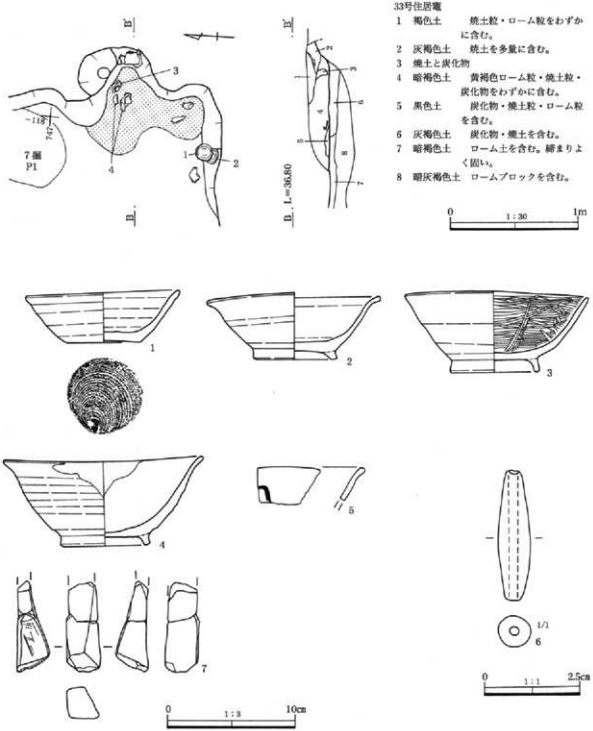
33号住居
1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。焼土粒をわずかに含む。
3　黒色土　ローム粒（径１～３mm）を多量に含む。
4　暗褐色土　ローム粒多く含む。よくしまり固い。貼り床。
5　暗褐色土　ローム粒を含む。

0　1:60　2m

第67図　33号住居・掘方平・断面図

遺物　遺物は竈とその周辺からの出土が多い。報告するのは須恵器坏1点、須恵器高台付埦3点、土錘1点、砥石1点である。1と2は竈右側の壁際から、ほぼ完形のまま重なって出土した。5には墨書があるが残画のみであり、判読できない。

所見　出土遺物から本住居の時期は9世紀中頃と考えられる。



第68図　33号住居竈平・断面図、出土遺物

34号住居（第69図、第5表、PL.11・12・35）

D区南端中央の、住居の切り合いの激しい部分にある。南側が調査区外となる。

位置　X＝29744～747、Y＝－43106～110

重複遺構　35号・36号・37号住居と重複する。いずれの住居よりも本住居の方が新しい。掘方の調査の際は35号住居の掘方も同時に調査してしまったため、掘方平面図では35号住居に切られるような形となってしまったが、これは誤りであり、本住居が新しい。

形態　南側が調査区外となるため不明である。北壁の北西隅がやや不整形である。

方位　N－85°－E

規模　2.90×（1.73）m

面積　（7.28）m²

壁高　10～20cm

床面　掘方底面には、北隅にやや深い部分があるが、ほぼ平坦で、それを3～10cm埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

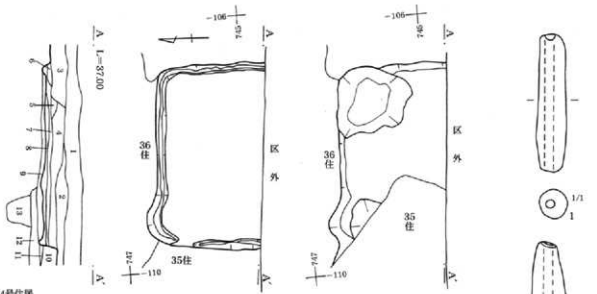
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　調査範囲内ではごく一部を除いて全周する。幅は10～15cm、深さは3～11cmだが、5cm以下の浅いところが多い。

竈　確認できなかった。

遺物　出土遺物は小破片ばかりであり、報告できるのは、土錘2点のみである。その他、土師器・須恵器の破片が少なからず出土しているが、図示できるものはない。

所見　出土遺物が小破片ばかりなので時期を特定することは困難である。



34号住居
1　表土
2　灰褐色土　少量のローム粒を含む。しまり弱い。
3　暗褐色土　（近年の撹乱）焼土・炭化物を含む。
4　褐色土　少量のローム粒、焼土、炭化物と微量のロームブロックを含む。
5　褐色土　多量の灰褐色粘土ブロックを含む。
6　褐色土　微量のローム粒、焼土粒を含む。
7　褐色土　微量のローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
8　褐色土　微量のローム粒、焼土粒、炭化物と少量のロームブロックを含む。
9　褐色土　少量のロームブロックを含む。しまりよい。
10　褐色土　（35号住）多量のロームブロック、少量のローム粒、微量の焼土粒、炭化物を含む。
11　灰白色土　（35号住）灰と炭化物からなる層。
12　ローム、黒色土、暗褐色土の混合。（35号住）
13　暗褐色土　（35号住）ロームブロック、黒色土を含む。特に下層はしまりが弱く、ぼろぼろしている。

第69図　34号住居・掘方平・断面図、出土遺物

35号住居（第70・71図、第5表、PL.12・35）

D区南端の、住居の切り合いの激しい部分にある。南側が調査区外となる。

位置　X＝29744～748、Y＝－43109～114

重複遺構　34号・36～38号住居と重複する。本住居は34・38号よりも古いことは確認できた。36・37号住居とは、調査時点では本住居が新しいと考えたが、遺物では異なっており、本来は本住居が古いものと考えられる。また、住居の中央には7号掘立柱建物の柱穴があるが、本住居との新旧関係は明らかにできなかった。

形態　南側が調査区外となり、東側を34号住居に破壊されるが、掘方の形から推定して、ほぼ正方形であると思われる。

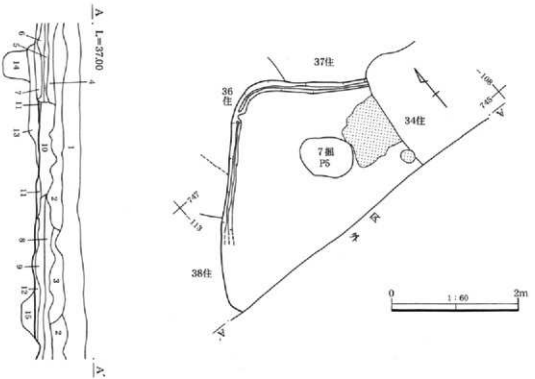
方位　N－48°－Wか

規模　(3.08)×(2.74) m

面積　(4.95) m²

壁高　他の遺構と切り合っていない北東壁中央では35cm残っている。

床面　掘方底面には土坑状に掘られているところが多く、その部分は埋め戻して床面としている。それ以外の部分では地山を床面としている。



35号住居

1　表土

2　灰褐色土　少量のローム粒含む。しまり弱い。

3　暗褐色土　微量のローム粒、焼土粒、炭化物を含む。

4　褐色土　(34号住) 少量のローム粒、炭化物と微量のロームブロックを含む。

5　褐色土　(34号住) 微量のローム粒、焼土粒、炭化物を含む。

6　褐色土　(34号住) 微量のローム粒、焼土粒、炭化物と少量のロームブロックを含む。

7　褐色土　(34号住) 少量のロームブロックを含む。しまりよい。

8　暗褐色土　(38号住) 少量のロームブロック、微量のローム粒を含む。

9　黒褐色土　(38号住) 少量のロームブロック、ローム粒を含む。

10　褐色土　多量のロームブロック、少量のローム粒、微量の焼土粒、炭化物を含む。

11　灰白色土　灰と炭化物からなる層。

12　灰褐色土　灰、炭化物を含む。

13　ローム、黒色土、暗褐色土の混合。

14　暗褐色土　ロームブロック、黒色土を含む。下層はしまり弱く、ぼろぼろしている。

15　灰褐色土　ロームブロック、黒褐色土を含む。

第70図　35号住居平・断面図

柱穴　確認できなかった。

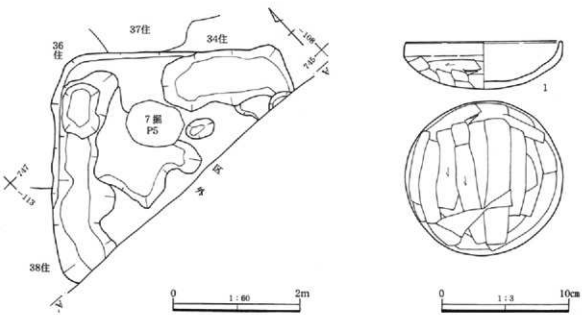
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　北隅周辺で確認できた。幅12～18cm、深さは5～10cmである。

竈　確認できなかった。床面の東側に灰・焼土・炭化物が散っている部分があったので、その付近にあったものと推定されるが、掘方の調査では北東壁に竈の痕跡はみられなかった。

遺物　遺物の出土は少なく、報告できるのは土師器坏1点のみで、掘方覆土から出土した。

所見　図示した坏は8世紀後半のものと思われるが、掘方から出土しているので、本住居はそれ以後のものである。さらに9世紀後半の38号住居よりも古いので、時期がある程度限定できる。



第71図　35号住居掘方平面図、出土遺物

36号住居（第72・73図、第5表、PL.12・35）

D区南端の、住居の切り合いの激しい部分にある。

位置　X＝29746～751、Y＝－43107～113

重複遺構　南から南東にかけて34・35・37号住居と重複する。本住居は37号住居より新しく、34号住居よりも古い。35号住居とは、先述のように不明確であるが、遺物から考えて本住居が新しい可能性が高い。また、北壁に73号土坑、西壁中央に7号掘立柱建物の柱穴が重複し、73号土坑は本住居より新しく、7号掘立柱建物は古い。

形態　南壁が確認できなかったが、正方形に近い形態ではないかと推定される。

方位　N－88°－E

規模　4.38×（4.13）m

面積　（15.29）m²

壁高　西壁では15cm残っているが、北壁では5cm前後である。

床面　地山を床面としている。

柱穴　確認できなかった。

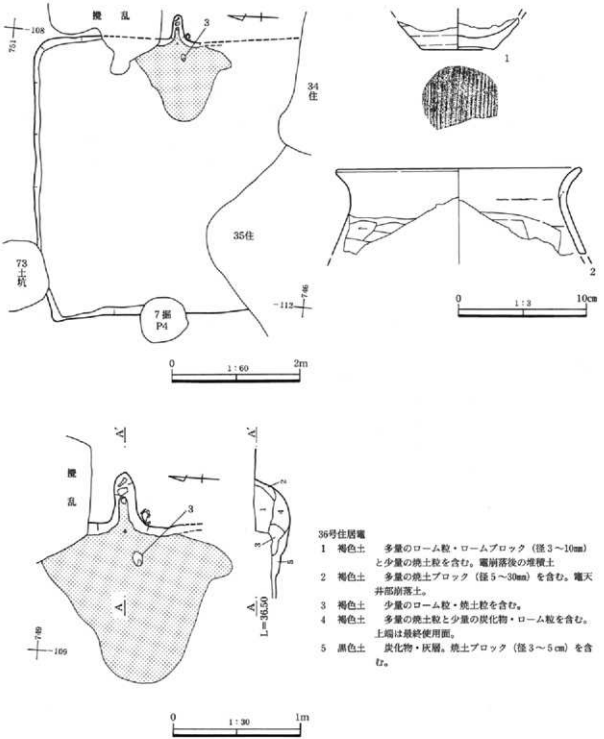
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁にある。焚き口幅25cm、長さ48cmで、小型の竈である。竈前の床面には焼土・炭化物が散っていたほか、覆土には多くの焼土・炭化物を含んでいる。周囲からは土師器の甕を中心とした土器片が出土している。

遺物　報告できるのは須恵器坏１点、土師器甕１点、砥石１点のみである。須恵器坏は竈覆土から、土師器甕は竈掘方から出土している。両者は時期が異なるものと思われるが、坏が本住居に伴うものであろう。

所見　竈覆土から出土した須恵器坏は10世紀後半のものであり、これが本住居の時期であると思われる。



36号住居竈

1　褐色土　多量のローム粒・ロームブロック（径３～10mm）と少量の焼土粒を含む。竈崩落後の堆積土

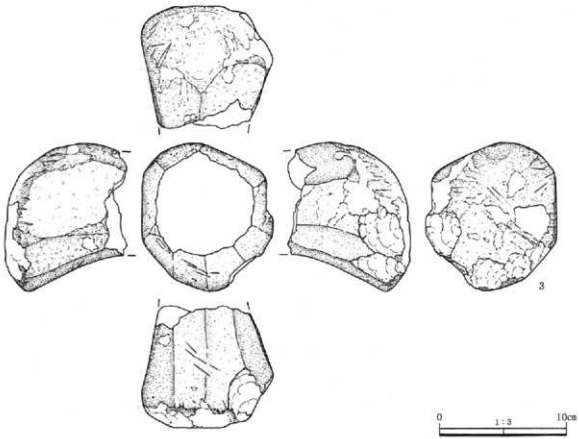
2　褐色土　多量の焼土ブロック（径５～30mm）を含む。竈天井部崩落土。

3　褐色土　少量のローム粒・焼土粒を含む。

4　褐色土　多量の焼土粒と少量の炭化物・ローム粒を含む。上端は最終使用面。

5　黒色土　炭化物・灰層。焼土ブロック（径３～５cm）を含む。

第72図　36号住居・竈平・断面図、出土遺物（１）



第73図　36号住居出土遺物（2）

37号住居（第74図、第5表、PL.12・35）

D区南端の、住居の切り合いの激しい部分にある。他の遺構や攪乱によって大きく破壊されており、残りは非常に悪かった。

位置　X＝29746～750、Y＝－43106～111

重複遺構　34～36号住居と重複する。調査時点ではそれらのいずれよりも古いと考えられていたが、先述のように、35号住居よりは新しい可能性が強い。194号ピットとも重複しているが、この部分にはちょうど攪乱が入っているため、本住居との新旧関係は不明である。

形態　南側を破壊されているため不明だが、36号住居と同様、正方形に近い形になるものと思われる。

方位　N－90°－E

規模　3.49×（3.05）m

面積　（10.53）㎡

壁高　他の遺構との重複のない東壁北側で計測すると13cmである。

床面　掘方底面には若干の凹凸があり、それらをならす程度に埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

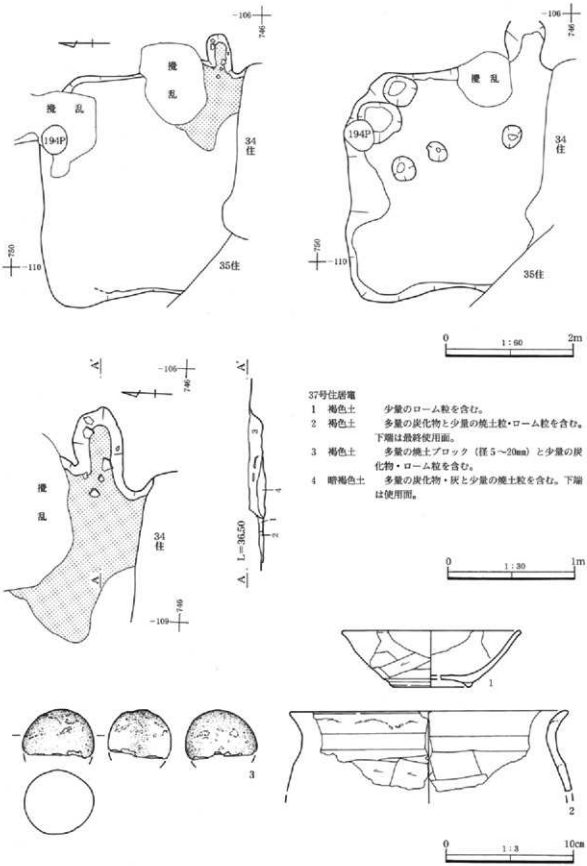
貯蔵穴　確認できなかった。34号住居に破壊された部分にあった可能性がある。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁にある。袖の痕跡がわずかに残っていた。焚き口幅は16cm、長さ53cmであり、36号住居と同様小型の竈である。覆土には多くの焼土・炭化物を含むほか、前面の床面にも焼土・炭化物が散っている。竈覆土からは土師器甕を中心とした土器片が出土している。

遺物　遺物は土師器・須恵器の小破片が多く、報告できるのは須恵器高台付埦1点、土師器甕1点のほか、敲石と思われる石製品1点である。

所見　報告した土器はいずれも9世紀後半のものであり、これが本住居の時期であると思われる。



37号住居竈

1　褐色土　少量のローム粒を含む。

2　褐色土　多量の炭化物と少量の焼土粒・ローム粒を含む。下端は最終使用面。

3　褐色土　多量の焼土ブロック（径５～20mm）と少量の炭化物・ローム粒を含む。

4　暗褐色土　多量の炭化物・炭と少量の焼土粒を含む。下端は使用面。

第74図　37号住居・掘方・竈平・断面図、出土遺物

38号住居（第75図、第5表、PL.12・35）

D区南端の、住居の切り合いの激しい部分にある。南側の大部分が調査区外となる。

位置　X＝29745～748、Y＝－43111～116

重複遺構　西側に32号住居、東側に35号住居が重複する。本住居は32号住居よりも古く、35号住居よりも新しい。調査の際は掘削する前に新旧関係を把握することができず、35号住居と同時に掘削してしまったため、平面図では35号住居が新しく見えてしまっているが、セクション図で明らかなとおり、38号住居が新しい。

形態　南側の大部分が調査区外となるため明らかではない。

方位　N－53°－Eか

規模　(2.90)×(1.87) m

面積　(6.02) m²

壁高　比較的残りがよく、他の遺構が重複しない北隅では35cmある。

床面　掘方底面には浅い土坑状の掘り込みがいくつかあり、それらを黒褐色土で埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

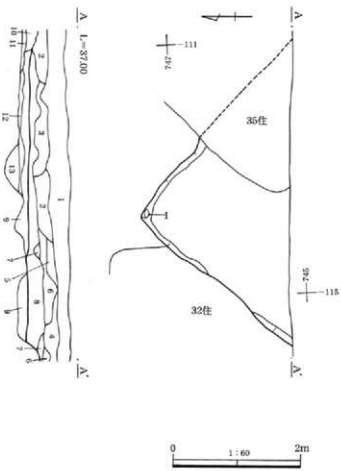
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　確認できなかった。

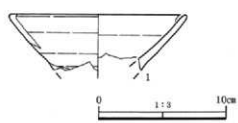
遺物　出土遺物は少なく、報告できるのは須恵器坏1点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、1の坏は9世紀後半のものと思われ、それが住居の時期と考えられる。



38号住居

1　表土
2　灰褐色土　少量のローム粒を含む。しまり弱い。
3　暗褐色土　微量のローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
4　褐色土　(32号住) 多量のローム粒と少量の焼土粒、炭化物を含む。
5　褐色土　(32号住) 多量のローム粒・小ブロックと少量の焼土粒、炭化物を含む。
6　褐色土　(32号住) 少量のローム粒・小ブロック、焼土粒、炭化物を含む。
7　暗褐色土　(32号住) ロームブロックを含む。
8　暗褐色土　(38号住) 少量のロームブロック、微量のローム粒を含む。
9　黒褐色土　(38号住) 少量のロームブロック、ローム粒を含む。
10　褐色土　(35号住) 多量のロームブロック、少量のローム粒、微量の焼土粒、炭化物含む。
11　灰白色土　(35号住) 灰と炭化物からなる層。
12　灰褐色土　(35号住) 灰、炭化物を含む。
13　灰褐色土　(35号住) ロームブロック、黒褐色土を含む。



第75図　38号住居平・断面図、出土遺物

39号住居（第76・77図、第5表、PL.13・35・36）

平成17年度に調査したF区の中央付近にある。F区は全体的に多くの攪乱が見られ、遺構の残りは非常に悪い。完形かそれに近い大きさの土器が遺構に伴わずに出土しているのはそのためであり、それらの土器は「第10節　遺構外出土の遺物」に報告してある。

位置　X＝29724～727、Y＝－43159～163

重複遺構　東側に40号住居が重複する。本住居が古いと思われるが、重複部分に大きな攪乱が入っており、断面図で切り合い関係を示すことはできなかった。東半部にある11号井戸は、掘方覆土を除去した後に見つかったものであり、本住居の方が新しいことは明らかである。

形態　東西に長い長方形。

方位　N－79°－Wか

規模　3.65×2.40m

面積　(8.57) ㎡

壁高　10cm

床面　掘方は東半部のみ方形の土坑状に掘り下げている。その壁の位置は、南北と東側は住居と等しく、西側だけ住居の壁よりも1m内側になっている。底面は平坦であり、あたかも別の小さな竪穴住居のようであるが、この掘り込みの中には床面のような硬化面はないので、この部分が住居として使われていたとは思えない。39号住居は、この土坑状の部分を埋め戻し、さらに西側に拡張して床面としたものと思われる。西側の浅い部分では地山を直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

竈　確認できなかった。東壁に設置されていたとすれば、この部分には大きな攪乱が入っているので、それによって破壊されたものと考えられるが、焼土や炭化物が少なく、掘方にも痕跡が見られなかったので、竈が存在しなかった可能性も考えられよう。

遺物　出土遺物は比較的多く、住居西半部から完形品を含めて出土している。報告したのは土師器坏2点、土師器高台付埦1点、土師器小型甕1点、須恵器坏1点、須恵器高台付埦5点である。

所見　本住居の時期は、出土遺物から9世紀後半であると思われる。竈が存在しない可能性があり、通常の住居として使用されていたものか、やや疑問がある。

40号住居（第76図、PL.13）

F区の中央付近にある。攪乱が多く入っていて残りはきわめて悪い。竪穴住居とするとかなり小型になること、遺物の出土がほとんどないこと、竈・柱穴などの施設も見られないことから、住居ではない可能性もある。

位置　X＝29724～726、Y＝－43157～160

重複遺構　西側に39号住居が重複する。床面の残存状況から、本住居の方が古いものと判断される。

形態　西側を破壊されているため不明。

方位　N－89°－E

規模　1.90×（1.43）m

面積　(2.54) ㎡

壁高　北側では3～6cm程度しか残っていないが、南壁では12cmの高さが残っていた。

床面　地山を床面としている。

柱穴　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

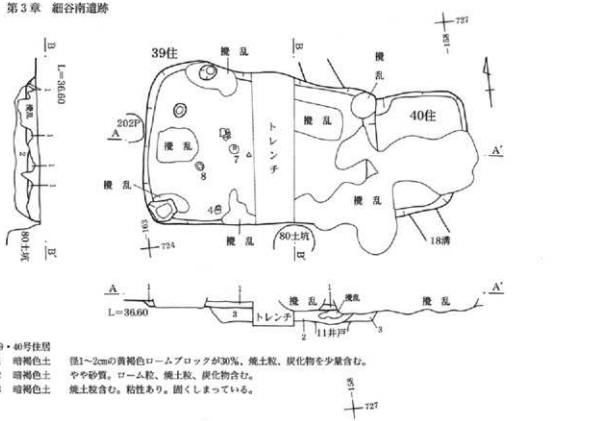
貯蔵穴　確認できなかった。

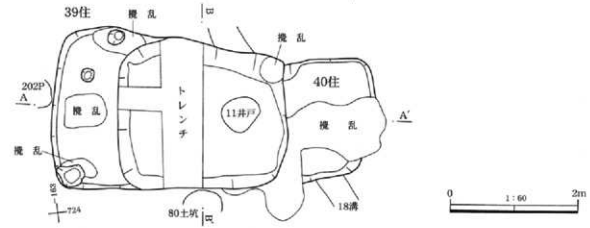
周溝　確認できなかった。本来存在しないものと思われる。

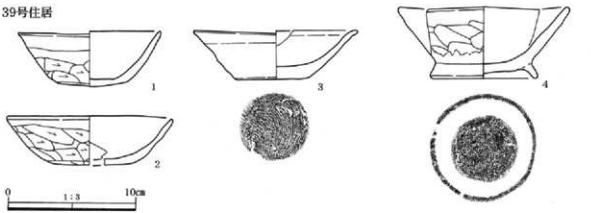
竈　確認できなかった。

遺物　土師器・須恵器の破片が出土しているが、小破片しかなく、掲載できる遺物はない。

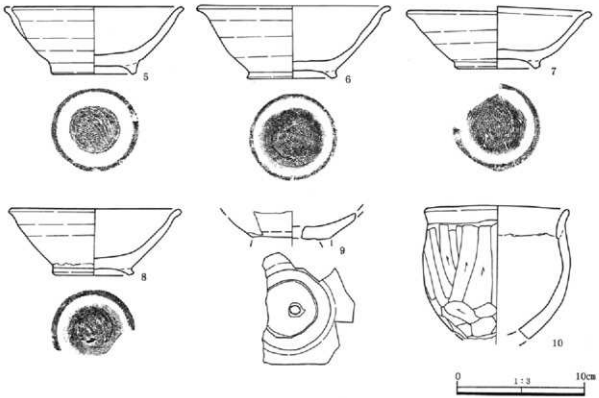
所見　遺物がほとんどなく、時期を特定できないが、39号住居よりも古いので、9世紀後半以前のものである。先述の通り住居ではない可能性がある。







第76図　39号・40号住居・掘方平・断面図、39号住居出土遺物（1）



第77図　39号住居出土遺物（2）

41号住居（第78図、第5表、PL.13・36）

F区の西端にあり、大部分が調査区外となる。この部分も攪乱が多く入っていたため、平面的に住居の形を確定するのは困難であり、調査区際にサブトレンチを入れながら調査を行った。

位置　X＝29720～725、Y＝－43164～167

重複遺構　他の遺構とは重複していないが、数多くの攪乱によって破壊されている。

形態　西側の大部分が調査区外となるほか、攪乱によって大きく破壊され、平面的にはほとんど残っていないため、形態は不明である。

方位　N－57°－E

規模　(3.2)×(2.13) m

面積　(5.62) m²

壁高　北壁の残りのよいところで16cm残っているが、A－A′セクション南端では23cmである。

床面　調査範囲内では大部分を攪乱によって破壊されてしまっているが、A－A′セクションを見ると、掘方底面から5～10cm埋め戻す部分と、地山を直接床面とする部分とがあるらしい。

柱穴　確認できなかった。

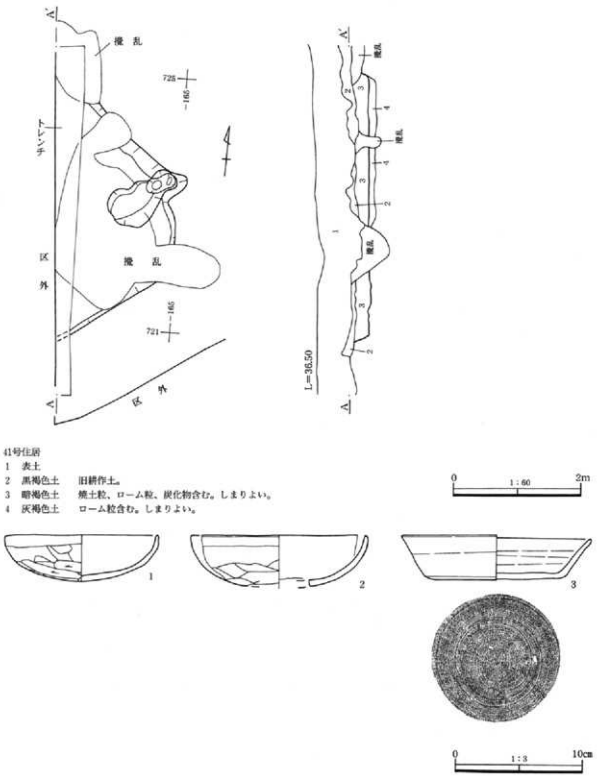
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。以上の柱穴・貯蔵穴・周溝は、攪乱が多いため、本来存在したものかどうか分からない。

竈　東壁にその痕跡と疑われる突出部分を確認したため調査したが、覆土には焼土・炭化物が少なく、竈ではない可能性が高い。

遺物　報告できたのは土師器坏2点と須恵器坏1点である。

所見　本住居の時期は、出土遺物から8世紀前半であると思われる。



41号住居
1　表土
2　黒褐色土　　旧耕作土。
3　暗褐色土　　焼土粒、ローム粒、炭化物含む。しまりよい。
4　灰褐色土　　ローム粒含む。しまりよい。

第78図　41号住居平・断面図、出土遺物

第3節　掘立柱建物

1号掘立柱建物（第79・80図、PL.14・16）

A区中央にある2間×2間の側柱の建物である。

位置　X＝29758～766、Y＝－43149～157

重複遺構　7号住居、4号掘立柱建物と重複しているほか、1号井戸、4・9・13・29号土坑と重複する。本建物は井戸、土坑より古いことが平面・断面観察の結果確認できた。7号住居との新旧関係は確認できなかったが、7号住居は2・3号掘立柱建物よりも古いことが確認できたので、7号住居は掘立柱建物よりも古い可能性があり、それから考えて、1号掘立柱建物との関係も、7号住居の方が古いのではないかと思われる。4号掘立柱建物とはP5、P6で重複している。このうちP6では4号掘立柱建物P1と完全に重複しているので、P6は破壊され、平面形は不明である。断面観察から本建物は4号掘立柱建物よりも古いことが確認できた。

形態　ほぼ正方形に近いが、北隅のP1の位置がやや東によっているため、その部分に若干の歪みが見られる。

方位　N－38°－W

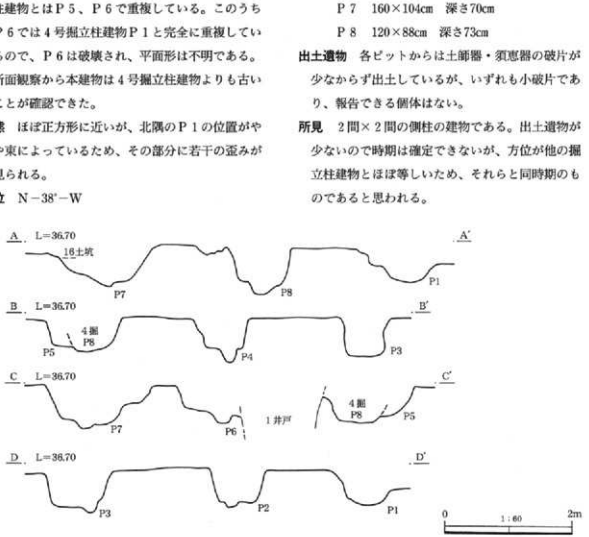
規模　1辺4.60m、北西辺（P7～1）のみ4.75m。

柱穴　P2、P4のように平面形が正方形に近いものがあり、これが本来の形であると思われる。柱痕が明確なものが多いが、その位置は柱筋に合致しないところがある。それぞれの規模は下記の通りである。

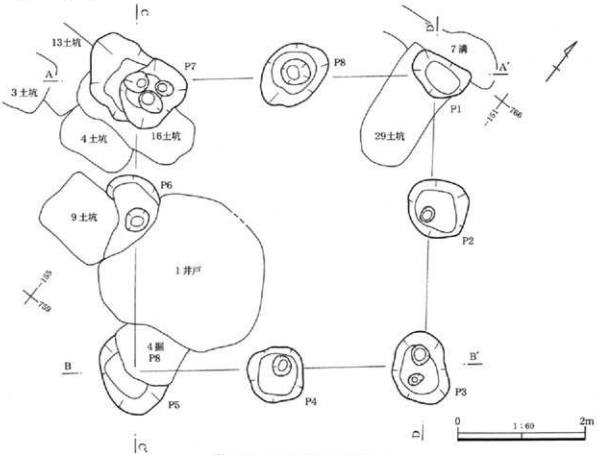
P1	90×58cm	深さ53cm
P2	95×89cm	深さ62cm
P3	110×82cm	深さ66cm
P4	89×85cm	深さ70cm
P5	124×－cm	深さ48cm
P6	－	深さ59cm
P7	160×104cm	深さ70cm
P8	120×88cm	深さ73cm

出土遺物　各ピットからは土師器・須恵器の破片が少なからず出土しているが、いずれも小破片であり、報告できる個体はない。

所見　2間×2間の側柱の建物である。出土遺物が少ないので時期は確定できないが、方位が他の掘立柱建物とほぼ等しいため、それらと同時期のものであると思われる。



第79図　1号掘立柱建物断面図



第80図　1号掘立柱建物平面図

2号掘立柱建物（第81図、第5表、PL.15・36）

A区の東部にある2間×2間の総柱建物である。

位置　X＝29765～772、Y＝－43142～150

重複遺構　7・8・19・24号住居、2・6号溝と重複する。本建物は溝よりも古い。住居との新旧関係は、7号住居よりも新しく、その他の住居よりは古いことが平面・断面観察から確認できた。3号掘立柱建物とも重複しているが、柱穴が直接切り合っていないため、新旧関係は不明である。

形態　全体の形は正方形に近いが、歪んだ不整方形である。

方位　N－52°－E

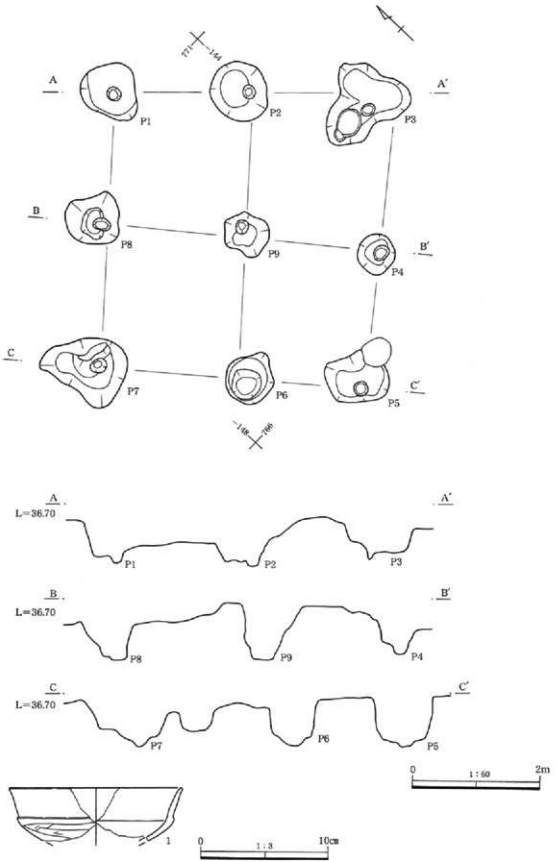
規模　北東辺（P1～3）4.45m
南東辺（P3～5）4.70m
南西辺（P5～7）4.20m
北西辺（P7～1）4.35m

柱穴　柱痕の明確なものが多い。他の遺構との切り合いが激しかったため、P3のように平面形が不整形になってしまったものがある。P3は他の土坑・ピットと切り合っている可能性もある。各柱穴の規模は下記の通り。

P1　89×85cm　深さ65cm
P2　93×88cm　深さ64cm
P3　145×123cm　深さ47cm
P4　65×59cm　深さ56cm
P5　97×80cm　深さ78cm
P6　84×75cm　深さ72cm
P7　138×107cm　深さ76cm
P8　86×81cm　深さ57cm
P9　69×66cm　深さ98cm

遺物　図示できるのはP1から出土した土師器の坏のみである。その他、8世紀代と思われる土器片が出土している。

所見　住居との重複関係から、7世紀中頃（7号住居）から9世紀前半（19号住居）の間の建物である。



第81図　2号掘立柱建物平・断面図、出土遺物

3号掘立柱建物（第82・83図、第5表、PL.15・36）

A区の東部にある2間×2間の総柱建物である。2号掘立柱建物と同様、この付近は遺構の重複が激しく、本建物の調査はやや難航した。

位置　X＝29763～770、Y＝－43142～149

重複遺構　7・8・18・19・24号住居、2・6号溝と重複している。本建物は溝よりも古い。各住居との新旧関係は、7号住居よりも新しく、その他の住居より古いことが平面・断面観察の結果確認できた。2号掘立柱建物とも重複しているが、柱穴が直接重複しないので、新旧関係は不明である。

形態　正方形に近い長方形。全体にやや歪んでいる。

方位　N－47°－E

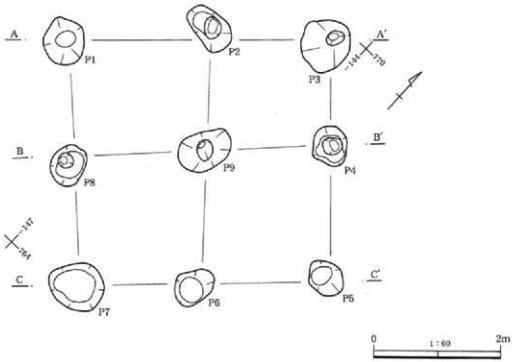
規模　北東辺（P3～5）　3.82m
　　南東辺（P5～7）　3.97m
　　南西辺（P7～1）　3.90m
　　北西辺（P1～3）　4.13m

柱穴　2号掘立柱建物のものよりも小さい傾向がある。柱痕が残るものもある。各柱穴の規模は下記の通り。

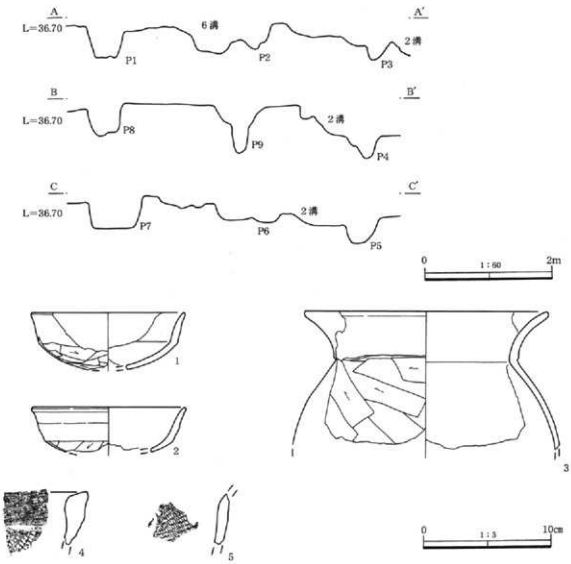
P1　76×63cm　深さ52cm
P2　80×47cm　深さ51cm
P3　81×77cm　深さ38cm
P4　64×54cm　深さ40cm
P5　62×49cm　深さ55cm
P6　69×49cm　深さ29cm
P7　89×74cm　深さ58cm
P8　62×52cm　深さ50cm
P9　87×58cm　深さ75cm

遺物　各柱穴から土師器・須恵器の破片が出土している。報告するのは土師器坏2点、甕1点であるが、いずれも小破片であり、本建物に伴うものかどうかは明らかではない。

所見　2号掘立柱建物とほぼ同位置にある2間×2間の総柱建物である。2号掘立柱建物との新旧関係は不明であるが、両者は建て替えの関係にあるものと思われる。出土遺物が少ないので時期の特定は困難であるが、2号掘立柱建物と同様、7世紀中頃から9世紀前半までの間である。



第82図　3号掘立柱建物平面図



第83図　３号掘立柱建物断面図、出土遺物

４号掘立柱建物（第84図、第５表、PL.16・36）

Ａ区中央にある２間×２間の側柱建物であり、１号建物とほぼ同位置にある。

位置　Ｘ＝29757～764、Ｙ＝－43148～155

重複遺構　西隅に１号井戸、９号土坑と重複する。本建物の方が古い。１号掘立柱建物とも重複し、Ｐ１とＰ８とは１号掘立柱建物の柱穴と直接重複している。このうち、Ｐ１では完全に重なっていたため、新旧関係が確認できなかったが、Ｐ８では断面観察により、本建物の方が新しいことが確認できた。

形態　北西－南東方向にやや長い長方形。歪みは少ない。

方位　Ｎ－40°－Ｗ

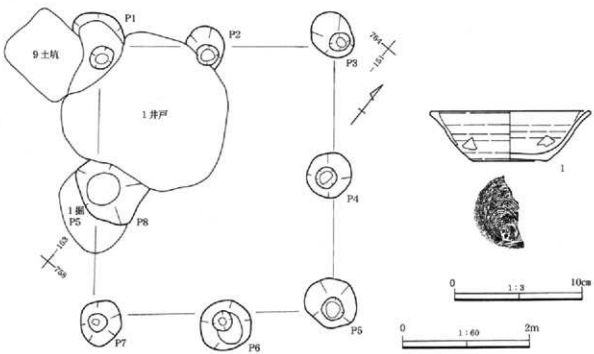
規模　北東辺（Ｐ３～５）　4.22m
　　南東辺（Ｐ５～７）　3.80m
　　南西辺（Ｐ７～１）　4.25m
　　北西辺（Ｐ１～３）　3.80m

柱穴　1号掘立柱建物よりも小さいものが多い。柱痕が明瞭である。P1は1号掘立柱建物のP6とほぼ完全に重複している。各柱穴の規模は下記の通り。

P1　－　深さ56cm
P2　－×54cm　深さ48cm
P3　76×61cm　深さ51cm
P4　71×68cm　深さ36cm
P5　87×75cm　深さ36cm
P6　78×78cm　深さ33cm
P7　71×62cm　深さ41cm
P8　116×－cm　深さ55cm

遺物　各柱穴から土師器・須恵器の破片が出土しているが、いずれも小破片であり、報告できるのはP8から出土した須恵器坏のみである。

所見　出土遺物が少ないため、時期を断定できないが、1号掘立柱建物の項で述べたように、他の掘立柱建物とほぼ同じ時期と考えられる。



第84図　4号掘立柱建物平面図、出土遺物

5号掘立柱建物（第85図、PL.16）

D区の西端付近にある。3本の柱穴が並んでいるのを確認したのみである。これが掘立柱建物だとすると、西側に続いているものと考えられる。

位置　X＝29746～751、Y＝－43132～136

重複遺構　26号住居、1号竪穴状遺構と重複する。本建物の方が新しい。

形態　西側が調査区外であると推定されるため、不明である。

方位　柱列の方位はN－38°－W

規模　P1～P3　柱痕の心－心距離で3.85m。

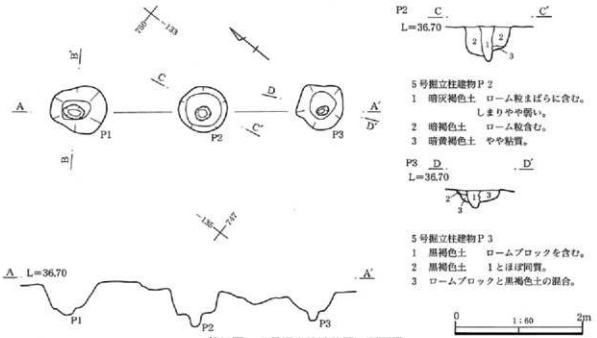
柱穴　いずれも楕円形だが、一部に方形を意識したようなところも見える。3本とも柱痕がはっきりと残る。規模は下記の通り。

P1　89×79cm　深さ52cm
P2　76×72cm　深さ55cm
P3　77×70cm　深さ45cm

遺物　土師器・須恵器甕の破片が出土しているが、

いずれもごく小破片であり、報告できる遺物はない。

所見　柱間２間分のみの調査なので詳細は不明であるが、西側に続く掘立柱建物であると思われる。１号竪穴状遺構よりも新しいので、少なくとも７世紀後半以降のものである。



第85図　５号掘立柱建物平・断面図

６号掘立柱建物（第86図、PL.17）

Ｃ区東部、As－Ｂ下の水田耕土の下層から見つかっている２間×３間の側柱建物である。各辺の中央部分が膨らむ特徴的な形態である。各柱穴はきわめて浅いので、かなり削平を受けているものと思われる。

位置　X＝29768～776、Y＝－43095～102

重複遺構　なし。As－Ｂ下水田耕土の下層にある。

形態　各辺の中央部分が膨らむ、樽型を呈する。

方位　N－21°－W

規模　各隅の柱穴の心－心距離を計測。

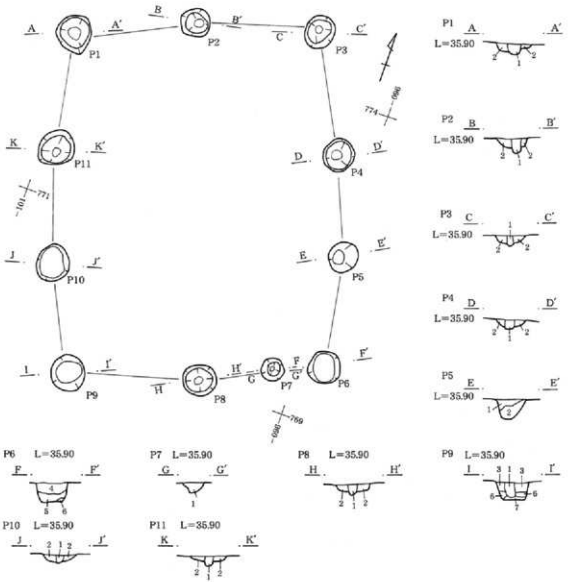
北辺（Ｐ１～３）　3.90m
東辺（Ｐ３～６）　5.37m
南辺（Ｐ６～９）　4.10m
西辺（Ｐ９～１）　5.36m

柱穴　いずれもみな浅い。不整円形を呈し、柱痕が明確に残るものが多い。Ｐ７のみ大きさが異なり、また、位置も通常の柱穴の中間にあるので、特別の用途をもつものか、あるいはこの建物に属さないものかもしれない。各柱穴の規模は次の通りである。

Ｐ１　62×55cm　深さ18cm
Ｐ２　50×44cm　深さ24cm
Ｐ３　54×45cm　深さ16cm
Ｐ４　53×48cm　深さ14cm
Ｐ５　49×45cm　深さ35cm
Ｐ６　52×50cm　深さ30cm
Ｐ７　38×37cm　深さ24cm
Ｐ８　54×49cm　深さ18cm
Ｐ９　60×54cm　深さ33cm
Ｐ10　62×53cm　深さ15cm
Ｐ11　62×54cm　深さ18cm

遺物　遺物はごく少なく、報告できるものはない。

所見　As－B下水田の耕土を除去して見つかった2間×3間の側柱建物である。出土遺物が少ないので、As－B降下以前であること以上に時期を限定する資料はない。この建物のある位置は台地から低地に移行した部分にあたり、居住には適さない部分であると考えられるので、この建物の用途は住居以外のものであると考えられる。西側にある焼土集中部との関連も考えられる。



6号掘立柱建物（P 1～11）
1　黒色土　　やや粘質。
2　黒色土　　やや粘質。黄白色シルト含む。
3　黒色土　　やや粘質。黒みが強い。
4　黒色土　　やや粘質。白色粘土ブロックを少量含む。
5　黒色土　　やや粘質。白色粘土ブロックを多く含む。
6　黄白色シルトと白色粘土の混合土。黒色土を含む。
7　灰白色シルト。

第86図　6号掘立柱建物平・断面図

７号掘立柱建物（第87・88図、PL.12・18）

Ｄ区の南端中央にある。

位置　Ｘ＝29745～751、Ｙ＝－43110～119

重複遺構　33・35・36号住居、76号土坑と重複する。本建物は76号土坑よりも古い。住居とは、33・36号よりも古いが、35号とは不明である。

形態　南半分が調査区外となるため、確定的なことは不明であるが、Ｐ１の南西側に柱穴が確認できなかったこと、Ｐ３のように、柱筋に対して斜めに掘ってある柱穴が隅になる場合が多いことの２つの理由から、Ｐ１が西側の隅である可能性があり、とすれば、梁間２間となる。桁行きは２間まで確認できているが、Ｐ５はＰ１・３とは異なって斜めになっていないため、隅部ではない可能性があり、だとすれば梁間は２間、桁行きは３間以上の建物となる。

方位　Ｎ－38°－Ｗ

北西側の柱筋の方位が桁行きの方位と近いものと考えられるので、そこを計測したが、この数値は１号・５号掘立柱建物と同じである。

規模　柱痕の心－心距離を計測する。

北西辺（Ｐ１～３）　4.90m

北東辺（Ｐ３～５）　5.66m

柱穴　不整な楕円形であるが、本来は方形を意識しているらしい。隅部の柱穴が柱筋に対して斜めに掘られている可能性がある。いずれも柱痕が明確に残っている。各柱穴の規模は下記の通り。

Ｐ１　96×65cm　深さ69cm

Ｐ２　75×62cm　深さ83cm

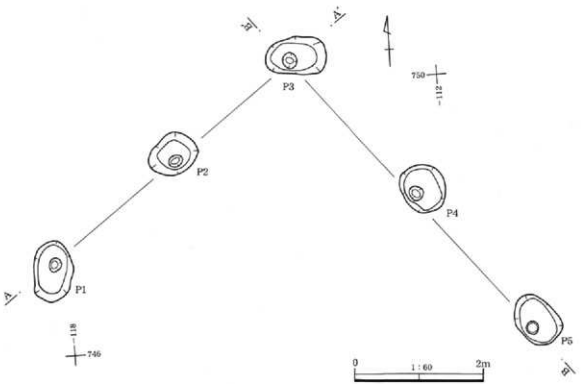
Ｐ３　96×58cm　深さ77cm

Ｐ４　74×68cm　深さ67cm

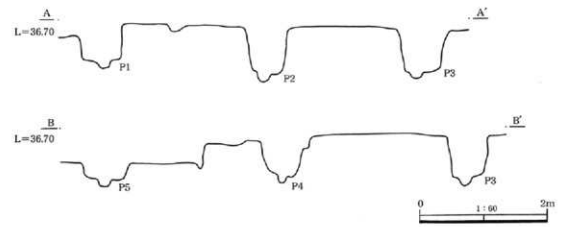
Ｐ５　85×62cm　深さ39cm

遺物　各ピットから土師器・須恵器の破片が出土しているが、いずれも小破片であり、報告できる遺物はない。

所見　調査区外となる部分が大きいが、２×２間か、２×３間以上の側柱建物になると思われる。遺物からは時期を特定できないが、重複関係からは33・36号住居よりは古いことが明らかであるので、９世紀中頃よりは遡るものである。



第87図　７号掘立柱建物平面図



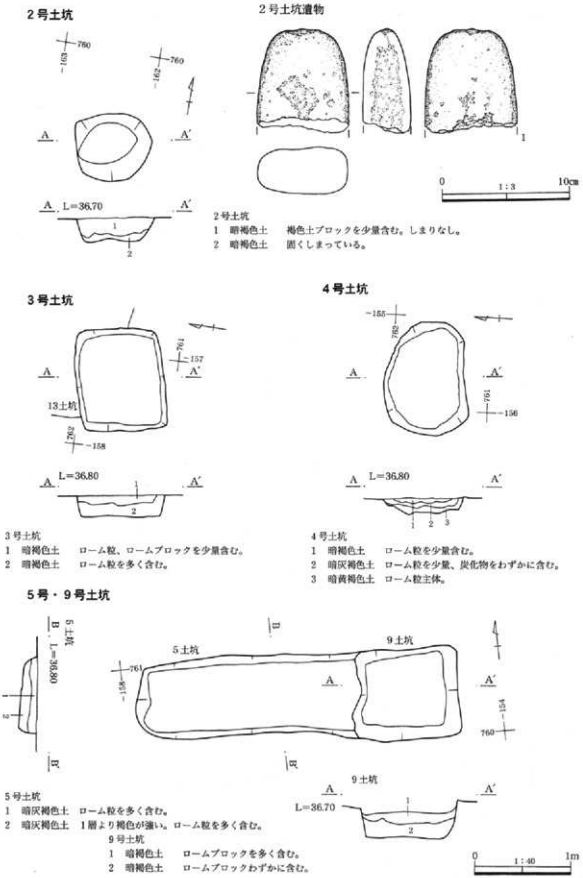
第88図　7号掘立柱建物断面図

第4節　土　　坑

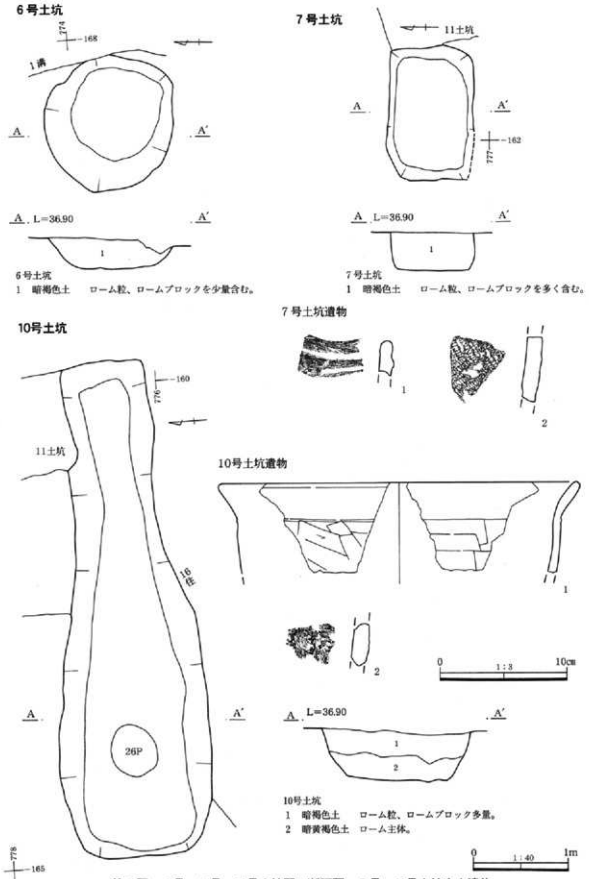
土坑は農地造成時に削平されたところ（B区、C区西半部）を除いて、ほぼ全域に分布している。何度も述べたとおり、調査区内は後世の削平・攪乱が著しく、遺構の平面的な確認作業はかなり困難であった。そのため、土坑として調査したものが、調査の最終段階でごく新しい攪乱であると判明した例や、掘立柱建物の柱穴であることが判明した例が少なからず生じてしまった。以下に報告する土坑のうち、欠番となっているものが多いのはそうした理由による。土坑のうちのほとんどは出土する遺物が少なく、時期・性格ともに不明なものが多い。ここでは、注目される土坑についてのみ記述し、その他のものについては、平面図・断面図、写真をあげるにとどめることにした。大きさなどのデータは、第2表にあげたとおりである。

26号土坑（第93図）A区中央やや南にある。底部に焼土や灰の層が見られ、さらに骨片と思われる白い粒子が出土したことから、火葬土坑だと思われる。調査時には1.10×1.04mの方形に近い楕円形で、深さは最大で19cmとごく浅いものであったが、この付近は後世の削平が激しく、隣接する11号住居も床面が削られているほどなので、本来はより大きなものであったはずである。北に隣接する3号住居では、南壁の東よりの部分に焼土が集中していたが、これは本来3号住居に帰属するものではなく、26号土坑の延長部である可能性が高いのではないだろうか。とすれば、26号土坑は、北西方向により長い形態であったものと思われる。

74号土坑（第98図）はD区にある。平面形はやや歪んでいるもののほぼ正方形で、その規模は中央で測って2.78×2.70mであり、深さは1.46mである。土坑の形態は断面図に明らかなように、まずほぼ垂直に約70cm掘り、その後一旦傾斜を緩やかにしたあともう一度急角度に掘り下げ、さらに底部に直径70～80cm、深さ38cmの穴を掘っている。埋土の最下層はしまりが弱くボロボロで、有機物が腐食した土だと思われる。埋土からは多数の土師器・須恵器が出土しているが、小破片で摩滅したものが多く、報告できるのは土師器甕と須恵器長頸瓶のみである。この土坑の時期は明確ではないが、明らかに中世以降の遺物は出土していないので、古代のうちに収まるものと思われる。遺構の性格は確定しがたいが、中山晋氏によって氷室と推定されている土坑に形態が似ており注目される（中山晋「古代日本の氷室の実態」『立正史学』79　1996）。

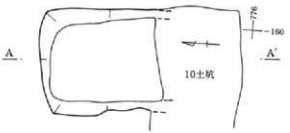


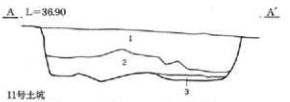
第89図　2号～5号・9号土坑平・断面図、2号土坑出土遺物



第90図　6号・7号・10号土坑平・断面図、7号・10号土坑出土遺物

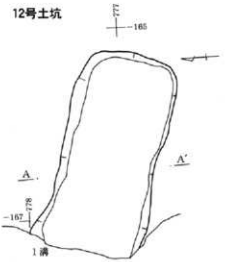
11号土坑

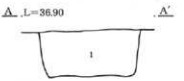




11号土坑
1　暗褐色土　　ローム粒、ロームブロック少量。
2　暗褐色土　　ローム粒、ロームブロック多量。
3　暗黄褐色土　（10号土坑2層）ローム主体。

12号土坑

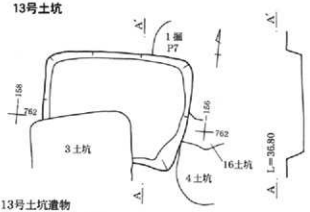




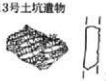
12号土坑
1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。

12号土坑遺物

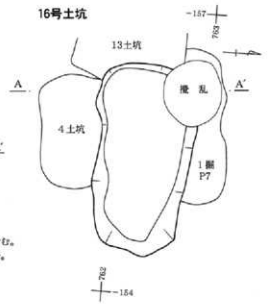
13号土坑

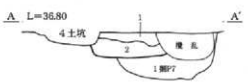


13号土坑遺物



16号土坑





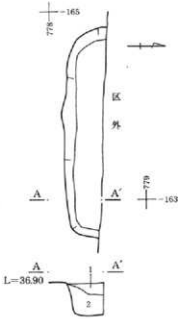
16号土坑
1　暗灰褐色土　ロームブロックまばらに含む。
2　暗褐色土　　ロームブロックを多く含む。

16号土坑遺物

0　1:3　10cm　　0　1:40　1m

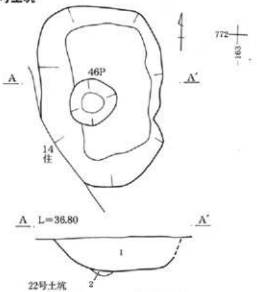
第91図　11号～13号・16号土坑平・断面図、12号・13号・16号土坑出土遺物

20号土坑



20号土坑
1　暗褐色土　　やや砂質。ローム粒わずかに含む。
2　暗褐色土　　ローム粒少量含む。

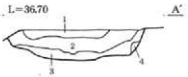
22号土坑



22号土坑
1　黒褐色土　　ローム粒を多量に含む。
2　暗褐色土と黒褐色土の混土（46号ピット）。

22号土坑
遺物

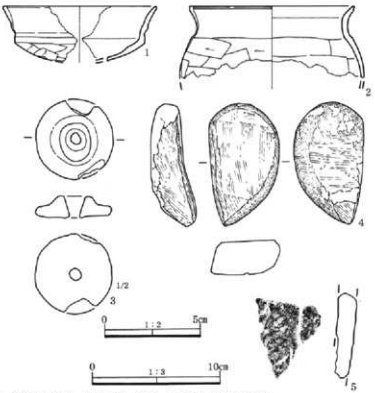
23号土坑



23号土坑
1　黒褐色土　　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　　ロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　　ローム粒、ロームブロック、
　　黒褐色土を少量含む。
4　褐色土と暗褐色土の混土　しまりよい。

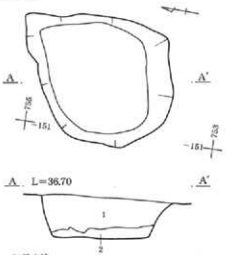
0　1:40　1m

23号土坑遺物



第92図　20号・22号・23号土坑平・断面図、22号・23号土坑出土遺物

24号土坑

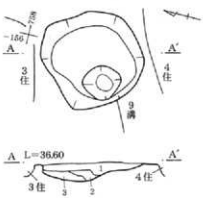


24号土坑
1　暗褐色土　ロームブロック含む。
2　黒褐色土　黒炭色砂を多く含む。

25号土坑

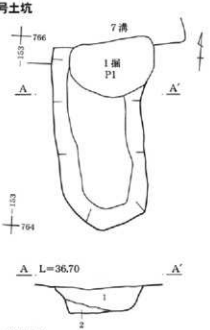
25号土坑
1　暗灰褐色土　ロームブロックを含む。
2　暗灰褐色土とロームブロックの混合土。

26号土坑



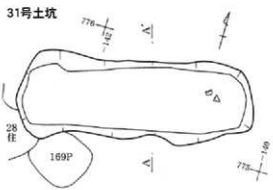
26号土坑
1　暗灰褐色土　焼土、灰をまばらに含む。
2　暗褐色土　焼土、灰、炭化物を含む。
3　灰層　焼土、骨片、炭化物を含む。

29号土坑



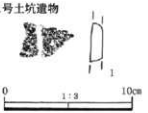
29号土坑
1　ロームブロックと黒褐色土の混合。
2　暗褐色土　暗色帯のくずれた土。

31号土坑



31号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。
2　暗褐色土と黄褐色土との混土　ロームブロックを少量含む。

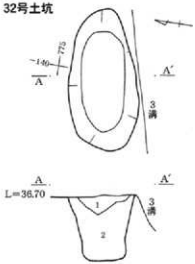
31号土坑遺物



0　1:40　1m

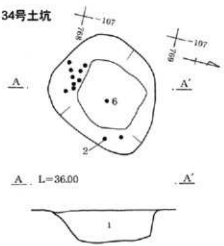
第93図　24号～26号・29号・31号土坑平・断面図、31号土坑出土遺物

32号土坑



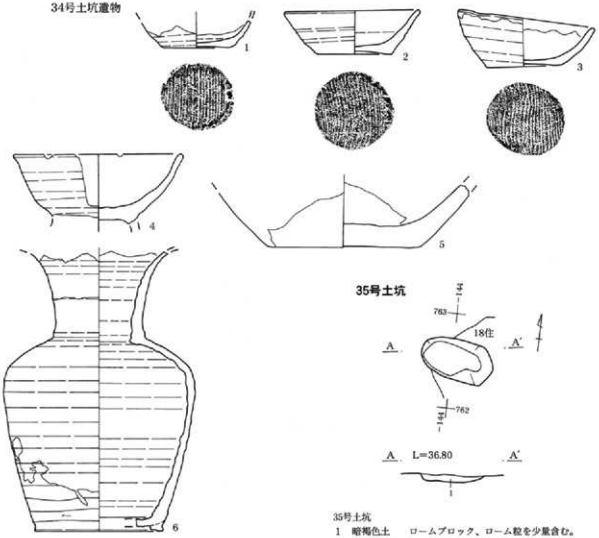
32号土坑
1　暗褐色土　　ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　　ロームブロックを多量に含む。

34号土坑



34号土坑
1　褐灰色土　　ローム粒を少量含む。

34号土坑遺物



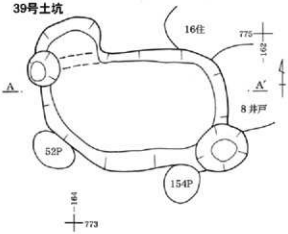
35号土坑

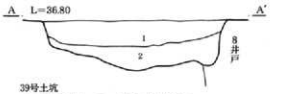
35号土坑
1　暗褐色土　　ロームブロック、ローム粒を少量含む。

0　1:3　10cm　　0　1:40　1m

第94図　32号・34号・35号土坑平・断面図、34号土坑出土遺物

39号土坑



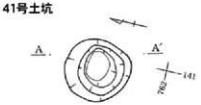


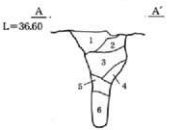
39号土坑
1　暗灰褐色土　ローム粒わずかに含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量含む。

40号土坑

40号土坑
1　ローム粒、ロームブロックを多く含む。

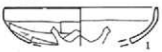
41号土坑





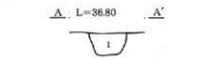
41号土坑
1　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。
2　暗褐色土　ローム粒少量、白色軽石多く含む。
3　黒褐色土　少量のローム粒と白色軽石、微量の炭化物を含む。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
5　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。

41号土坑遺物



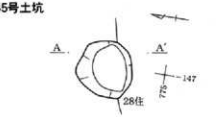
0　1:3　10cm

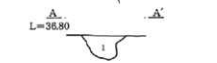
44号土坑



44号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。

45号土坑



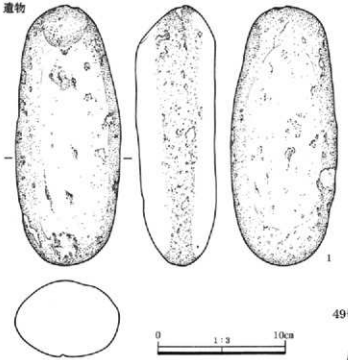


45号土坑
1　黒褐色土　ローム粒と焼土粒を含む。

0　1:40　1m

第95図　39号～41号・44号・45号土坑平・断面図、41号土坑出土遺物

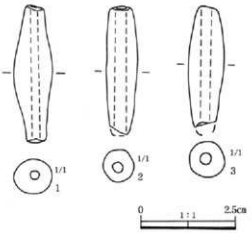
45号土坑
遺物



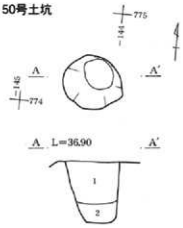
49号土坑

49号土坑
1　暗灰褐色土　ローム粒をまばらに含む。

49号土坑遺物

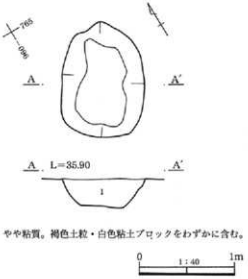


50号土坑



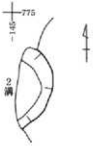
50号土坑
1 黒褐色土　多量の焼土粒、ロームブロック、ローム粒子を含む。
2 黒褐色土　黄白色粘質ローム粒少量、焼土粒・炭わずかに含む。

53号土坑



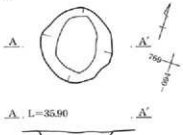
53号土坑
1　黒色土　やや粘質。褐色土粒・白色粘土ブロックをわずかに含む。

52号土坑



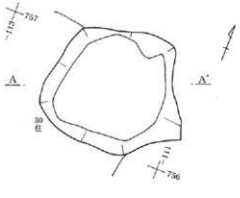
第96図　49号・50号・52号・53号土坑平・断面図、45号・49号土坑出土遺物

54号土坑



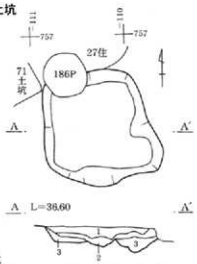
54号土坑
1　黒色土　　やや粘質。褐色土粒・白色粘土ブロックをわずかに含む。

71号土坑



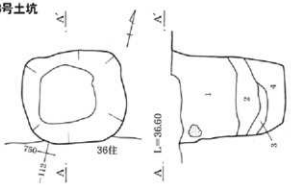
71号土坑
1　灰褐色土　　ロームブロック、炭化物含む。
2　灰褐色土　　ロームブロック多い。炭化物含む。
3　灰褐色土とロームブロックの混合土　炭化物含む。

72号土坑



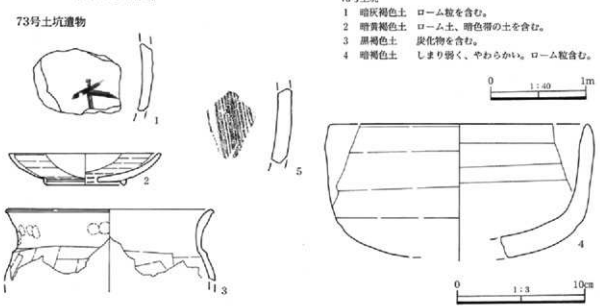
72号土坑
1　暗褐色土　　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。炭化物含む。
2　暗褐色土　　炭化物を多量に含む。ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
3　灰褐色土　　ロームブロック(径3cm)、ローム粒をやや多く含む。

73号土坑



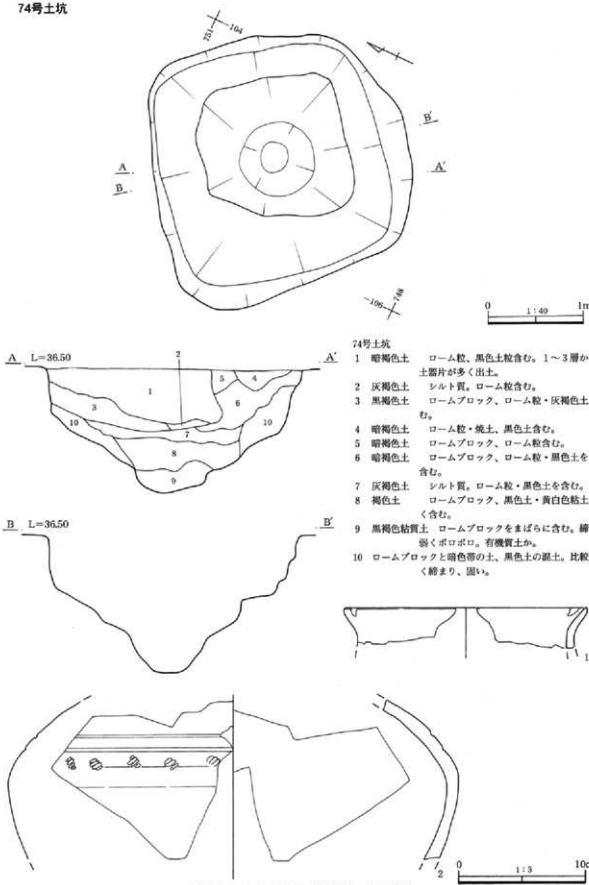
73号土坑
1　暗灰褐色土　ローム粒を含む。
2　暗黄褐色土　ローム土、暗色帯の土を含む。
3　黒褐色土　　炭化物を含む。
4　暗褐色土　　しまり弱く、やわらかい。ローム粒含む。

73号土坑遺物



第97図　54号・71号～73号土坑平・断面図、73号土坑出土遺物

74号土坑

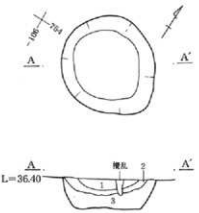


74号土坑

1　暗褐色土　ローム粒、黒色土粒含む。1～3層からは土器片が多く出土。
2　灰褐色土　シルト質。ローム粒含む。
3　黒褐色土　ロームブロック、ローム粒・灰褐色土を含む。
4　暗褐色土　ローム粒・焼土、黒色土含む。
5　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒含む。
6　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒・黒色土を多く含む。
7　灰褐色土　シルト質。ローム粒・黒色土を含む。
8　褐色土　ロームブロック、黒色土・黄白色粘土を多く含む。
9　黒褐色粘質土　ロームブロックをまばらに含む。締まり弱くボロボロ。有機質土か。
10　ロームブロックと暗色帯の土、黒色土の混土。比較的よく締まり、固い。

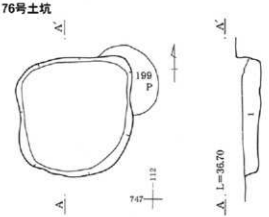
第98図　74号土坑平・断面図、出土遺物

75号土坑



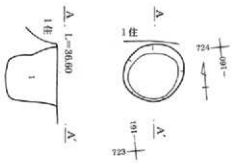
75号土坑
1　暗褐色土　少量の白色粘土と灰色粘土のブロック、微量の焼土粒、ロームブロック、ローム粒を含む。
2　灰褐色土　少量のロームブロックとローム粒、わずかな焼土粒を含む。
3　暗褐色土　多量のロームブロック、ローム粒、少量の焼土粒を含む。

76号土坑



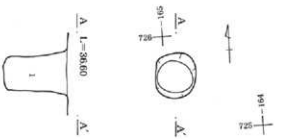
76号土坑
1　褐色砂質土　少量のローム粒、ロームブロック（径5～15cm）を含み、微量の焼土粒を含む。

80号土坑



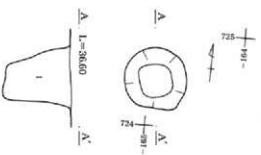
80号土坑　　H17年度調査区
1　暗褐色土　　径1～5mmの小礫、白色粒子、炭化物含む。

81号土坑



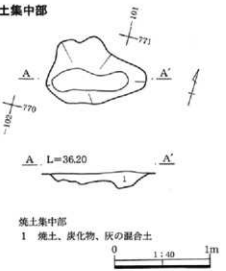
81号土坑　　H17年度調査区
1　暗褐色土　　径1～5mmの小礫、白色粒子、炭化物含む。

82号土坑



82号土坑　　H17年度調査区
1　暗褐色土　　径1～5mmの小礫含む。しまりやや弱い。

焼土集中部



焼土集中部
1　焼土、炭化物、灰の混合土

第99図　75号・76号・80号～82号土坑・焼土集中部平・断面図

第2表　土坑一覧表

No.	位　置	大きさ(m)			方　位	備　考
		長軸	短軸	深さ		
1	欠番					
2	758-161	0.81	0.70	0.25	N-80°-E	
3	761-156	1.08	0.94	0.23	N-80°-E	
4	761-155	1.20	0.86	0.18	N-90°-W	
5	760-155	(2.38)	0.85	0.18	N- 2°-W	
6	772-168	1.46	1.38	0.32	N-67°-W	
7	777-161	1.42	0.90	0.40	N-88°-W	
8	欠番					
9	759-154	1.12	0.96	0.26	N-90°-E	
10	776-159	5.20	1.62	0.52	N-89°-E	
11	776-159	1.24	1.12	0.54	N- 4°-W	
12	776-165	2.14	1.08	0.49	N-76°-W	
13	761-156	1.50	1.14	0.18	N-90°-E	
14	欠番					4号掘立柱建物P 7
15	欠番					1号掘立柱建物P 4
16	761-154	2.00	0.97	0.25	N-88°-W	
17	欠番					1号掘立柱建物P 7
18	欠番					4号掘立柱建物P 8
19	欠番					1号掘立柱建物P 5
20	778-162	2.22	(0.44)	0.34	N-88°-W	
21	欠番					1号掘立柱建物P 6と4号掘立柱建物P 1が重複
22	770-163	1.93	1.30	0.36	N-21°-W	
23	769-164	1.76	1.32	0.32	N-29°-W	
24	753-149	1.50	1.36	0.45	N- 0°	
25	755-149	1.19	0.86	0.18	N-35°-W	
26	756-155	1.10	1.04	0.19	N-11°-W	
27	欠番					1号掘立柱建物P 8
28	欠番					3号掘立柱建物P 8
29	764-151	(1.96)	0.94	0.27	N- 4°-W	
30	欠番					
31	774-140	2.50	0.87	0.20	N-75°-E	
32	774-139	1.49	0.74	0.47	N-82°-E	
33	欠番					3号掘立柱建物P 7
34	767-105	1.19	1.06	0.34	N-32°-E	
35	762-143	0.78	0.42	0.07	N-72°-E	

№	位　置	大　き　さ（m）			方　　位	備　　考
		長軸	短軸	深さ		
36	欠番					
37	欠番					
38	欠番					
39	773-162	1.97	1.25	0.53	N-89°-E	
40	775-147	2.00	0.94	0.16	N-79°-E	
41	762-140	0.70	0.65	1.01	N-15°-W	23号住居下層
42	欠番					3号掘立柱建物Ｐ９
43	欠番					
44	773-147	0.48	0.42	0.24	N-21°-W	
45	775-146	0.64	0.60	0.25	N-60°-E	
46	欠番					
47	欠番					
48	欠番					
49	747-123	1.60	1.02	0.14	N-14°-W	
50	774-143	0.62	0.56	0.65	N-84°-E	
51	欠番					
52	773-144	0.85	(0.38)	-	N- 4°-E	
53	763-095	1.22	0.88	0.30	N-32°-E	
54	768-094	0.80	0.78	0.21	N- 4°-W	
55～70	欠番					
71	756-111	1.33	1.16	0.26	N-11°-E	
72	755-109	1.26	1.24	0.26	N-90°-W	
73	750-111	1.08	0.98	1.21	N- 3°-W	
74	748-103	2.78	2.70	1.31	N-37°-W	
75	753-104	1.04	0.99	0.31	N-40°-W	
76	747-112	1.28	1.20	0.19	N- 0°	
77	欠番					
78	欠番					
79	欠番					
80	723-160	0.61	0.59	0.55	N-34°-E	
81	725-164	0.48	0.43	0.68	N- 7°-E	
82	724-164	0.65	0.64	0.73	N-15°-W	

第5節　溝

1号溝（付図2、第100図、第5表、PL.22・38）
A区の西端近くを南北に走る溝である。

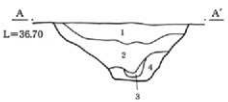
位置　X＝29749～779、Y＝－43161～169

重複遺構　1・2・4・6・9・13・14号住居、12・23号土坑、6・7・9号溝と重複する。1号溝はいずれの遺構よりも新しい。

形態　途中で2回屈曲して走向を替えるほか、南端部で2本に分かれる。その他の部分はほぼ直線的である。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

走向　南側はN－10°－W。北半部で2～3mだけN－39°－Wに方向を変え、さらにその北側はN－5°－Wになる。

規模　調査した長さは約30mであるが、南北両端は調査区外となりさらに続く。上面幅は1.8～1.15m、底面幅は45～22cm、深さはセクション図を取った部分で60cmである。



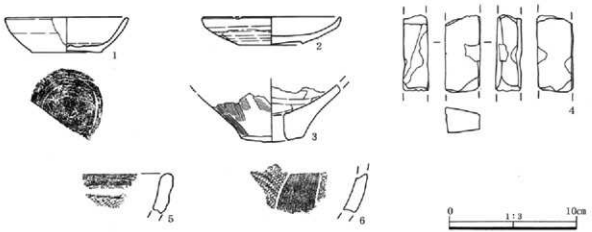
埋土の状態　埋土の下部にはAs－Bを含む層が堆積している。特に底面から5～10cm上にはAs－Bと思われる軽石を大量に含む層が見られるが、これらは流水によって運ばれたもので、さほど古くまで遡れるものではないと思われる。

遺物　出土遺物はかなり多いが、報告できるのは土師器甑、かわらけ小皿、陶器小皿、砥石のほか、混入品の縄文土器片である。このほか小破片のため図化できなかったが、近世のものと思われる焙烙片などが出土している。

所見　埋土下部にAs－Bを含んでいるものの、出土遺物や他の遺構との重複関係から見て、この溝が埋もれたのは近世であると考えられ、古代にまで遡るのは不可能である。深くしっかりした溝であるが、その用途などは不明である。

1号溝
1　暗褐色土　小さな褐色土粒を含む。しまりなし。
2　暗褐色土　As－Bを少量含む。ブロック状の黒褐色土と、一部に褐色土を含む。
3　黒褐色土　As－Bを多量に含む。
4　暗褐色土　As－Bを少量含む。

0　1:40　1m



第100図　1号溝断面図、出土遺物

2号溝（付図2、第101図、第5表、PL.22・23・38）

A区の東端近くにある。3号溝と平行し、途中でほぼ直角に曲がる。

位置　X＝29754～778、Y＝－43139～147

重複遺構　8・18・19・22・23・24・28・29号住居、2・3号掘立柱建物、50・52号土坑と重複する。いずれの遺構よりも本溝が新しい。6号溝とも重複するが、新旧関係は不明。合流地点の形態から見て同時存在の可能性もある。

形態　上面からは分からなかったが、断面及び底面の観察から、3時期の溝が集合したものであることが判明するが、底面形状が複雑な部分があるのでさらに別の時期の溝があるかもしれない。南端では4号溝で接するように終わっていて、重複しない。そこから直線的に北に延び、21mのところでほぼ直角に東に曲がる。1時期の溝を見ると、断面形状は逆台形で、途中から傾斜が緩やかになる。

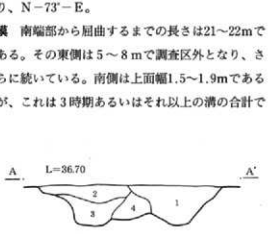
走向　南側はN－14′－W、北側はほぼ直角に曲がり、N－73′－E。

規模　南端部から屈曲するまでの長さは21～22mである。その東側は5～8mで調査区外となり、さらに続いている。南側は上面幅1.5～1.9mであるが、これは3時期あるいはそれ以上の溝の合計である。深さはセクション図を取った部分で44cmである。北側は上面幅1.3～1.65m、底面幅28～44cm、深さは50～65cmである。

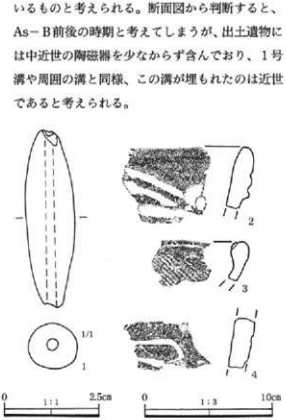
埋土の状態　セクションを取った部分で見ると、最も新しい溝の埋土にAs－Bと思われる軽石が含まれているが、1号溝と同様、これを根拠にこの溝の年代を古くするのは危険である。

遺物　多数の土師器・須恵器の破片と中・近世の陶磁器が出土しているが、いずれも小破片であり、報告できるものはない。報告したのは1点の土錘のほか、混入品の縄文土器3点のみである。

所見　何時期かの切り合いがある溝である。3号溝と平行していることから、何らかの区画溝であると考えられる。東側のB区は本来台地であった部分を掘り下げて水田とした部分であるが、2・3号溝はこの西辺・北辺と平行している。他にもこの2・3号溝と近い走向をとる溝が見られるので、このような方向がこの地点の古くからの区画方向であったと思われ、それが現在まで引き継がれているものと考えられる。断面図から判断すると、As－B前後の時期と考えてしまうが、出土遺物には中近世の陶磁器を少なからず含んでおり、1号溝や周囲の溝と同様、この溝が埋もれたのは近世であると考えられる。



2号溝
1　暗褐色砂質土　As－Bと思われる軽石を含む。
2　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　ごく小さなローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。



第101図　2号溝断面図、出土遺物

3号溝（付図2、第102図、第5表、PL.23・38）

A区の東端にある。B区との境の斜面に掘られているが、この斜面はB区を水田にする際に作られたものだと考えられるので、3号溝を掘った時には存在しなかったものと考えられる。2号溝と平行している。

位置　X＝29753～777、Y＝－43129～143

重複遺構　19・22・23・24号住居と重複。いずれも本溝が新しい。南端部では4号溝と重複するが、本溝が古い。

形態　2溝と平行し、途中で直角に曲がる。断面を見ると、後述するように2時期の溝が重複してるようである。

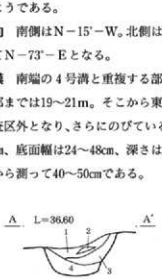
走向　南側はN－15′－W。北側はほぼ直角に屈曲してN－73′－Eとなる。

規模　南端の4号溝と重複する部分から、北の屈曲部までは19～21m。そこから東へ11～13.5mで調査区外となり、さらにのびている。上面幅は55～90cm、底面幅は24～48cm、深さは西・北側の高い方から測って40～50cmである。

埋土の状態　断面を見ると、A－A′、B－B′とも1～3層と4層とで分けることができ、2時期の溝が重複していると思われる。新しい溝にはAs－Bと思われる軽石を含む層が見られる（A－A′の2層）が、出土遺物には近世の陶磁器も含まれるため、これも1・2号溝と同様、流水によって集められたものと考えられ、時期を決定できるものではないと考えられる。

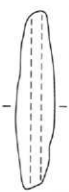
遺物　土師器・須恵器や中近世の陶磁器の小破片が多数出土しているが、いずれも図化できるものではなく、報告できるのは土錘1点のみである。

所見　2号溝と平行しており、出土遺物もほぼ同様であるため、同時存在していたもの考えられる。2号溝の項で述べたとおり、両者は関連を持った遺構であると思われ、何らかの区画施設であろう。溝間が道として利用されていた可能性も考えられる。埋もれた時期は1・2号溝同様、出土遺物から近世と考えられ、この溝が古くからのこの地点の区画方向であることも共通している。



3号溝A－A′
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　As－Bを多量に含む。
3　暗褐色土　少量のロームブロックと多量のローム粒を含む。
4　褐灰色砂質土　ローム粒を多量に含む。間に暗褐色粘土の薄い層が入る。

3号溝B－B′
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　ロームの小ブロック、ローム粒を多量に含む。
3　黒褐色土と暗褐色土との混土　ロームブロックを大量に含む。
4　暗褐色粘質土　粘性に富む。



0　1:40　1m

0　1:1　2.5cm

第102図　3号溝断面図、出土遺物

4号溝（付図2、第103・104図、第5表、PL.23・38）
A区の南側にある東西方向の溝である。

位置　X＝29746～755、Y＝－43135～159

重複遺構　重複遺構は少ない。東端近くで3号溝、西部で168号ピットと重複するが、いずれも本溝が新しい。

形態　西端近くでやや屈曲し、さらに東側でほぼ直角に屈曲する。それぞれの屈曲点以外は直線的にのびている。断面形状は逆台形で、斜面は上半部が緩やかになる。底面は平坦だが、中央部がやや低くなるところもある。

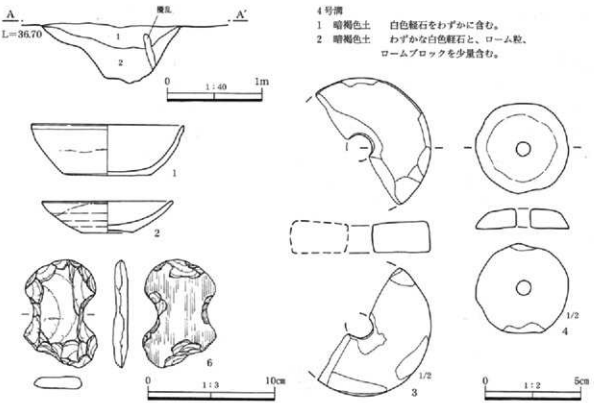
走向　西端部はN－43°－E、その東側はN－77°－E、東端でほぼ正確に90°屈曲し、N－13°－Wとなる。

規模　西端から、東の直角に屈曲するところまでが約21m。そこから南端まで約8mであるが、両端とも調査区外にのびている。上面幅は1.10～1.55mであるが、西端部は広がって2.20mある。底面幅は20～58cm、深さは45～66cmで、セクション図を取った部分では60cmである。

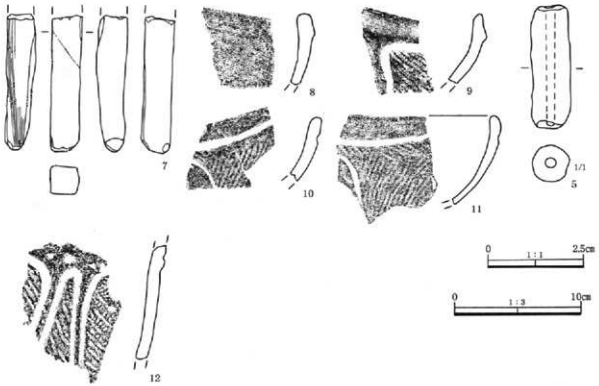
埋土の状態　短期間で埋もれたような状態であり、流水があったような痕跡は見られない。1～3号溝に見られたような、As－Bと思われる軽石は含まれていない。

遺物　土師器・須恵器・中近世陶磁器の小破片などが多量に出土している。報告できたのは、土師器坏1点、陶器皿1点のほか、土製紡錘車2点、砥石1点、土錘1点、石斧1点、縄文土器片5点である。小破片の陶磁器の中には近現代のものも含まれているので、報告した遺物はすべて混入品である。

所見　西端部を除いた走向が2・3号溝に近いため、この溝も何らかの区画溝と考えられるが、遺物の中には近現代のものも含まれ、土層も異なるので、この溝のみ新しいものである可能性が強い。現在この溝の南側には墓地があり、東側もちょうど墓地の東端に近いところで屈曲するので、この溝はその墓地の周囲を区画するものである可能性が考えられる。



第103図　4号溝断面図、出土遺物



第104図　４号溝出土遺物

５号溝（付図２、第105図、PL.23）

Ａ区北西隅にごく一部が見えている溝で、南側は攪乱で破壊されている。

位置　Ｘ＝29778～781、Ｙ＝－43170～173

重複遺構　なし。

形態　ごく一部が見えているだけなので平面的な形態は不明。断面形は、上半は不整形だが、下部に逆台形の細い溝が入る形状である。

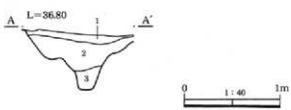
走向　Ｎ－４°－Ｅ

規模　調査できたのはわずか２ｍのみ。上面幅は1.65ｍ、下部の細い溝は上面幅50cm、底面幅15～18cmである。深さはセクション図を取った部分で63cmである。

埋土の状態　土層は上下ともよく似ており、比較的短期間に埋まったものと考えられる。特に最下層の３層にはローム・ブロックを多く含んでおり、この溝が掘られた後、あまり時間をおかないで埋もれたものと思われる。

遺物　調査した範囲が狭いため、出土遺物は少なく、報告できる遺物は出土していない。

所見　ごく一部を調査しただけなので詳細は不明であるが、１号溝の北部と走向が近く、関連が考えられる。ただし、As－Ｂなどが見られないなど、埋土は大きく異なるため、同時期に埋もれたものではないと思われる。



５号溝
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

第105図　５号溝断面図

6号溝（付図2、第106図、第5表、PL.23・38）

A区中央部を東西に走る溝である。次にあげる7号溝と平行して直線的にのびている。そのため、道の側溝の可能性が強いものと考えて、同時に調査を行った。

位置　X＝29766～769、Y＝－43144～170

重複遺構　6・7・14号住居、2・3号掘立柱建物1・2・8号溝と重複する。本溝は住居、掘立柱建物より新しい。1号溝よりは古く、8号溝より新しい。2号溝との新旧関係は不明だが、同時存在の可能性が高い。

形態　東西両端付近がわずかに屈曲するものの、それ以外の部分は直線的にのびている。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

走向　中央部分がN－89°－E、西端部はN－85°－E、東端部もN－85°－Eである。

規模　調査できた長さは、西端から2号溝に合流するまで約25mであるが、西側は調査区外となり、さらにのびていることが予想される。上面幅は54～72cmで、西端付近は上面が攪乱で削平されて細くなる。底面幅は14～40cmである。深さは上面に浅い攪乱が入る場所が多いために一定しないが、セクション図を取った部分では、遺構確認面から50cmの深さがある。

埋土の状態　暗灰褐色土1層で埋まっており、分層できない。そのため、比較的短期間に埋まったものと思われる。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器・須恵器や中近世の陶磁器の小破片が出土しているが、報告できるのは須恵器坏1点、同高台付埦1点、灰釉陶器埦1点、かわらけ皿1点のほか、凹み石1点、縄文土器片2点である。

所見　7号溝とは心－心距離で1.60～1.70m離れて平行しているため、両溝は道路側溝の可能性があるが、路面にあたる部分には浅い攪乱が入っているところがほとんどで、硬化面などは確認できなかった。溝の形態は両者とも似ているが、7号溝はかなり浅く、また、6号溝が2号溝まで達するのに対して、7号溝はその手前でとぎれてしまっており異なっている。以上のことから、道路側溝である可能性は残っているものの、断定することはできないといえよう。時期は、出土した陶磁器の破片から近世のものであると思われる。2号溝との関係は確認できなかったが、時期的にも近接しており、同時存在した可能性が高い。

7号溝（付図2、第106図、第5表、PL.23・39）

A区中央部にあり、6号溝と平行する溝である。

位置　X＝29764～767、Y＝－43151～169

重複遺構　6号住居、1号掘立柱建物、29号土坑と重複する。いずれの遺構とも、本遺構の方が新しい。

形態　東西両端がやや屈曲しているが、その他の部分はほぼ直線的にのびている。断面形状は逆台形である。

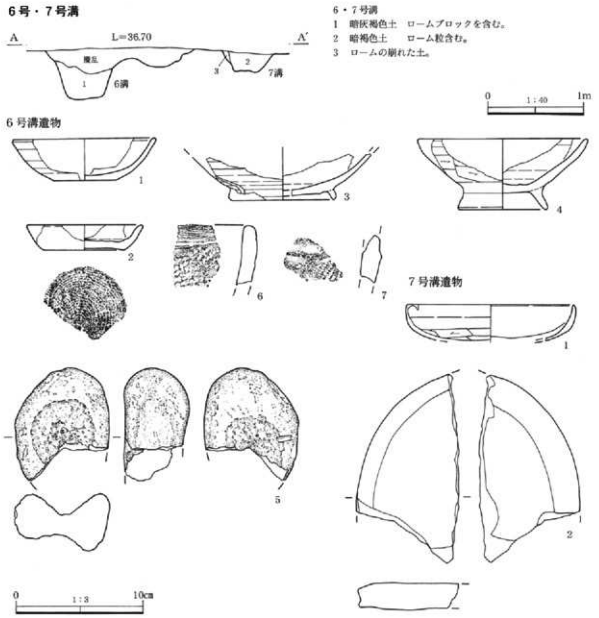
走向　N－89°－E。東端部分はやや北に屈曲し、N－76°－E。西端部分は攪乱が激しく、北壁が残っていないため計測は不能である。南壁の形状から、やや屈曲しているものと思われる。

規模　調査できたのは約18mであるが、西側は調査区外となり、さらにのびているものと思われる。上面幅は45～78cm、底面幅は14～35cm、深さは浅い攪乱が入っているため一定しないが、12～25cmで、セクション図を取った部分では20cmである。6号溝に比べて浅いのが特徴的である。

埋土の状態　暗褐色土のみで埋まり、分層できないので、比較的短期間に埋まったものと思われる。流水の形跡はない。

遺物　土師器・須恵器・近世陶器の小破片が出土するが、量は比較的少ない。報告できるのは土師器坏1点と、形象埴輪片1点である。

所見　6号溝と平行しているが、道路側溝である確証は得られていない（6号溝の項参照）。遺物は少ないが、近世の土器も混じっているため、近世のものであると思われる。



第106図　6号・7号溝断面図、出土遺物

8号溝（付図2、第107図、PL.23）

A区中央やや北東にある。両端が調査区内となる比較的短い溝である。

位置　X＝29764～777、Y＝－43148～153

重複遺構　7・17・20・21号住居、6号溝と重複する。本溝は住居より新しく、6号溝より古い。

形態　長い土坑状。ほぼ直線的にのびる。ちょうど6号溝を挟んで、南北で走向、深さが異なる。南側は浅く、北側は深い。断面形状はほぼ逆台形だが、底面には細かな凹凸がある。

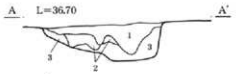
走向　6号溝の北側でN－15°－W。南側はわずかに屈曲してまたほぼ同じ走向となる。

規模　長さは12.7m。幅は一定せず、上面幅は0.95～1.55m、底面幅は0.74～1.33mである。深さは6号溝北側で15～38cm、南側は確認面から8～12cmである。

埋土の状態　セクション図を見ると、2・3層が堆積したあとに1層が掘り込まれたような状態であるため、一部で掘り直しが行われた可能性があるが、1層の底面はかなり凹凸があり、はっきりと

したものではない。

遺物　土師器・須恵器・灰釉陶器の小破片が出土しているが、報告できるような個体はない。中近世の遺物は見られない。



所見　長い土坑状の溝である。出土遺物に中近世のものが含まれていないため、平安時代に遡る可能性が強いが、出土遺物が小破片のみなので詳細な時期は不明である。

8号溝
1　暗褐色土　　ロームブロック、ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　　ロームブロックを多量に含む。
3　暗褐色土と黒褐色土との混土　ロームブロックを多量に含む。

第107図　8号溝断面図

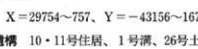
9号溝（付図2、第108図、第5表、PL.23）

A区南西隅近くにある、東西に走る溝である。西側は明瞭であるが、東端近くになると浅くなり、形がはっきりしなくなるため、端部がどこなのか分からなかった。

位置　X＝29754～757、Y＝－43156～167

重複遺構　10・11号住居、1号溝、26号土坑と重複する。本溝は住居より新しく、1号溝より古い。26号土坑との新旧関係は不明である。

形態　1号溝を境にして方向が異なるが、それ以外はほぼ直線的にのびる。底面は中央部分がやや高くなり、2本の溝が平行するような形状である。東端部分は浅くなり、11号住居と26号土坑と重複するあたりは形状がはっきりしない。



9号溝
1　暗褐色土　　ローム粒、焼土粒をわずかに含む。

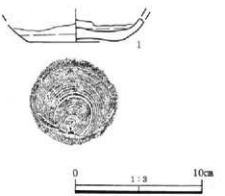
走向　1号溝の西側ではN－80°－W、東側ではN－82°－Eである。

規模　調査できた長さは10.5mだが、西側は調査区外にのびている。上面幅は75～105cm、底面幅は52～88cm、深さは一定せず、5～20cmである。

埋土の状態　暗褐色土1層で埋まっているので、比較的短期間に埋もれたものと考えられる。流水の形跡はない。

遺物　土師器・須恵器の小破片が出土しているが、量は比較的少ない。報告できたのは須恵器坏1点のみである。

所見　中近世の陶磁器が出土しないため、平安時代に遡る可能性がある。



第108図　9号溝断面図、出土遺物

11号溝（第109～117図、第5表、PL.24・25・39～43）
C区中央部にあり、多くの遺物が出土した。

位置　X＝29757～776、Y＝－43101～111

重複遺構　底部中央に34号土坑が重複する。新旧関係は確定できないが、埋土に11号溝と同様の遺物が多数含まれているため、34号土坑の方が新しいものと思われる。北端部には117・119ピットが重複するが、ピットが新しい。

形態　直線的に伸び、ちょうどD区に掛かるところで止まる。断面は底辺が長い逆台形状で、底面は平坦である。

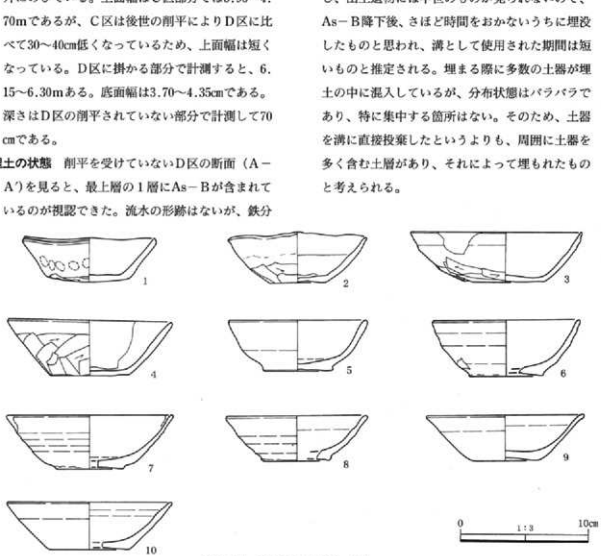
走向　N－10°－W

規模　調査した長さは約19mであるが、北は調査区外にのびている。上面幅はC区部分では3.95～4.70mであるが、C区は後世の削平によりD区に比べて30～40cm低くなっているため、上面幅は短くなっている。D区に掛かる部分で計測すると、6.15～6.30mある。底面幅は3.70～4.35cmである。深さはD区の削平されていない部分で計測して70cmである。

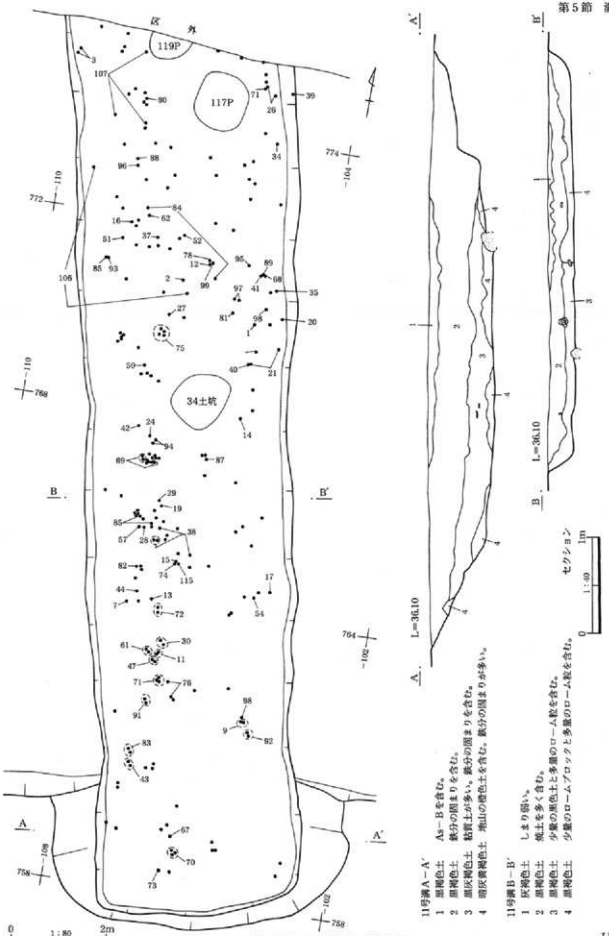
埋土の状態　削平を受けていないD区の断面（A－A′）を見ると、最上層の1層にAs－Bが含まれているのが視認できた。流水の形跡はないが、鉄分を含むところがあり、水分を含んでいた時期があるものと思われる。

遺物　土師器・須恵器・灰釉陶器が完形品を含めて非常に多く出土した。これらの遺物は調査した全域から出土しているが、南半分で中央やや西よりから多く出土しているように見えるほかは、特に集中するところはない。溝が埋没する過程で、周囲から流れ込んだものと思われる。遺物の時期は、9世紀から11世紀までに及んでいる。

所見　埋土の上層にAs－Bが含まれていることが視認できるが、平面的に見ると北部でAs－B下水田の耕土を切っていることが確認できるので、As－B以後の溝であることは確実である。ただし、出土遺物には中世のものが見られないので、As－B降下後、さほど時間をおかないうちに埋没したものと思われ、溝として使用された期間は短いものと推定される。埋まる際に多数の土器が埋土の中に混入しているが、分布状態はバラバラであり、特に集中する箇所はない。そのため、土器を溝に直接投棄したというよりも、周囲に土器を多く含む土層があり、それによって埋もれたものと考えられる。



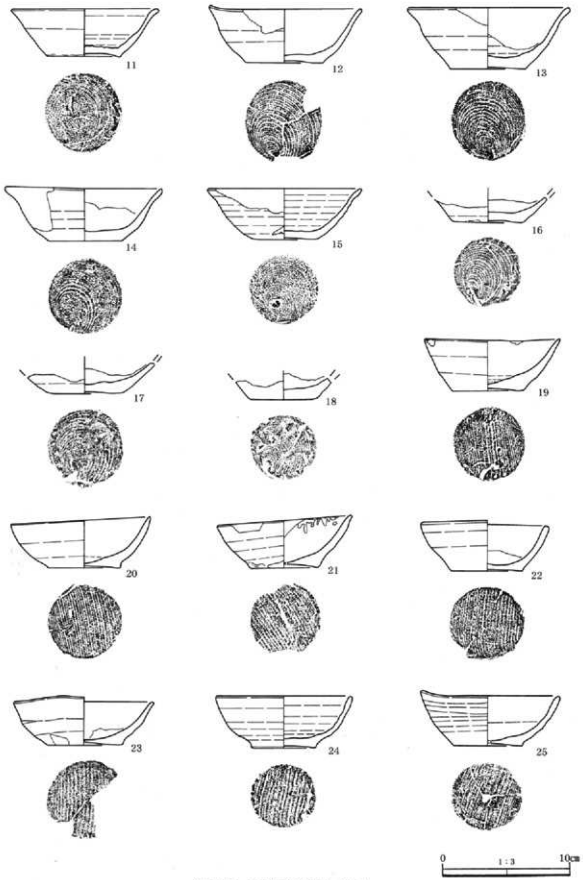
第109図　11号溝出土遺物（1）



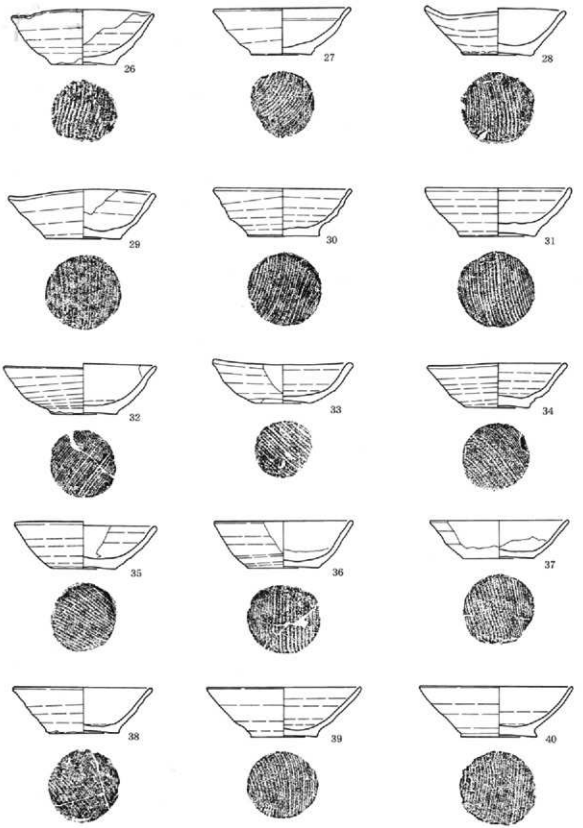
11号溝A－A'
1 黒褐色土　As－Bを含む。
2 黒褐色土　鉄分の混まりを含む。
3 黒灰褐色土　粘質土が多い。鉄分の混まりが多い。
4 暗灰黄褐色土　褐山の褐色土を含む。鉄分の混まりが多い。

11号溝B－B'
1 灰褐色土　しまり弱い。
2 黒褐色土　褐土を多く含む。
3 黒褐色土　少量の黒色土と多量のローム粒を含む。
4 黒褐色土　少量のロームブロックと多量のローム粒を含む。

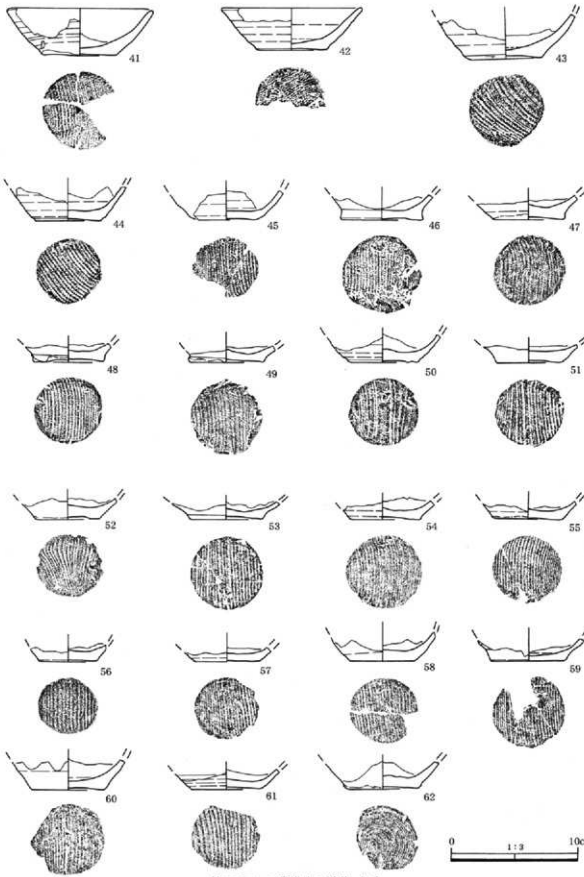
第110図　11号溝平・断面図



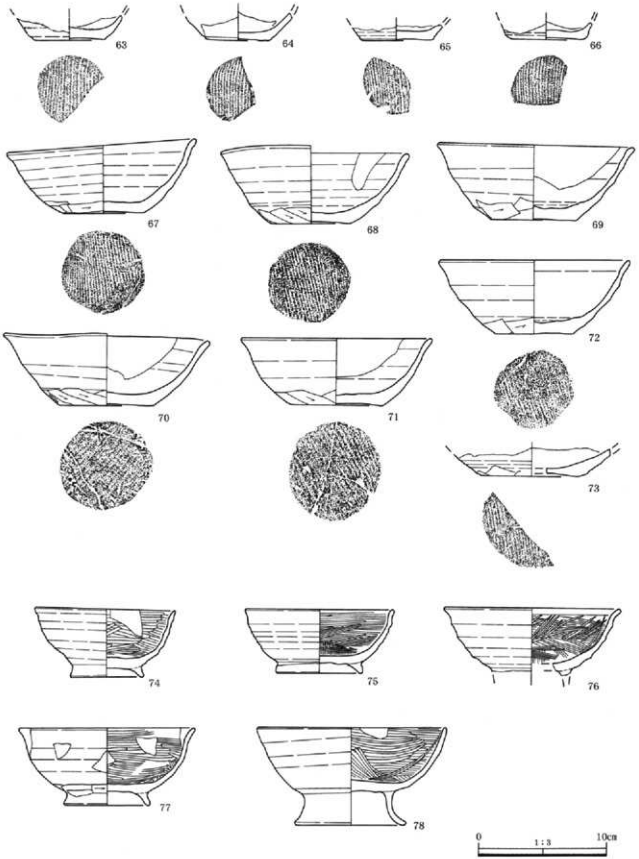
第111図　11号溝出土遺物（2）



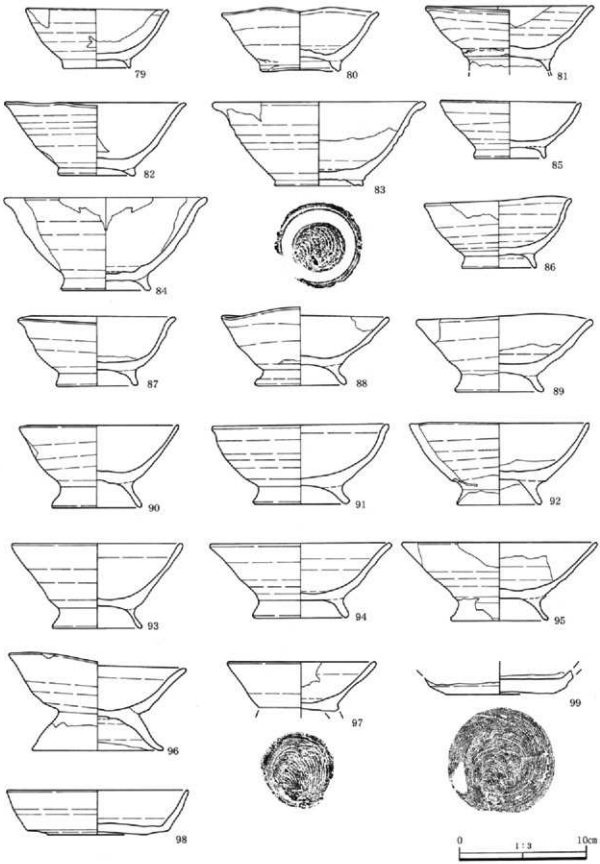
第112図　11号溝出土遺物（3）



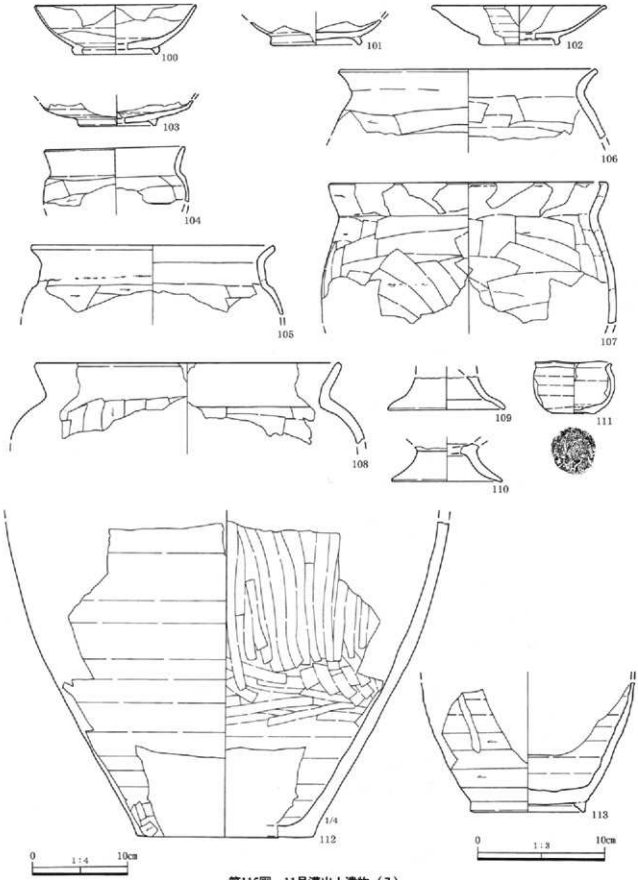
第113図　11号溝出土遺物（４）



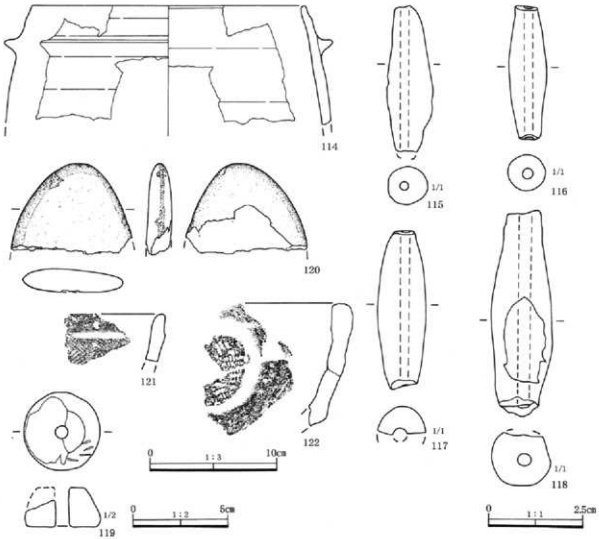
第114図　11号溝出土遺物（5）



第115図　11号溝出土遺物（6）



第116図　11号溝出土遺物（7）



第117図　11号溝出土遺物（８）

13号溝（第118・119図、第５表、PL.25・43・44）

Ｃ区東半部にある。この付近はAs－Ｂ下水田の耕土が残る部分の西端にあたるので、本溝はその水田との関連が考えられる。

位置　Ｘ＝29743～776、Ｙ＝－43083～096

重複遺構　なし。

形態　南端近くで２本に分かれるが、これは同時存在ではなく、西側が古いことが断面（Ｄ－Ｄ′）で確認できる。中央部分では十字状に広がるが、その他の部分ではごく緩やかに蛇行している。断面形は基本的に逆台形である。十字状に広がる部分には、水田に水を引くための「堰」などの施設があったのではないかと推定したが、土層が浅い（Ｂ－Ｂ′参照）ためもあって施設の痕跡を確認することができず、確証を得ることはできなかった。

走向　北半分はＮ－20°－Ｗ。南半分はわずかに蛇行する。

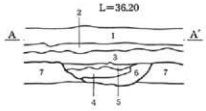
規模　調査した長さは32～33ｍであるが、南北とも調査区外にのびる。北部や中央部で計測すると上面幅は80～100㎝、底面幅は同じく30～55㎝、深さは19～25㎝である。２本に分かれる部分は、西側が上面幅70～100㎝、底面幅30～70㎝、深さ16～23㎝、東側が105～160㎝、底面幅52～112㎝、深さ22～32㎝である。

埋土の状態　北端の断面図を見ると、この溝を覆ってAs－Ｂ混じりの土が堆積し、それ以下の土層に

はAs－Bが含まれていないので、As－B堆積時にはこの溝はすでに埋没していたものと思われる。

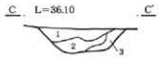
遺物　土師器・須恵器の破片を中心として多数の遺物が出土した。

所見　13号溝のある場所は、As－B下水田の耕土の西端の部分にあり、その水田はここから東に広がっていたものと思われる。旧地形は削平のため分かりにくいが、この溝は西側の台地から低地に移行し終わった部分に位置し、東の水田へはごくわずかに下がっていたものと思われる。そのため、この溝が水田の給水溝である可能性が高いと思われるが、As－Bを含む土がこの溝を覆っているため、As－B降下時にはこの溝はすでに埋没していたものと思われる。既述のように、堰と思われる部分もあったが、構造は明らかにできなかった。

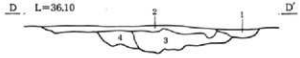


13号溝A－A'
1　表土
2　灰褐色土　現水田床土
3　灰褐色土　As－Bを含む。
4　灰色砂質土
5　灰色砂　鉄分を多く含む。
6　灰色砂質土　鉄分、黒色粘質土を含む。
7　黒色粘質土　As－B下水田耕作土。鉄分を含む。

13号溝B－B'
1　黒色土　As－B、砂粒を含む。固くしまっている。
2　灰色砂質土　炭化物、鉄分の固まりを含む。
3　灰色砂質土　鉄分裂じりの土を含む。しまり強い。
4　灰色砂質土　鉄分を多く含む。
5　灰色砂　鉄分で染まり、固くなっている。
6　灰色粘質土　鉄分多い。砂を少量含む。

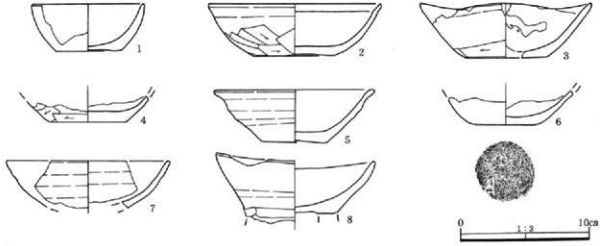


13号溝C－C'
1　灰色砂質土　鉄分を含む。固くしまっている。
2　灰色砂質土　黒色粘質土、鉄分を含む。
3　黒褐色粘質土　灰白色砂を含む。

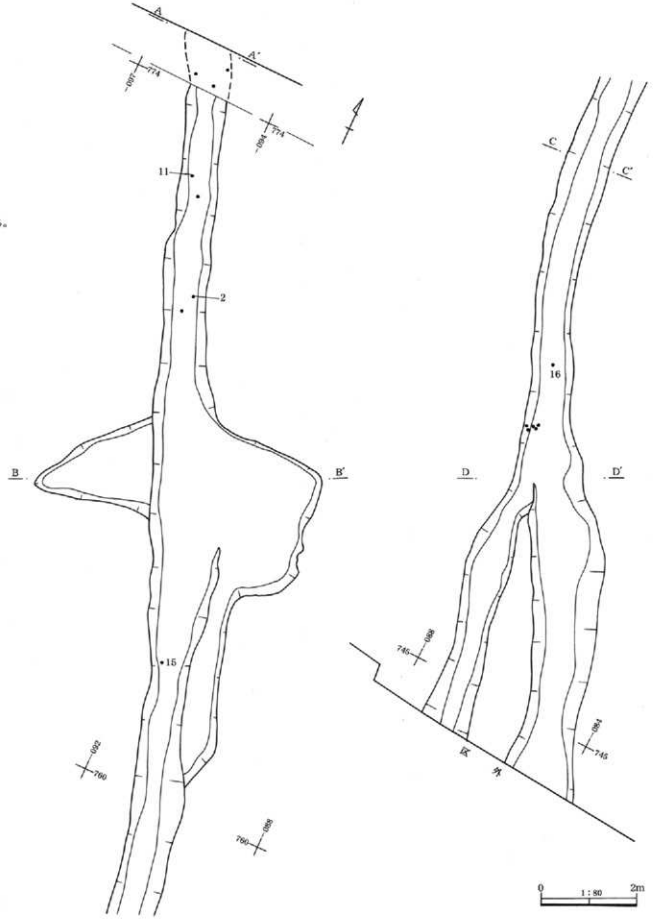


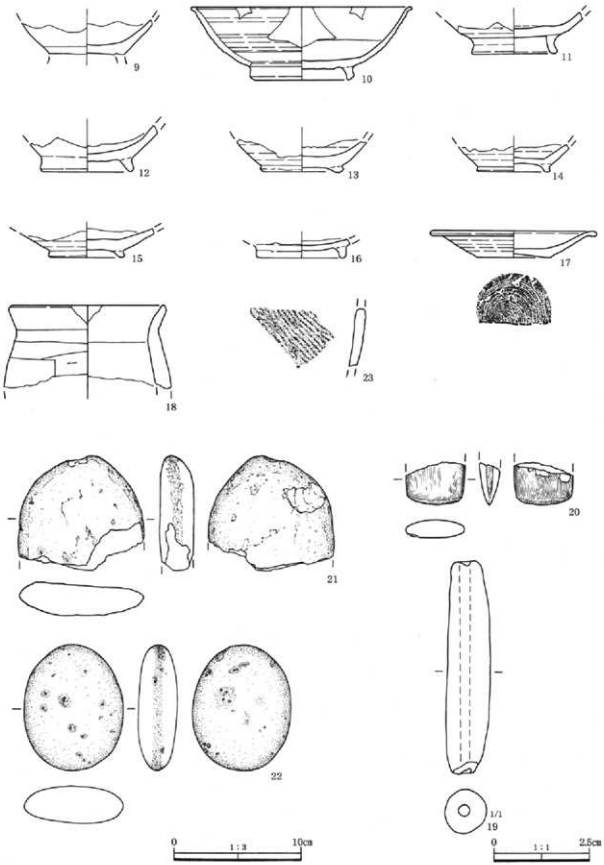
13号溝D－D'
1　黒褐色土　灰色砂含む。鉄分を多く含み固い。
2　灰色砂質土　As－Bを含む。
3　灰色砂質土　(13溝A) 鉄分多く、橙色に染まっている部分が多い。黒色土含む。固くしまっている。
4　灰色砂質土　(13溝B) 上部は鉄分が多く、橙色に染まって固い。

0　1:40　2m



第118図　13号溝平・断面図、出土遺物（1）





第119図　13号溝出土遺物（2）

14号溝（付図3、第120図、第5表、PL.26・44）

D区南西にある。ほぼ同じ位置に新旧2時期の溝があったようである。26号住居調査の際は、掘方面の調査でその下層に14溝の延長と思われる部分があったので、26号住居より古い溝と認識していたが、その後の調査でより新しい遺物が出土し、さらに33号住居を破壊していることが判明したため、上層に新しい溝が重複していることが確認された。平面図にのせてあるのは新段階の溝であるが、26号住居の掘方図面（第54図）に見るように、古段階の溝が掘方面に見えている。この古段階の溝は26号住居より東側では浅くなるらしく、新段階の溝に破壊されて確認することはできない。以下、報告するのはこの新段階の溝である。この新段階の溝は26号住居を切ってさらに西に延びていたはずだが、この付近には浅い攪乱が多かったこともあり、調査時には見落としていたらしい。

位置　X＝29747～750、Y＝－43116～128

重複遺構　26・33号住居、49号土坑と重複する。本溝はいずれの遺構よりも新しい。

形態　ほぼ直線的にのびる。断面形は皿状である。

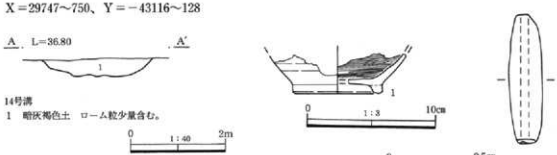
走向　N－80°－E

規模　上面幅1.12～1.67m。底面幅0.56～1.23m。深さは15～20cmである。

埋土の状態　暗灰褐色土1層で埋まっている。流水の形跡はない。

遺物　土師器・須恵器の破片が出土しているが、量は比較的少ない。報告できるのは須恵器高台付塊と、土錘が各1点である。中近世陶器は出土していない。

所見　出土遺物から、平安時代に遡ると思われる溝である。本来はさらに西の調査区外へとのびているものと思われる。前述のように下層により古い溝（7世紀前半以前）が重なっているが、その形状は不明である。



第120図　14号溝断面図、出土遺物

15号溝（第121図、PL.26）

15～17号溝の3本はC区東半部にあり、As－B下水田耕土を除去した下層から見つかったものである。いずれも出土遺物がきわめて少なく、詳細な時期は不明である。

位置　X＝29743～752、Y＝－43082～086

重複遺構　16号溝と重複している。本溝が新しい。13号溝とも重複関係にはあるが、13号溝はAs－B下水田耕土の上層にあり、調査面が違う。

形態　深さはあるものの幅は狭く、蛇行している。断面形は逆台形である。

走向　蛇行しているためやや不正確ではあるが、南半部はN－4°－E、北半部はN－31°－Eである。

規模　調査できたのは長さ8.3mである。南端は調査区外となりさらにのびる。上面幅は31～67cm、底面幅は10～24cm、深さは17～35cmで北に行くほど浅くなる。

埋土の状態　1層で埋まっているため、比較的短期間で埋もれたようである。

遺物　土師器・須恵器の小破片が出土している。

所見　As－B下水田耕土の下層で見つかっているため、それを遡る時期のものであることは明確であるが、出土遺物が少なく、詳細な時期・用途などは不明である。

16号溝（第121図、PL.26）

位置　X＝29746～752、Y＝－43084～086

重複遺構　15号溝と重複している。本溝が古い。

形態　15号溝の途中から分岐するように、北に直線的にのびる。断面形は逆台形である。南側は15号溝と完全に重複しているらしく、見ることができない。

走向　N－5°－W

規模　調査できたのは約4mのみである。南側は15号溝に破壊されているため、本来の長さは不明である。上面幅は42～57cm、底面幅は15～37cm、深さは7～15cmである。

遺物　土師器・須恵器の小破片が出土している。

所見　15号溝と同。

17号溝（第121図、PL.26）

位置　X＝29743～750、Y＝－43080～082

重複遺構　なし。

形態　やや蛇行している。断面形は逆台形である。

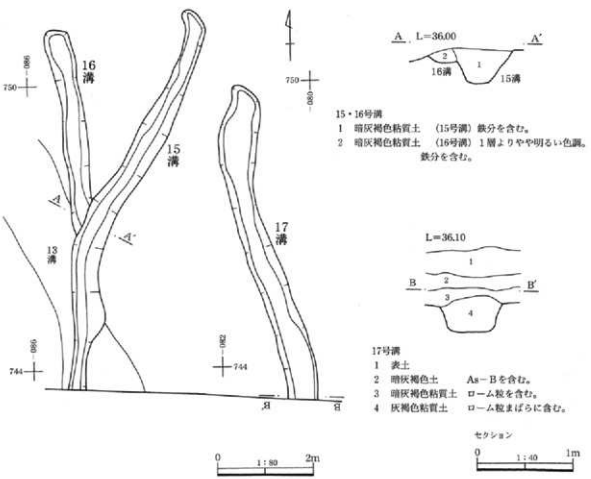
走向　蛇行しているが、中央部分で測るとN－17°－Wである。

規模　調査できた長さは約6.8mで、南端は調査区外へのびている。上面幅は50～84cm、底面幅は23～60cm、深さは南端のセクション面で測って39cm分が残っている。

埋土の状態　1層で埋まっているので、比較的短期間で埋まったらしい。

遺物　土師器・須恵器の小破片が出土している。

所見　15号溝と同。



第121図　15号・16号・17号溝平・断面図

18号溝（第122図、PL.26）

F区にある溝である。

位置　X＝29723～728、Y＝－43158～161

重複遺構　39・40号住居と重複。本溝が古い。

形態　蛇行している。断面形は逆台形である。

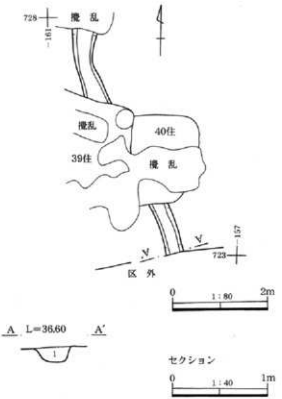
走向　蛇行しているが、南半部は大体N－27°－Wである。

規模　調査したのは延長約5.1mであり、南北とも調査区外にのびている。上面幅は46～50cm、底面幅は20～34cm、深さは8～17cmである。

埋土の状態　暗褐色土1層で埋まっているので、比較的短期間に埋もれたらしい。流水の痕跡はない。

遺物　出土していない。

所見　出土遺物がなく、時期、性格とも不明の溝である。



18号溝
1　暗褐色土　　ローム粒をまだらに含む。炭化物粒をわずかに含む。しまりやや弱い。

第122図　18号溝平・断面図

第6節　井　　戸

井戸はA～D区で10基、F区で1基の計11基を調査した。それぞれの位置や計測値などは第3表のとおりである。

このうちA区にある1・2・8号井戸の3基はそれぞれ別の遺構と重複しており、いずれも井戸が新しいことが平面・断面観察によって確認できた。F区の11号井戸は39号住居の掘方底面で見つかっており、住居よりも古い。その他の7基は別の遺構と切り合っていない。

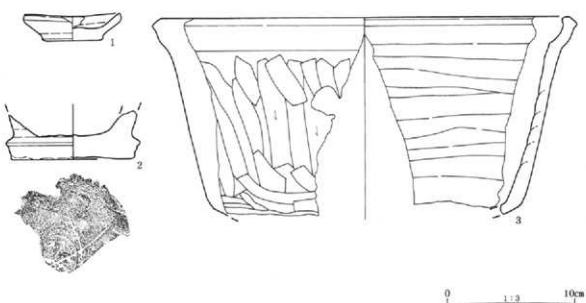
出土遺物は、大部分の井戸が竪穴住居の近傍に掘られているため、土師器・須恵器の破片が多数出土したが、時期を明確に示すものは少ない。それらのうち、内耳土器や中近世の陶器が出土しているものは1・2・3号井戸であり、この3基は少なくとも近世以降のものである。また、8号井戸は遺物が出土しておらず、時期は不明である。F区の11号井戸も遺物が出土していないが、39号住居の下層にあるため、明らかにそれよりも古い。39号住居は9世紀後半と思われるので、それを遡るものである。これ以外の6基は、以下に報告した土師器・須恵器のほかにも多数の土師器・須恵器片を出土しており、平安時代以降のものであるが、時期の詳細な特定は困難なものが多い。C区にある9・10号井戸はAs－B下水田耕土の下層から見つかっているため、少なくともAs－B降下よりは遡るものであるが、出土遺物からは、9号井戸が9世紀以降、10号井戸は10世紀以降のものと思われる。

底面の標高を見ると31.10～35.23mと、かなり差が大きい。低地部にある9・10号井戸はそれぞれ34.72m、34.95mと比較的高い位置にある。F区の11号は35.23mと最も高く、井戸としてはやや疑問が残るものである。

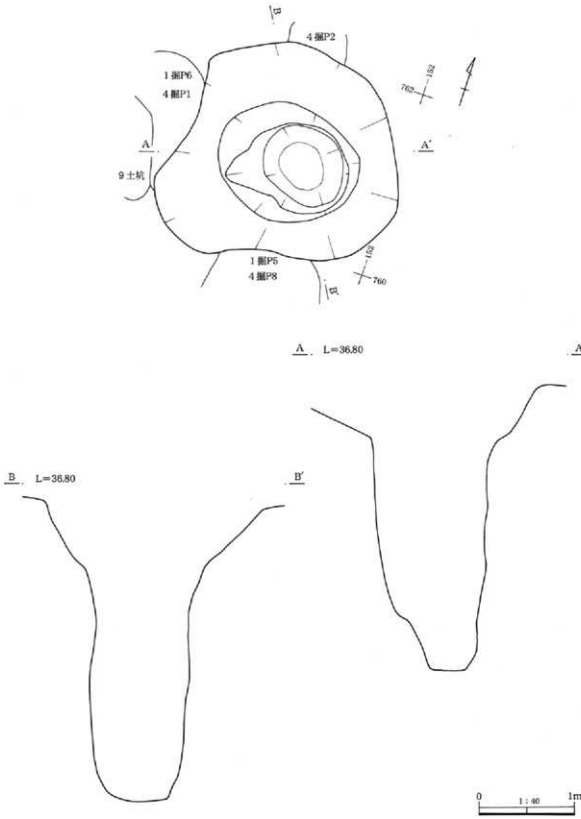
第3表　井戸一覧表

No	位置	大きさ(m)			底面レベル	備考
		長軸	短軸	深さ		
1	759-151	2.58	2.30	3.12	33.47m	A区
2	760-158	0.99	0.86	5.64	31.10	A区
3	761-134	1.05	0.96	2.57	33.38	B区。中部以下は掘り増し跡らしい。
4	765-130	1.16	1.06	2.82	33.02	B区
5	771-137	1.60	1.34	2.22	33.58	B区。最下部30cmは掘り増し跡らしい。
6	771-128	0.80	0.60	1.47	34.24	B区。最下部20cmは掘り増し跡らしい。
7	773-127	2.63	2.18	1.78	33.93	B区
8	774-161	0.89	0.85	2.38	34.12	A区
9	761-098	0.94	0.88	1.25	34.72	C区。As－B下水田耕土下層
10	748-089	1.13	0.95	0.98	34.95	C区。As－B下水田耕土下層
11	724-159	0.59	0.52	0.93	35.23	F区

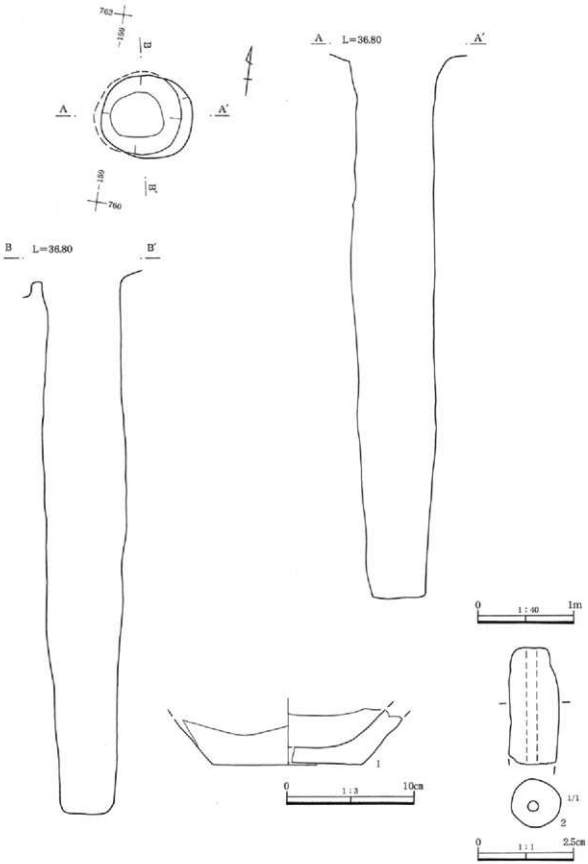
1号井戸遺物



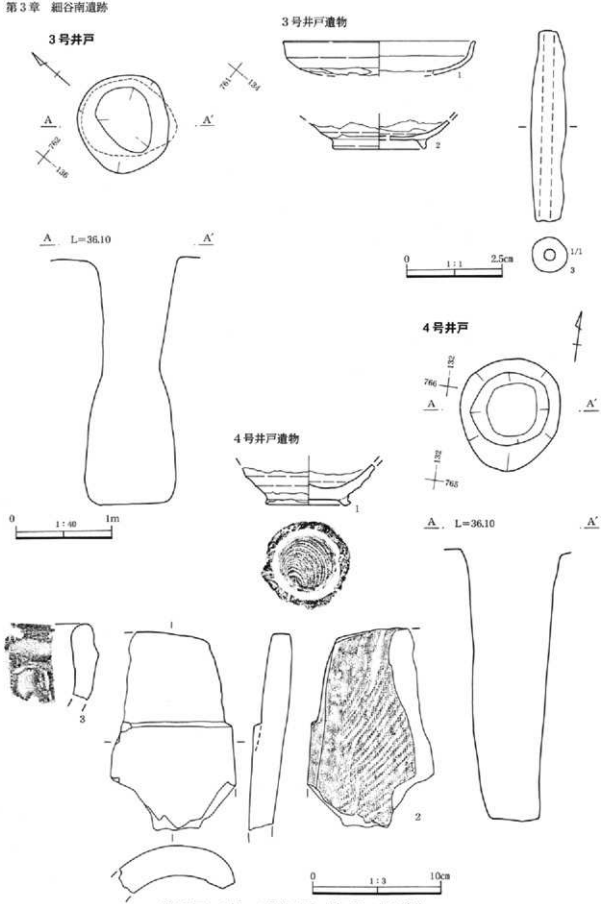
第123図　1号井戸出土遺物



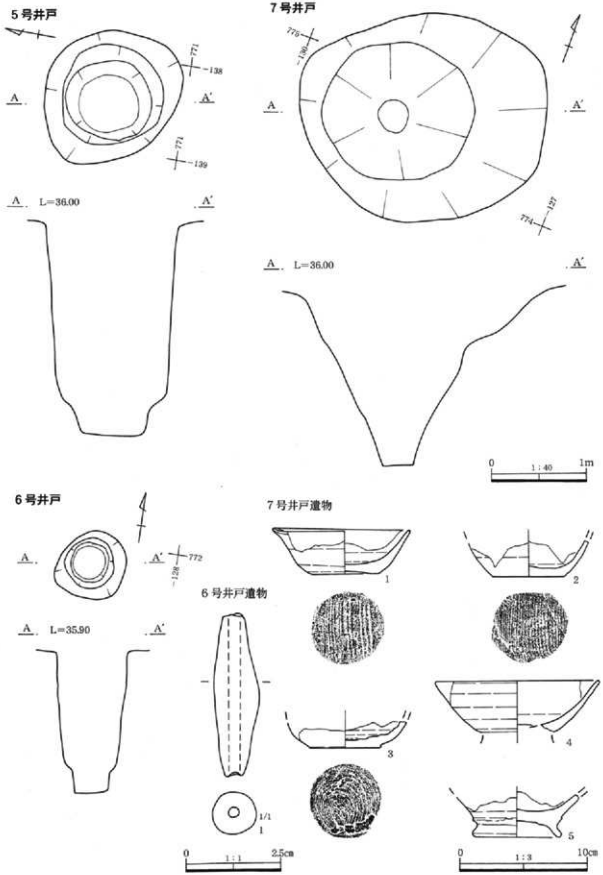
第124図　1号井戸平・断面図



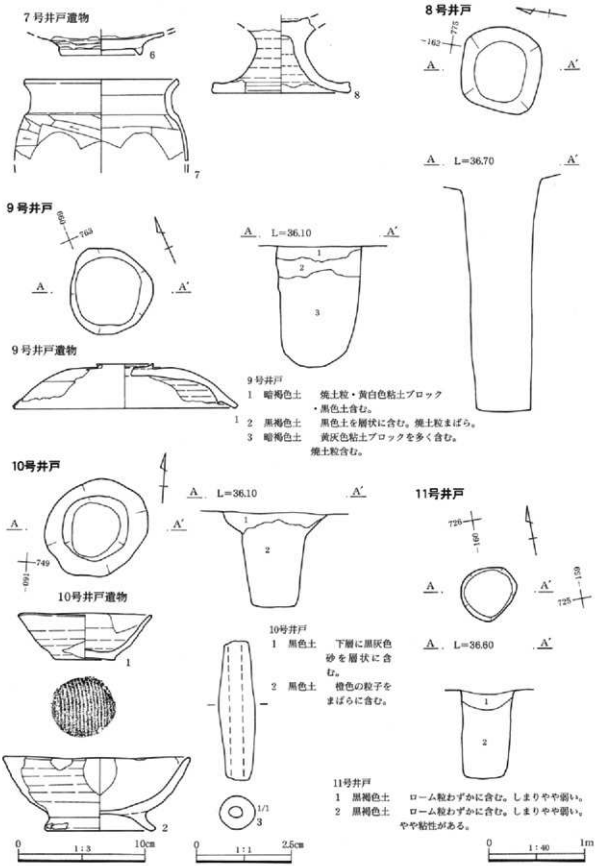
第125図　2号井戸平・断面図、出土遺物



第126図　3号・4号井戸平・断面図、出土遺物



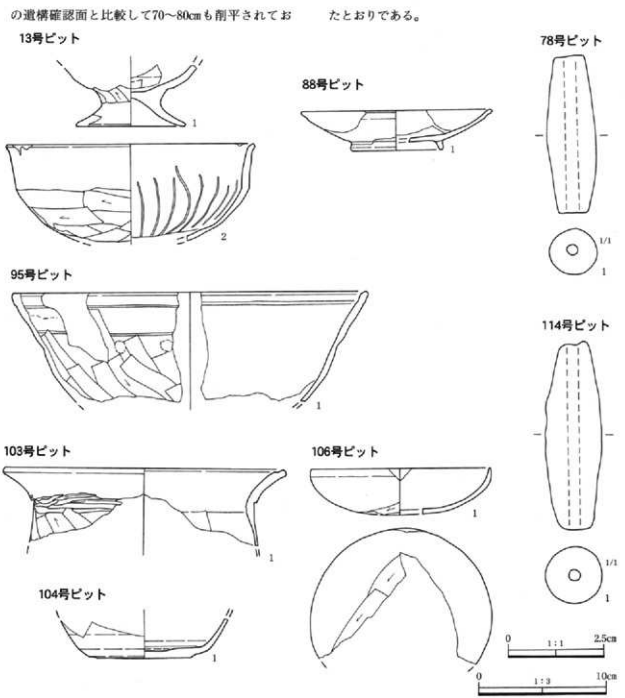
第127図　5号・6号・7号井戸平・断面図、6号・7号井戸出土遺物



第128図　8号～11号井戸平・断面図、7号・9号・10号井戸出土遺物

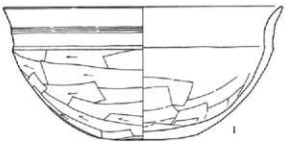
第7節　ピ　ッ　ト

ピットは平成13年度の調査区（A～D区）で163基、平成17年度の調査区（F区）で3基の合計166基を調査した。その大部分はA区とD区にあるが、これはこの両区が削平を受けていないためである。B区南部にも多数のピットが分布するが、この部分はD区の遺構確認面と比較して70～80cmも削平されており、それを加算すれば、このB区にあるピットの深さはかなり深いものとなる。いずれのピットも遺物が少なく、時期や性格などは不明である。ピットのうちの大部分については付図に平面図をあげたほか、すべてのピットの位置・計測値は第4表にあげたとおりである。

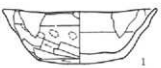


第129図　13号・78号・88号・95号・103号・104号・106号・114号ピット出土遺物

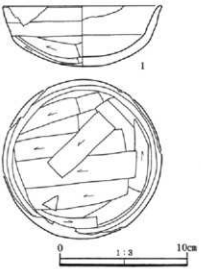
126号ピット



143号ピット



174号ピット



第130図　126号・143号・174号ピット出土遺物

第４表　ピット一覧表

No.	位置	大きさ(m) 長軸	短軸	深さ	備考
1	759-162	0.38	0.25	0.12	
2	欠番				
3	758-161	0.38	0.30	0.25	
4	760-161	0.24	0.20	0.19	
5	751-159	0.44	0.44	0.44	
6	778-171	0.60	0.50	0.15	
7	776-170	0.32	0.32	0.20	
8	773-170	0.73	0.50	0.41	
9	772-169	0.62	0.34	0.39	
10	763-158	0.32	0.30	0.27	
11	758-146	0.40	0.32	0.50	
12	758-143	0.30	0.30	0.36	
13	759-142	0.60	0.44	0.45	
14	758-144	0.46	0.36	0.50	
15	758-144	0.50	0.30	0.43	
16	750-159	0.55	0.52	0.81	
17	758-142	0.30	0.30	0.37	
18	欠番				4号掘立柱建物Ｐ4
19	759-144	0.40	0.36	0.40	
20	759-144	0.53	0.38	0.32	
21	758-145	0.30	0.22	0.28	
22	758-146	0.28	0.24	0.46	
23	758-154	0.66	0.60	0.45	
24	777-164	0.40	0.34	0.36	
25	欠番				
26	776-163	0.53	0.47	0.86	
27	欠番				2号掘立柱建物Ｐ6
28	欠番				3号掘立柱建物Ｐ8
29	763-149	0.30	0.22	0.57	
30	765-149	0.33	0.30	0.23	
31	764-161	0.40	0.30	0.38	
32	763-160	0.34	0.30	0.40	
33	764-159	0.40	0.32	0.26	
34	762-158	0.48	0.34	0.48	
35	764-157	0.30	0.30	0.74	
36	769-159	0.35	0.34	0.36	
37	769-159	0.44	0.40	0.39	
38	768-157	0.28	0.28	0.40	
39	768-156	0.38	0.26	0.57	
40	768-156	0.38	0.30	0.30	
41	768-158	0.30	0.25	0.40	
42	769-157	0.34	0.25	0.41	
43	770-156	0.68	0.44	0.44	
44	769-155	0.46	0.42	0.31	
45	764-149	0.42	0.38	0.71	
46	771-164	0.52	0.48	0.61	
47	772-165	0.50	0.40	0.42	
48	773-165	0.48	(0.30)	0.42	
49	欠番				
50	774-164	0.42	0.40	0.45	
51	773-164	0.45	0.40	0.49	
52	774-164	0.48	0.30	0.50	
53	756-151	0.48	0.38	0.34	
54	755-150	0.44	0.38	0.33	
55	755-150	0.52	0.46	0.40	
56	755-147	0.50	0.38	0.32	
57	755-146	0.52	0.45	0.22	
58	756-146	0.42	0.26	0.26	
59	756-144	0.45	0.32	0.63	
60	756-144	0.58	0.50	0.58	
61	757-144	0.52	0.30	0.29	
62	756-143	0.32	0.24	0.23	
63	756-142	0.58	0.32	0.65	
64	753-143	0.67	0.60	0.44	
65	欠番				4号掘立柱建物Ｐ6
66	762-152	0.40	0.30	0.43	
67	758-149	0.32	0.25	0.55	
68	760-148	0.40	0.30	0.39	
69	760-148	0.30	0.24	0.31	
70	764-156	0.44	0.35	0.34	
71	763-156	0.58	0.25	0.27	
72	760-145	0.35	0.30	0.44	
73	772-165	0.54	0.35	0.23	
74	769-152	0.37	0.30	0.35	
75	欠番				1号掘立柱建物Ｐ1
76	欠番				

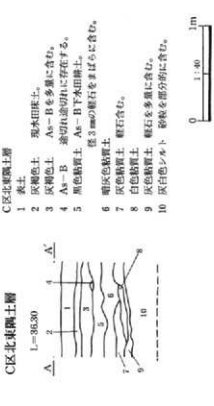
No.	位置	大きさ(m)			備考
		長軸	短軸	深さ	
77	772-162	0.38	0.30	0.48	
78	775-137	(0.38)	0.40	0.25	
79	774-137	0.82	0.52	0.67	
80	756-127	0.76	0.72	0.34	
81	欠番				3号掘立柱建物P3
82	756-125	0.44	0.40	0.32	
83	751-130	0.52	0.40	0.35	
84	752-128	0.54	0.48	0.43	
85	757-122	0.60	0.58	0.54	
86	754-127	0.70	0.64	0.81	
87	752-123	0.54	0.50	0.48	
88	763-123	0.60	0.42	0.38	
89	766-122	0.44	0.30	0.29	
90	766-122	0.34	0.30	0.26	
91	767-121	0.46	0.42	0.15	
92	769-122	0.64	0.46	0.25	
93	771-124	0.44	0.36	0.21	
94	774-125	0.54	0.48	0.50	
95	758-121	0.60	0.58	0.65	
96	758-121	0.30	0.30	0.50	
97	759-121	0.72	0.70	0.96	
98	759-120	0.46	0.30	0.48	
99	760-120	0.42	0.36	0.63	
100	762-117	0.38	0.32	0.18	
101	欠番				
102	772-131	0.57	0.50	0.38	
103	769-136	0.65	0.65	0.44	
104	756-124	1.18	1.00	0.98	
105	761-138	0.40	0.34	0.36	
106	772-132	0.70	0.61	0.86	
107	欠番				
108	766-139	0.40	0.38	0.25	
109	758-137	0.42	0.42	0.28	
110	762-118	0.90	0.90	0.18	
111	774-119	1.04	1.00	0.18	
112	755-126	0.56	0.52	0.43	
113	774-130	0.56	0.54	0.50	
114	773-107	0.70	0.64	0.38	
115	欠番				
116	767-109	0.46	0.40	0.12	
117	774-106	1.18	1.06	1.43	
118	768-109	0.64	0.50	1.32	
119	775-107	(0.50)	0.80	0.97	
120	755-108	0.85	0.65	1.20	
121	776-150	0.50	0.32	0.40	21号住居下層
122	欠番				5号掘立柱建物P2
123	欠番				23号住居P1
124	764-141	0.56	0.35	0.37	19号住居下層
125	760-139	0.68	0.64	1.23	
126	欠番				
127	749-096	0.50	0.42	0.42	
128	747-096	0.82	0.66	1.03	
129	欠番				
130	761-141	0.59	0.56	0.87	
131	755-140	0.50	0.44	0.35	
132	754-140	0.46	0.30	0.26	
133	欠番				
134	欠番				
135	760-140	0.38	0.35	0.23	
136	欠番				
137	欠番				
138	欠番				
139	756-143	0.45	0.38	0.57	
140	756-143	0.32	0.28	0.61	
141	756-143	0.55	0.32	0.63	

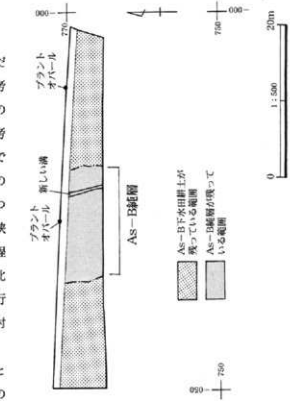
No.	位置	大きさ(m)			備考
		長軸	短軸	深さ	
142	756-143	0.32	0.30	0.57	
143	756-142	0.77	0.40	0.48	
144	777-158	0.35	0.20	0.35	
145	777-158	0.20	0.20	0.27	
146	777-158	0.20	0.20	0.43	
147	777-158	0.28	0.24	0.23	
148	776-157	0.20	0.20	0.28	
149	775-157	0.44	0.33	0.42	
150	775-156	0.30	0.28	0.27	
151	774-153	0.28	0.20	0.12	
152	773-164	0.34	0.26	0.33	
153	773-164	0.40	0.36	0.35	
154	773-162	0.40	0.40	0.24	
155	777-159	0.42	0.30	0.60	
156	欠番				5号掘立柱建物P3
157	747-132	0.59	0.41	0.36	26号住居下層
158	776-136	0.43	0.36	0.22	
159	776-134	0.40	0.25	0.16	
160	774-138	0.48	0.46	0.24	
161	776-137	(0.30)	0.42	0.23	
162	749-135	0.70	0.46	0.52	
163	欠番				5号掘立柱建物P1
164	欠番				
165	欠番				
166	欠番				
167	欠番				
168	749-151	0.85	0.85	1.48	
169	774-141	(0.60)	0.52	0.56	
170	776-146	0.60	0.43	0.45	
171	776-146	0.72	0.63	0.24	
172	774-145	0.35	0.28	—	
173	772-142	0.41	0.39	0.31	
174	757-092	0.70	0.62	0.51	As-B下水田耕土下層
175	772-102	0.36	0.30	0.20	As-B下水田耕土下層
176	770-112	0.38	0.30	0.22	As-B下水田耕土下層
177	763-096	0.76	0.52	0.22	As-B下水田耕土下層
178	758-094	0.54	0.50	1.04	As-B下水田耕土下層
179	758-094	0.58	0.50	0.22	As-B下水田耕土下層
180	758-109	0.64	0.42	0.21	
181	754-118	0.46	0.30	0.58	
182	754-118	0.70	0.34	0.47	
183	756-108	0.32	0.32	0.19	
184	756-108	0.64	0.52	0.16	
185	754-085	0.68	0.58	0.28	As-B下水田耕土下層
186	756-110	0.48	0.46	0.76	
187	752-112	0.38	0.35	0.35	
188	754-105	0.50	0.43	0.43	
189	754-107	0.64	0.54	1.04	
190	754-105	0.75	0.72	1.02	
191	750-102	0.80	0.65	1.03	
192	755-103	0.54	0.48	0.37	
193	748-117	0.50	0.48	1.37	
194	749-107	0.45	0.42	0.54	
195	欠番				7号掘立柱建物P5
196	欠番				7号掘立柱建物P2
197	欠番				7号掘立柱建物P1
198	欠番				7号掘立柱建物P3
199	欠番				7号掘立柱建物P4
200	727-163	0.44	0.33	0.40	F区
201	727-162	0.28	0.25	0.40	F区
202	725-162	0.45	0.40	0.49	F区

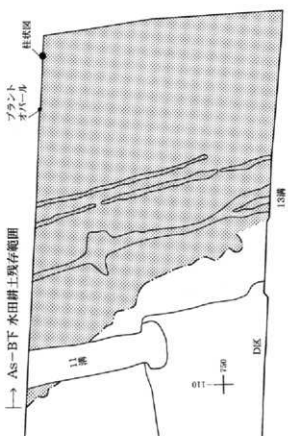
第８節　水　田　跡

Ｃ区東側では現水田床土の下にAs－Ｂを含んだ土層が見られるようになり、その下に水田耕土と考えられる黒色粘質土が広がるのが観察できた。そのため、As－Ｂ混土下に水田の痕跡があるものと考え、その面での調査を行った。さらに東側のＥ区では、県教育委員会による試掘調査の結果、As－Ｂの純層が確認されていたので、ここでも水田跡が見つかるものと期待された。ただし純層の分布範囲が狭いとのことなので、Ｅ区では、まずAs－Ｂがどの程度の広がりをもつのかを確認するために、調査区北側に幅５～７ｍのトレンチを設けて試掘調査を行い、全面調査に移行するかどうかは、その後に検討することにした。

Ｃ区東側では、As－Ｂ混土の下層を掘り広げたところ、13号溝と、その東側に平行する２本の溝状の遺構を確認した。このうち13号溝については第５節







第131図　As－Ｂ下水田耕土残存範囲平面図、柱状図

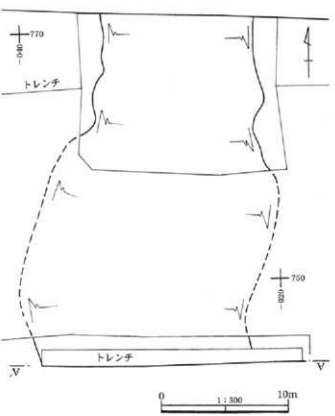
で詳述したとおり、As－B下水田の給水溝であった可能性が高い。その東側に平行する2本の溝状の遺構は、シミ状の土色の変化が溝状につながっているようなもので、明確な掘り込みをもつものではないため、それを掘り下げることはできなかった。これはおそらく、両側に浅い溝をもつ幅2m程度の大畦状のものであったと考えられ、だとすれば、これも水田に関わる遺構であると考えることができる。C区東部で見られる、水田に関わる可能性が高い遺構はこの二つだけであり、この部分では水田痕跡がわずかに残っているにすぎないといえよう。第5章第1節で報告するように、C区東部でのプラントオパール分析ではB混層とその下層とからイネが検出されている。下層の密度は比較的低いが、これは水田面が削平されているためと推定される。

E区でも水田耕作土と思われる黒色粘質土が全域にあることが確認できたが、As－Bの純層は中央付近のやや低くなった部分に残るのみで、その他の場所ではC区東部と同様、途切れ途切れの状態でしか残っていなかった。As－Bの下層では、プラントオパール分析の結果大量のイネが検出され、やはりB下水田が存在していることが判明したが、畦などの遺構は一切見つからなかった。つまり、E区では中央部のやや低くなった部分にAs－B下の水田面が残るものの、それ以外の場所では水田面が削平されていて、遺構は残されていないものと判断できた。このため、E区の全面調査は行わないこととした。なお、この低くなった部分は南北方向に伸びており、その下層に大規模な溝などの存在が予想されるため、この部分についてはトレンチ調査を行うこととした（次節参照）。

第9節　自然河川跡

E区は、南北に延びる浅く広い谷状地形の中央にあり、現在周辺は水田として利用されている。このような地形が古代以来のものであることは、この部分にAs－B下水田が存在することから明らかである。前節に述べたAs－Bの純層が残る部分は、ちょうどその谷状地形のもっとも低い場所を南北に通っており、しかもその部分はごく浅く凹んでいて、より下層に溝のような遺構が存在することを想像させた。そのためこの部分について、下層に遺構があるかどうか確認する必要が生じ、そのための調査を行った。

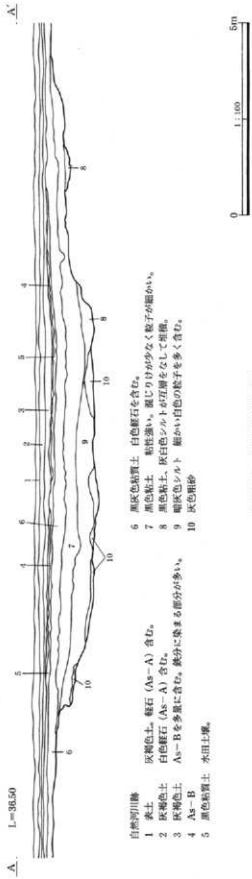
まずAs－Bの純層が残っていた範囲の北側で、15m×12mの範囲で水田耕土と、その下層の黒灰色粘質土とを取り除いてみたところ、やはり下層に溝状の落ち込みがあることが判明した。しかし、その形はかなり不整形であり、しかもその岸にあたる部分を一部掘り下げてみたところ、落ち込みの傾斜はかなり緩やかで、人為的なものかどうか疑問が持たれた。そのため、E区の南端に沿って深掘りのトレンチを入れ、この落ち込みの断面形と、同時に走行方



第132図　自然河川平面図

向を確認することにした。

このトレンチによって確認した落ち込みの断面は第133図のとおりである。これをみると、深さは中央付近で計測して１ｍほどあるものの、断面形は皿状で、壁の傾斜はきわめて緩く、人為的に掘られたような痕跡は全く認められなかった。しかも、埋土からは遺物は全く出土しなかった。埋土には粗砂の層や、シルト・粘土が細かい互層になっている部分があり、一時期は流水があったものと考えられるが、大部分はシルトや粘土層で埋もれており、流水があったとしても、その流れはかなり緩やかであったと考えられる。以上のような点から、この落ち込みは人為的なものとは考えられず、谷状地形の中央部分を北から南へ流れる、ごく浅い自然河川であると判断した。地下水位はかなり低かったため、トレンチの中でも水が出ることはなく、木器などの遺物も残っている可能性はないと思われ、そのため、この部分の全面調査は行わないこととした。

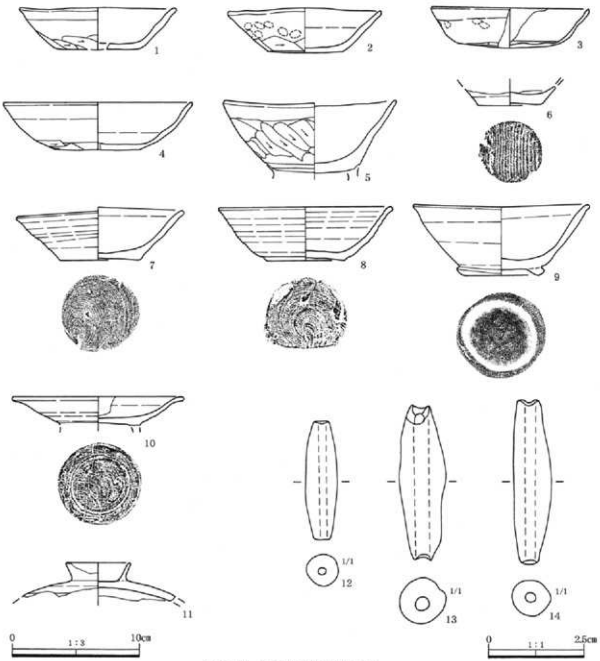


第133図　自然河川断面図

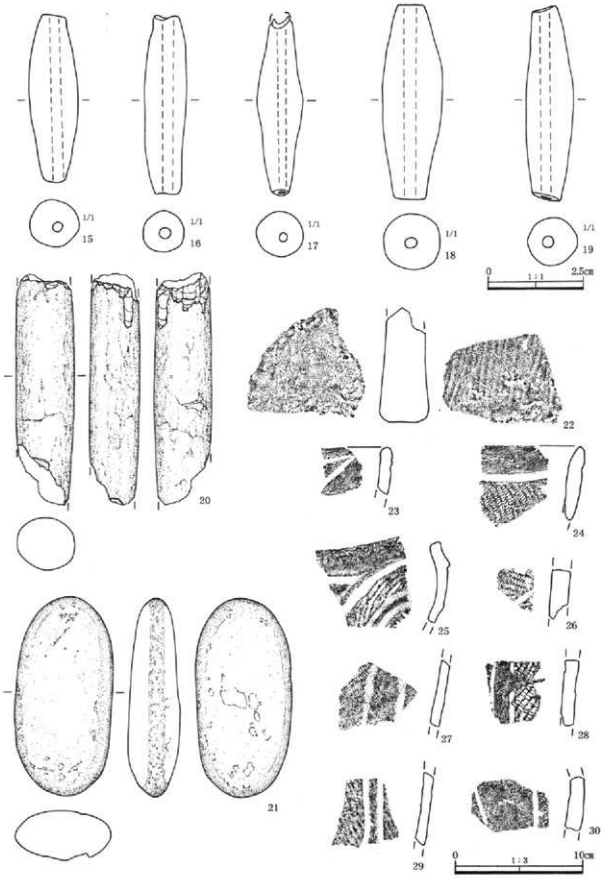
第10節　遺構外出土の遺物

本節では表土や攪乱など、遺構外から出土した遺物をまとめて報告する。

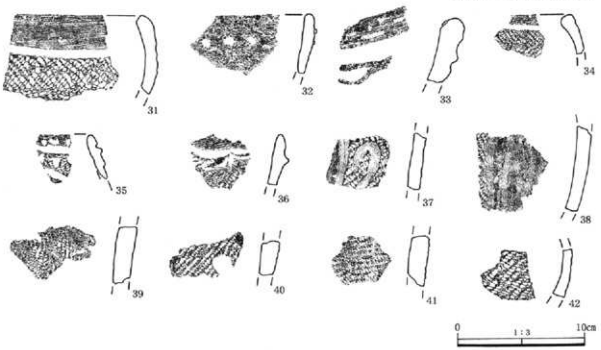
A・D・Fの3地区では竪穴住居が多数見られたため、表土出土の遺物がやや多い。また、「B下水田耕土下層」としてまとめたものは、C区東側で出土したものである。この部分ではAs－B下層の水田耕土が広がっていたため、それを除去して下層の調査を行い、6号掘立柱建物などの遺構を見つけている。この面では平安時代の遺物が出土したほか、流水によると考えられる凹部から縄文土器が出土している。縄文土器はかなり摩滅がひどく、また、本遺跡の今回の調査範囲には縄文時代の遺構が見られなかったため、上流から流されてきたものと考えられる。



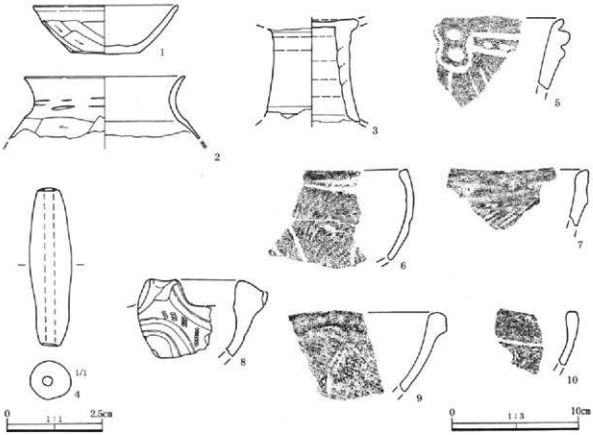
第134図　遺構外出土遺物（1）



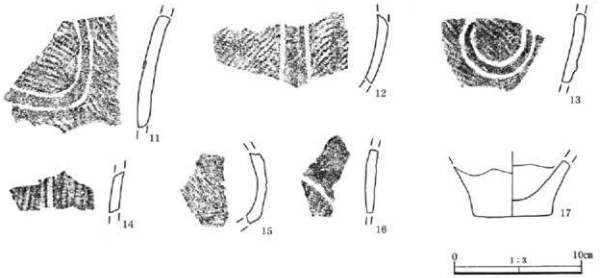
第135図　遺構外出土遺物（２）



As－B下水田耕土下層



第136図　遺構外出土遺物（3）、As－B下水田耕土下層出土遺物（1）



第137図　As－Ｂ下水田耕土下層出土遺物（２）

第５表　細谷南遺跡遺物観察表

１号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計画値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第11図 PL.29	1	土師器 坏	貯蔵穴 完形	口径　12.2 底径　－ 高さ　4.1	①粗・細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(5YR6/6)	底部丸底。口縁部は内傾する。底部外面篦削り。口縁内外面横撫で。底部内面撫で。器表面黒褐色(2.5Y3/2)。	
第12図 PL.29	2	土師器 坏	床面・表土 口縁1/4～底部1/2	口径　(14.0) 底径　－ 高さ　4.6	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③灰黄褐(10YR5/2)	底部やや平坦な丸底。口縁部は直線的に外傾する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。底部内面撫で。	内面は表面のみ黒色(10YR2/1)のところがある。
第12図 PL.29	3	土師器 坏	床面・表土 口縁部1/2～底部1/3	口径　13.6 底径　－ 高さ　4.8	①細・粗砂粒・白色粒少量 ②普通 ③黒褐(10YR3/1)	底部丸底。口縁部は外面に段をもち、直線的に立ち上がる。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。底部内面撫で。	黒褐色は表面のみ。断面はにぶい黄橙(10YR6/4)
第12図 PL.29	4	土師器 坏	床面 口縁部1/2～底部1/2	口径　13.3 底径　－ 高さ　4.4	①細砂粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR6/8)	底部丸底。口縁部は直線的に外傾する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第12図 PL.29	5	土師器 甕	Ｐ１南床面 口縁部2/3～胴上半1/3	口径　12.8 底径　－ 高さ　(11.9)	①粗砂粒・角閃石中量 ②普通 ③橙(7.5YR6/6)	器面は摩滅し整形不明瞭。胴上半外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴上半内面篦撫で。胴中位に最大径でやや丸味を帯びる。	
第13図 PL.29	6	土師器 甕	南壁際床面 口縁部1/2～胴下部1/2	口径　13.0 底径　－ 高さ　(17.1)	①細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	胴下半器面は摩滅し整形不明。胴上半縦方向の篦削り。類部～口縁内外面とも横撫で。内面胴上半横方向の篦撫で。	
第13図 PL.29	7	土師器 甕	埋土 口縁３/４～胴部3/4	口径　19.0 底径　－ 高さ　(24.9)	①粗砂粒中量 ②普通 ③にぶい橙(5YR6/4)	胴部外面縦方向篦削り。内面横方向篦撫で。口縁部内外面横撫で。内面に輪積み痕が残る。	
第13図 PL.29	8	縄文土器 深鉢	Ｐ２ 口縁部片	残存高　(4.7) 厚さ　0.8	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄(2.5Y6/3)	口縁部横位微隆起帯。微隆起帯の下にＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第13図 PL.29	9	縄文土器 深鉢	掘方 口縁部片	残存高　(3.9) 厚さ　0.7	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	波状口縁。地文にＲＬ縄文を施文後、２本の沈線により区画。区画は渦巻きあるいは楕円か。口唇部内側面取り。	中期加曽利Ｅ
第13図 PL.29	10	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高　(3.9) 厚さ　0.8	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	波状口縁。口縁部にそって１条の沈線が巡る。ＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第13図 PL.29	11	縄文土器 鉢	埋土 口縁部片	残存高　(2.5) 厚さ　0.7	①砂粒少ない ②良好 ③にぶい橙(5YR6/4)	外面無文。内面口縁に沿った沈線２本が巡る。	後期加曽利Ｂ
第13図 PL.29	12	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高　(4.7) 厚さ　0.6	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③灰(5Y4/1)	沈線で楕円文を描き、区画内にＲＬ縄文を充填。	中期加曽利Ｅ

2号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第15図 PL.29	1	土師器 坏	床面・埋土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 (16.7) 底径 － 高さ (5.6)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③橙(5YR7/6)	底部丸底。底部～体部外面篦削り。体部～口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部内外面横撫で。	
第15図 PL.29	2	須恵器 坏	北西隅床面 口縁部1/4～ 底部3/4	口径 (14.2) 底径 8.5 高さ 3.8	①粗・細砂粒少量 ②還元焔 ③外面黄灰(2.5Y4/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離しは不明。切り離し後右回転篦削り。体部下位で屈曲し、外展しほぼ直線的に立ち上がる。	内面灰黄(2.5Y6/2)
第15図 PL.29	3	須恵器 坏	撹乱埋土 口縁部1/4～ 底部1/2	口径 (14.4) 底径 8.2 高さ 3.2	①粗・細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離しは不明。切り離し後右回転篦削り。体部下位で屈曲し、外展しほぼ直線的に立ち上がる。	胎土に角閃石少量含む。
第15図 PL.29	4	土師器 甕	竈内 口縁1/4～胴 上部1/4	口径 (20.6) 底径 － 高さ (8.9)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③明赤褐(5YR5/8)	体部外面横方向の篦削り。口縁部は頸部で屈曲し、外展して立ち上がる。頸部に接合痕がみられる。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第15図 PL.29	5	須恵器 甕	貯蔵穴 口縁部1/4	口径 (19.6) 底径 － 高さ (11.5)	①砂粒・白色粒・小礫少量 ②還元焔 ③暗灰(N3/0)	轆轤成形。胴部は丸みをもつ。口縁部は大きく屈曲する。	
第15図 PL.29	6	縄文土器 深鉢	撹乱埋土 胴部片	残存高 (3.6) 厚さ 1.1	①砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	ＲＬ縄文を施文。	中期か

3号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第17図 PL.30	1	土師器 坏	撹乱埋土 口縁部～底 部1/5	口径 (12.8) 底径 － 高さ (3.0)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	底部丸底。体部は内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部外面篦削り。体部外面撫で。口縁部内外面横撫で。	
第17図 PL.30	2	土師器 坏	撹乱埋土 口縁部1/6～ 底部1/6	口径 (13.7) 底径 － 高さ (3.2)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部丸底気味。体部は内湾し、口唇部は内側に屈曲。底部外面篦削り、体部外面指押さえ後撫で。口縁部内外面横撫で。	
第17図 PL.30	3	土師器 甕	竈撹乱埋土 口縁部1/4	口径 (19.8) 底径 － 高さ (6.1)	①細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③暗赤褐(5YR3/6)	外面胴部横方向の篦削り。頸部～口縁部内外面横撫で。内面胴部篦撫で。口縁部はやや外反し立ち上がる。	
第17図 PL.30	4	土師器 甕	№25・28 口縁部～胴 上位2/3	口径 21.0 底径 － 高さ (8.3)	①細砂粒・白色少量 ②普通 ③にぶい赤褐(5YR5/3)	外面胴部横方向の篦削り。口縁部～頸部内外面とも横撫で。胴内面篦撫で。	
第17図 PL.30	5	石器 スクレイパー	撹乱	長さ 3.5 幅 2.7 厚さ 1.2	チャート	完形品。左縁が刃部。使用による細かい剥離が見られる。重さ12.3g。	
第17図 PL.30	6	石製品 紙石か	埋土	高さ 7.1 幅 6.4 厚さ 1.7	角閃石安山岩	上下面が磨られて平滑になっている。 重さ55.7g。	

4号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第18図 PL.30	1	土師器 坏	埋土 口縁1/4～底 部1/4	口径 (12.0) 底径 － 高さ 3.5	①細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③褐灰(5YR4/1)	底部丸底。底部外面篦削り。底部と口縁部の境界にゆるやかな稜。口縁部は外傾し1段の段を有し直線的に立ち上がる。口縁部内外面横撫で。	
第18図 PL.30	2	土師器 甕	竈撹乱 №10・竈埋土 口縁部1/4	口径 (19.8) 底径 － 高さ (4.8)	①細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③暗褐(7.5YR3/4)	口縁部は頸部で屈曲し、外傾して立ち上がる。口唇部は面取りが施される。口縁部内外面横撫で。体部外面篦削り。体部内面篦撫で。	
第18図 PL.30	3	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.3) 厚さ 0.8	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③黄灰(2.5Y4/1)	縦位・斜位の細い沈線。その間をＬＲ縄文を充填。	後期か。

5号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第20図 PL.30	1	土師器 坏	南壁際埋土 口縁1/3～底部4/5	口径 12.0 底径 － 高さ 4.0	①粗砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③にぶい橙(5YR6/4)	底部丸底。口縁部は外傾する。底部外面荒削り。口縁部外面～内面横撫で。体部外面に黒斑。	

6号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第22図 PL.30	1	土師器 坏	掘方埋土・9 住埋土 口縁1/3～底部1/3	口径 (13.9) 底径 － 高さ 3.6	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(5YR6/8)	底部丸底。底部～体部外面荒削り。体部は内湾し、口縁部は屈曲し外側に開いて立ち上がる。口縁部内外面横撫で。	
第22図 PL.30	2	土師器 坏	南東隅床面 口縁部1/3～底部2/3	口径 (14.4) 底径 － 高さ 3.3	①細・粗砂粒・黒色粒少量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	底部平坦。丸みをもって立ち上がり、口縁部はほぼ垂直。底部外面荒削り。口縁部外面～内面横撫で。底部内面撫で。	
第22図 PL.30	3	縄文土器 深鉢	床面 口縁部片	残存高 (5.2) 厚さ 0.8	①粗砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	口縁部横位微隆起帯。微隆起帯の下にＬＲ縄文を施文。口縁部内湾する。	中期加曽利Ｅ
第22図 PL.30	4	縄文土器 深鉢	掘方 胴部片	残存高 (4.5) 厚さ 1.1	①砂粒・赤色粒含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR4/6)	ＲＬ縄文施文後、２本の懸垂する沈線、間隔は狭い。	後期堀之内
第22図 PL.30	5	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.7) 厚さ 1.1	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	微隆起帯で∩字状の区画。ＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ

7号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第23図 PL.30	1	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片	残存高 (5.2) 厚さ 1.0	①砂粒・白・赤色粒含む ②良好 ③橙(2.5YR6/6)	粗い縦位の縄文と、櫛歯状工具による６条＋α条の条線が縦位に、波状に施文。	中期加曽利Ｅ

8号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第24図 PL.30	1	縄文土器 深鉢	掘方 口縁部片	残存高 (3.2) 厚さ 1.7	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	波状口縁。口唇部内側が肥厚する。口縁部横位沈線により区画。区画内をＲＬ縄文を充填。	後期称名寺
第24図 PL.30	2	縄文土器 深鉢	覆土 胴部片	残存高 (3.1) 厚さ 0.8	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐(5YR5/6)	地文にＲＬ縄文を施文後、沈線で区画。沈線は曲線的であるが、区画は不明。	後期か

9号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第26図 PL.30	1	土師器 高坏	掘方 坏部1/3	口径 (12.8) 底径 － 高さ (2.6)	①細・粗砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	体部はわずかに丸みをもちながら広がる。口唇部内面に浅い沈線１本。底部外面荒削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第26図 PL.30	2	土師器 高坏	埋土・表土 坏部2/3～脚部2/3	口径 14.0 底径 － 高さ (11.6)	①粗砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい橙(5YR6/4)	坏部に比し脚部が大きく開く。穿孔は３カ所。脚部下半外面荒磨き。脚部上半～坏部外面刷毛目後粗い撫で。口縁部外面～内面横撫で。脚部内面刷毛目後粗い撫で。	
第26図 PL.30	3	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (6.9) 厚さ 1.3	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③浅黄(2.5Y7/4)	ＲＬ縄文を施文。	中期か

10号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第28図 PL.30	1	須恵器 高台付壺	南壁際埋土 口縁部1/4～底部、高台剥離	口径 (14.6) 底径 － 高さ (5.8)	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③灰白色(2.5YR7/1)	口縁部は直立し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。外面口縁部横撫で、体部荒削り、内面撫で。	胎土に雲母を少量含む。

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第28図 PL.30	2	灰釉陶器 皿	竈内・掘方埋 土 底部3/4	口径 － 底径 6.5 高さ (1.9)	①砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/1)	輪轆成形。輪轆回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け。表面荒れている。内面全面施釉。外面不明。	
第28図 PL.30	3	土製品 土錘	北東壁際床 面 完形	長さ 4.8 径 1.3×1.3 重さ 6.9g	①細砂粒少量 ②良好 ③褐(7.5YR4/4)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。	
第28図 PL.30	4	土製品 土錘	貯蔵穴脇床 面 完形	長さ 5.3 径 1.3×1.3 重さ 7.5g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/4)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。	
第28図 PL.30	5	土製品 土錘	掘方 一部欠損	長さ (5.0) 径 1.4×1.4 重さ 8.0g	①細砂粒少量 ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。中央部～下端部一部欠損。	
第29図 PL.30	6	石製品 砥石	埋土	長さ 15.0 幅 12.7 厚さ 3.8	安山岩	表面のみ使用。裏面は剥離面のまま。重さ669.7g。	

11号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第30図 PL.31	1	土師器 坏	掘方埋土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 (13.7) 底径 － 高さ (3.7)	①細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR6/8)	底部丸底。口縁部～底部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は直立する。底部篦削り。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。	胎土に角閃石中量含む。
第30図 PL.31	2	土師器 坏	掘方埋土 口縁～底部 2/5	口径 (12.9) 底径 － 高さ 3.7	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部丸底。口縁部は短く、やや内湾する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第30図 PL.31	1	須恵器 壺	西壁際埋土 口縁～体部	口径 (18.6) 底径 － 高さ (5.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y6/1)	輪轆成形。口縁部は外反し、体部は丸味をおびて立ち上がる。底部を欠損。	
第31図 PL.31	2	須恵器 短頸壺	西側埋土	口径 － 底径 (6.4) 高さ (5.4)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(7.5Y5/1)	輪轆成形。輪轆右回転。静止糸切り。体部下部右回転篦削り。	

13号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第33図 PL.31	1	土師器 坏	床面 口縁部1/4～ 底部1/8	口径 (11.8) 底径 － 高さ (3.8)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③明赤褐(5YR5/8)	底部丸底。底部と口縁部の境界に弱い段を有す。口縁部は外傾し立ち上がる。口唇部内側に1条沈線が巡る。底部外面篦削り。口縁部外面～底部内面横撫で。	
第33図 PL.31	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.4) 厚さ 0.9	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄(2.5Y6/3)	地文に R L 縄文を施文後横位の微隆起帯を施文。	中期か

14号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第33図 PL.31	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/8～ 底部1/8	口径 (13.1) 底径 － 高さ (3.5)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③褐灰(7.5YR4/1)	底部丸底。口縁部と底部の境界に段を有す。口縁部はやや内傾する。底部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。内面底部撫で。	胎土に角閃石を少量含む。

15号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第36図 PL.31	1	土師器 坏	埋土・表土 口縁1/4～底 部1/3	口径 (13.5) 底径 (6.0) 高さ 4.1	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(2.5YR6/8)	外面底部～体部下位篦削り。体部上位指押さえ後摘撫で。指圧痕がみられる。外面口縁～内面体部下位まで横撫で。	
第36図 PL.31	2	土師器 坏	埋土 口縁部1/5～ 底部1/4	口径 (13.4) 底径 (8.0) 高さ (4.3)	①粗・細砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	底部篦削り、一部離れ砂の痕跡。体部外面指押さえ後撫で。口縁部外面指押さえ後横撫で。口縁部内面～底部横撫で。	

図版番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第36図 PL.31	3	土師器 坏	埋土 口縁1/4～底部1/4	口径 (13.5) 底径 (6.8) 高さ 3.7		①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	外面底部～体部下位置開り。体部上位指押さえ後指撫で。外面口縁横撫で。内面口縁～体部下位まで篦撫で。	
第36図 PL.31	4	土師器 坏	北壁付近床面 口縁一部欠	口径 12.6 底径 － 高さ 4.6		①粗砂粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部丸底,口縁部はほぼ直線的に外傾する。底部外面篦削り。口縁部内面一外面横撫で。	
第36図 PL.31	5	土師器 坏	北壁付近埋土 口縁部1/4～底部1/4	口径 (11.8) 底径 － 高さ (4.5)		①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③灰黄褐(10YR5/2)	口縁部と底部の境に段を持ち、口縁部は外反気味に外傾する。底部丸底。底部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。	
第36図 PL.31	6	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～底部1/6	口径 (12.0) 底径 － 高さ (4.5)		①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③暗灰黄(2.5Y4/2)	口縁部と底部の境に段を持ち、口縁部は外反気味に外傾する。底部丸底。底部外面篦削り。口縁部外面一底部内面横撫で。	
第36図 PL.31	7	土師器 小型甕	竈前埋土 口縁部1/3～胴部上位1/3	口径 (11.8) 底径 － 高さ (3.7)		①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③におい黄褐(10YR5/3)	胴が膨らみ、頸部は直線的で、口縁部は外傾する。胴部外面横方向の篦削り。頸部～口縁部外面指押さえ後横撫で。口縁部内面横撫で。頸部～胴部内面横方向の篦撫で。	
第36図 PL.31	8	土師器 小型甕	南側床面・埋土 口縁部一底部1/3	口径 (11.0) 底径 － 高さ (4.7)		①粗・細砂粒少量 ②酸化焔 ③明赤褐(2.5YR5/8)	胴部が膨らみ、頸部緩く屈曲し、口縁部は外傾する。胴部外面斜方向の篦削り。頸部外面～口縁部内外面横撫で。頸部内面～胴部内面横方向の篦撫で。	
第36図 PL.31	9	土師器 小型甕	貯蔵穴西脇埋土 口縁部1/3～胴部中位1/3	口径 (11.8) 底径 － 高さ (7.6)		①粗・細砂粒少量 ②酸化焔 ③明赤褐(5YR5/8)	胴部がやや膨らみ、頸部は直線的で、口縁部は外反気味に立ち上がる。胴部外面横方向の篦削り。頸部～口縁部内外面横撫で。口容部に１条の沈線が巡る。胴内面横方向の篦撫で。	

16号住居

図版番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第38図 PL.31	1	土師器 坏	貯蔵穴脇床面・掘方埋土 一部欠	口径 11.9 底径 － 高さ 4.4		①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③黒褐(10YR2/2)	底部丸底。口縁部は内傾する。底部外面篦削り。口縁部内面一外面横撫で。底部内面撫で。	
第38図 PL.32	2	土師器 甕	竈左袖 口縁・胴部下部一部欠	口径 21.4 底径 4.7 高さ 37.7		①粗砂粒・小礫中量 ②普通 ③灰黄褐(10YR5/2)	胴部の丸み少なくほぼまっすぐ立ち上がる。口縁は外反する。胴部外面縦方向篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向篦撫で。内面に輪積み痕が残る。	
第38図 PL.32	3	土師器 甕	竈右袖 口縁部1/2～胴部1/3	口径 20.8 底径 － 高さ (30.0)		①粗砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③におい黄褐(10YR5/3)	胴部の丸みは少ない。口縁は外反しながら大きく開く。胴部外面縦方向篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向篦撫で。	
第39図 PL.31	4	土師器 甕	竈左袖 口縁1/3～胴中位1/2	口径 (12.8) 底径 － 高さ (3.8)		①粗・細砂粒中量 ②普通 ③におい黄橙(10YR6/3)	長胴甕。胴部外面縦方向の篦削り。口縁部は外反する。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	
第39図 PL.31	5	土師器 甕	竈埋土 胴部下位1/2	口径 (15.4) 底径 － 高さ (2.5)		①粗・細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③におい褐(7.5YR5/3)	胴部下位でやや丸味が強い。胴部外面縦方向の篦削り。下位底部付近斜方向の篦削り。内面胴部横方向と斜方向の篦撫で。	
第38図 PL.31	6	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (3.0) 厚さ 1.3		①砂粒・白・赤色粒含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	口容部を欠損。沈線により区画。区画内に ＬＲ縄文を充填。	後期堀之内
第38図 PL.31	7	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部片	残存高 (6.2) 厚さ 1.2		①粗砂粒・黒・赤色粒多い ②良好 ③浅黄(2.5Y7/3)	沈線により区画。区画は∩字状文と想定される。区画内にＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第38図 PL.31	8	縄文土器 深鉢	竈埋土 胴部片	残存高 (6.5) 厚さ 1.1		①砂粒含む ②良好 ③におい黄橙(10YR7/6)	微隆起帯により区画。区画は∩字状文と想定される。区画内にＬＲ縄文が残る。	中期加曽利Ｅ

17号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第41図 PL.32	1	土師器 坩	掘方P 6 口縁1/2～底部1/2	口径 (11.6) 底径 (4.2) 高さ 16.6	①粗砂粒・白色粒中量 ②普通 ③灰黄褐(10YR4/2)	丸い胴部。口縁部は直線的に立ち上がる。底部篦削り。胴部外面篦削りの後粗い縦篦磨き。口縁部外面横撫での後縦篦磨き。口縁部内面横撫での後斜め篦磨き。胴部内面篦撫で。	
第41図 PL.32	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (5.5) 厚さ 0.7	①細砂粒・赤色粒含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	平行した沈線で渦巻きを描く。内部はＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第41図 PL.32	3	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.6) 厚さ 1.1	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	ＲＬ縦位施文。	中期加曽利Ｅ

18号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第42図 PL.31	1	土師器 坏	掘方埋土 口縁部1/5～底部1/5	口径 (11.6) 底径 － 高さ (2.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③明赤褐(5YR5/8)	底部丸底。底部～口縁部は内湾し、立ち上がる。底部外面篦削り。口縁部外面横撫で。口縁部内面～底部内面撫で。	胎土に角閃石を少量含む。
第42図 PL.31	2	須恵器 坏	掘方埋土 口縁部1/4～底部1/4	口径 (12.6) 底径 (5.3) 高さ 3.5	①粗・細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部は内湾し、口縁部は外反する。	
第42図 PL.31	3	土師器 小型壺	床下土坑 口縁部1/4～胴部上位1/4	口径 (12.6) 底径 － 高さ (4.6)	①細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③にぶい褐(5YR6/3)	胴部は膨らみ、頸部で屈曲し、口縁部は外傾する。胴部外面横方向の篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向篦撫で。	胎土に角閃石を少量含む。切り離し技法は不明。

19号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第44図 PL.32	1	須恵器 坏	床面・掘方 口縁部1/4～底部1/4	口径 (13.2) 底径 (7.8) 高さ 3.7	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離しは不明。切り離し後、右回転篦削り。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾し立ち上がる。	
第44図 PL.32	2	須恵器 高台付埦	掘方埋土 口縁部1/2～底部1/3	口径 13.2 底径 (7.0) 高さ 5.2	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤成形。轆轤右回転。切り離し後、高台貼り付け。貼り付け後撫で。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾し立ち上がる。	胎土に角閃石を少量含む。切り離し技法は不明。
第44図 PL.32	3	須恵器 蓋	北西隅床面・埋土 1/2、摘み欠	口径 (13.3) 底径 － 高さ (2.6)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。轆轤右回転。口縁は折り返し。体部上面は右回転篦削り。摘み欠。	
第44図 PL.32	4	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部片	残存高 (3.6) 厚さ 1.2	①砂粒含む ②良好 ③灰黄(2.5Y6/2)	懸垂する微隆起帯で区画。区画内あるいは区画外をＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第44図 PL.32	5	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部片	残存高 (3.5) 厚さ 1.3	①砂粒含む ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	波状口縁。口唇部に沿って２本の平行した沈線を施し、沈線の間に２列の円形の刺突列を施す。刺突列の下にＬＲ縄文を施文。	後期称名寺

21号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第46図 PL.32	1	石製品 錘車	南壁際掘方埋土 一部欠	孔径 3.2 広径 5.0 厚さ 1.9	流紋岩	紙石を流用しているが、孔径9.7cm、重さ57.5g。	
第46図 PL.32	2	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部片	残存高 (3.9) 厚さ 1.4	①砂粒・白・赤色粒多い ②やや軟 ③浅黄(2.5Y7/3)	口唇部内外面に１条の沈線が巡る。口縁部は屈曲し外傾する。	後期堀之内
第46図 PL.32	3	縄文土器 深鉢	掘方埋土 口縁部片	残存高 (3.6) 厚さ 0.8	①砂粒含む ②良好 ③浅黄橙(10YR8/4)	口縁部横位微隆起帯。横位微隆起帯に連結し２本の微隆起帯で凸字状の区画。ＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ

22号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第48図 PL.32	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/5～ 体部1/5	口径 (12.4) 底径 － 高さ (2.3)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい橙(2.5YR6/4)	底部丸底。体部は丸味を帯び、口縁部は直立する。底部外面篦削り。体部外面撫で。口縁部外面～底部内面横撫で。	
第48図 PL.32	2	石器 制片	北壁際埋土	長さ 1.7 幅 1.4 厚さ 0.6	黒曜石		重さ1.7g。

23号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第50図 PL.33	1	土師器 坏	西隅付近埋土 口縁1/4～底部1/2	口径 (13.0) 底径 － 高さ 3.5	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部丸底。底部外面～体部篦削り。体部は内湾し、口縁部は直立する。口縁部内外面横撫で。	
第49図 PL.33	2	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長さ 5.0 径 1.2×1.2 重さ 5.8g	①細砂粒多量 ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/4)	中央部に最大径、両端が細くなる。下端部の一部を欠損。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	
第49図 PL.33	3	土製品 土錘	中央部埋土 完形	長さ 5.2 径 1.3×1.2 重さ 6.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③橙(7.5YR6/8)	中央部に最大径、両端が細くなる。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	
第50図 PL.33	4	縄文土器 深鉢	掘方埋土 胴部片	残存高 (3.2) 厚さ 1.4	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	幅1.5cmの太い横位の施帯。その下に懸垂する沈線が施される。	後期堀之内
第50図 PL.33	5	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.6) 厚さ 0.7	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	地文にＲＬ縄文施文後、懸垂する２本の沈線が施される。	後期堀之内

24号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第51図 PL.33	1	土師器 坏	掘方埋土 口縁部2/3～底部	口径 14.8 底径 － 高さ 4.0	①細・粗砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	底部丸底。口縁はわずかに外反しながら外傾する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。底部外面黒斑。	
第51図 PL.33	2	土師器 甕	南壁際埋土 口縁部1/6～胴部上位1/6	口径 (25.0) 底径 － 高さ (5.8)	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	胴部やや膨らみ、口縁部は外反する。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	
第51図 PL.33	3	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 4.6 径 1.0×1.0 重さ 4.3g	①細砂粒・白色粒多量 ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	中央部に最大径、両端が細くなる。器面は丁寧な整形。	
第51図 PL.33	4	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (3.0) 厚さ 0.7	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	波状口縁か。地文にＲＬ縄文施文後、曲線的な沈線が施される。	後期堀之内

25号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第52図 PL.33	1	須恵器 高台付埦	東壁際埋土 口縁部1/4～底部1/4	口径 (13.3) 底径 － 高さ (4.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。貼り付け後回転撫で。体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	高台欠損。胎土に角閃石を少量含む。

26号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第54図 PL.33	1	土師器 壺	北東部床面 口縁部2/3～底部	口径 15.0 底径 － 高さ 6.5	①細砂粒・黒色粒中量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	底部丸底。口縁はほぼ垂直に立ち上がってわずかに外反する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。底部内面撫で。	器壁が厚めで重い。
第54図 PL.33	2	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 5.0 径 1.2×1.2 重さ 5.7g	①細砂粒多量 ②良好 ③浅黄橙(10YR8/4)	中央部に最大径、両端が細くなる。器面は丁寧な整形。	

1号竪穴状遺構

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第54図 PL.33	1	土師器 坏	東壁際埋土 口縁1/5	口径 (14.9) 底径 － 高さ (3.8)	①細砂粒少量 ②普通 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	体部外面横位ヘラ削の後篦削り。口縁部横撫で。 体部はもく、口縁は外反する。	
第54図 PL.33	2	土師器 鉢か	北東部埋土 口縁1/6	口径 (24.0) 底径 － 高さ (5.4)	①細砂粒中量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	体部外面横撫削り。口縁外面～内面横撫で。 口縁はゆるく外傾する。	内面にぶい橙(5YR6/4) 外面黒班。
第54図 PL.33	3	土師器 甕	中央部埋土 口縁～体部小破片	口径 (22.0) 底径 － 高さ (7.8)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	胴部は直線的に立ち上がり、頸部で大きく屈曲。口縁はわずかに外反しながら開く。 胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第55図 PL.33	4	土師器 甕	中央部埋土 口縁～胴部小破片	口径 (24.0) 底径 － 高さ (12.5)	①砂粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	胴部はふみをもち、頸部は大きく屈曲。口縁は外反しない。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第55図 PL.33	5	土師器 甕	中央部埋土 口縁部1/6	口径 (21.0) 底径 － 高さ (7.1)	①砂粒・白色粒少量 ②普通 ③灰白(10YR8/2)	胴部は緩やかに内傾。頸部で屈曲して口縁部は外反する。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第55図 PL.33	6	土師器 甕	埋土 口縁部小破片	口径 － 底径 － 高さ (3.7)	①雲砂粒多い ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	折り返した部分の下縁には細かい刺突。内外面とも横方向の刷毛目。 外面の折り返し部以下は粗い縦磨き。	
第55図 PL.33	7	土師器 壺	埋土 口縁部小破片	口径 － 底径 － 高さ (3.3)	①砂粒・小礫多く含む ②普通 ③浅黄(2.5Y8/4)		

27号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第57図 PL.33	1	土師器 坏	埋土 小破片	口径 (13.4) 底径 (7.0) 高さ 4.1	①砂粒含む ②普通 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	体部外面下端～底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。	体部外面に墨書。「水」か。

28号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第59図 PL.33	1	土師器 坏	北西隅埋土 口縁部1/4～体部1/4	口径 (13.2) 底径 － 高さ (2.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③褐(7.5YR4/3)	底部丸底。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。体部外面篦削り。口縁部外面～体部内面横撫で。	胎土に角閃石少量含む。
第59図 PL.33	2	須恵器 坏	埋土 体部1/3	口径 (14.0) 底径 (8.2) 高さ 3.3	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。表面摩滅のため回転方向不明。 体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反しない。	
第59図 PL.33	3	須恵器 坏	撹乱 埋土	口径 (13.2) 底径 8.4 高さ 3.6	①細砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③橙(5YR6/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り後、外周右回転篦削り。体部はわずかに丸みをもち、口縁はやや外反する。	
第59図 PL.33	4	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～底部	口径 13.3 底径 8.0 高さ 4.1	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し右回転篦削り。体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	
第59図 PL.33	5	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～底部1/2	口径 (13.4) 底径 (7.0) 高さ 3.9	①細砂粒少量 ②還元焔 ③オリーブ黒(5Y3/1)	轆轤成形。轆轤右回転。右回転糸切り。体部は丸みをもち、口縁は外反しない。	口縁部は灰白(6Y7/1)
第59図 PL.33	6	土製品 土錘	南壁際埋土 1/2下半部欠	長さ (4.5) 径 1.8×1.8 重さ 12.2g	①細砂粒・粗い砂粒を少量 ②良好 ③浅黄橙(10YR8/4)	中央部に最大径、両端が細くなる。中央部～下端を欠損。	

29号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第60図 PL.33	1	土師器 甕	埋土 小破片	口径 － 底径 － 高さ (2.2)	①砂粒含む ②普通 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	斜め方向刷毛目の後、横、斜めの沈線を施す。	

30号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第61図 PL.34	1	土師器 坏	強方理土 口縁1/6～底部1/4	口径 (12.8) 底径 － 高さ 4.0	①細砂粒・赤色粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	外面底部～体部下位篦削り。体部上位指撫で。体部はやや内湾し、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。口縁部内外面横撫で。	
第61図 PL.34	2	土師器 小型台付甕	P2理土 完形	口径 8.5 底径 5.2 高さ 9.8	①粗砂粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	台部は直線的に立ち上がる。胴部は丸みをもち、口縁部は短い。外面は刷毛目の後、台部下半と口縁部のみ横撫で。内面は篦撫で、胴部上部に篦先による刺突。	
第61図 PL.34	3	土師器 高坏	中央部理土 脚部4/5	口径 － 底径 (10.4) 高さ (7.6)	①粗砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄褐(10YR7/4)	緩やかに外反しながら広がる。穿孔は3カ所。外面縦方向の篦磨き。内面は横方向の篦撫で。	
第61図 PL.34	4	土師器 高坏	強方理土 坏部1/4	口径 (22.0) 底径 － 高さ (7.0)	①白・赤・黒色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	体部は丸みをもって緩やかに広がる。外面は撫での後やや粗い縦方向の篦磨き。内面は全面斜め方向の篦磨き。	
第61図 PL.34	5	土師器 高坏	強方理土 脚部1/4	口径 － 底径 (13.5) 高さ (3.7)	①粗砂粒少量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	ごくわずかに外反しながら広がる。外面撫で。内面撫での後、一部に刷毛目。	
第62図 PL.34	6	土製品 土錘	強方理土 完形	長さ 4.1 径 1.1×1.1 重さ 4.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③橙(7.5YR6/8)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧整形。	
第62図 PL.34	7	土製品 土錘	強方理土 完形	長さ 5.4 径 1.3×1.3 重さ 6.8g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧整形。	
第61図 PL.34	8	縄文土器 深鉢	強方理土 胴部片	残存高 (4.1) 厚さ 0.8	①砂粒多い ②やや軟 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	地文にＬＲ縄文施文後、整備する2本の直線的な沈線とやや曲線的な沈線を施す。	後期堀之内
第61図 PL.34	9	縄文土器	東攪乱 胴部片	残存高 (5.1) 厚さ 1.1	①砂粒・赤色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	地文にＲＬ縄文施文後、整備する2本の沈線を施す。	後期堀之内

31号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第64図 PL.34	1	土師器 坏	強方理土 口縁部1/4～底部1/3	口径 (13.2) 底径 (6.4) 高さ 3.9	①細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	体部～口縁部はやや丸味を帯びる。底部外面～体部下位篦削り。体部上位指撫で。口縁部外面～体部内面横撫で。底部撫で。	胎土に角閃石中量含む。
第64図 PL.34	2	須恵器 坏	理土・裾方 口縁部～底部小破片	口径 (13.3) 底径 (6.0) 高さ 4.1	①細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰黄褐(10YR5/2)	輪轆成形。輪轆右回転。底部回転糸切り。体部はやや丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。	
第64図 PL.34	3	土師器 甕	電理土 口縁部1/2～胴部上位1/4	口径 12.6 底径 － 高さ (5.7)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	胴部が膨らみ、口縁部外反。胴部外面横方向篦削り。頸部に1条の沈線が巡る。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向篦撫で。	胎土に角閃石中量含む。
第64図 PL.34	4	土師器 甕	北西隅床面 口縁～胴部中位2/3	口径 19.0 底径 － 高さ (12.3)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③灰褐(7.5YR4/2)	胴部外面中位縦方向、上位横方向篦削り、部分的に指頭痕がみられる。頸部に間があき、口縁部は外傾する。口唇部面取り。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第64図 PL.34	5	土製品 土錘	理土 完形	長さ 3.1 径 0.8×0.8 重さ 2.1g	①砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	中央部に最大径。両端部はやや細くなる。	
第64図 PL.34	6	縄文土器 甕	理土 小破片	残存高 (3.6) 厚さ 0.6	①細砂粒含む ②普通 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	ＲＬ横位施文。口縁に沿って連続した刺突。	

32号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第65図 PL.34	1	須恵器 坏	竈右脇床面 体部1/3欠	口径 (11.5) 底径 6.0 高さ 3.8	①粗砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	輪轆成形。輪轆右回転。静止糸切り。体部はやや丸みをもち、口縁はわずかに外反する。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第65図 PL.34	2	須恵器 甕	埋土 口縁1/5～底部	口径 (14.2) 底径 5.6 高さ 6.4	①粗砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	轆轤成形。右回転。底部右回転糸切り。体部はやや丸みを帯び口縁は外反しない。	
第66図 PL.34	3	須恵器 高台付椀	埋土 口縁部1/4～底部	口径 (13.6) 底径 7.0 高さ 5.6	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5Y7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部は直線的で外傾する。	胎土に石英を少量含む。
第66図 PL.34	4	灰釉陶器 高台付椀	埋土 1/8	口径 (14.1) 底径 (5.8) 高さ 5.0	①細砂粒・黒色粒微量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤成形。切り離し後高台貼り付け。体部は丸みをもつ。釉は刷毛塗りで薄い。	
第66図 PL.34	5	須恵器 高台付椀	埋土 底部3/4	口径 － 底径 6.8 高さ (3.2)	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄褐(10YR5/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け。貼り付け後の撫でで、切り離し技法は不明。	
第66図 PL.34	6	土師器 台付甕	北攪乱 胴部下半1/2	口径 － 底径 － 高さ (12.0)	①細・粗砂粒中量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	胴部外面刷毛目。胴部内面刷毛目の後撫撫で。台部外面刷毛目の後丁寧な撫で。台部内面撫で。	
第66図 PL.34	7	土師器 小型台付甕	竈埋土 口縁部1/3～胴部上位1/3残存	口径 (9.1) 底径 － 高さ (4.0)	①粗・細砂粒中量 ②普通 ③浅黄橙(10YR8/4)	口縁部は「S」字状。胴部外面斜方向の刷毛目。肩部に横位の刷毛目が巡る。口縁部内外面横撫で。胴部内面撫で。	口縁部一部欠損。口縁部歪む。
第66図 PL.34	8	土師器 甕	床面・埋土 口縁部1/5～胴部1/5	口径 (20.0) 底径 － 高さ (17.2)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部は丸味を帯び、口縁部は外反する。胴部外面縦方向の撫削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の撫撫で。	
第66図 PL.34	9	須恵器 蓋	埋土 1/6	口径 (14.1) 摘み径 (4.3) 高さ 2.8	①細砂粒・黒色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y1/6)	轆轤成形。外面中央右回転撫削り。摘みを貼り付けた後回転撫で。	

33号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第68図 PL.35	1	須恵器 坏	竈右壁際埋土 完形	口径 12.1 底径 5.8 高さ 4.1	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はやや直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反。	
第68図 PL.35	2	須恵器 高台付椀	竈右壁際埋土 ほぼ完形	口径 13.5 底径 6.0 高さ 5.3	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部はやや丸味を帯び、口縁部は外反。	口縁部一部欠損。口縁部歪む。
第68図 PL.35	3	須恵器 高台付椀	竈埋土 口縁1/2～底部1/2	口径 14.3 底径 6.8 高さ 6.4	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい赤褐(5YR5/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾する。体部内面に荒磨き。	
第68図 PL.35	4	須恵器 高台付椀	竈埋土 口縁1/5～底部1/2	口径 (15.4) 底径 (6.4) 高さ 6.9	①細・粗砂粒中量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り後高台貼り付け、やや強い回転撫で。体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。	
第68図 PL.35	5	須恵器 坏	掘方埋土 小破片	口径 － 底径 － 高さ －	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。口縁部わずかに外反する。	墨書判読不能
第68図 PL.35	6	土製品 土錘	掘方埋土 ほぼ完形	長さ 3.4 径 0.9×0.9 重さ 1.9g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/3)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。下端部本口一部欠損。小型。	
第68図 PL.35	7	石製品 砥石	埋土	長さ (7.2) 幅 (2.5) 重さ 44.5g	硬質岩	3面使用。未使用の面には刃先の擦痕がある。	

34号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第69図 PL.35	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 3.7 径 0.8×0.8 重さ 2.3g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	中央部と端部で太さが変わらない。器面は丁寧な整形。小型。	
第69図 PL.35	2	土製品 土錘	埋土 上端部1/2	長さ (3.6) 径 0.9×0.9 重さ 2.4g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③橙(10YR6/6)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。中央部～上端部1/2残存。	

35号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第71図 PL.35	1	土師器 坏	掘方理土 ほぼ完形	口径 12.3 底径 － 高さ 3.7	①粗砂粒中量・小礫少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	丸底。口縁部は短く、ほぼ垂直に立ち上がる。底部外面施削り。口縁部外面～内面横撫で。	

36号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第72図 PL.35	1	須恵器 坏	電理土 底部2/3	口径 － 底径 5.6 高さ (2.4)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③灰黄褐(10YR5/2)	輪鏈成形。輪鏈右回転。静止糸切り。体部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第72図 PL.35	2	土師器 甕	電脆方・理土 口縁部1/4	口径 (19.0) 底径 － 高さ (6.8)	①細砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	胴部やや膨らみ、口縁部は外反する。胴部外面横方向施削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向荒撫で。	
第73図 PL.35	3	石製品 砥石	扁平床面 扁部破片	長さ (9.6) 幅 (10.0) 最大厚 11.7	多孔質安山岩	全8面使用。各面ともよく使用され平滑。 重さ1,067.6g	

37号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第74図 PL.35	1	須恵器 高台付埦	理土 口縁～底部 3/4	口径 (13.8) 底径 (5.8) 高さ 4.4	①砂粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	輪鏈成形。体部外面下半は施削り。切り離し後高台貼り付け。貼り付け時の回転撫でのため、切り離し技法不明。	
第74図 PL.35	2	土師器 甕	電理土 口縁部1/6～ 胴部上位1/6	口径 (21.6) 底径 － 高さ (6.4)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部外反し、胴部やや膨らむ。胴部外面横方向施削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向荒撫で。	
第74図 PL.35	3	石製品 砥石か	電理土	長さ 5.5 幅 5.0 重さ 46.6g	角閃石安山岩	各所に擦痕があるが、使用頻度は低いらしい。	

38号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第75図 PL.35	1	須恵器 坏	理土 口縁～体部 1/3	口径 (13.8) 底径 － 高さ (4.4)	①粗砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	輪鏈成形。輪鏈右回転。体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反しない。	外面の大部分は黒(10YR2/1)

39号住居

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第76図 PL.35	1	土師器 坏	理土 完形	口径 11.2 底径 5.4 高さ 4.3	①細砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR6/6)	やや粗い作り。体部はわずかに丸みをもち、口縁は外反しない。体部外面下半～底部外面施削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第76図 PL.35	2	土師器 坏	理土 口縁～体部 1/2	口径 12.8 底径 － 高さ (4.9)	①砂粒中量 ②普通 ③明黄褐(10YR6/6)	体部はやや丸みをもつが口縁は外反しない。体部外面～底部外面施削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第76図 PL.35	3	須恵器 坏	理土 口縁1/4次	口径 12.7 底径 5.4 高さ 5.0	①砂粒中量 ②やや酸化焔 ③にぶい黄(2.5Y6/3)	輪鏈成形。底部右回転糸切り。体部はほぼ直線的で口縁は外反する。	
第76図 PL.35	4	土師器 高台付埦	南壁際床面 口縁1/8～底部完形	口径 (13.2) 底径 8.2 高さ 5.6	①砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反しない。体部外面下半施削り、その後高台貼り付け。口縁外面～内面横撫で。	
第77図 PL.36	5	須恵器 高台付埦	理土 口縁1/4～底部完形	口径 (14.2) 底径 6.6 高さ 5.3	①細砂粒中量、白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	輪鏈成形。回転方向不明。底部回転糸切り後高台貼り付け。体部はやや丸みをもち、口縁は外反する。	
第77図 PL.36	6	須恵器 高台付埦	理土・表土 口縁～体部 1/3次	口径 15.0 底径 6.9 高さ 5.8	①細砂粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	輪鏈成形。輪鏈右回転。底部切り離し後高台貼り付け。体部はわずかに丸みをもち、口縁は短く強く外反する。	
第77図 PL.36	7	須恵器 高台付埦	中央部床面 完形	口径 14.2 底径 6.0 高さ 4.9	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰オリーブ(5Y6/2)	輪鏈成形。輪鏈右回転。底部回転糸切り後高台貼り付け。体部はわずかに丸みをもち、口縁は外反する。	

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第77図 PL.36	8	須恵器 高台付壺	西部床面 ほぼ完形	口径 底径 高さ	13.3 5.8 5.3	①砂粒・白色粒中量 ②やや酸化焔 ③黄灰(2.5Y7/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁は外反する。	
第77図 PL.36	9	須恵器 高台付壺	埋土・表土 底部2/3	口径 底径 高さ	－ － (2.1)	①細砂粒少量 ②微化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	轆轤成形。回転方向不明。底部回転糸切り後高台貼り付け。高台欠損。底部に穿孔。	
第77図 PL.36	10	土師器 小型甕	埋土 口縁～底部 1/3	口径 底径 高さ	(11.0) － (10.4)	①砂粒・赤色粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR6/6)	胴部外面やや粗い篦削り。口縁外面から内面横撫で。胴部内面撫で。口縁内面に粘土紐接合痕。	

41号住居

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第78図 PL.36	1	土師器 坏	埋土 口縁～底部 2/3	口径 底径 高さ	12.1 － 3.7	①砂粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR6/6)	丸底。体部外面～底部外面篦削り。口縁外面～内面横撫で。	
第78図 PL.36	2	土師器 坏	埋土 口縁～体部 1/3	口径 底径 高さ	(13.7) － (4.1)	①砂粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	丸底。体部外面は篦削りだが、摩滅のため不明瞭。口縁外面～内面横撫で。	
第78図 PL.36	3	須恵器 坏	埋土 口縁1/4次	口径 底径 高さ	(14.8) 9.9 3.5	①小礫・白色針状鉱物 ②還元焔 ③褐灰(7.5YR5/1)	轆轤成形。体部は低く直線的。口縁は外反しない。底部外面右回転篦削り。	

2号掘立柱建物

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第81図 PL.36	1	土師器 坏	P 1 埋土	口径 底径 高さ	(13.6) － (4.2)	①砂粒・白色粒中量 ②普通 ③黒褐(10YR3/2)	丸底。口縁部は外傾し、直線的に立ち上がる。底部篦削り。口縁部外面～内面横撫で。	中期加曽利E

3号掘立柱建物

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第83図 PL.36	1	土師器 坏	口縁～底部 1/6	口径 底径 高さ	(12.0) － －	①細砂粒中量 ②普通 ③浅黄橙(10YR8/3)	底部丸底。口縁は斜めに立ち上がる。底部篦削り。口縁外面～内面横撫で。	
第83図 PL.36	2	土師器 坏	P 1 埋土 口縁1/4	口径 底径 高さ	(12.0) － －	①砂粒中量。白色粒少量 ②普通 ③橙(2.5YR6/8)	底部丸底。口縁は斜めに立ち上がる。底部篦削り。口縁外面～内面横撫で。	
第83図 PL.36	3	土師器 甕	口縁～体部 小破片	口径 底径 高さ	(19.0)	①砂粒・白色・黒色粒中量 ②普通 ③にぶい赤褐(5YR5/4)	胴部は丸みをもち、頸部で屈曲し、口縁部は外傾・外反する。胴部外面斜め篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面撫で。	
第83図 PL.36	4	縄文土器 深鉢	P 7 埋土 口縁部片	残存高 厚さ	(4.2) 1.5	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部幅のやや広い横位線帯。それ以下RL縄文施文。	中期加曽利EL
第83図 PL.36	5	縄文土器 深鉢	P 7 埋土 胴部片	残存高 厚さ	(4.0) 0.7	①細砂粒含む ②良好 ③橙(2.5YR6/6)	地文にRL縄文施文後、曲線的な沈線で区画。	後期堀之内

4号掘立柱建物

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第84図 PL.36	1	須恵器 坏	P 8 埋土 口縁部1/5～ 底部1/2	口径 底径 高さ	(12.5) (5.8) 3.9	①小礫・黒色粒少量 ②還元焔 ③灰(N4/0)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部は直線的に立ち上がり、口縁はやや外反する。	

2号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第89図 PL.36	1	石製品 凹み石	埋土	長さ 幅 最大厚	(7.6) 7.2 3.7	安山岩	表面中央が使用されやや凹む。上部を敲石として使用か。重さ313.9g。	

7号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第90図 PL.36	1	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (2.8) 厚さ 1.1	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	波状口縁。口縁部横位沈線。	後期
第90図 PL.36	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (5.1) 厚さ 1.2	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	上半ＲＬ横位施文。下半ＲＬ縦位施文。	後期

10号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第90図 PL.36	1	土師器 甕	埋土 口縁部1/6～ 胴部上位1/6	口径 (28.0) 底径 － 高さ (7.2)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	胴部は膨らまず。口縁部は外反する。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	
第90図 PL.36	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.7) 厚さ 1.2	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	隆帯が懸垂する。	中期加曽利E

12号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第91図 PL.36	1	縄文土器	埋土 胴部片	残存高 (4.0) 厚さ 1.0	①粗砂粒多い ②良好 ③にぶい橙(2.5YR6/4)	表面摩滅。ＲＬ横位施文か。	時期不明、後期か
第91図 PL.36	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (2.6) 厚さ 0.9	①砂粒・白色粒多い ②やや軟質 ③浅黄(2.5Y7/3)	表面摩滅。ＲＬ横位施文か。	時期不明、後期か

13号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第91図 PL.36	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.4) 厚さ 1.0	①砂粒多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR5/3)	ＲＬ斜位施文。	時期不明、後期か

16号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第91図 PL.36	1	須恵器 高台付椀	埋土 底部1/3	口径 － 底径 (8.2) 高さ －	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	輪轆成形。輪轆回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け。貼り付け後周辺部撫で。	

22号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第92図 PL.36	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.5) 厚さ 0.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	横位微隆起帯。わずかにＬＲ縄文が残る。	中期加曽利E
第92図 PL.36	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.5) 厚さ 1.0	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	微隆起帯が懸垂し、∩字形の区画か。区画内ＲＬ縄文横位施文。	上下90°回転 中期加曽利E

23号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第92図 PL.37	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/5～ 底部1/5	口径 (12.0) 底径 － 高さ (4.3)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR6/8)	底部丸底。底部と口縁部の境界に段を有す。口縁部はやや外反する。外面底部篦削り。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。	脚土に角閃石少量含む。
第92図 PL.37	2	土師器 小型壺	埋土 口縁部1/4～ 胴部上位1/4	口径 (12.9) 底径 － 高さ (5.7)	①細・微砂粒少量 ②普通 ③にぶい赤褐(5YR4/4)	口縁部は外反し、頸部にわずかな段、胴部はやや膨らむ。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向篦撫で。	脚土に角閃石少量含む。
第92図 PL.37	3	土製品 不明製品	埋土 一部欠	直径 4.0 厚さ0.5～1.0 重さ 11.9g	①細砂粒少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	孔径0.6cm。裏面に指か掌の圧痕。丸い粘土塊に上からパイプ状のものを押しつけて成形か。	

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第92図 PL.37	4	石製品 砥石か	埋土	長さ　9.6 幅　5.4	角閃石安山岩	表面と側面の2面使用。よく擦られて平滑。 重さ83.5g。	
第92図 PL.37	5	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (6.6) 厚さ　1.4	①砂粒多い ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	表面摩滅。微隆起帯懸垂。R L 縄文を施文。	中期加曽利E

31号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第93図 PL.37	1	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.0) 厚さ　0.9	①砂粒・白・赤色粒多い ②やや軟質 ③浅黄橙(10YR8/4)	表面摩滅。地文に縄文施文後沈線施文。縄文は不明。断面は褐灰(10YR4/1)。	後期堀之内

34号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第94図 PL.37	1	須恵器 坏	埋土 底部	口径　－ 底径　5.3 高さ　(2.1)	①粗砂粒・赤色粒中量 ②微化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。静止糸切り。体部はやや丸みをもつか。	
第94図 PL.37	2	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径　10.5 底径　5.8 高さ　3.5	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②微化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。静止糸切り。体部～口縁部は直線的で外傾して立ち上がる。	
第94図 PL.37	3	須恵器 坏	埋土 ほぼ完形	口径　10.6 底径　6.1 高さ　4.7	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②微化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。口縁部内外面に炭化物付着。	口唇部わずかに欠損。胎土に角閃石を含む。
第94図 PL.37	4	土師器 高台付椀	埋土・11号溝 埋土 一部欠	口径　13.3 底径　－ 高さ　(5.5)	①粗砂粒・赤・白色粒中量 ②微化焔 ③灰黄褐(10YR5/2)	轆轤成形。轆轤右回転。内面黒色処理。内面の荒剥きは摩滅のため単位不明瞭。体部はやや丸みをもち、口縁部わずかに外反。	
第94図 PL.37	5	土師器 甕	埋土 底部1/2	口径　－ 底径　(11.4) 高さ　(5.0)	①細・粗砂粒少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部外面篦削り。体部内外面横撫で。底部内面撫で。	
第94図 PL.37	6	灰釉陶器 長頸瓶	埋土・11号溝 埋土 口縁～底部 1/3	口径　－ 底径　(10.0) 高さ　(22.1)	①細砂粒・白色粒わずか ②還元焔 ③灰白(2.5Y8/1)	轆轤成形。轆轤右回転。最大径が胴部上位。口縁部が外反。胴下位篦削り。高台貼り付け。釉は内面胴部以外施釉。	口唇部欠損。灰釉は灰オリーブ(5Y6/2)。

41号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第95図 PL.37	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/4	口径 (12.6) 底径　－ 高さ　(2.9)	①細砂粒少量 ②普通 ③橙(5YR7/8)	底部丸底。口縁部は直立する。底部外面篦削り。口縁部外面底部内面横撫で。	

45号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第96図 PL.37	1	石製品 敲石	埋土 完形	長さ　20.4 幅　8.3 最大厚　6.2	ヒン岩	上下面使用。上面は擦られて平滑になっている。	

49号土坑

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第96図 PL.37	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ　3.6 幅 1.0×1.0 重さ　2.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。小型。断面形はほぼ円形。	
第96図 PL.37	2	土製品 土錘	埋土 下端部一部 欠損	長さ　(3.4) 幅 0.8×0.8 重さ　2.2g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/3)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。小型。断面形はほぼ円形。	
第96図 PL.37	3	土製品 土錘	埋土 下端部一部 欠損	長さ　(3.2) 幅 1.0×0.9 重さ　2.6g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい橙(5YR7/4)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。小型。断面形はほぼ円形。	

73号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第97図 PL.37	1	土師器 甕か	埋土 小破片	口径 － 底径 － 高さ －	①砂粒・白色粒含む ②普通 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	胴部小破片か。外面縦削り。内面横撫で。	内面に墨書「大」
第97図 PL.37	2	灰釉陶器 皿	埋土 口縁～底部 小破片	口径 (11.9) 底径 (6.2) 高さ 2.5	①細砂粒少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y7/1)	輪轆成形。輪轆回転方向不明。底部回転糸切り後高台貼り付け。体部は丸みをもつ。体部～口縁部内面のみ施釉。釉は薄い。	
第97図 PL.37	3	土師器 甕	埋土 口縁部1/4～胴部上位1/5	口径 (16.0) 底径 － 高さ (5.6)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③橙色(7.5YR7/6)	胴部やや膨らみ、口縁部外反する。胴部外面篦削り。口縁部外面指押さえ後横撫で。口縁部内面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第97図 PL.37	4	軟質陶器 鉢	埋土 口縁部～底部1/5	口径 (20.0) 底径 － 高さ (10.5)	①砂粒・白色粒少量 ②やや酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	底部は厚平な丸底。体部は直線的に立ち上がる。	
第97図 PL.37	5	縄文土器 深鉢	73号土坑 胴部片	残存高 (5.8) 厚さ 1.1	①細砂粒含む ②良好 ③淡黄(2.5Y8/4)	微隆起部が懸垂し、区画する。区画内を櫛歯状工具による条線を施文。	中期加曽利E

74号土坑

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第98図 PL.38	1	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 (19.0) 底径 － 高さ (3.1)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③橙(2.5YR6/8)	口縁部は外反する。口縁部内外面横撫で。	
第98図 PL.38	2	須恵器 長頸瓶か	埋土 小破片	口径 － 底径 － 高さ (12.4)	①砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	復元最大径35.2cmの大型品。	

1号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第100図 PL.38	1	かわらけ 皿	埋土 口縁1/3～底部2/3	口径 (9.5) 底径 (5.5) 高さ 2.7	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	輪轆成形。輪轆右回転。底部右回転糸切り。体部～口縁部はやや内湾して立ち上がる。	
第100図 PL.38	2	陶器 小皿	埋土 口縁1/3～底部完形	口径 (10.8) 底径 5.0 高さ 2.2	①砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2) 釉 オリーブ(5Y5/4)	輪轆成形。底面は静止糸。内面全面と口縁部外面に施釉。体部は直線的に広がり、口縁部でやや屈曲する。	
第100図 PL.38	3	土師器 甕	埋土 底部	口径 － 底径 5.0 高さ (4.4)	①砂粒・角閃石・石英少量 ②普通 ③明赤褐(2.5YR5/6)	底部篦撫で。胴下部外面木口状工具による撫で。胴部内面篦撫で。中央に径1.3cmほどの孔1点。	
第100図 PL.38	4	石製品 砥石	埋土 上下欠	長さ (6.0) 幅 2.8 重さ 49.8g	流紋岩	4面とも使用。全体に後世のガジリ痕がつく。	
第100図 PL.38	5	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (3.1) 厚さ 1.0	①砂粒やや多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部にそって1条の沈線が巡る。沈線はやや中広。沈線下はLR縄文を施文。	中期加曽利E
第100図 PL.38	6	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.0) 厚さ 0.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	沈線で区画。区画後LR縄文を充填。	後期堀之内

2号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第101図 PL.38	1	土製品 土錘	埋土 ほぼ完形	長さ 4.7 径 1.3×1.2 重さ 5.9g	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	中央部に最大径、両端部が細くなる。上端部一部欠損。器面は丁寧な整形。	
第101図 PL.38	2	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (4.9) 厚さ 1.5	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③淡黄(2.5Y8/3)	円形の窪みを起点に弧状に3条の沈線で文様を描く。	後期堀之内
第101図 PL.38	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (3.0) 厚さ 0.7	①砂粒含む ②良好 ③浅黄(2.5Y7/3)	波状口縁。口唇部内側に張り出す。LR縄文を施文。	中期加曽利E

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第101図 PL.38	4	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (3.9) 厚さ 1.5	①砂粒・白・赤色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	沈線で区画。	後期堀之内

3号溝

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第102図 PL.38	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 4.7 径 1.1×1.0 重さ 3.5g	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②微化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	中央部に最大径で、両端部が細くなる。両端部本口は長軸に対し斜めに成形されている。	

4号溝

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第103図 PL.38	1	土師器 坏	埋土 口縁部3/4	口径 12.0 底径 7.0 高さ 4.0	①細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/8)	体部はやや内湾し立ち上がる。器面は摩滅し調整は不明瞭。体部外面下位箆削り、中位指押さえ。	
第103図 PL.38	2	陶器 皿	埋土 口縁～底部 1/3	口径 (10.2) 底径 3.9 高さ 2.4	①細砂粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y5/1) 釉灰(5Y6/1)	轆轤成形。回転方向不明。体部外面下端～底部外面回転による箆削り。内面に厚く灰釉を施す。全体に細かい貫入。	
第103図 PL.38	3	土製品 紡錘車	埋土 1/2	直径 (7.4) 厚さ 1.6 重さ 60.0g	①細砂粒少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y8/2)	孔径1.3cm。上下面とも回転削り。	
第103図 PL.38	4	土製品 紡錘車	埋土 ほぼ完形	孔径 3.6 広径 4.9 厚さ 1.0	①細砂粒中量 ②還元焔 ③灰白(7.5Y8/1)	孔径0.8cm。重さ24.8g。	
第104図 PL.38	5	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 3.3 径 1.1×1.0 重さ 2.6g	①細砂粒・白色粒少量 ②微化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	両端部と中央部の径がほぼ同じである。器面の成形が雑で凹凸がみられる。	
第103図 PL.38	6	石製品 打製石斧	埋土 一部欠	長さ 8.3 幅 5.5 最大厚 1.2	砂岩	刃部は摩滅で丸くなっている。重さ72.5g。	
第104図 PL.38	7	石製品 砥石	埋土	長さ (10.5) 幅 2.3 重さ 96.9g	流紋岩	4面とも使用。擦痕が残る面もある。	
第104図 PL.38	8	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (5.6) 厚さ 0.8	①砂粒・白色粒多い ②やや軟 ③灰黄(2.5Y7/2)	表面摩滅。口縁に沿って横位微隆起帯。微隆起帯の下は縄文が施されているが不明。断面黄灰(2.5Y4/1)。	中期加曽利E
第104図 PL.38	9	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (5.4) 厚さ 0.9	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③オリーブ黒(5Y3/2)	波状口縁。口縁部内湾。隆帯で区画。区画は楕円。区画内にＬＲ縄文を施文。	中期加曽利E
第104図 PL.38	10	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (5.0) 厚さ 0.9	①砂粒・白・赤色粒やや多 ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	波状口縁。口縁に沿って横位沈線と連結して∩字状の区画。区画外にＲＬ縄文施文。口縁部内湾。断面黒(7.5YR1.7/1)。	中期加曽利E
第104図 PL.38	11	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高 (6.9) 厚さ 0.7	①砂粒・白・赤色粒多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部横位沈線に連結し、沈線で∩字状の区画。口縁部沈線下と∩字状の区画内はＲＬ縄文を施文。断面褐灰(10YR5/1)。	中期加曽利E 口縁部内湾
第104図 PL.38	12	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (8.9) 厚さ 1.0	①砂粒・白・赤色粒含む ②良好 ③黒褐(10YR3/1)	隆帯により区画。区画は∩字状文と想定される。区画内にＬＲ縄文を施文。	中期加曽利E

6号溝

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第106図 PL.38	1	須恵器 坏	埋土 口縁1/6～底部1/3	口径 (11.2) 底径 (5.0) 高さ 3.3	①細砂粒・白色粒少量 ②微化焔 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はやや内湾して立ち上がる。	
第106図 PL.38	2	かわらけ 皿	埋土 口縁1/8～底部1/2	口径 (9.0) 底径 (6.3) 高さ 2.0	①細砂粒・白色粒少量 ②微化焔 ③灰褐(5YR4/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第106図 PL.38	3	灰釉陶器 境	埋土 体部～高台 部破片	口径　－ 底径　(8.0) 高さ　(3.6)	①白色粒微量。脆密。 ②還元焔 ③灰白(2.5Y8/1)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り後、高台貼り付け。体部は丸みをもって立ち上がる。釉は薄い。	
第106図 PL.38	4	須恵器 高台付壺	埋土 口縁部1/8～ 底部	口径　(13.2) 底径　6.8 高さ　5.6	①細砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(5YR6/6)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け。高台貼り付け後回転撫で。体部～口縁部はやや内湾して立ち上がる。外面体部に篦削り。	
第106図 PL.38	5	石製品 凹み石	埋土 1/4欠	長さ　(6.5) 幅　7.5 最大厚　5.1	角閃石安山岩	表裏とも使用により大きく凹んでいる。重さ181.3g。	
第106図 PL.38	6	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高　(4.7) 厚さ　1.1	①砂粒・赤色粒含む ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	地文にＬＲ縄文施文後、口縁部にそって１条沈線が巡る。	中期加曽利Ｅ
第106図 PL.38	7	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高　(3.6) 厚さ　1.3	①砂粒・白・赤色粒多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	口唇部内側を欠損。微隆起帯で区画し、区画内にＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ

7号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第106図 PL.39	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/6	口径　(13.1) 底径　－ 高さ　(2.8)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	底部丸底。底部外面篦削り。体部～口縁部は内湾して立ち上がる。体部外面撫で。口縁部内外面横撫で。	
第106図 PL.39	2	埴輪	埋土 小破片	口径　－ 底径　－ 高さ　－	①砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	形象埴輪の一部か。両面とも刷毛目の後粗い撫で消し、外周と側部に撫で。	

9号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第108図	1	須恵器 坏	埋土 底部	口径　－ 底径　7.0 高さ　(1.7)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。回転糸切り。	

11号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第109図 PL.39	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/4	口径　(10.2) 底径　(6.5) 高さ　3.5	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	体部はほぼ直線的に外傾し立ち上がる。外面底部篦削り。中位指押さえ。口縁部内外面横撫で。	
第109図 PL.39	2	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径　(10.8) 底径　4.4 高さ　4.0	①細砂粒・角閃石少量 ②良好 ③橙(5YR7/6)	体部はやや内湾して立ち上がる。底部に離れ砂の痕跡。体部外面下位篦削り。中位指押さえ後撫で。口縁部内外面横撫で。	
第109図 PL.39	3	土師器 坏	埋土 ほぼ完形	口径　13.4 底径　6.4 高さ　4.0	①細砂粒・赤色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	体部～口縁部やや丸味を帯びて立ち上がる。外面底部～体部下位篦削り。体部上位指押さえ後撫で。外面口縁部～内面体部横撫で。	胎土に角閃石少量含む。口縁部わずかに欠損。
第109図 PL.39	4	土師器 坏	埋土 口縁部3/4	口径　13.6 底径　－ 高さ　5.4	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②良好 ③橙(5YR7/6)	体部はほぼ直線的に外傾し立ち上がる。底部～体部上位まで篦削り。外面体部中位指押さえ後篦削りか。内面は撫で。	
第109図 PL.39	5	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/4	口径　(10.8) 底径　(5.6) 高さ　4.0	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部丸味を帯びて立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第109図 PL.39	6	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部1/2	口径　11.5 底径　(5.6) 高さ　4.4	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第109図 PL.39	7	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/2	口径　12.3 底径　5.1 高さ　3.6	①細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(7.5Y5/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	
第109図 PL.39	8	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部1/5	口径　(13.8) 底径　(6.8) 高さ　6.2	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。	

図版番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第109図 PL.39	9	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部3/4	口径 (15.8) 底径 (6.8) 高さ 7.3	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。	胎土に石英を少量含む。
第109図 PL.39	10	須恵器 坏	埋土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 (12.9) 底径 (6.3) 高さ 5.4	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部は右回転糸切り。体部～口縁部はほぼ直線的で、外傾する。	胎土に石英を含む。
第111図 PL.39	11	須恵器 坏	埋土 完形	口径 11.5 底径 5.8 高さ 3.7	①細砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	
第111図 PL.39	12	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 11.9 底径 6.2 高さ 4.5	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部は丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	胎土に角閃石を中量含む。
第111図 PL.39	13	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (12.6) 底径 6.0 高さ 4.8	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はやや内湾し、口縁部はやや外反して立ち上がる。内面体部に炭化物付着。	
第111図 PL.39	14	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (12.3) 底径 5.6 高さ 4.3	①細砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はやや丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	
第111図 PL.39	15	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (12.0) 底径 5.1 高さ 4.0	①粗・細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(N5/)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。体部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。	
第111図 PL.39	16	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.2 高さ (2.0)	①赤・白色微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤左回転。回転糸切り。	
第111図 PL.39	17	須恵器 坏	埋土 底部～体部	口径 － 底径 5.7 高さ (2.2)	①細砂粒・白色細粒少量 ②還元焔 ③にぶい黄褐(10YR5/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り。	
第111図 PL.39	18	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.4 高さ (2.1)	①細・微砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(7.5Y4/1)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り。	
第111図 PL.39	19	須恵器 坏	埋土 ほぼ完形	口径 10.6 底径 5.6 高さ 4.2	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部わずかに丸味を帯びてたちあがる。	僅かに口縁部を欠損する。胎土に角閃石を中量含む。
第111図 PL.39	20	須恵器 坏	埋土 完形	口径 10.9 底径 5.7 高さ 4.1	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。静止糸切り。体部～口縁部丸味を帯びて立ち上がる。	胎土に角閃石を中量含む。
第111図 PL.39	21	須恵器 坏	埋土 口縁部7/8～ 底部	口径 10.5 底径 5.3 高さ 4.1	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。口縁部内面に炭化物付着。	胎土に角閃石中量含む。
第111図 PL.39	22	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 9.8 底径 5.6 高さ 4.0	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。	
第111図 PL.39	23	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4	口径 11.0 底径 5.8 高さ 3.9	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。	
第111図 PL.39	24	須恵器 坏	埋土 口縁部1/3～ 底部	口径 (10.6) 底径 4.8 高さ 4.1	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部は内湾して立ち上がる。	
第111図 PL.39	25	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 10.8 底径 5.5 高さ 4.3	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	胎土に角閃石を中量含む。
第112図 PL.39	26	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 11.1 底径 5.1 高さ 4.3	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部やや丸味を帯びて立ち上がる。口縁部が歪む。	胎土に角閃石中量含む。
第112図 PL.40	27	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 10.6 底径 4.7 高さ 3.7	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。静止糸切り。体部はやや丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	
第112図 PL.40	28	須恵器 坏	埋土 口縁部4/5～ 底部	口径 10.8 底径 5.4 高さ 3.8	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部外傾して立ち上がる。一部口縁部が歪む。	

掲図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第112図 PL.40	29	須恵器 坏	埋土 口縁部2/3～ 底部	口径 底径 高さ	11.4 5.8 3.9	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③浅黄橙(7.5YR8/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は直線的で外傾する。口縁部はやや湾む。	胎土に角閃石を中量含む。
第112図 PL.40	30	須恵器 坏	埋土 完形	口径 底径 高さ	10.6 5.6 3.9	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第112図 PL.40	31	須恵器 坏	埋土 口縁部1/3～ 底部	口径 底径 高さ	13.6 － 5.4	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部僅かに丸味を帯び、口縁部はやや内湾する。	胎土に角閃石を中量含む。
第112図 PL.40	32	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 底径 高さ	12.0 5.2 4.0	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	胎土に角閃石を中量含む。
第112図 PL.40	33	須恵器 坏	埋土 口縁部2/3～ 底部1/3	口径 底径 高さ	10.8 4.5 3.4	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は内湾して立ち上がる。	胎土に角閃石を中量含む。
第112図 PL.40	34	須恵器 坏	埋土 完形	口径 底径 高さ	10.8 5.0 3.6	①雲・細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部下位で丸味を帯び、体部中位～口縁部は外傾し、ほぼ直線的に立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第112図 PL.40	35	須恵器 坏	埋土 口縁部2/3～ 底部	口径 底径 高さ	11.1 5.0 3.7	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。	胎土に赤・白色粒中量含む。
第112図 PL.40	36	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 底径 高さ	(10.8) 5.6 3.7	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR6/8)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部下部でやや丸味を帯び、体部上位～口縁部はほぼ直線的で外傾する。	胎土に角閃石中量含む。
第112図 PL.40	37	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 底径 高さ	(10.7) 5.6 3.0	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は外傾し、ほぼ直線的に立ち上がる。	
第112図 PL.40	38	須恵器 坏	埋土 ほぼ完形	口径 底径 高さ	10.8 5.4 3.7	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部はほぼ直線的で外傾する。	僅かに口縁部を欠損する。
第112図 PL.40	39	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 底径 高さ	(12.2) 5.3 3.9	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②還元焔 ③褐灰(10YR4/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は外傾して、ほぼ直線的に立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第112図 PL.40	40	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 底径 高さ	11.9 6.0 4.0	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③浅黄橙(10YR8/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第113図 PL.40	41	須恵器 坏	埋土 口縁部1/8～ 底部	口径 底径 高さ	(11.4) 5.9 4.7	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部やや丸味を帯びて立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第113図 PL.40	42	須恵器 坏	埋土 口縁部1/8～ 底部1/2	口径 底径 高さ	(10.9) 5.0 3.3	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部～口縁部は直線的で外傾して立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第113図 PL.40	43	須恵器 坏	埋土 体部～底部	口径 底径 高さ	－ 5.6 (3.3)	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部下部膨所り。体部はやや内湾して立ち上がる。	
第113図 PL.40	44	須恵器 坏	埋土 体部下位～ 底部	口径 底径 高さ	－ 5.1 (2.6)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。 体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。 口縁部欠損。	胎土に角閃石中量含む。
第113図 PL.40	45	須恵器 坏	埋土 底部	口径 底径 高さ	－ 4.8 (2.3)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③灰(5Y4/1)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	46	須恵器 坏	埋土 底部	口径 底径 高さ	－ 6.2 (2.1)	①細・微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	47	須恵器 坏	埋土 底部	口径 底径 高さ	－ 5.7 (1.9)	①赤・白色微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り。	
第113図 PL.40	48	須恵器 坏	埋土 底部	口径 底径 高さ	－ 5.1 (1.5)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第113図 PL.40	49	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.9 高さ (1.3)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	50	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.3 高さ (2.0)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。回転方向不明。静止糸切り。体部～口縁部欠損。	
第113図 PL.40	51	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.2 高さ (1.4)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	52	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 4.8 高さ (1.6)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	53	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.6 高さ (1.4)	①細・微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	54	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.8 高さ (1.2)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	55	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.5 高さ (1.4)	①細微砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③浅黄(2.5Y8/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	56	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 4.8 高さ (1.4)	①赤・白色微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	57	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.0 高さ (1.1)	①細微砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄褐(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	58	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.0 高さ (1.9)	①赤・白色微砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り。	
第113図 PL.40	59	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.9 高さ (1.6)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③浅黄橙(10YR8/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	60	須恵器 坏	埋土 底部～体部	口径 － 底径 5.7 高さ (2.5)	①細砂粒・赤色細粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	61	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 (5.4) 高さ (1.5)	①細微砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(10YR7/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第113図 PL.40	62	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 5.3 高さ (2.0)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。回転糸切り。	
第114図 PL.40	63	須恵器 坏	埋土 底部2/3～ 体部	口径 － 底径 5.6 高さ (5.4)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第114図 PL.41	64	須恵器 坏	埋土 底部1/2	口径 － 底径 5.0 高さ (2.2)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③灰黄褐(10YR5/2)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第114図 PL.41	65	須恵器 坏	埋土 底部1/3	口径 － 底径 (5.6) 高さ (1.2)	①細微砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第114図 PL.41	66	須恵器 坏	埋土 底部1/3	口径 － 底径 (5.5) 高さ (1.3)	①細・微砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③浅黄橙(10YR8/3)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り。	
第114図 PL.41	67	須恵器 坏	埋土 ほぼ完形	口径 14.8 底径 6.4 高さ 5.8	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③浅黄橙(7.5YR8/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り。体部はやや丸味を帯び、口縁部はやや外反する。体部外面下位篦削り。	体部歪かに欠損。
第114図 PL.41	68	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 14.6 底径 6.0 高さ 6.2	①粗・細砂粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り後、篦削り。体部は丸味を帯び、口縁部は僅かに外反する。やや口縁部が歪む。	胎土に赤・白色粒中量含む。

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第114図 PL.41	69	須恵器 坏	埋土 口縁部2/3～ 底部	口径 15.2 底径 6.8 高さ 6.0	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、一方向篦削り。体部～口縁部はやや丸味を帯びて立ち上がる。体部下位篦削り。	
第114図 PL.41	70	須恵器 坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 15.9 底径 7.4 高さ 5.6	①粗・細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③浅黄橙(10YR8/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り後、一方向篦削り。体部は丸味を帯び、口縁部は外反する。体部外面下位篦削り。	胎土に赤・白色粒中量含む。
第114図 PL.41	71	須恵器 坏	埋土 口縁部2/3～ 底部	口径 14.9 底径 7.1 高さ 5.3	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り後、篦削り。体部は丸味を帯び、口縁部は僅かに外反する。	胎土に角閃石中量含む。
第114図 PL.41	72	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (14.7) 底径 6.0 高さ 5.9	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り後篦削り。体部外面下位篦削り。体部はやや丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	胎土に角閃石中量含む。
第114図 PL.41	73	須恵器 坏	埋土 底部1/2	口径 － 底径 (7.6) 高さ (2.3)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。静止糸切り後体部下部～底部篦削り。	
第114図 PL.41	74	須恵器 高台付坏	埋土 ほぼ完形	口径 10.9 底径 5.6 高さ 5.5	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部丸味を帯びる。内面黒色処理。	口縁部・体部一部欠損。内面黒(10YR2/1)
第114図 PL.41	75	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 11.6 底径 6.6 高さ 5.0	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③外面にぶい赤褐(2.5YR5/4)　内面黒褐(10YR3/1)	轆轤成形。轆轤右回転。高台貼り付け後回転撫で。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はやや外反する。内面口縁部～底部丁寧な篦磨き、黒色処理。	
第114図 PL.41	76	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 (13.6) 底径 － 高さ (5.3)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤左回転。底部切り離し後高台貼り付け。体部は丸味を帯び、口縁部は外反。内面に丁寧な篦磨き、黒色処理。	高台欠損。内面黒(10YR2/1)
第114図 PL.41	77	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/2	口径 (13.8) 底径 (6.6) 高さ 6.1	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤左回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部は丸味を帯び、口縁部は外反する。口縁部内面～底部内面丁寧な篦磨き。黒色処理。	胎土に石英を少量含む。内面は黒(7.5YR2/1)
第114図 PL.41	78	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部2/3～ 底部3/4	口径 14.8 底径 8.5 高さ 7.7	①粗・細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。口縁部内面～底部内面丁寧な篦磨き。黒色処理。	内面は黒(7.5YR2/1)
第115図 PL.41	79	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径 11.1 底径 5.2 高さ 4.8	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部はやや丸味を帯び立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第115図 PL.41	80	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (12.2) 底径 6.0 高さ 5.0	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③浅黄橙(7.5YR8/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り後、高台貼り付け、回転撫で。体部はやや丸味を帯び、口縁部はわずかに外反する。	胎土に角閃石少量含む。
第115図 PL.41	81	須恵器 高台付坏	埋土 ほぼ完形	口径 13.0 底径 － 高さ (5.1)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	口縁部・高台部に欠損。胎土に角閃石中量。
第115図 PL.41	82	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 13.9 底径 5.7 高さ 5.8	①粗・細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部は僅かに丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	胎土に角閃石を少量含む。
第115図 PL.41	83	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (16.4) 底径 6.7 高さ 6.6	①細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰黄褐(10YR6/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り後、高台貼り付け、回転撫で。体部は丸味を帯び、口縁部は外反する。	
第115図 PL.41	84	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/2	口径 (15.8) 底径 (6.8) 高さ 7.3	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(7.5Y8/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部はやや丸味を帯び、口縁部は外反する。	
第115図 PL.41	85	須恵器 高台付坏	埋土 口縁２/３～ 底部	口径 11.0 底径 5.5 高さ 4.6	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第115図 PL.41	86	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部2/3～ 底部	口径 11.5 底径 5.7 高さ 5.6	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部は丸味を帯び、口縁部は僅かに外反する。	胎土に角閃石を中量含む。
第115図 PL.41	87	須恵器 高台付坏	埋土 口縁部1/3～ 底部	口径 (12.2) 底径 6.2 高さ 5.6	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部静止糸切り後高台貼り付け。高台貼り付け時撫で。体部は内將、口縁部やや外反する。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第115図 PL.42	88	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/5欠 揖	口径 底径 高さ	12.9 6.8 6.2	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。高台貼り付け後撫で。体部～口縁部やや内湾して立ち上がる。口縁部歪み。	
第115図 PL.42	89	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/2～ 底部1/2	口径 底径 高さ	(11.0) (5.0) 6.3	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部は直線的で外傾して立ち上がる。	胎土に石英を中量含む。
第115図 PL.42	90	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 底径 高さ	(12.4) 6.8 6.5	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。高台貼り付け後撫で。体部～口縁部内湾して立ち上がる。	
第115図 PL.42	91	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 底径 高さ	13.7 7.0 6.3	①細砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR5/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部は丸味を帯び、口縁部はやや外反する。	胎土に石英・角閃石中量含む。
第115図 PL.42	92	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 底径 高さ	(14.0) (6.3) 6.5	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後、高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部は僅かに丸味を帯び立ち上がる。	高台部大半を欠損。
第115図 PL.42	93	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 底径 高さ	(13.3) (7.0) 6.7	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③浅黄橙(10YR8/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部はほぼ直線的で、外傾して立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第115図 PL.42	94	須恵器 高台付埦	埋土 ほぼ完形	口径 底径 高さ	14.1 7.2 5.9	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR 7/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部～口縁部はほぼ直線的で外傾して立ち上がる。	僅かに口縁部を欠損。
第115図 PL.42	95	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部1/8～ 底部1/2	口径 底径 高さ	(15.2) 7.4 6.2	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR6/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。体部～口縁部は直線的で外傾して立ち上がる。	胎土に角閃石中量含む。
第115図 PL.42	96	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部2/3～ 底部1/3	口径 底径 高さ	13.9 (10.2) 7.8	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	轆轤成形。轆轤右回転。高台作成後端部を乗せて作成。高台が大きい。体部はやや丸味を帯び、口縁部やや外反する。	
第115図 PL.42	97	須恵器 高台付埦	埋土 口縁部3/4～ 底部	口径 底径 高さ	11.6 － (3.9)	①粗・細砂粒・石英中量 ②酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。底部切り離し後高台貼り付け。体部～口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	高台欠損
第115図 PL.42	98	須恵器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部3/4	口径 底径 高さ	(14.2) 7.8 3.5	①細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰白(7.5Y7/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部は右回転糸切り後、周辺部右回転篦削り。体部下位で屈曲し、口縁部まで直線的で、外傾する。	
第115図 PL.42	99	須恵器 坏	埋土 底部	口径 底径 高さ	－ 8.5 (1.2)	①細砂粒少量 ②還元焔 ③褐灰(7.5YR5/1)	轆轤成形。回転糸切り後外周篦調整。	
第116図 PL.42	100	灰釉陶器 埦	埋土 口縁部1/4～ 底部1/2	口径 底径 高さ	(12.6) (6.4) 3.9	①細砂粒微量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/1)	轆轤成形。轆轤回転力向不明。回転糸切り後高台貼り付け。施釉は口縁部付近のみで、漬け掛け。	釉はオリーブ灰(10Y5/2)
第116図 PL.42	101	灰釉陶器 埦	埋土 底部3/4	口径 底径 高さ	－ 6.8 (1.9)	①細砂粒わずか ②還元焔 ③灰白(5YR8/1)	轆轤成形。轆轤回転力向不明。底部切り離し後高台貼り付け。	
第116図 PL.42	102	灰釉陶器 皿	埋土 口縁部1/8～ 底部1/4	口径 底径 高さ	(13.4) (7.6) 3.1	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y6/1)	轆轤成形。轆轤回転力向不明。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部はやや丸味を帯び、口縁部は僅かに外反する。	釉はオリーブ(5Y6/2)。体部内外面施釉。
第116図 PL.42	103	灰釉陶器 皿	埋土 体部1/6～ 底部1/4	口径 底径 高さ	－ (6.0) (1.9)	①微砂粒・白色粒わずか ②還元焔 ③灰白(10YR8/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。体部から口縁部の境界で屈曲する。縁折皿。内面に施釉。	灰オリーブ(5Y6/2)の釉
第116図 PL.42	104	土師器 小型甕	埋土 口縁部1/4～ 胴上位1/5	口径 底径 高さ	(11.0) － (4.4)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい赤褐(5YR5/4)	胴部はやや膨らみ、口縁部は外傾して立ち上がる。胴部外面横方向の篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	
第116図 PL.42	105	土師器 甕	埋土 口縁部1/4～ 胴上位1/5	口径 底径 高さ	(19.0) － (5.4)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③暗褐(10YR3/4)	胴部外周篦削り。頸部は「コ」の字状。接合痕がみられる。口縁部は外反する。内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	
第116図 PL.42	106	土師器 甕	埋土 口縁部1/4～ 胴部上位1/4	口径 底径 高さ	(20.0) － (5.6)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③灰褐(7.5YR5/2)	胴部は膨らみ、口縁部はやや外反して立ち上がる。胴部外面横方向の篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第116図 PL.42	107	土師器 甕	埋土 口縁部1/3～ 胴部上位1/3	口径　(21.6) 底径　－ 高さ　(11.1)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	胴部はやや膨らみ、口縁部は外傾する。口唇部は内湾する。胴部外面横方向と斜め方向篦削り。口縁部内外面横撫で。胴内面横方向の篦撫で。口唇部面取り。	
第116図 PL.42	108	土師器 甕	埋土 口縁部3/4	口径　(24.0) 底径　－ 高さ　(6.4)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③浅黄橙(10YR8/4)	胴部は膨らみ、口縁部は外屈して立ち上がる。胴部外面縦方向の篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横方向の篦撫で。	
第116図 PL.42	109	土師器 台付甕	埋土 台部1/3	底径　－ 底径　(9.0) 高さ　(2.6)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい赤褐(2.5YR5/4)	台部内外面横撫で。	
第116図 PL.42	110	土師器 台付甕	埋土 台部1/3	底径　－ 底径　(8.4) 高さ　(3.0)	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	台部内外面横撫で。	
第116図 PL.42	111	須恵器 小型壺	埋土 口縁部1/2～ 底部	口径　5.9 底径　3.4 高さ　4.1	①細砂粒・角閃石中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	轆轤成形。轆轤左回転。底部左回転糸切り。体部は膨らみ、頸部で屈曲し、口縁部は外傾する。	
第116図 PL.43	112	須恵器 甕	埋土・表土 胴部中位1/6 ～底部僅か	口径　－ 底径　(18.6) 高さ　(33.3)	①粗・細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	轆轤成形。轆轤右回転。胴部やや膨らむ。胴部外面下位篦削り。胴部内面中位縦・横方向篦撫で。胴部内面下位回転撫で。	
第116図 PL.43	113	灰釉陶器 長頸瓶	埋土 胴部下位～ 底部	口径　－ 底径　8.7 高さ　(10.2)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y7/1)	轆轤成形。轆轤左回転。底部回転糸切り後、高台貼り付け回転撫で。胴部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	釉は灰オリーブ(5Y6/2)。
第117図 PL.43	114	須恵器 羽釜	埋土 口縁付近小 破片	口径　(21.6) 底径　－ 高さ　(9.4)	①粗砂・小礫・赤色粒少量 ②酸化焔 ③明赤褐(2.5YR5/6)	胴部は口縁に向けて緩やかに内傾する。鍔は貼り付け。	
第117図 PL.43	115	土製品 土錘	埋土 下端一部欠	長さ　(3.9) 径1.1×(1.0) 重さ　3.7g	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	下端部を一部欠損。中央部が最大径で両端部が細い。	
第117図 PL.43	116	土製品 土錘	埋土 完形	長さ　3.5 径 1.0×0.9 重さ　2.8g	①細砂粒少量 ②酸化焔 ③褐灰(10YR4/1)	中央部が最大径で両端部が細くなる。孔は直線的である。	
第117図 PL.43	117	土製品 土錘	埋土 1/2	長さ　4.2 径1.3×(0.7) 重さ　3.9g	①細・微砂粒少量 ②酸化焔 ③橙(7.5YR6/8)	中央部が最大径で両端部が細くなる。裏面を欠損。孔は直線的である。	
第117図 PL.43	118	土製品 土錘	埋土 下端一部欠	長さ　(3.9) 径1.1×(1.0) 重さ　11.6g	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	中央部と下端部を一部欠損。中央部が最大径で両端部が細い。	
第117図 PL.43	119	石製品 紡錘車	埋土 一部欠	狭径　(2.5) 広径　4.1 厚さ　2.1	滑石	孔径9.8㎜。重さ44.9g。	
第117図 PL.43	120	石製品 磨石	埋土 1/2	長さ　(6.8) 幅　9.4 最大厚　1.9	安山岩	表裏面とも使用。使用度合いは低い。	
第117図 PL.43	121	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高　(3.8) 厚さ　0.9	①砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	口縁部横位微隆起帯。微隆起帯下はＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第117図 PL.43	122	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部片	残存高　(9.6) 厚さ　1.2	①砂粒・白色粒多い ②やや軟 ③灰黄(2.5Y7/2)	口縁部隆帯を欠損。隆帯で楕円形の区画。区画内ＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ

13号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②成形③色調	器形・技法等の特徴	備考
第118図 PL.43	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/8～ 底部1/2	口径 (8.7) 底径 5.1 高さ 3.7	①角閃石・石英・砂粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	体部は内湾し立ち上がる。内外面とも摩滅。不明瞭だが外面底部～体部下半篦削り。口縁部内外面横撫で。	
第118図 PL.43	2	土師器 坏	埋土 口縁1/4～ 底部	口径 (13.5) 底径 6.3 高さ 4.1	①細砂粒・角閃石中量 ②普通 ③橙(5YR6/8)	体部は内湾し立ち上がる。外面底部～体部下半篦削り。口縁部内外面横撫で。	
第118図 PL.43	3	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部1/3	口径 (13.4) 底径 (6.5) 高さ 4.3	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい褐(10YR5/4)	体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部～体部下位篦削り。体部中位指押さえ後撫で。口縁部内外面横撫で。	
第118図 PL.43	4	土師器 坏	埋土 体部下位～ 底部	口径 － 底径 6.0 高さ (2.1)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③橙(5YR6/8)	体部はやや内湾して立ち上がる。外面底部～体部篦削り。内面体部～底部指撫で。	
第118図 PL.43	5	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部完形	口径 (12.4) 底径 4.9 高さ 4.2	①砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁は外反する。全体に鉄分を含んだ土が付着。	
第118図 PL.43	6	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 4.2 高さ (2.8)	①細砂粒・白色粒 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。	
第118図 PL.43	7	須恵器 坏	埋土 口縁～体部	口径 12.8 底径 － 高さ (3.7)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。回転方向不明。体部はやや丸味を帯びて立ち上がる。	
第118図 PL.43	8	須恵器 高台付埦	埋土 ほぼ完形 高台欠	口径 (12.5) 底径 － 高さ (5.6)	①砂粒・赤・白色粒少量 ②やや酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け。歪みがひどく、被た作り。内面に鉄分を含んだ泥が付着。	
第119図 PL.43	9	須恵器 高台付埦	埋土 底部のみ 高台欠損	口径 － 底径 － 高さ (2.8)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/2)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。底部切り離し後、高台貼り付け。切り離しは不明。	
第119図 PL.43	10	灰釉陶器 埦	埋土 口縁部1/4～ 底部1/3	口径 (17.2) 底径 7.4 高さ 5.7	①粗・細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離しは不明。切り離し後高台貼り付け後撫で。体部はやや内湾し、口縁部は外反する。	釉は灰オリーブ(5Y6/3)見込み部に刷毛塗りの痕跡
第119図 PL.43	11	須恵器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 6.5 高さ (2.1)	①細砂・粗砂粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。外面は篦削り。切り離し後高台貼り付け。貼り付け時回転撫で。高台内面の撫では粗い。	
第119図 PL.43	12	須恵器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 7.0 高さ (3.7)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。高台貼り付け後撫で、切り離しは不明。	
第119図 PL.44	13	須恵器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 6.1 高さ (2.5)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(7.5Y6/1)	轆轤成形。回転方向不明。回転糸切り後高台貼り付け。貼り付け時撫で。	
第119図 PL.44	14	須恵器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 5.7 高さ (2.2)	①粗い砂粒 ②還元焔 ③灰黄褐(10YR5/2)	轆轤成形。轆轤右回転。回転糸切り後高台貼り付け。貼り付け時撫で。	
第119図 PL.44	15	須恵器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 5.8 高さ (2.3)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③褐灰(7.5YR6/1)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。高台貼り付け後撫で、切り離しは不明。	
第119図 PL.44	16	灰釉陶器 高台付埦	埋土 底部	口径 － 底径 6.7 高さ (1.5)	①細砂粒わずか ②還元焔 ③灰白(7.5Y8/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離しは不明。高台貼り付け後撫で。	
第119図 PL.44	17	須恵器 皿	埋土 口縁1/3～ 底部1/3	口径 (12.6) 底径 (6.0) 高さ 2.1	①粗・細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(7.5Y6/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部は水平近くまで外反する。	
第119図 PL.44	18	土師器 小型甕	埋土 口縁部1/5～ 胴部上位1/5	口径 (12.0) 底径 － 高さ (6.6)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	胴部はやや膨らみ、頸部で屈曲し、口縁部は外傾する。胴部外面横方向の篦削り。口縁部外面横撫で。内面の調整は不明瞭。	
第119図 PL.44	19	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 5.6 径 1.2×1.1 重さ 8.1g	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	両端部がわずかに細くなる。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第119図 PL.44	20	石器 磨製石斧	埋土 刃部のみ	長さ (3.2) 幅 4.6 最大厚 1.5	蛇紋岩	丁寧な作り。刃部には細かい刃こぼれがある。重さ33.8g。	
第119図 PL.44	21	石製品 凹み石	埋土 1/2	長さ (8.9) 幅 9.9 最大厚 2.8	安山岩	表面が使用により凹む。細かい凹みが多数ある。重さ261.3g。	
第119図 PL.44	22	石製品 磨石	埋土 完形	長さ 9.9 幅 7.8 最大厚 3.0	多孔質安山岩	表裏とも使用か。使用頻度は低い。重さ276.0g。	
第119図 PL.44	23	縄文土器 深鉢	埋土 胴部片	残存高 (4.5) 厚さ 0.7	①砂粒多い ②良好 ③明褐(7.5YR5/6)	表面摩滅。LR縄文施文か。	中期か

14号溝

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第120図 PL.44	1	須恵器 高台付壺	埋土 体部1/3～ 底部1/3	口径 — 底径 (6.6) 高さ (3.2)	①細砂粒・赤色粒少量 ②酸化焔 ③明褐(7.5YR5/6)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。底部切り離し後高台貼り付け、回転撫で。体部はやや丸味を帯びる。内面黒色処理。篦磨き。	
第120図 PL.44	2	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 3.4 径 0.9×0.9 重さ 2.6g	①細砂粒少量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(7.5YR6/3)	手捏ね。中央部が最大径で、両端が細くなる。	

1号井戸

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第123図 PL.44	1	かわらけ 皿	埋土 口縁部1/4～ 底部	口径 (7.5) 底径 (4.8) 高さ 2.1	①細砂粒・赤色粒わずか ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部～口縁部はほぼ直線的で外傾して立ち上がる。	胎土に雲母をわずかに含む。
第123図 PL.44	2	須恵器 鉢	埋土 底部	口径 — 底径 9.8 高さ (3.7)	①砂粒・小礫・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(N4/0)	轆轤成形。底部回転糸切り。篦書き「×」。	
第123図 PL.44	3	中世土器 内耳鍋	埋土 口縁部1/6～ 胴部1/6	口径 (32.0) 底径 — 高さ (15.6)	①粗・細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③褐灰(10YR4/1)	底部丸底か。底部大半を欠損。体部はやや外傾し直線的。外面篦削り。内面横方向篦撫で。口縁部は内湾気味。内外面横撫で。	胎土に赤色粒を中量含む。14C後半～15C前半。

2号井戸

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第125図 PL.44	1	須恵器 鉢	埋土 底部1/3のみ	口径 — 底径 (12.0) 高さ (4.3)	①砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(10YR6/1)	轆轤成形。轆轤回転方向不明。底部回転糸切り。	コネ鉢か。内面の器表が平滑。
第125図 PL.44	2	土製品 土錘	埋土 1/2残存	長さ (3.1) 径 1.4×1.3 重さ 4.9g	①細砂粒・白色粒やや多い ②良好 ③灰黄褐(10YR5/2)	手捏ね。形状は棒状で、端部がやや細い。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	

3号井戸

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第126図 PL.44	1	土師器 坏	埋土 口縁1/4～ 底部1/4	口径 (15.0) 底径 — 高さ (2.7)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③明赤褐(5YR6/8)	底部丸底。口縁部はほぼ直立し、口唇部はわずかに外反。底部外面篦削り。体部外面撫で。口縁部外面～体部内面横撫で。	底部内面撫で。
第126図 PL.44	2	灰釉陶器 壺	埋土 体部下位1/4～底部1/3	口径 — 底径 (7.0) 高さ (2.2)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y7/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け、撫で。体部内外面施釉。	釉は灰オリーブ(5Y6/2)。
第126図 PL.44	3	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 5.0 径 0.9×0.9 重さ 4.5g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	手捏ね。形状は棒状。両本口簪状の工具で切断。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	

4号井戸

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第126図 PL.44	1	須恵器 高台付壺	覆土 体部～底部	口径 — 底径 5.8 高さ (3.2)	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	轆轤成形。轆轤右回転。体部はやや丸味を帯びて立ち上がる。底部右回転糸切り後、高台貼り付け、撫で。	胎土に雲母を少量含む。口縁部欠損。

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第126図 PL.44	2	丸瓦	埋土 玉縁部破片	長さ (15.5) 幅 (10.0) 厚さ 2.2	①粗砂粒・小礫少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y8/2)	凹面糸切り痕・布目痕、外周面取り1回。凸面玉縁部を含めて縦削り。玉縁部の段は貼り付けで成形。	
第126図 PL.44	3	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部	残存高 (6.0) 厚さ 1.5	①砂粒・赤色粒やや多い ②良好 ③浅黄橙(10YR8/3)	表面摩滅。隆帯で楕円区画。区画内をRL縄文を施文。	中期加曽利E

6号井戸

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第127図 PL.44	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 4.3 径 1.2×1.1 重さ 4.7g	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②良好 ③橙(5YR6/8)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。	

7号井戸

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第127図 PL.45	1	須恵器 坏	埋土 口縁部1/2欠	口径 (10.7) 底径 5.2 高さ 3.7	①粗砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	輪轆成形。輪轆右回転。底部静止糸切り。口縁～体部は直線的に立ち上がる。口縁の一部が歪む。	口縁に油煙付着。
第127図 PL.45	2	須恵器 坏	埋土 底部～体部	口径 － 底径 5.6 高さ (2.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②酸化焔 ③明黄褐(10YR6/6)	輪轆成形。輪轆右回転。静止糸切り。体部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第127図 PL.45	3	かわらけ 皿	埋土 体部3/4～ 底部	口径 － 底径 5.4 高さ (2.1)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③橙(5YR7/6)	輪轆成形。輪轆右回転。底部右回転糸切り。体部は丸味を帯びて立ち上がる。	
第127図 PL.45	4	須恵器 高台付椀	埋土 口縁部1/4～ 体部1/4	口径 (12.8) 底径 － 高さ (4.0)	①細砂粒・赤色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	輪轆成形。輪轆右回転。体部～口縁部は強かに丸味を帯びて立ち上がる。	貼土に角閃石・石英を中量含む。底部・高台欠損。
第127図 PL.45	5	須恵器 高台付椀	埋土 底部	口径 － 底径 6.6 高さ (3.5)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	輪轆成形。輪轆右回転。底部切り離し後高台貼り付け。貼り付け時の撫でで、切り離し技法は不明。高台部一部欠損の底部破片。わずかに体部が残る。	
第128図 PL.45	6	灰釉陶器 皿	埋土 底部	口径 － 底径 (6.3) 高さ (1.7)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰白(7.5Y7/1)	輪轆成形。切り離し後高台貼り付け。底部外面を除いた全面に施釉。	灰釉はオリーブ灰(7.5Y6/2)
第128図 PL.45	7	土師器 甕	埋土 口縁1/3	口径 (12.0) 底径 － 高さ (6.4)	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	コの字口縁。胴部外面荒削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面横撫で。	
第128図 PL.45	8	須恵器 高坏	埋土 脚部2/3	口径 － 底径 (10.6) 高さ (5.9)	①細砂粒・白色粒少量 ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	輪轆成形。坏部と脚部は貼り付け。	

9号井戸

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第128図 PL.45	1	須恵器 蓋	埋土 1/4	口径 (17.5) 底径 － 高さ 3.5	①細砂粒・黒色粒少量 ②還元焔 ③灰白(2.5Y7/1)	輪轆成形。外面中央右回転篦削り。薄い円盤状のつまみを貼り付けて周囲を回転撫で。カエリはつまんで作り出す。	

10号井戸

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第128図 PL.45	1	須恵器 坏	埋土 体部1/4欠	口径 10.4 底径 4.7 高さ 3.7	①粗砂粒・赤・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	輪轆成形。輪轆右回転。底部静止糸切り。体部～口縁部は直線的に立ち上がり、口縁は外反しない。	
第128図 PL.45	2	須恵器 高台付椀	埋土 口縁部1/5～ 底部	口径 (14.6) 底径 8.4 高さ 5.8	①細砂粒・白色粒中量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	輪轆成形。輪轆右回転。体部～口縁部は丸味を帯びて立ち上がる。底部切り離し後高台貼り付け後撫で。	貼土に雲母を中量含む。
第128図 PL.45	3	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 3.7 径 1.0×0.9 重さ 2.5g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③灰黄褐(10YR4/2)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。	

13号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土師器 台付甕	埋土 台部3/4	口径 － 底径 8.5 高さ (4.8)	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③灰黄褐(10YR5/2)	台部は低く、大きく広がる。台部内外面横撫で。甕部外面篦削り。内面篦撫で。	
第129図 PL.45	2	土師器 鉢	埋土 口縁部1/2～ 体部1/4	口径 19.5 底径 － 高さ (7.6)	①砂粒・白色粒少量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	底部丸底。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は外反する。底部外面篦削り。口縁部外面～内面横撫で。内面には粗い放射状の篦磨き。	内面黒色処理。

78号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 4.1 径 1.3×1.2 重さ 5.9g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(7.5YR6/4)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形である。両木口は篦状の工具で切断。	

88号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	灰釉陶器 皿	埋土 1/4	口径 (14.7) 底径 (7.0) 高さ 3.1	①黒色粒微量 ②還元焔 ③灰白(10Y8/1)	輪轆成形。輪轆回転方向不明。切り離し後高台貼り付け。内面に重ね焼きの痕跡。釉は刷毛塗りで薄い。	

95号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土師器 鉢	埋土・表土 口縁部1/5	口径 (28.0) 底径 － 高さ (8.6)	①細・粗砂粒中量 ②普通 ③橙(2.5Y6/6)	体部外面斜め篦削り。口縁外面～内面横撫で。体部はゆるく屈曲しながら立ち上がり、口縁は外反しない。	

103号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土師器 甕	埋土 口縁部1/4	口径 (22.0) 底径 － 高さ (6.0)	①細・粗砂粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR6/6)	胴部はやや内傾し、頸部で屈曲。口縁はわずかに外反する。胴部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	

104号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	須恵器 坏	埋土 底部	口径 － 底径 7.5 高さ (3.1)	①粗砂粒・赤色粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/1)	輪轆成形。輪轆右回転。底部全面右回転篦削り。	

106号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土師器 坏	104ピットと 接合 口縁部～体 部2/3	口径 14.0 底径 － 高さ (3.6)	①粗砂粒・白色粒中量 ②普通 ③橙(7.5Y6/6)	底部丸底。体部～底部外面篦削り。口唇部～内面横撫で。	

114号ピット

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第129図 PL.45	1	土製品 土錘	埋土 完形	長さ 5.0 径 1.5×1.5 重さ 9.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③橙(5YR6/6)	中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形。	

126号ピット

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第130図 PL.46	1	土師器 鉢	埋土 口縁1/4～ 体部1/4	口径 (22.0) 底径 － 高さ 10.5	①細・粗砂粒中量 ②普通 ③橙(2.5YR6/8)	底部丸底。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。底部～体部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。底部～体部内面丁寧な篦撫で。	

143号ピット

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第130図 PL.46	1	土師器 坏	埋土 口縁1/6～ 底部2/3	口径 (12.1) 底径 (6.8) 高さ 4.3	①粗砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③明赤褐(5YR5/6)	底部篦削り。体部外面撫での後下半のみ篦削り。口縁部内外面横撫で。体部はやや屈曲しながら立ち上がり、口縁は外反する。	

174号ピット

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第130図 PL.46	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/2欠	口径 12.4 底径 － 高さ 4.8	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	底部丸底。口縁部は外面中央に段がある。底部外面篦削り。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。	

遺構外(表土)

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第134図 PL.46	1	土師器 坏	F区表土 口縁～体部 1/3	口径 (12.2) 底径 (6.8) 高さ (3.3)	①砂粒・赤色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反しない。体部外面下半～底部外面篦削り。口縁部外面一内面横撫で。	
第134図 PL.46	2	土師器 坏	D区撹乱 口縁部1/3～ 底部2/3	口径 (12.0) 底径 6.0 高さ 3.5	①粗砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③橙(7.5YR7/6)	全体的に歪みがある。体部下半～底部外面篦削り。口縁部外面～体部内面横撫で。底部内面撫で。体部外面に指頭痕。	
第134図 PL.46	3	土師器 坏	A区表土 口縁部1/2～ 底部	口径 12.4 底径 7.9 高さ 3.2	①細砂粒・白色粒少量 ②普通 ③にぶい褐(10YR5/4)	体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部はやや丸底。外面体部下半指押さえ後撫で。口縁部内外面横撫で。	
第134図 PL.46	4	土師器 坏	D区表土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 (14.8) 底径 (6.6) 高さ 3.7	①細砂粒・角閃石少量 ②普通 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	体部はやや内湾し立ち上がる。外面底部～体部下位篦削り。中位指押さえ後撫で。口縁部内外面横撫で。	
第134図 PL.46	5	土師器 高台付埦	F区表土 高台欠	口径 13.5 底径 － 高さ (5.2)	①砂粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反しない。体部外面篦削り、その後高台貼り付け。口縁部外面～内面横撫で。	
第134図 PL.46	6	須恵器 坏	C区表土 底部のみ	口径 － 底径 5.0 高さ (1.4)	①粗砂粒・赤・白色粒少量 ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	轆轤成形。底部静止糸切り。	
第134図 PL.46	7	須恵器 坏	F区表土 完形	口径 13.0 底径 6.3 高さ 4.2	①細砂粒少量 ②還元焔 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	轆轤成形。轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はほぼ直線的で口縁はわずかに外反する。全体に歪んでいる。	
第134図 PL.46	8	須恵器 坏	A区表土 口縁部1/2～ 底部3/5	口径 13.6 底径 6.2 高さ 4.2	①礫・細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰黄(2.5Y6/2)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り。体部はやや丸味を帯び、口縁部は外反気味。	
第134図 PL.46	9	須恵器 高台付埦	F区表土 口縁1/2～ 底部完形	口径 13.6 底径 5.6 高さ 5.6	①細砂粒少量 ②やや酸化焔 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	轆轤成形。回転方向不明。底部回転糸切り後高台貼り付け。体部はわずかに丸みをもち、口縁はわずかに外反する。	
第134図 PL.46	10	須恵器 高台付皿	A区表土 口縁部3/4～ 底部	口径 13.4 底径 － 高さ (2.3)	①粗・細砂粒・白色粒中量 ②還元焔 ③灰(7.5Y5/1)	轆轤成形。轆轤右回転。底部右回転糸切り後高台貼り付け。体部は丸味を帯び、口縁部は外反する。	高台欠損。
第134図 PL.46	11	須恵器 蓋	A区表土 摘み～体部 1/4	口径 － 摘み径 (5.0) 高さ (3.0)	①細・粗砂粒少量 ②還元焔 ③灰白(5Y7/2)	轆轤成形。回転方向不明。つまみ貼り付け時回転撫で。	
第134図 PL.46	12	土製品 土錘	D区表土 上端部一部 欠損	長さ 3.1 径 0.8×0.8 重さ 2.1g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③灰黄褐(10YR5/2)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。小型。	
第134図 PL.46	13	土製品 土錘	A区表土 上端部一部 欠損	長さ 4.1 径 1.2×1.2 重さ 4.9g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第134図 PL.46	14	土製品 土鈴	A区表土 完形	長さ　4.3 径 0.9×1.0 重さ　3.9g	①細砂粒少量 ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	
第135図 PL.46	15	土製品 土鈴	A区表土 上端部一部欠損	長さ　4.3 径 1.3×1.3 重さ　6.7g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	
第135図 PL.46	16	土製品 土鈴	A区表土 下端部一部欠損	長さ　4.2 径 1.1×1.1 重さ　5.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面はやや粗い整形で凹凸がみられる。	
第135図 PL.46	17	土製品 土鈴	C区表土 上端部一部欠損	長さ　4.7 径 1.2×1.2 重さ　5.4g	①細砂粒・白色粒少量 ②良好 ③灰黄褐(10YR6/2)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。	
第135図 PL.46	18	土製品 土鈴	A区表土 下端部一部欠損	長さ　5.1 径 1.6×1.5 重さ　10.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。両木口を篦状工具で切断する。	
第135図 PL.46	19	土製品 土鈴	A区表土 完形	長さ　5.1 径 1.2×1.2 重さ　7.4g	①細砂粒少量 ②良好 ③橙(10YR6/6)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。両木口を篦状工具で切断する。	
第135図 PL.46	20	石製品 石棒	C区表土 上下欠	長さ　(18.1) 径 4.0×4.5	点紋緑泥片岩	中央部がやや膨らむ。重さ546.7g。	
第135図	21	石製品 磨石	C区東部表土 完形	長さ　15.5 幅　7.3 厚さ　3.8	安山岩	表裏とも磨られているが、使用頻度は低い。	
第135図	22	埴輪	C区表土 小破片	口径　－ 底径　－ 高さ　(8.9)	①細砂粒・赤・白色粒中量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	埴輪の底部破片か。厚い。外面粗いタテハケ、表面摩滅。内面横撫で。	
第135図 PL.46	23	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (3.7) 厚さ　0.9	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	波状口縁。沈線により区画。区画内の施文は不明。断面黒褐(10YR3/1)。	後期称名寺
第135図 PL.46	24	縄文土器 深鉢	C区表土 口縁部片	残存高 (5.8) 厚さ　1.1	①砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	波状口縁。口縁部にそって１条の沈線が巡る。沈線下位ＲＬ縄文施文。	中期加曽利Ｅ
第135図 PL.46	25	縄文土器 深鉢	C区東部表土 口縁部片	残存高 (6.3) 厚さ　0.7	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	波状口縁。２条の微隆起帯で凸字状あるいは渦巻き文を区画。区画内をＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第135図 PL.46	26	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (3.8) 厚さ　1.4	①砂粒・赤色粒多い ②良好 ③淡黄(2.5Y8/3)	ＲＬ縄文施文後、斜位の沈線。沈線による区画は不明。断面黒褐(2.5Y3/1)。	後期称名寺か
第135図 PL.46	27	縄文土器 深鉢	C区表土 胴部片	残存高 (5.2) 厚さ　0.7	①砂粒・白・赤色粒多い ②やや軟 ③にぶい黄褐(10YR5/4)	懸垂する２条の沈線。地文にＬＲ縄文を施文。沈線の間は磨り消し。	中期加曽利Ｅ
第135図 PL.46	28	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (5.1) 厚さ　1.0	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	ＲＬ縄文施文後、懸垂する平行沈線施文。平行沈線の間はＲＬ縄文を磨り消す。	中期加曽利Ｅ
第135図 PL.46	29	縄文土器 深鉢	C区表土 胴部片	残存高 (5.7) 厚さ　0.7	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	表面摩滅。地文にＬＲ縄文を施文。懸垂する１条の隆帯(両側に沈線を伴う)を施す。断面・表面黒褐(10YR3/1)。	中期加曽利Ｅ
第135図 PL.46	30	縄文土器 深鉢	C区表土 胴部片	残存高 (4.2) 厚さ　1.2	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR6/4)	沈線により区画。区画は凸字状と想定される。区画外にＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	31	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (6.2) 厚さ　0.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部やや巾広の横位沈線。沈線下ＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	32	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (4.7) 厚さ　0.8	①砂粒多い ②やや軟 ③灰白(10YR8/2)	表面摩滅が著しい。口縁にそって隆帯が１条巡る。隆帯の上に円形の押圧文を施す。	後期堀之内
第136図 PL.47	33	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (6.5) 厚さ　1.7	①砂粒含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	口縁部にそった１条の隆帯に連結した隆帯で区画。区画は楕円と想定される。	中期加曽利Ｅ

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第136図 PL.47	34	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (3.2) 厚さ 0.6	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐(10YR7/3)	波状口縁。口縁部内湾。口縁部にそって1条沈線が巡る。沈線下ＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	35	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (3.5) 厚さ 0.9	①砂粒含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	波状口縁。口縁部内湾。沈線により区画。区画内にＲＬ縄文を充填し、円形の刺突を施す。口唇部に円形の刺突を列状に施す。	後期称名寺
第136図 PL.47	36	縄文土器 深鉢	A区表土 口縁部片	残存高 (4.0) 厚さ 0.8	①砂粒含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	波状口縁。波頂部を起点に弧状の微隆起帯が1条。微隆起帯の下ＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	37	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (4.4) 厚さ 0.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	地文ＲＬ縄文を施文の後、懸垂する1条の沈線と菱手懸垂文で区画する。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	38	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (5.4) 厚さ 0.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	微隆起帯が1条懸垂。区画内をＬＲ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	39	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (4.4) 厚さ 1.4	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	ＲＬ縄文を施文。	中期か
第136図 PL.47	40	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (2.7) 厚さ 1.3	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	ＲＬ縄文を施文。	中期か
第136図 PL.47	41	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (3.9) 厚さ 1.4	①砂粒やや多い ②やや軟 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	ＲＬ縄文を施文。	中期か
第136図 PL.47	42	縄文土器 深鉢	A区表土 胴部片	残存高 (3.8) 厚さ 0.7	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③灰黄褐(10YR6/2)	ＲＬ縄文を施文。	後期か

B下水田耕土下層

挿図番号 図版番号	No.	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第136図 PL.47	1	土師器 坏	B下黒色土 口縁部1/6欠	口径 11.3 底径 5.4 高さ 3.9	①砂粒・赤・白色粒少量 ②普通 ③橙(5YR6/6)	体部はわずかに丸みをもって立ち上がる。底部～体部外面荒削り。口縁部外面～内面横撫で。	
第136図 PL.47	2	土師器 小型甕	B下黒色土 口縁部～胴部上位	口径 12.6 底径 － 高さ (5.0)	①細砂粒・白色粒中量 ②普通 ③明赤褐(2.5YR5/6)	胴部やや膨らみ、口縁部外反する。頸部外面に胴部荒削り時の篦の当たりあり。口縁部内外面横撫で。胴部内面篦撫で。	胎土に角閃石を少量含む。
第136図 PL.47	3	須恵器 高盤	B下黒色土 脚部を除く胴部のみ	口径 － 底径 － 高さ －	①細砂粒・白色粒多量 ②還元焔 ③褐灰(10YR5/1)	輪積み成形の後、輪轆調整。	砂粒等多い粗い胎土。内面によい褐(7.5YR5/3)。
第136図 PL.47	4	土製品 土錘	B下黒色土 完形	長さ 4.2 径 1.2×1.1 重さ 4.0g	①細砂粒・赤・白色粒少量 ②良好 ③浅黄橙(10YR8/3)	手捏ね。中央部に最大径、両端部が細くなる。器面は丁寧な整形。器面やや摩滅。断面形ほぼ円形。	
第136図 PL.47	5	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部片	残存高 (5.6) 厚さ 1.1	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③灰白(2.5Y8/2)	口縁部２本の横位沈線で区画。区画内に連続する刺突文。８の字状文貼り付け。８の字状文を起点に懸垂する沈線が抱きれる。	後期堀之内
第136図 PL.47	6	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部片	残存高 (7.1) 厚さ 0.6	①砂粒・白色粒多い ②やや軟質 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部内湾。口縁部下横位に１条沈線が巡り、八字状あるいは卍字状の沈線区画。地文にＬＲ縄文を施文。表面摩滅。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	7	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部片	残存高 (4.4) 厚さ 0.8	①砂粒・白色粒多い ②やや軟質 ③灰(5Y4/1)	口縁部内湾。口縁部下１条横位に微隆起帯が巡る。微隆起帯下はＬＲ縄文施文か。表面摩滅。	中期加曽利Ｅ
第136図 PL.47	8	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部片	残存高 (5.9) 厚さ 0.8	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	波状口縁の波頂部。沈線により区画。区画はＯ字状文あるいは渦巻き文が想定される。区画内をＲＬ縄文を充填する。	後期称名寺
第136図 PL.47	9	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部	残存高 (6.2) 厚さ 0.7	①砂粒・白色粒多い ②やや軟質 ③灰白(2.5Y7/1)	口縁の肥厚した部分。表面摩滅のため、文様不詳。	不明後期か
第136図 PL.47	10	縄文土器 深鉢	B下黒色土 口縁部片	残存高 (4.1) 厚さ 0.5	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	波状口縁。沈線により区画。区画内をＲＬ縄文を充填。表面摩滅。断面褐灰(10YR5/1)。	後期称名寺

挿図番号 図版番号	No	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備考
第137図 PL.47	11	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 胴部片	残存高 (8.8) 厚さ 1.0	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③灰白(2.5Y7/2)	地文にＲＬ縄文を施文後、平行する沈線でＵ字状あるいは楕円文を描き、沈線の間は磨り消し。表面摩滅。	中期加曽利Ｅか
第137図 PL.47	12	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 胴部片	残存高 (5.4) 厚さ 0.7	①砂粒・白色粒多い ②良好 ③灰黄(2.5Y6/2)	地文にＲＬ縄文施文後、懸垂する２本の沈線を施す。縦位施文。沈線の間は磨り消し。	後期堀之内
第137図 PL.47	13	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 胴部片	残存高 (5.4) 厚さ 0.8	①砂粒・白色粒やや多い ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	地文にＬＲ縄文を施文。隆帯で円形区画。隆帯の両側に沈線を施文。	中期加曽利Ｅ
第137図 PL.47	14	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 胴部片	残存高 (3.2) 厚さ 0.7	①粗砂粒含む ②良好 ③浅黄(2.5Y7/3)	表面摩滅。地文にＲＬ縄文施文後、懸垂する２本沈線を施す。	後期堀之内
第137図 PL.47	15	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 口縁部片	残存高 (5.5) 厚さ 0.6	①砂粒多い ②やや軟質 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	口唇部欠損。隆帯により区画。区画は楕円と想定され、区画内をＲＬ縄文を施文。	中期加曽利Ｅ
第137図 PL.47	16	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 胴部片	残存高 (5.0) 厚さ 0.7	①砂粒含む ②良好 ③灰黄(2.5Y7/2)	沈線により区画。区画内をＲＬ縄文を充填。	後期称名寺
第137図 PL.47	17	縄文土器 深鉢	Ｂ下黒色土 底部片	残存高 (4.3) 底径 6.5	①砂粒・白色粒含む ②良好 ③灰白(2.5YR8/2)	表面摩滅のため、調整等不明。	

第４章　細谷八幡遺跡

第１節　遺跡の概要

細谷八幡遺跡は細谷南遺跡とは異なってほぼ平坦な台地上にある。Ａ～Ｃ区の区割りは、調査区が現道などによって分離していることから名付けたものであり、相互に地形上の違いがあるわけではない。本遺跡では全域が台地上にあり、遺跡の内容には特に差を認めることはできない。

細谷八幡遺跡で調査した遺構は、竪穴住居33軒、土坑85基、粘土採掘坑１基、溝47条、井戸２基である。竪穴住居は少数の時期不明のものを除いてすべて９世紀代のものであり、その点で細谷南遺跡とは大きく異なる。以下、区毎に遺構の概要を述べる。

Ａ区は蛇川の河川改修部分であり、現蛇川右岸に沿った地域である。ここの調査は平成14年度に行い、竪穴住居９軒、土坑43基、溝12条を調査した。竪穴住居はＡ－３・７・８号住居が至近距離にある他は、全域にまばらに分布している。時期はいずれも９世紀のものであり、出土遺物が比較的多くもう少し詳細に時期を判定できたものは、みな９世紀後半に収まる。住居の形態はほぼ同じであるが、主軸の方向や竈の位置には多様性が認められる。特にＡ－１号住居は竈が西壁にある。竈が西壁にあることが確認できたのは、Ｂ区・Ｃ区を含めてもこの１軒のみである。その他は東、ないし北東にある。土坑は北半部と南部とにやや集中した部分がある。その分布に何らかの意味を認めることは難しいが、北半部では土坑が列状に並んでいる傾向が見て取れるので、その配置が何らかの区画を反映している可能性は考えられる。出土遺物はいずれも周辺の竪穴住居からの流れ込みと考えられ、時期を明確に示すものはほとんどなかった。Ａ－37号土坑とＡ－43号土坑には馬骨が残っており、馬を埋葬したものと考えられる。これについて詳細は第５章第３節を参照していただきたい。溝はＡ－１・２・４号溝のように長く直線的にのびるものもあるが、大部分は調査区の狭さのためにごく一部の調査にとどまった。詳細な時期は不明であるが、北半部にあるＡ－１号溝は住居との切り合い関係から古代のものであり、その他、北半部から中央部にあるＡ－２・４～７号溝は古代に遡る可能性がある。

Ｂ区は国道の本線部分にあたる。調査は平成14・17年度に数回に分けて行った。全体に多くの攪乱が見られ、遺構の残存状況はよくなかったが、竪穴住居23軒、土坑42基、粘土採掘坑１基、溝32条、井戸２基を調査できた。竪穴住居はＡ区と同様にまばらな配置であり、切り合っているものは少ない。形態や方向は多くがほぼ同じ傾向にあり、竈は東壁にあるものと北壁にあるものとに分かれる。時期は出土遺物が少ないものを除いて９世紀代のものであり、Ａ区と同様に時期を絞り込めるものは９世紀後半のものであった。土坑は南東部を除いた全域に分布し、集中する所も何カ所かあるが、その配置に意味を認めるのは困難である。それらのうち、Ｂ－41号土坑には馬が埋葬されていた（第５章第３節参照）。北西端にある土坑はその形態から粘土採掘坑と考えられる。溝は長大なものが多く、区画溝の役割が考えられるが、近世以降のものが多く、古代に遡る可能性があるものは、西端近くにあるＢ－５号溝、北端部を東西に走る長大なＢ－18号溝の他、西半部にあるＢ－15～17号溝などがあるにすぎない。井戸は２基あるが、いずれも９世紀後半以降のものである。

Ｃ区は蛇川河川改修部分の南側で、平成15年度に調査した。竪穴住居１軒と溝３条を調査したが、面積が狭いためもあり、詳細は不明な点が多い。竪穴住居は時期不明であり、溝は２条が古代に遡る可能性がある。

第2節　A区の調査

1　竪穴住居跡

A－1号住居（第138図、第8表、PL.48・68）

A区北端近くにある。

位置　X＝29824～828、Y＝－42618～623

重複遺構　なし

形態　北壁の中央辺りが南側に湾曲している、やや不整な方形である。

方位　N－85°－W

規模　長軸3.33m×短軸2.80m

面積　9.73㎡

壁高　12cm

床面　地山のロームを直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。

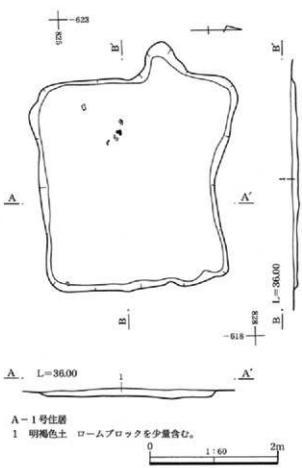
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

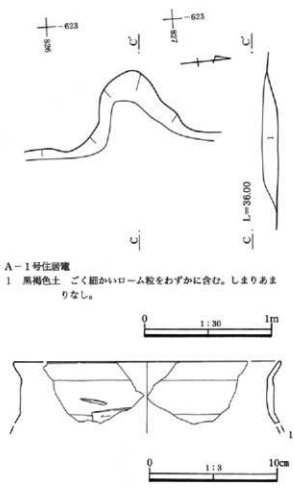
竈　住居西壁北寄りに造られている。西壁面に竈が確認されたのは、本住居のみであった。土層では焼土や炭は確認されなかったが、遺構平面確認によって竈と判断した。焚き口幅57cm、長さ32cmである。

遺物　1は土師器甕。その他、土師器片や須恵器片がわずかに出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は9世紀後半と考えられる。柱穴・貯蔵穴などの施設がなく、土器の出土も少ない。さらに竈も焼土が見られないなど、生活の痕跡に乏しい。そのため、住居として使用されたものか、やや疑問がある。



A－1号住居
1　明褐色土　ロームブロックを少量含む。



A－1号住居竈
1　黒褐色土　ごく細かいローム粒をわずかに含む。しまりあまりなし。

第138図　A－1号住居・竈平・断面図、出土遺物

Ａ－２号住居（第139～141図、第８表、PL.49・68）
Ａ区北部にある。

位置　X＝29810～816、Y＝－42617～624

重複遺構　東部にＡ－１号溝、西壁にＡ－５号土坑が重複する。遺構平面確認と土層断面の状況により、本住居はＡ－５号土坑、Ａ－１号溝よりも古いと考えられる。

形態　やや東西に長い長方形。

方位　Ｎ－80°－Ｗ

規模　長軸4.40m×短軸3.79m

面積　17.10m²

壁高　18cm

床面　掘方底面よりローム・ブロックを主体とする暗黄褐色土を５～10cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

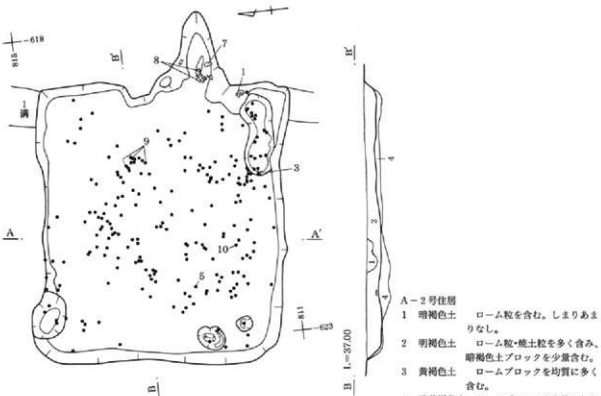
貯蔵穴　住居南東コーナー付近にある。長径103cm、短径46cm、深さ21cmの不整形である。

周溝　確認できなかった。

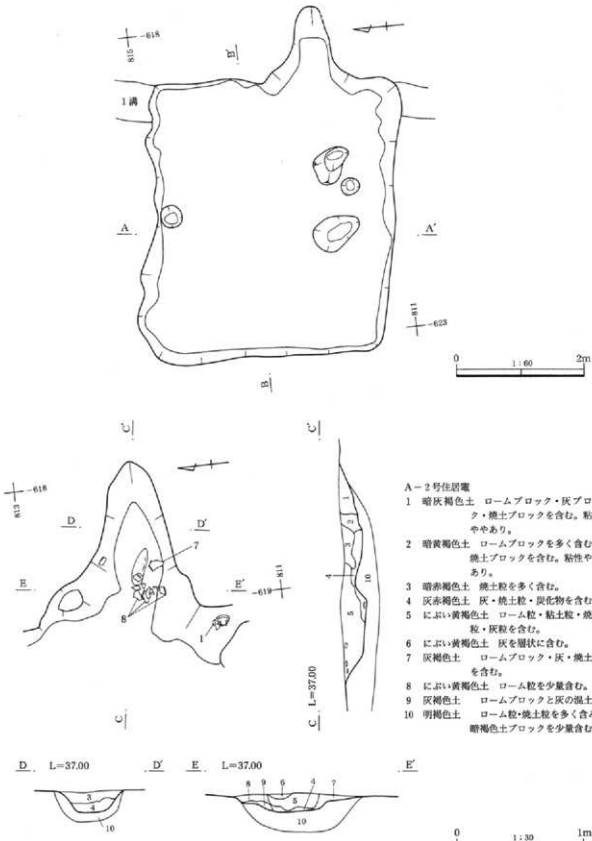
竈　住居東壁やや南寄りに造られている。焚き口幅47cm、長さ95cmである。竈からは７・８の甕をはじめとした土器片とともに、支脚と考えられる石が出土している。

遺物　住居全域から出土しているが、ほとんどは小破片であり、報告できるのは１～10の10点である。その他、土師器片・須恵器片多数、焼成粘土塊、縄文土器片、陶磁器片などが出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は９世紀後半と考えられる。



第139図　Ａ－２号住居平・断面図



A－２号住居竈

1　暗灰褐色土　ロームブロック・灰ブロック・焼土ブロックを含む。粘性ややあり。

2　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。焼土ブロックを含む。粘性ややあり。

3　暗赤褐色土　焼土粒を多く含む。

4　灰赤褐色土　灰・焼土粒・炭化物を含む。

5　にぶい黄褐色土　ローム粒・粘土粒・焼土粒・灰粒を含む。

6　にぶい黄褐色土　灰を層状に含む。

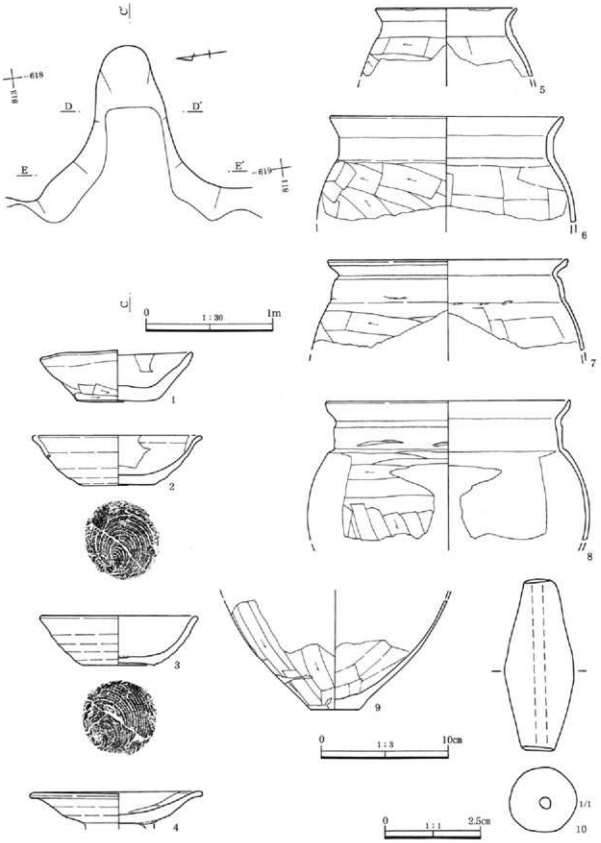
7　灰褐色土　ロームブロック・灰・焼土粒を含む。

8　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。

9　灰褐色土　ロームブロックと灰の混土。

10　明褐色土　ローム粒・焼土粒を多く含み、暗褐色土ブロックを少量含む。

第140図　Ａ－２号住居掘方・竈平・断面図



第141図　A－2号住居竈掘方平面図、出土遺物

Ａ－３号住居（第142図、第８表、PL.49・68）

Ａ区南部にある。残りが悪く、掘方のみの調査となった。３・７・９号の３軒の竪穴住居が集中している。

位置　Ｘ＝29775～779、Ｙ＝－42670～675

重複遺構　Ａ－８号住居と重複する。遺構平面確認により、本遺構はＡ－８号住居よりも古い。

形態　調査区境に位置し、Ａ－８号住居と重複しているために全形は不明である。

方位　Ｎ－82°－Ｗ

規模　長軸（3.62）ｍ×短軸2.83ｍ

面積　（7.54）㎡

壁高　11cm

床面　残存状況が良好ではなく、床面は削平されていた。土層断面観察から、掘方底面よりローム・ブロックを主体とする黄褐色土を２～６cmほど埋め戻して、床面を構築していると考えられる。部分的に地山ロームを直接床面としているところもある。

柱穴　確認できなかった。

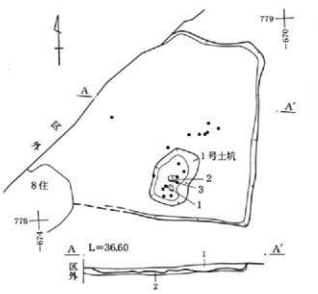
土坑　住居内１号土坑は径92cm×60cm、深さ11cmで、内部からは多くの土器が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。

周溝　確認できなかった。

竈　調査区内では確認されなかった。

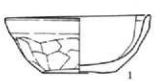
遺物　１は土師器坏、２・３は須恵器の高台付埦、４は土師器小型台付甕の台部である。その他、土師器片や須恵器片などが出土している。

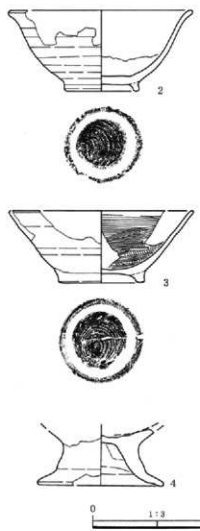
所見　出土遺物から、時期は９世紀代と考えられる。



Ａ－３号住居
1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりややあり。
2　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。

0　1:60　2m





第142図　Ａ－３号住居掘方平・断面図、出土遺物

Ａ－４号住居（第143・144図、第８表、PL.49・50・68・83）

Ａ区北部の西寄りにある。

位置　X＝29803～808、Y＝－42629～634

重複遺構　Ａ－21号土坑と重複する。遺構平面確認と土層断面の状況により、本住居はＡ－21号土坑よりも古い。

形態　やや南北に長い方形であるが、北西隅が少し歪んでいる。

方位　N－68°－W

規模　長軸3.17m×短軸3.75m

面積　9.94m²

壁高　28cm

床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含む暗褐色土を14～18cmほど埋め戻して、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

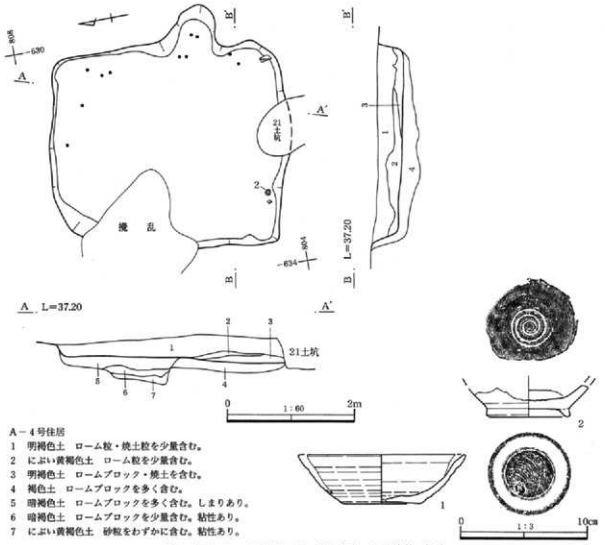
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁ほぼ中央に造られている。焚き口幅41cm、長さ71cmである。埋土には焼土を含む。使用面下の燃焼部は掘り窪められていた。

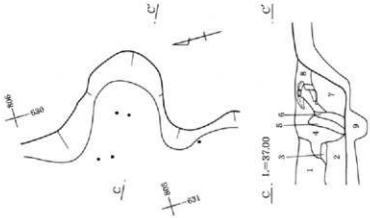
遺物　遺物の出土は少ないが、東・北壁に沿った形で出土している。１は須恵器坏、２は須恵器高台付埦、３・４は土師器甕である。その他、土師器片・須恵器片が出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は９世紀代であると考えられる。



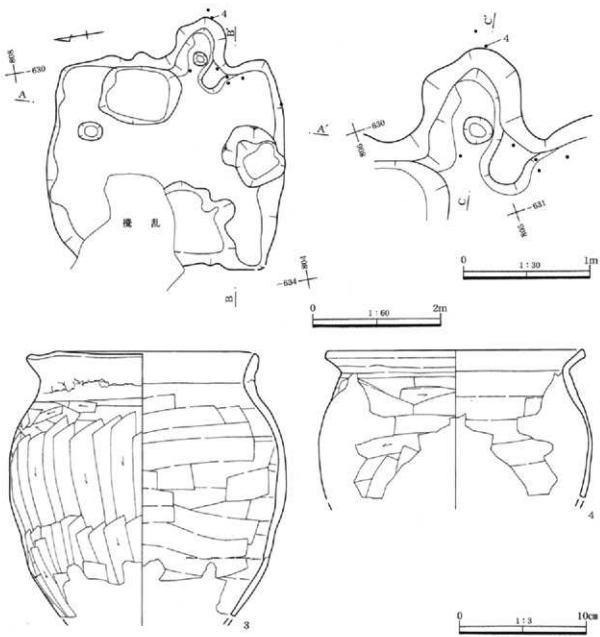
Ａ－４号住居
1　明褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。
2　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。
3　明褐色土　ロームブロック・焼土を含む。
4　褐色土　ロームブロックを多く含む。
5　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。
6　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性あり。
7　にぶい黄褐色土　砂粒をわずかに含む。粘性あり。

第143図　Ａ－４号住居平・断面図、出土遺物（１）



A－４号住居竈

1　にぶい黄褐色土　ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土　焼土粒を多く含む。炭化物をわずかに含む。
3　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　にぶい黄褐色土　焼土粒を少量含む。
5　にぶい黄褐色土　焼土を含む。
6　暗黄褐色土　焼土を少量含む。
7　にぶい黄褐色土　焼土粒を少量含む。
8　にぶい黄褐色土　ロームブロック・焼土を少量含む。
9　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。



第144図　Ａ－４号住居掘方・竈平・断面図、出土遺物（２）

Ａ－５号住居（第145・146図、第８表、PL.50・69）

Ａ区中央付近にある。大部分が調査区外となるほか、西側に攪乱が入っており、ごく一部の調査にとどまった。

位置　Ｘ＝29798～801、Ｙ＝－42639～643

重複遺構　なし

形態　北側の大部分は調査区域外であり、調査できたのは南側の一部であった。全形は不明である。

方位　Ｎ－67°－Ｅ

規模　長軸（1.34）ｍ×短軸（0.82）ｍ

面積　（0.94）㎡

壁高　11cm

床面　貼床は確認できなかった。地山ローム土を床面にしていたと考えられる。

柱穴　確認できなかった。

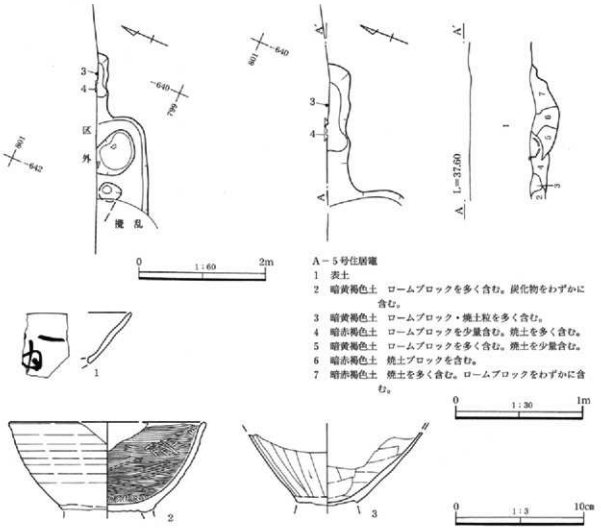
貯蔵穴　径80cm×56cm、深さ18cmの楕円形である。

周溝　確認できなかった。

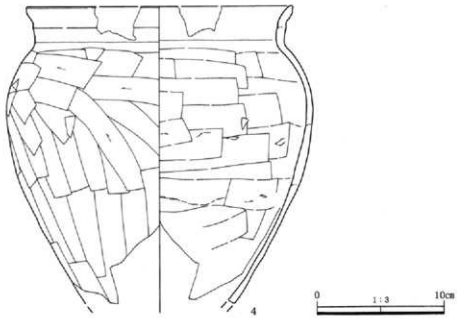
竈　竈のおおよそ半分は調査区外である。位置から見て東壁の南端付近に作られているものと思われる。覆土には焼土を含む。調査区内で確認できた竈の規模は、焚き口幅（23cm）、長さ85cmである。

遺物　１は土師器坏、２は須恵器高台付埦、３・４は土師器甕である。その他、多数の土師器片と少数の須恵器片が出土している。

所見　大半が調査区外であり、攪乱も付近にあったため、調査ができた範囲はわずかであり、詳細は不明である。出土遺物から、時期は９世紀後半であると考えられる。



第145図　Ａ－５号住居掘方・竈平・断面図、出土遺物（１）



第146図　Ａ－５号住居出土遺物（２）

Ａ－６号住居（第147・148図、第８表、PL.50・69）

Ａ区中央付近の調査区壁際にある。

位置　X＝29792～796、Y＝－42631～636

重複遺構　Ａ－38号土坑と重複する。土層断面の観察から、本遺構はＡ－38号土坑よりも古いことが確認できた。

形態　攪乱やＡ－38号土坑との重複のために住居の南東隅の残りが悪いが、東西方向に長軸をとる長方形であると考えられる。

方位　N－87°－W

規模　長軸4.77m×短軸3.58m

面積　(13.49) m²

壁高　22cm

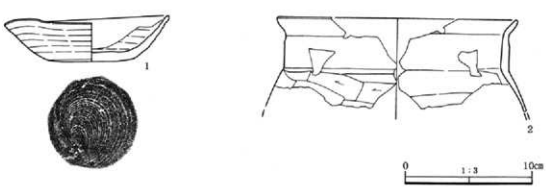
床面　地山ロームを直接床面にしている。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

焼土　中央からやや南東に、径50cm～86cmの焼土の集中部（焼土１）を検出した。また、焼土１の東寄りに、一部を攪乱に壊されてはいるが、径72cm～80cmの焼土２を検出した。これらの焼土は、本住居に伴うものと考えられる。このうち焼土２は、



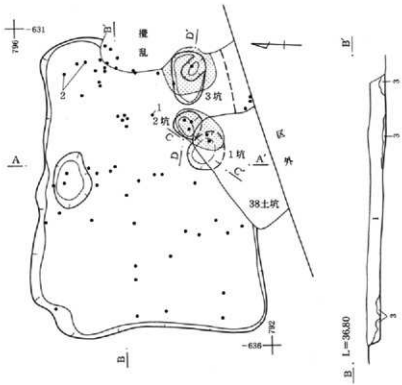
第147図　Ａ－６号住居出土遺物

本来は竈に伴う焼土であった可能性があるが、焼土1は不明である。

竈　本来は東壁にあったと考えられるが、その部分には攪乱が入っているため、これによって壊されてしまったと考えられる。とすれば、焼土2は竈に伴うものであろう。

遺物　遺物はほぼ全域から出土している。1は須恵器坏、2は土師器甕である。その他、土師器片や須恵器片多数、焼成粘土塊などが出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は9世紀後半であると考えられる。

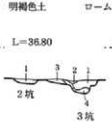


A－6号住居

1　にぶい黄褐色土　多くのローム粒とわずかな焼土粒を含む。
2　にぶい黄褐色土　ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。
3　にぶい黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　明褐色土　ロームブロックを少量含む。

A－6号住居1号床下土坑

1　暗褐色土　径5～10mmの焼土を30%斑状に含み、炭化物少量含む。しまりやや弱い。



A－6号住居2号床下土坑

1　暗褐色土　ローム粒20%含む。硬い。

A－6号住居3号床下土坑

1　赤色土　径5～10mmの焼土が固まっているが、直接の被熱ではない。しまりなし。
2　褐色土　ローム10%を斑状に含み、焼土・炭化物少量含む。しまり弱い。
3　暗褐色土　ややしまる。
4　黄褐色土　地山に近い褐色土を10%含む。ややしまる。

第148図　A－6号住居平・断面図

Ａ－７号住居（第149・150図、第８表、PL.50・69）

Ａ区南部にある。３・７・８号住居の３軒が集中している。掘方調査のみ実施した。

位置　X＝29772～776、Y＝－42671～676

重複遺構　なし

形態　正方形に近い方形

方位　N－51°－E

規模　長軸2.76m×短軸2.75m

面積　6.84m²

壁高　19cm

床面　土層断面観察によって、掘方底面から10cmほど埋め戻して床面を構築している場所と、地山ロームを床面としている場所を確認した。

柱穴　確認できなかった。

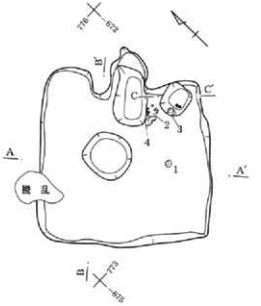
貯蔵穴　東隅付近にある。長径50cm、短径42cm、深さ32cmのやや方形に近い楕円形である。

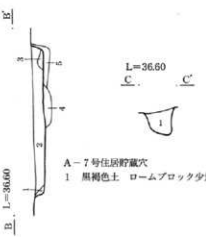
周溝　確認できなかった。

竈　北東壁のほぼ中央に造られている。焚き口幅50cm、長さ64cmである。覆土には焼土をわずかに含む。焚き口からその手前にかけての床下は、径50cm×90cmほどの大きさで掘り窪められている。

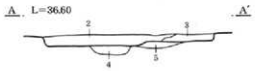
遺物　１は須恵器坏、２は須恵器高台付埦、３は須恵器皿、４は須恵器壺である。その他、土師器片や須恵器片がわずかに出土している。

所見　出土遺物や住居の形態から、時期は９世紀後半と考えられる。

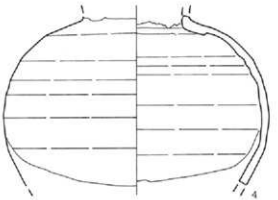




Ａ－７号住居貯蔵穴
1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。しまりあり。

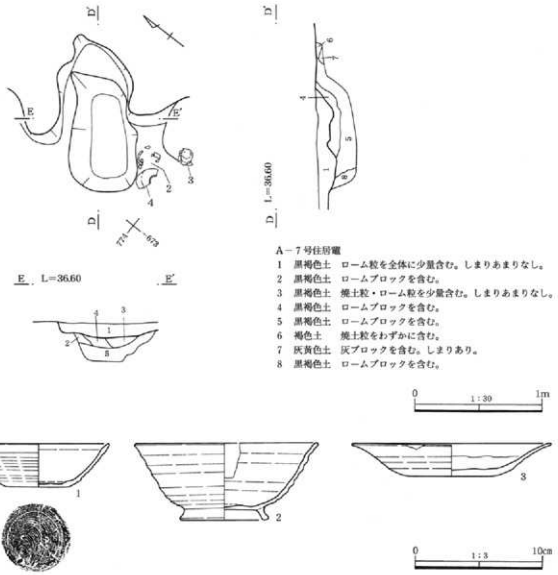


Ａ－７号住居
1　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあまりなし。
3　黒褐色土　ローム粒を少量含む。焼土をわずかに含む。しまりあまりなし。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含む。焼土をわずかに含む。しまりあまりなし。
5　黒褐色土　ロームブロックを含む。



0　1:60　2m　　0　1:3　10cm

第149図　Ａ－７号住居掘方平・断面図、出土遺物（１）



第150図　A－7号住居竈平・断面図、出土遺物（2）

A－8号住居（第151・152図、第8表、PL.51・69・70）

A区南部にある。大部分が調査区外となり、ごく一部の調査にとどまった。

位置　X＝29775～777、Y＝－42673～676

重複遺構　A－3号住居と重複する。遺構平面確認の状況より、本遺構はA－3号住居よりも新しい。

形態　調査区境に位置しており、竈とその周辺のみを確認した。全形は不明である。

方位　N－72°－E

規模　長軸（1.50）m×短軸（1.28）m

面積　（1.70）㎡

壁高　10cm

床面　掘方底面からローム・ブロックをわずかに含む褐色土を14～18cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　調査区内では未確認。

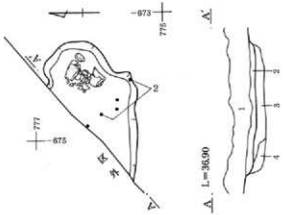
周溝　確認できなかった。

竈　住居東壁に造られている。焚き口幅50cm、長さ90cmである。覆土には焼土を含む。燃焼部付近からは、竈の部材かと考えられる礫や土器が出土し

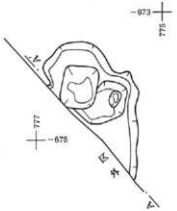
た。焚き口からその手前にかけての床下は、径75cm～80cmほど掘り窪めている。

遺物　1は土師器坏、2～4は土師器甕である。その他、土師器・須恵器片が多数出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は9世紀後半であると考えられる。

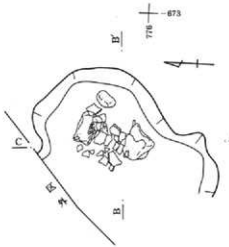


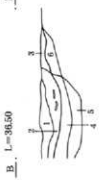
A－8号住居
1　表土
2　褐色土　ロームブロック・ローム粒・焼土を少量含む。

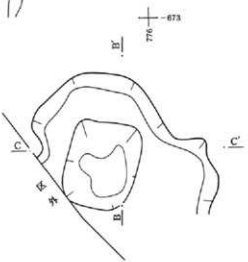


3　褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。
4　褐色土　焼土粒・ローム粒を少量含む。しまりややあり。

0　1:60　2m



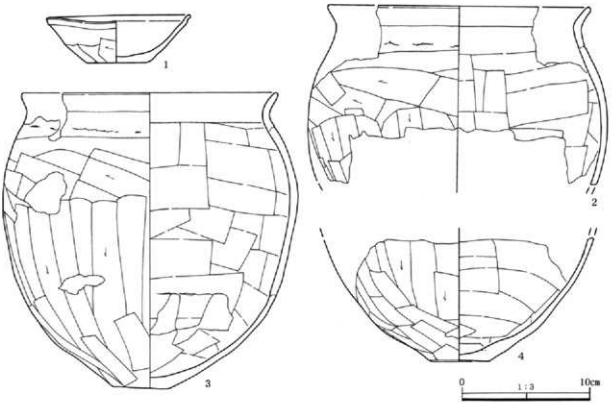




A－8号住居竈
1　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。焼土粒をごくわずか含む。
2　暗灰褐色土　灰を含む。しまりあり。
3　暗灰赤褐色土　焼土を多く含む。ローム粒を少量含む。
4　にぶい黄褐色土　灰ブロック・ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
5　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。焼土粒をごくわずか含む。
6　暗黄褐色土　ロームブロックと焼土の混土層。

0　1:30　1m

第151図　A－8号住居・掘方・竈・竈掘方平・断面図



第152図　A－8号住居出土遺物

A－9号住居（第153・154図、第8表、PL.51・70）

A区北端にある。大部分が調査区外となる。

位置　X＝29382～386、Y＝－42623～625

重複遺構　なし

形態　東壁とその付近のみが調査区内であったため、全形は不明である。

方位　N－86°－W

規模　長軸（0.47）m×短軸2.64m

面積　（1.08）㎡

壁高　20cm

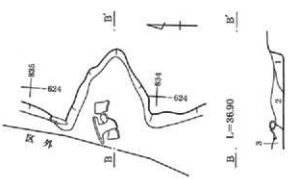
床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含む黄褐色土を30cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　住居南東コーナー付近にある。長径が46cm以上、短径56cm、深さ40cmの楕円形である。

周溝　確認できなかった。

竈　住居東壁のほぼ中央に造られている。焚き口幅66cm、長さ57cmである。



A－9号住居竈

1　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。しまりあまりなし。

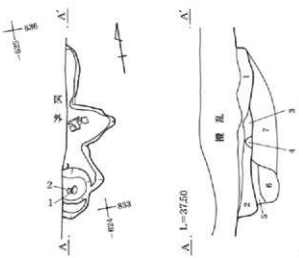
2　黄褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあり。

3　暗褐色土　ローム粒・焼土を含む。しまりあり。

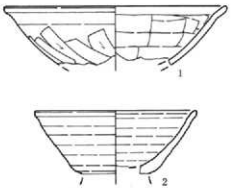
第153図　A－9号住居竈平・断面図

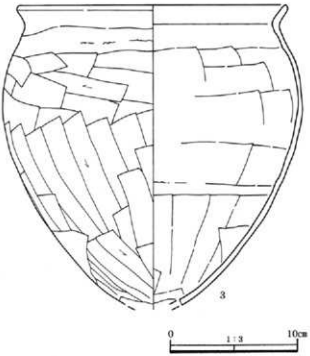
遺物　1は土師器坏、2は須恵器高台付埦、3は土師器甕である。

所見　出土遺物から、時期は9世紀代であると考えられる。



A－9号住居
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあり。
3　暗褐色土　暗褐色土を主体とした層。ローム粒を含み、焼土を全体的に含む。しまりあり。
4　明黄色土　竈付近から出土した粘土。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土　根による撹乱が強い。しまりあまりなし。貯蔵穴の覆土。
6　黄褐色土　ロームブロック・焼土を少量含む。貯蔵穴の覆土。
7　黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。黒褐色土・焼土を少量含む。





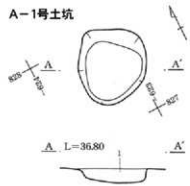
第154図　A－9号住居平・断面図、出土遺物

2　土　　坑

A区では43基の土坑を調査した。土坑の多くは周辺住居よりも時期が新しいと考えられるが、住居の遺物が流れ込んでいると思われる土坑が多く、時期を判断することの難しいものが多かった。いずれにせよ、土坑の時期は周辺住居と同様に古代に属するか、近世以降の比較的新しいもののどちらかであると考えられる。馬骨がまとまって出土した土坑が2基（37・43号土坑）あるのが注目されるが、馬骨について詳しくは、第5章第3節に取り上げた。

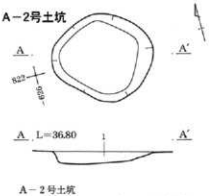
以下、注目すべき土坑について詳述する。それぞれの形態・規模については、一覧表と遺構図を掲げた。

A－1号土坑



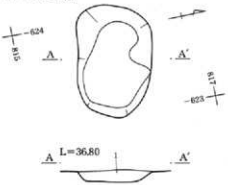
A－１号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。

A－2号土坑



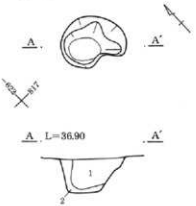
A－２号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。

A－3号土坑



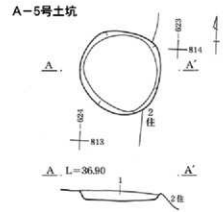
A－３号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。しまりあまりなし。

A－4号土坑



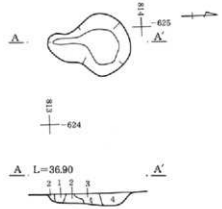
A－４号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。しまりあまりなし。
2　黄褐色土　ロームブロックを少量含む。

A－5号土坑



A－５号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。

A－6号土坑

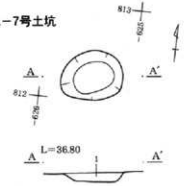


A－６号土坑
1　灰白色土　粘土を含む。しまりあり。
2　明褐色土　ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　焼土粒をわずかに含む。粘性ややあり。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む。

0　1:40　1m

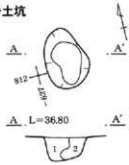
第155図　A－１号～６号土坑平・断面図

A－7号土坑



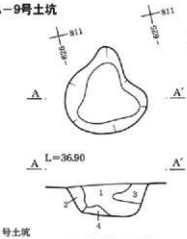
A－7号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを含む。

A－8号土坑



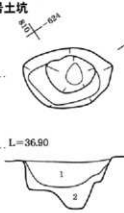
A－8号土坑
1　明褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあまりなし。
2　黄褐色土　ロームブロックを含む。しまりあまりなし。

A－9号土坑



A－9号土坑
1　暗褐色土　ローム粒・炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。
3　にぶい黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　黄褐色土　ロームブロックを含む。しまりあまりなし。

A－10号土坑

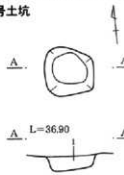


A－10号土坑
1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあまりなし。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりあまりなし。

A－11号土坑

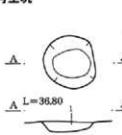
A－11号土坑
1　暗褐色土　ローム粒・炭化物を少量含む。

A－12号土坑



A－12号土坑
1　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。

A－13号土坑

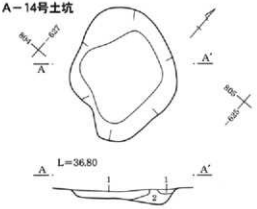


A－13号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあまりなし。

0　1：40　1m

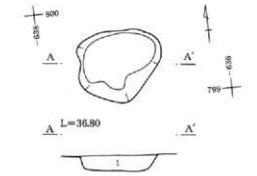
第156図　A－7号～13号土坑平・断面図

A－14号土坑



A－14号土坑
1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
2　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。

A－17号土坑



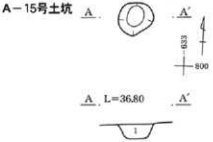
A－17号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を含む。

A－18号土坑

A－18号土坑
1　暗褐色土　ローム粒を多く含む。灰を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒を少量含む。

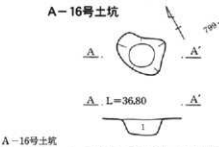
0　1:40　1m

A－15号土坑



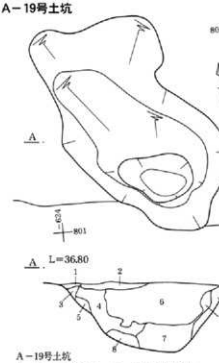
A－15号土坑
1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあまりなし。

A－16号土坑



A－16号土坑
1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあまりなし。

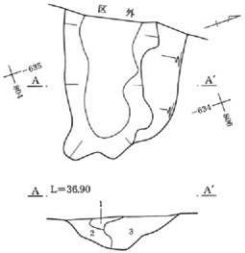
A－19号土坑



A－19号土坑
1　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。
2　明褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黄褐色土　ロームブロックを含む。
4　明褐色土　褐色土を少量含む。
5　明褐色土　ロームブロックを少量含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
7　明褐色土　ロームブロック含む。しまりあまりなし。
8　黄褐色土　ロームブロックを含む。
9　明褐色土　褐色土を含む。

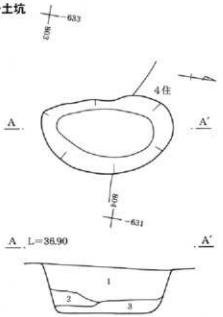
第157図　A－14号～19号土坑平・断面図

A－20号土坑



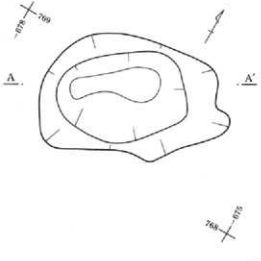
A－20号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを縞状に含む。

A－21号土坑



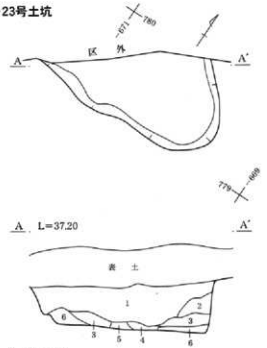
A－21号土坑
1　明褐色土　下層にロームブロックを含む。
2　明褐色土　ロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。やや粘性あり。

A－22号土坑



A－22号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を下部にわずかに含む。しまりややあり。
2　黄褐色土　ローム粒わずかに含む。しまりややあり。

A－23号土坑



A－23号土坑
1　暗褐色土　白色粒を少量含む。しまりあまりなし。
2　褐色土　1層にロームブロックを多く含む。
3　暗褐色土　1層にロームブロックを少量含む。
4　暗褐色土　白色粒・ロームブロックを含む。
5　暗黄褐色土　ロームブロックを含む。
6　暗黄褐色土　ロームブロックを含む。

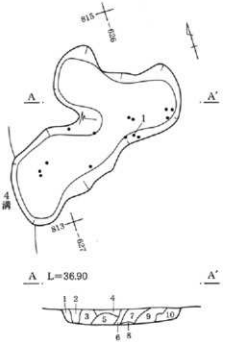
0　1:40　1m

第158図　A－20号～23号土坑平・断面図

Ａ－24号土坑（第159図、第８表、PL.54・70）

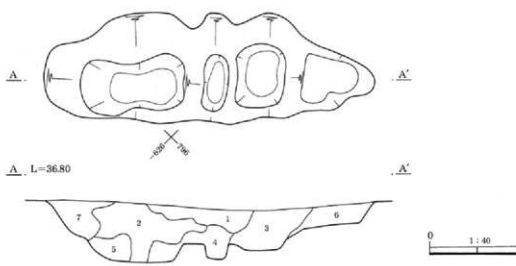
Ａ区北寄りに位置し、西側でＡ－４号溝と重複する。本遺構の方が新しい。形態は不整形であり、本来は２基の土坑であった可能性もある。断面は皿状であり、深さは17cmである。埋土はにぶい黄褐土を主体に焼土を多く含んでいる。

遺物は多く出土したが、報告できるのは１の灰釉陶器のみである。その他、多数の土師器片とわずかな須恵器片、縄文土器片１点などが出土している。



Ａ－24号土坑
1　明褐色土　ロームブロックを多く含む。焼土粒を少量含む。
2　にぶい黄褐色土　ロームブロック・焼土粒を少量含み、炭化物をわずかに含む。
3　明褐色土　ロームブロック・焼土粒を少量含む。
4　にぶい黄褐色土　ロームブロック・焼土粒を少量含む。炭化物をわずかに含む。
5　にぶい黄褐色土　焼土粒を多く含む。全体に赤味を帯びる。
6　黄褐色土　ロームブロック・明褐色土を少量含む。しまりあまりなし。
7　にぶい黄褐色土　焼土粒を含む。
8　黄褐色土　ロームブロックを含む。
9　明褐色土　ロームブロックを少量含む。焼土粒わずかに含む。
10　黄褐色土　ロームブロックと明褐色土の混土層。しまりあまりなし。

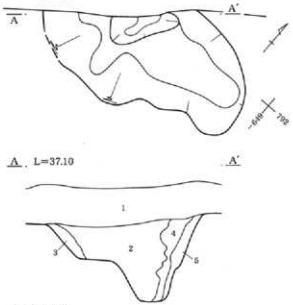
Ａ－25号土坑



Ａ－25号土坑
1　にぶい黄褐色土　ロームブロックを少量含む。しまりあまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりあまりなし。
3　暗褐色土　ローム粒をごくわずか含む。
4　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
5　にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
6　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。
7　にぶい黄褐色土　ローム粒を少量含む。

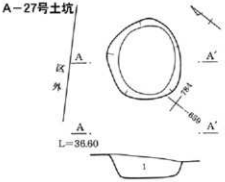
第159図　Ａ－24号・25号土坑平・断面図、24号土坑出土遺物

A－26号土坑



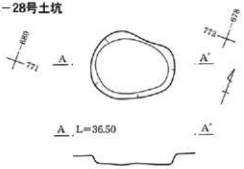
A－26号土坑
1　褐色土　耕作土。
2　暗褐色土　ローム粒わずかに含む。しまりややあり。
3　黄褐色土　ロームブロックを含む。しまりややあり。
4　暗褐色土　焼土粒を少量含む。
5　にぶい黄褐色土　ロームブロックを含む。

A－27号土坑

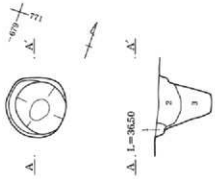


A－27号土坑
1　暗褐色土　湧ったロームブロックを少量含む。

A－28号土坑

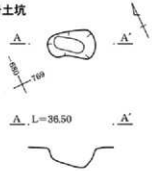


A－29号土坑



A－29号土坑
1　黄褐色土　ロームブロックを含む。粘性あり、しまりあまりなし。
2　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
3　黒褐色土　ローム粒を全体に少量含む。

A－30号土坑



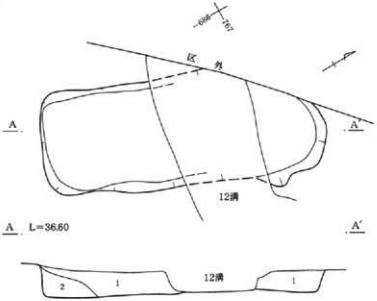
A－31号土坑

A－31号土坑
1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあまりなし。
2　褐色土　ロームブロックを含む。

0　1:40　1m

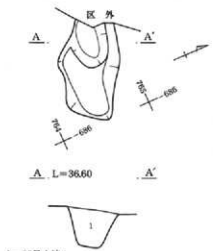
第160図　A－26号～31号土坑平・断面図

A－32号土坑



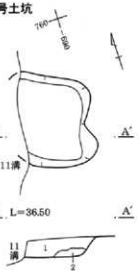
A－32号土坑
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。

A－33号土坑



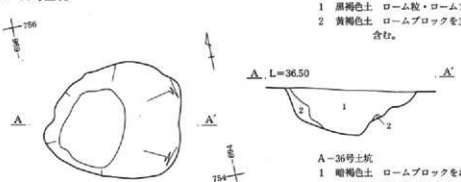
A－33号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを斑状に含む。

A－35号土坑



A－35号土坑
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
2　黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。黒褐色土を少量含む。

A－36号土坑



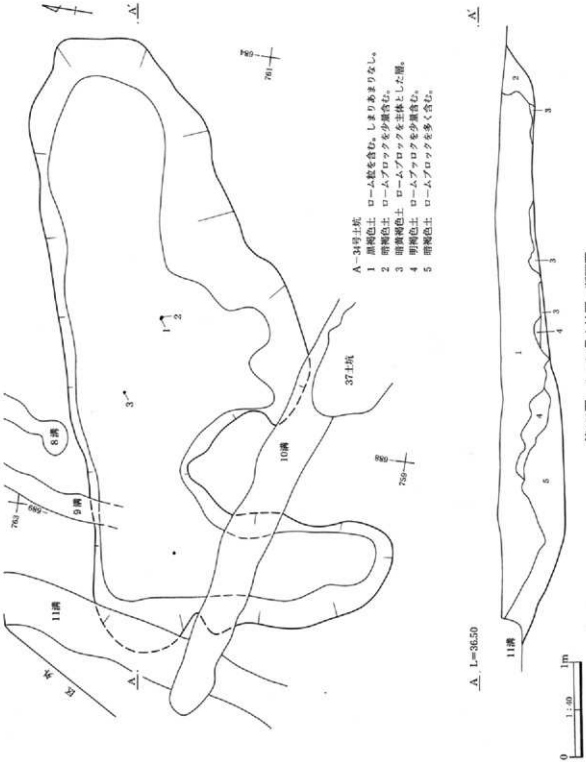
A－36号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。
2　黄褐色土　ロームブロックを含む。しまりあまりなし。

0　1:40　1m

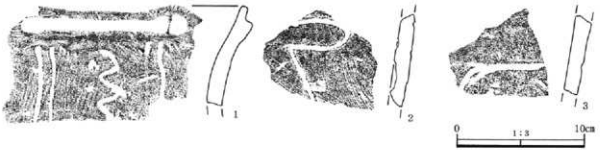
第161図　A－32号・33号・35号・36号土坑平・断面図

Ａ－34号土坑（第162・163図、第８表、PL.55・70）

Ａ区南側にあり、Ａ－９・10・11号溝と重複する。本遺構がいずれよりも古い。平面の形状は不整形で、断面は北側がやや急峻に、南側は緩やかに立ち上がる。底部も不整形で、中央よりもやや西よりが深い。深さは最も深いところで22cmである。埋土はロームブロックを含む暗褐色土を主体としている。掲出した遺物は、みな縄文土器であるが混入品であろう。その他に土師器の小片がわずかに出土している。



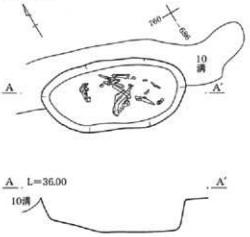
第162図　Ａ－34号土坑平・断面図



第163図　A－34号土坑出土遺物

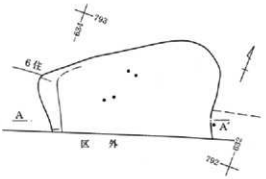
A－37号土坑（第164図、PL.56）

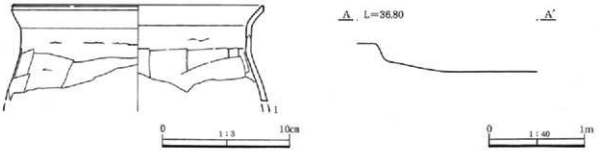
A区南部に位置し、A－10号溝と重複する。本遺構は10号溝よりも新しい。平面の形状は、西北から東南に長軸をとる楕円形である。深さは最も深い所で約35cmである。断面は中央から西北端に向かって底部が緩やかに傾斜し、西北端から確認面までは急峻に立ち上がる。東南側の底部はほぼ平坦であるが、立ち上がりは急峻である。本遺構からは、馬骨が出土している（第5章第3節参照）。その他には、遺物は出土していない。



A－38号土坑（第164図、第8表、PL.70）

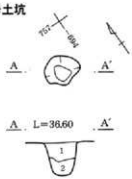
A区のほぼ中央に位置し、A－6号住居と重複する。本遺構の方が新しい。南側が調査区外になるために、全形は不明である。北側や東側の立ち上がりは明瞭でなかった。西側は底部が緩やかに傾斜して、底部西端から確認面まではやや急峻に立ち上がっている。遺物は、1の土師器甕の口縁部が出土している。その他、土師器甕の破片と須恵器片が出土している。





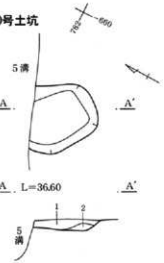
第164図　A－37号・38号土坑平・断面図、38号土坑出土遺物

Ａ－39号土坑



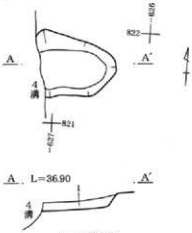
Ａ－39号土坑
1　暗褐色土　ローム粒をごくわずか含む。しまりあまりなし。
2　暗褐色土　黄褐色土を含む。しまりあまりなし。

Ａ－40号土坑



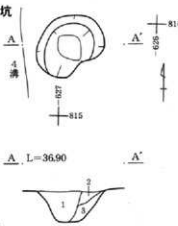
Ａ－40号土坑
1　暗褐色土　焼土粒を少量含む。しまりあまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。

Ａ－41号土坑



Ａ－41号土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを含む。

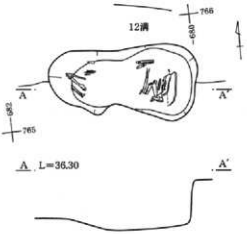
Ａ－42号土坑



Ａ－42号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりあまりなし。

Ａ－43号土坑（第165図、PL.56）

Ａ区南部に位置し、Ａ－12号溝と重複する。本遺構は、Ａ－12号溝よりも新しい。平面の形状はやや不整な楕円形であり、東西に長い。断面は東側が底部から確認面までほぼ垂直に立ち上がるのに対して、西側は緩やかに立ち上がる。深さは東側で約50cmである。本遺構からは馬骨が出土しており、本来は本遺構に伴っていたと考えられる馬骨片２点が12号溝からも出土している（第５章第３節参照）。その他には、遺物は出土していない。



第165図　Ａ－39号～43号土坑平・断面図

第6表　A区　土坑一覧表

No.	位　置	大きさ（m）			方　位	備　考
		長軸	短軸	深さ		
1	827-622	0.82	0.74	0.16	N－58°－E	
2	821-624	1.07	0.92	0.19	N－77°－W	
3	825-623	1.18	0.79	0.13	N－78°－W	
4	816-620	0.69	0.55	0.36	N－46°－W	9世紀後葉か。
5	813-623	0.92	0.86	0.11	N－25°－W	2号住居と重複、本遺構の方が新しい。
6	813-624	0.88	0.66	0.13	N－ 5°－E	
7	812-625	0.66	0.52	0.10	N－52°－E	
8	811-626	0.65	0.46	0.24	N－ 5°－E	
9	809-625	0.93	0.87	0.35	N－20°－E	
10	809-623	0.95	0.63	0.50	N－33°－E	
11	807-625	1.10	0.98	0.12	N－18°－W	
12	809-626	0.52	0.51	0.15	N－84°－W	
13	806-626	0.57	0.55	0.12	N－26°－W	
14	803-625	1.42	1.14	0.16	N－36°－W	
15	800-633	0.37	0.35	0.16	N－88°－W	
16	798-633	0.46	0.37	0.16	N－65°－W	
17	798-636	0.94	0.80	0.18	N－63°－W	
18	803-628	1.12	1.03	0.16	N－ 4°－W	9世紀後葉か。
19	800-622	2.67	1.21	0.73	N－37°－W	A－2号溝と重複、本遺構の方が新しい。
20	804-633	(1.42)	1.23	0.35	N－63°－W	西側が調査区外となるため全形不明。
21	803-631	1.40	0.78	0.50	N－10°－W	A－4号住居と重複、本遺構の方が新しい。
22	768-675	2.02	1.22	0.34	N－66°－E	
23	778-669	(1.36)	0.94	0.50	N－83°－W	西側が調査区外となるため全形不明。
24	813-624	2.18	1.27	0.17	N－58°－E	A－4号溝と重複、本遺構の方が新しい。
25	795-624	3.50	1.16	0.61	N－44°－E	
26	790-649	(2.05)	(1.07)	0.87	N－83°－E	西側が調査区外となるため全形不明。
27	784-658	0.85	0.78	0.24	N－53°－E	
28	771-678	0.88	0.71	0.12	N－70°－E	
29	769-678	0.64	0.63	0.56	N－71°－E	
30	768-679	0.51	0.26	0.20	N－64°－W	
31	756-688	2.80	1.39	0.40	N－47°－W	
32	764-684	3.04	1.16	0.30	N－23°－E	A－12号溝と重複、本遺構の方が古い。
33	764-686	(0.94)	0.65	0.40	N－62°－W	
34	759-684	(6.48)	2.58	0.71	N－76°－E	
35	758-689	0.94	(0.79)	0.20	N－25°－E	A－11号溝と重複、本遺構の方が古い。
36	754-694	1.39	1.23	0.47	N－80°－W	
37	759-686	1.54	0.73	0.35	N－64°－W	馬骨出土。A－10号溝と重複、本遺構の方が新しい。
38	791-632	1.89	(0.91)	0.29	N－56°－E	A－6号住と重複、本遺構の方が新しい。
39	756-694	0.39	0.32	0.34	N－60°－W	
40	781-660	(0.72)	0.72	0.11	N－32°－W	A－5号溝と重複、本遺構の方が古い。
41	821-626	(0.80)	0.72	0.10	N－88°－W	A－4号溝と重複、本遺構の方が古い。
42	815-626	0.75	0.54	0.33	N－46°－E	
43	764-679	1.55	0.68	0.52	N－77°－W	馬骨出土。A－12号溝と重複、本遺構の方が新しい。

3　溝

A－1号溝（第166図、PL.57）

A区北部に位置する南北方向の溝である。

位置　X＝29800～830　Y＝－42616～622

重複遺構　A－2号住居、A－2号溝と重複する。遺構平面確認により、本遺構はいずれよりも古いことが確認できた。

走向　N－10°－E

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は擂鉢状あるいは皿状である。A－2号溝とはほぼ直交し、そのすぐ南で途切れている。

規模　検出全長　30.8m　上幅　0.30～0.58m
底幅　0.17～0.34m　深さ　0.14～0.20m

遺物　なし

所見　A－2号住居との切り合い関係から、本遺構の時期は9世紀後半以前であると考えられる。

A－2号溝（第166図、PL.57）

A区北部に位置する東西方向の溝である。

位置　X＝29800～803　Y＝－42620～638

重複遺構　A－19号土坑、A－1号溝と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はA－19号土坑よりも古く、A－1号溝よりも新しいことが確認できた。

走向　N－87°－W

形態　ごくわずかに北に湾曲するものの、ほぼ直線的に走向する。断面は逆台形状である。調査区西側から現れ、A－1号溝と直交した後に消失する。この部分ではA－1号溝、A－2号溝ともに交差した直後に消失しており、この地点に何か意味がある可能性もある。

規模　検出全長　17.64m　上幅　0.72～0.60m
底幅　0.20～0.24m　深さ　0.40～0.45m

遺物　多数の土師器片とわずかな須恵器片などが出土しているが、小片のために図示できなかった。

所見　遺物の出土状況から、周辺の住居と同様に本遺構の時期は古代であると考えられる。

A－3号溝（第166図、PL.57）

A区のほぼ中央に位置する東西方向の溝である。

位置　X＝29782～785　Y＝－42656～662

重複遺構　A－5号溝とわずかに重複する。遺構平面確認により、本遺構はA－5号溝よりも古いことが確認できた。

走向　N－78°－E

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は皿状である。

規模　検出全長　5.36m　上幅　0.84～0.40m
底幅　0.60～0.24m　深さ　0.20m

遺物　なし

所見　本遺構や隣接しているA－5～7号溝は狭小な調査区に位置しているため、その走行がどのように続くのか判断し難かった。出土遺物もないことから、本遺構の時期は不明である。

A－4号溝（第166図、PL.58）

A区北部に位置する南北方向の溝である。

位置　X＝29807～824　Y＝－42626～629

重複遺構　A－24号土坑、A－41号土坑と重複する。土層断面の観察により、本遺構はA－24号土坑より古く、A－41号土坑より新しいことが確認できた。

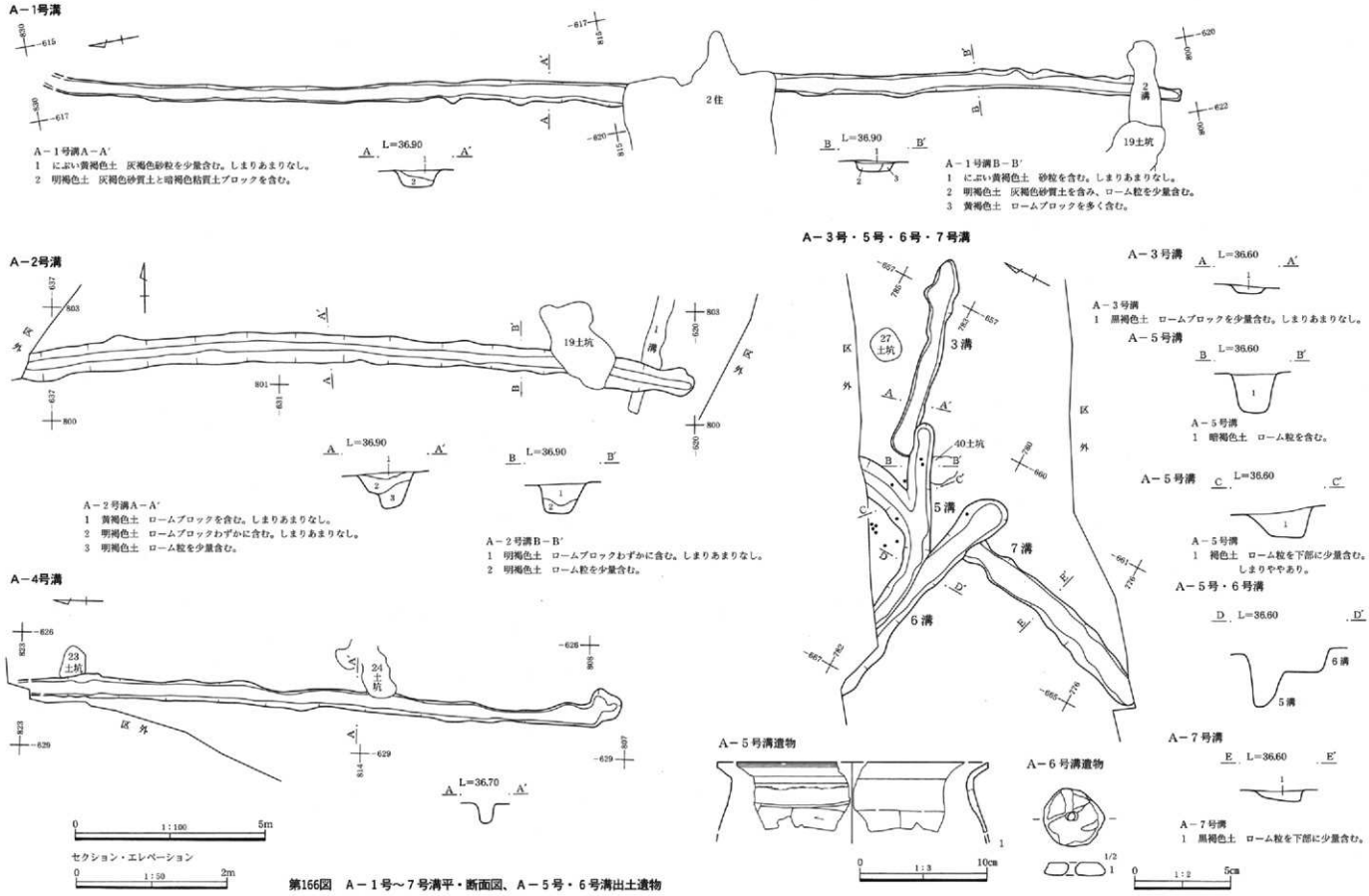
走向　N－2°－E

形態　南端部分を除いてほぼ直線的に走向する。断面はU字状である。調査区北壁から現れ、A－13号土坑付近で消失する。

規模　検出全長　15.88m　上幅　0.50～0.60m
底幅　0.30～0.35m　深さ　0.25m

遺物　壺の胴部片を中心とした土師器片が多数と、少数の須恵器片などが出土しているが、いずれも小片のために図示できなかった。

所見　時期を示す出土遺物はわずかであるが、それらが周辺住居と同様な時期であることから、時期は古代であると考える。



第166図　A－1号～7号溝平・断面図、A－5号・6号溝出土遺物

A－5号溝（第166図、第8表、PL.57・58・70）

A区の中央やや南寄りに位置する溝である。

位置　X＝29780～785　Y＝－42660～666

重複遺構　A－3・6号溝と重複する。遺構平面確認と出土遺物から判断すると、本遺構はいずれよりも新しい。

走向　N－74°－W

形態　弧を緩やかに描きながら走行し、途中で二方向に分流する。断面はやや深い逆台形状である。

規模　検出全長　5.50m　上幅　0.72～0.60m
　　底幅　0.30m　深さ　0.34～0.70m

遺物　1の土師器甕の口縁部片が出土している。その他、土師器甕・坏片、わずかな須恵器小片などが出土している。

所見　遺物の出土状況から、周辺の住居と同様に本遺構の時期は古代であると考える。

A－6号溝（第166図、第8表、PL.57・70）

A区中央やや南寄りに位置する東西方向の溝である。

位置　X＝29779～782　Y＝－42661～668

重複遺構　A－5・7号溝と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はA－5号溝よりも古く、A－7号溝より新しいことが確認できた。

走向　N－74°－W

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は逆台形状である。調査区北壁から現れ、南東方向に延びていき途中で確認できなくなる。

規模　検出全長　6.6m　上幅　0.38～1.00m
　　底幅　0.16～0.60m　深さ　0.31～0.34m

遺物　1の土製品が出土している。土師器の底部と思われる破片を丸く打ち欠き、その中心に穿孔したものであるが、用途不明である。その他、土師器片が約20点出土している。

所見　出土した遺物が本遺構に伴うものであると判断して、時期は古代であると考える。

A－7号溝（第166図、PL.57）

A区中央やや南寄りに位置する南北方向の溝である。

位置　X＝29774～781　Y＝－42662～665

重複遺構　A－6号溝と重複する。土層断面の観察により、本遺構はA－6号溝よりも古いことが確認できた。

走向　N－14°－E

形態　ごくわずか東側に湾曲するものの、ほぼ直線的に走向する。断面は皿状である。調査区南壁から現れ、A－6号溝と重複した後に確認できなくなる。

規模　検出全長　5.90m　上幅　0.62～0.83m
　　底幅　0.43～0.60m　深さ　0.22m

遺物　須恵器片が1点出土しているが、小片のため図示できなかった。

所見　A－6号溝との重複関係から、本遺構の時期は古代と考える。

A－8号溝（第167図、PL.58）

A区西側の調査区北壁付近に位置する溝である。調査区内にはわずかな距離がかかるのみである。

位置　X＝29762～765　Y＝－42687～689

重複遺構　なし

走向　N－20°－E

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は箱状である。調査区北壁から現れ、A－34号土坑の辺りで消失する。A－9号溝とほぼ並走する。

規模　検出全長　2.25m　上幅　0.3m
　　底幅　0.16m　深さ　0.15m

遺物　なし

所見　本遺構とA－9号溝とはほぼ並走しており、覆土や規模が類似すること、出土遺物がないことで共通している。組み合う関係の遺構である可能性がある。出土遺物がないので時期を確定することはできないが、本遺構はA－9号溝と同時期で、比較的新しい溝であると考えられる。

Ａ－９号溝（第167図、PL.58）

Ａ区南側の北壁付近に位置する溝であり、前掲の８号溝と平行している。

位置　X＝29761～765　Y＝－42688～690

重複遺構　Ａ－34号土坑と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はＡ－34号土坑よりも新しいことが確認できた。

走向　N－18°－E

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は皿状で、Ａ－８号溝よりも浅い。調査区北壁から現れ、Ａ－34号土坑と重複する辺りで確認できなくなる。Ａ－８号溝とほぼ並走する。

規模　検出全長　3.00m　上幅　0.3m
　　底幅　0.18m　深さ　0.06m

遺物　なし

所見　Ａ－８号溝の所見で述べたように、本遺構はＡ－８号溝と関連するものである可能性があり、同時期のものであると考えられる。

Ａ－10号溝（第167図、PL.58）

Ａ区南側に位置する溝である。両端が調査区内となり、全長5.7mと短い。

位置　X＝29759～761　Y＝－42684～691

重複遺構　Ａ－34・37号土坑、Ａ－11号溝と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はＡ－34号土坑・Ａ－11号溝よりも新しく、Ａ－37号土坑よりも古いことが確認できた。

走向　N－75°－W

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は逆台形状である。西側はＡ－11号溝と重複する辺りから現れ、Ａ－37号土坑と重複する付近で消失する。

規模　検出全長　5.70m　上幅　0.42～0.50m
　　底幅　0.28～0.35m　深さ　0.50m

遺物　土師器片が１点出土しているが、小片のため図示できなかった。

所見　出土遺物がわずかであるため、本遺構の時期は不明である。

Ａ－11号溝（第167図、PL.58）

Ａ区の南側に位置する溝である。

位置　X＝29752～764　Y＝－42689～693

重複遺構　Ａ－34・35号土坑、Ａ－10号溝と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はＡ－34・35号土坑よりも新しく、Ａ－10号溝よりも古いことが確認できた。

走向　N－17°－E

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は逆台形状である。調査区北壁から現れ、10mほど走向した後に消失する。

規模　検出全長　10.76m　上幅　0.40～0.58m
　　底幅　0.18～0.22m　深さ　0.20m

遺物　明確に本遺構に伴う遺物は確認できなかった。

所見　出土遺物がなかったため、本遺構の時期は不明である。

Ａ－12号溝（第167図、PL.58）

Ａ区の南側に位置する東西方向の溝である。

位置　X＝29765～767　Y＝－42679～686

重複遺構　Ａ－32・43号土坑と重複する。遺構平面確認と土層断面の観察により、本遺構はＡ－32号土坑よりも新しく、Ａ－43号土坑よりも古い。

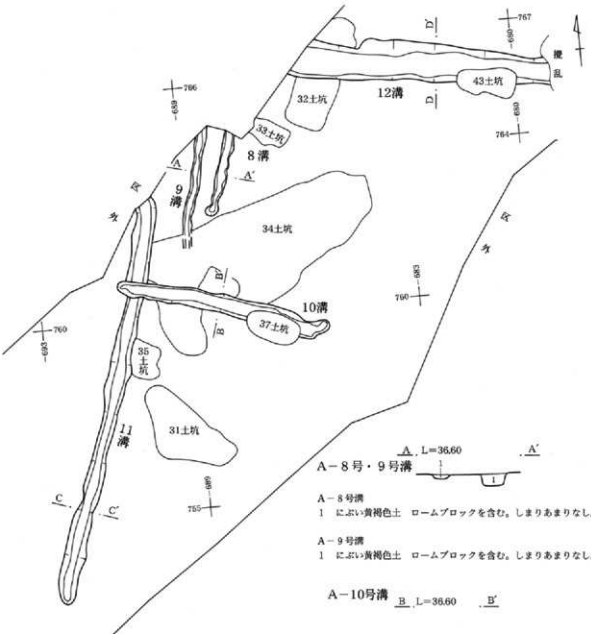
走向　N－82°－W

形態　ほぼ直線的に走向する。断面は皿状である。調査区北壁から現れ、攪乱によって破壊された後は確認できない。

規模　検出全長（6.65）m　上幅　0.66～1.10m
　　底幅　0.42～0.54m　深さ　0.24m

遺物　土師器片３点、陶磁器片１点が出土している。いずれも小片であるため、図示できなかった。また、Ａ－43号土坑からの流れ込みであると考えられる馬骨片２点が出土している。

所見　比較的しっかりとした溝であるが、調査区が狭小であるため全形を確認できなかった。出土遺物もわずかであるため、本遺構の時期は不明である。



第167図　A－8号～12号溝平・断面図

第3節　B区の調査

1　竪穴住居跡

B－1号住居（第168・169図、第8表、PL.60・71）
B区南西隅近くにある。

位置　X＝29738～741、Y＝－42824～829

重複遺構　B－3・4号土坑、B－4・7号溝と重複する。遺構平面確認の状況により、本遺構はいずれよりも古い。

形態　ほぼ東西を長軸にとる長方形

方位　N－78°－W

規模　長軸（3.52）m×短軸2.61m

面積　（8.70）㎡

壁高　全体に低く、9cm程度しか残っていない。

床面　住居の全体で、地山のロームを直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。

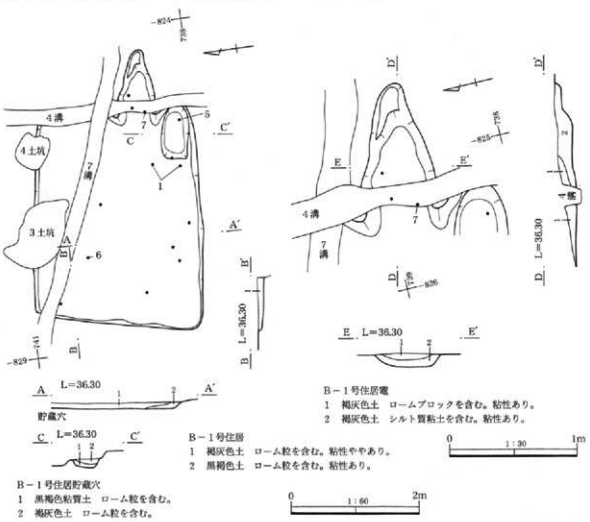
貯蔵穴　住居南東コーナー付近にある。長径は残存長で82cm、短径43cm、深さ14cmの楕円形である。

周溝　確認できなかった。

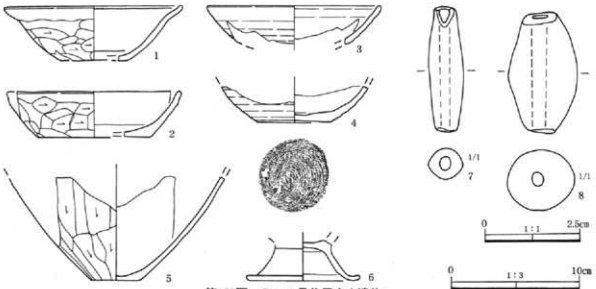
竈　住居東壁面のやや南寄りに造られている。焚き口幅50cm、長さ114cmである。

遺物　1・2は土師器坏、3・4は須恵器坏、5・6は土師器甕、7・8は土錘である。その他、土師器片や須恵器片、焼成粘土塊が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀後半であると考えられる。



第168図　B－1号住居・竈平・断面図



第169図　B－1号住居出土遺物

B－2号住居（第170～173図、第8表、PL.60・71・72）

B区中央やや東寄りにある。本住居の調査は平成14年度と17年度との2カ年にわたって行われた。

位置　X＝29745～750、Y＝－42752～758

重複遺構　B－1号溝と重複する。遺構平面確認から、本遺構はB－1号溝よりも古い。

形態　東西方向に長軸をとる長方形

方位　N－82°－W

規模　長軸5.29m×短軸3.52m

面積　16.51m²

壁高　10～16cm

柱穴　確認できなかった。

床面　掘方底面からローム・ブロックをわずかに含む褐色土を14cmほど埋めて、床面を構築している。

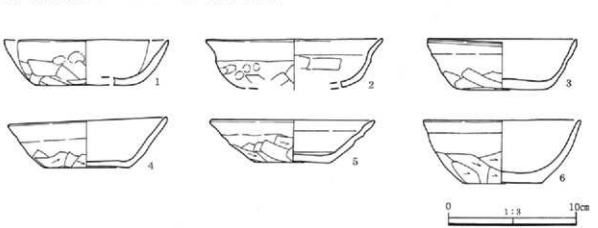
周溝　確認できなかった。

貯蔵穴　確認できなかった。

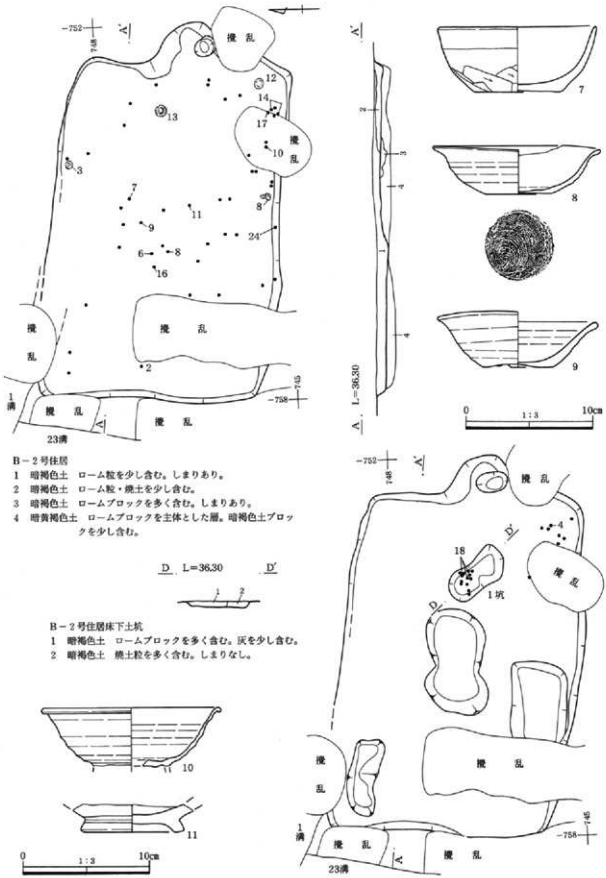
竈　住居東壁のほぼ中央にある。焚き口幅85cm、長さ62cmである。覆土には焼土や灰を含む。

遺物　比較的多くの遺物が出土している。1～7は土師器坏、8・9は須恵器坏、10～13は須恵器高台付埦、14は須恵器皿、15～18は土師器甕、19・20は土師器台付甕、21～24は土錘である。その他、土師器片や須恵器片多数、焼成粘土塊、灰釉陶器片などが出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は9世紀後半であると考えられる。



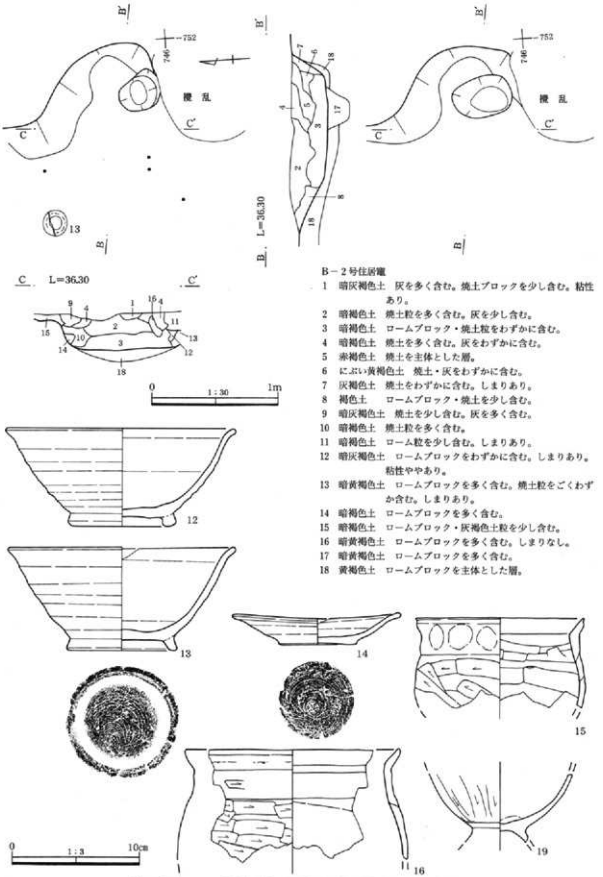
第170図　B－2号住居出土遺物（1）



B－２号住居
1　暗褐色土　ローム粒を少し含む。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒・焼土を少し含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。
4　暗黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。暗褐色土ブロックを少し含む。

B－２号住居床下土坑
1　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。灰を少し含む。
2　暗褐色土　焼土粒を多く含む。しまりなし。

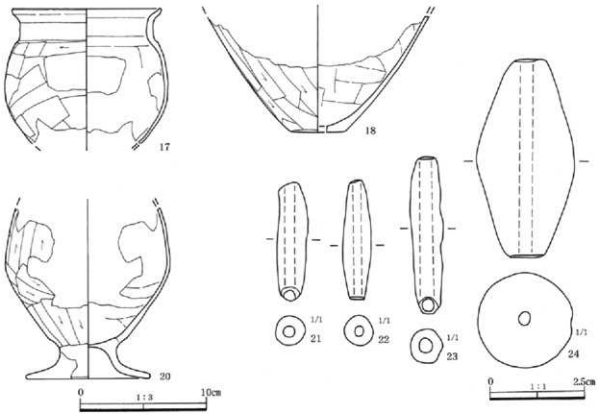
第171図　Ｂ－２号住居・掘方平・断面図、出土遺物（２）



Ｂ－２号住居電

1　暗灰褐色土　灰を多く含む。焼土ブロックを少し含む。粘性あり。
2　暗褐色土　焼土粒を多く含む。灰を少し含む。
3　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒をわずかに含む。
4　暗褐色土　焼土を多く含む。灰をわずかに含む。
5　赤褐色土　焼土を主体とした層。
6　にぶい黄褐色土　焼土・灰をわずかに含む。
7　灰褐色土　焼土をわずかに含む。しまりあり。
8　褐色土　ロームブロック・焼土を少し含む。
9　暗灰褐色土　焼土を少し含む。灰を多く含む。
10　暗褐色土　焼土粒を多く含む。
11　暗褐色土　ローム粒を少し含む。しまりあり。
12　暗灰褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。粘性ややあり。
13　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。焼土粒をごくわずか含む。しまりあり。
14　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
15　暗褐色土　ロームブロック・灰褐色土粒を少し含む。
16　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりなし。
17　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
18　黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。

第172図　Ｂ－２号住居電・掘方平・断面図、出土遺物（３）



第173図　Ｂ－２号住居出土遺物（３）

Ｂ－３号住居（第174・175図、第８表、PL.60・72）
Ｂ区西部北寄りにある。

位置　Ｘ＝29752～757、Ｙ＝－42803～809

重複遺構　南半部がＢ－10号溝と重複する。遺構平面確認と断面観察によって、本住居はＢ－10号溝よりも古いことが確認できた。南西隅とその付近は浅い撹乱により削平されている。

形態　東西方向に長軸をとるやや不整な長方形である。南西隅部が削平されているために不明確だが、南壁の向きからみて、西壁が東壁に比べてやや長くなるらしい。

方位　Ｎ－74°－Ｗ

規模　長軸3.56m×短軸3.08m

面積　11.12㎡

壁高　12cm

床面　掘方底面は部分的に深くなるところがあり、それ以外の部分を含めて、褐灰色土を埋め戻して床面としている。

柱穴　確認できなかった。

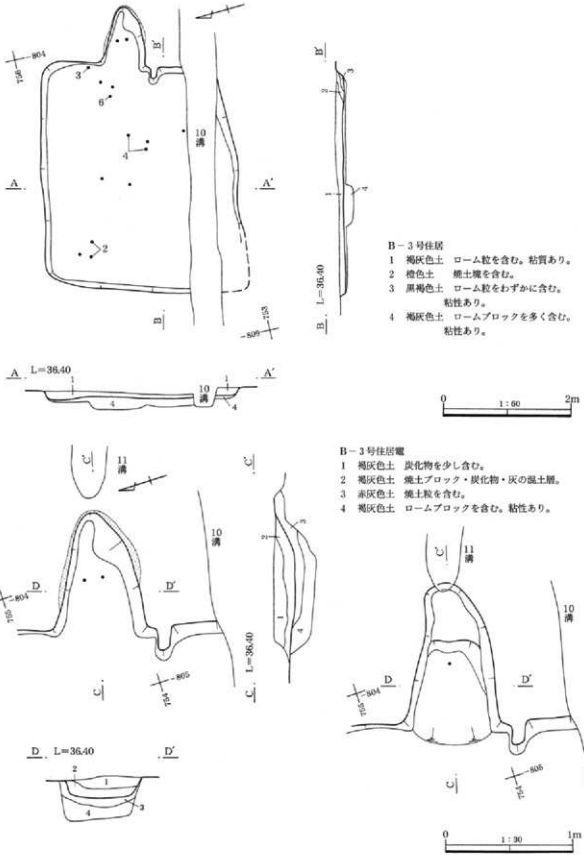
貯蔵穴　調査区内では未確認である。10号溝で破壊された南東隅部分にあった可能性がある。

周溝　確認できなかった。

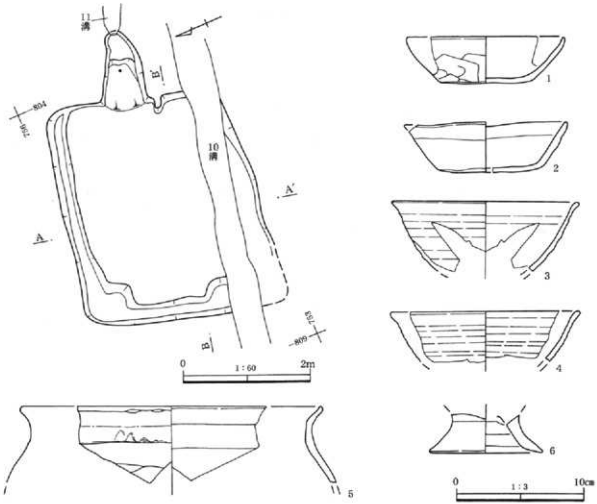
竈　住居東壁のほぼ中央に造られている。焚き口幅66cm、長さ92cmである。煙道付近はよく焼けて焼土となっていた。覆土には焼土・炭化物をやや多く含んでいた。焚き口や燃焼部の周辺は、掘方が掘り窪められている。

遺物　遺物は全域からまばらに出土している。１・２は土師器坏、３は須恵器埦、４は須恵器坏、５は土師器甕、６は土師器台付甕である。その他、土師器片や須恵器片、縄文土器片や瓦片などが出土している。

所見　出土遺物から、時期は９世紀代であると考えられる。



第174図　B－3号住居・竈平・断面図



第175図　B－3号住居掘方平面図、出土遺物

B－4号住居（第176・177図、第8表、PL.61・72・73）
B区中央やや北西寄りにある。

位置　X＝29749～753、Y＝－42780～785

重複遺構　B－2・10号溝と重複する。遺構平面確認により、本住居はいずれよりも古い。

形態　西北から東南にかけて長軸をとる長方形。

方位　N－80°－W

規模　長軸3.71m×短軸2.82m

面積　(9.45) m²

壁高　20cm

床面　中央やや北寄りに、床下土坑を1基確認したほか、南西隅にかけて大きく緩やかに凹んでいるところがある。床面の大部分は地山のロームを直接床面としているが、これらの土坑や凹み部分では、地山ロームから黒褐色土・褐灰色土を埋め戻して床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

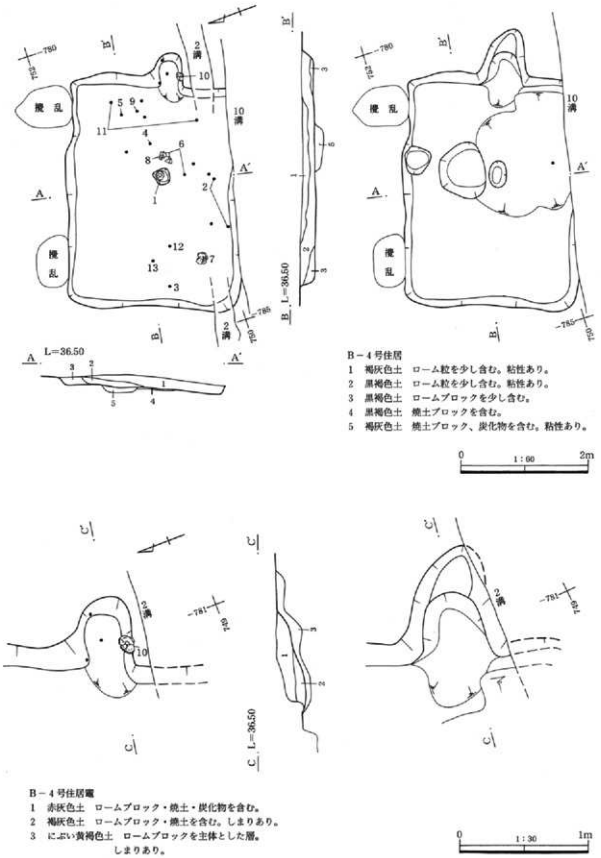
貯蔵穴　調査区内では未確認だが、破壊されている部分はわずかなので、本来なかった可能性が強い。

周溝　確認できなかった。

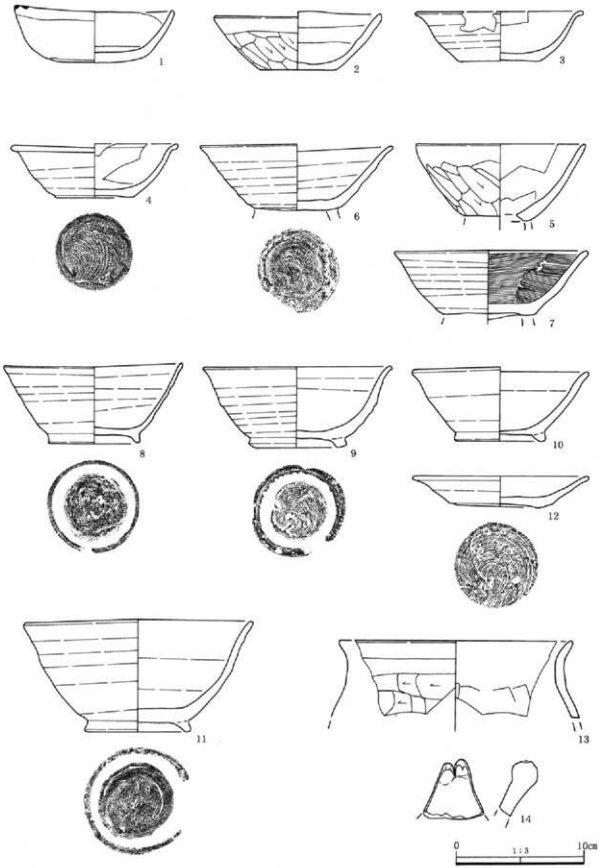
竈　住居東壁のほぼ中央に造られている。長さ47cm、焚き口幅46cmである。焚き口や燃焼部の周辺は、床面・掘方面ともに掘り窪められている。

遺物　出土遺物は多い。1・2は土師器坏、3・4は須恵器坏、5は土師器高台付埦、6～11は須恵器高台付埦、12は須恵器皿、13は土師器甕、14は縄文土器片である。その他、土師器片や須恵器片、焼成粘土塊、縄文土器片が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀後半であると考えられる。



第176図　B－4号住居・掘方・竈平・断面図



第177図　Ｂ－４号住居出土遺物

B－5号住居（第178・179図、第8表、PL.61・73）
B区中央やや北寄りにある。

位置　X＝29748～751、Y＝－42776～779

重複遺構　B－2・10号溝と重複する。遺構平面確認により、本住居はいずれよりも古いことが確認できた。

形態　B－10号溝によって、住居の南壁が壊されている。そのため全形は不明であるが、B－10号溝よりも南側は本住居の範囲外であることから、北東から南西にかけて長軸をとる長方形であると考えられる。

方位　N－76°－W

規模　長軸（2.37）m×短軸2.40m

面積　（5.68）m²

壁高　16cm

床面　土層断面観察から掘方底面より6cmほどロームブロックを主体とした黄褐色土で埋め土を行い、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

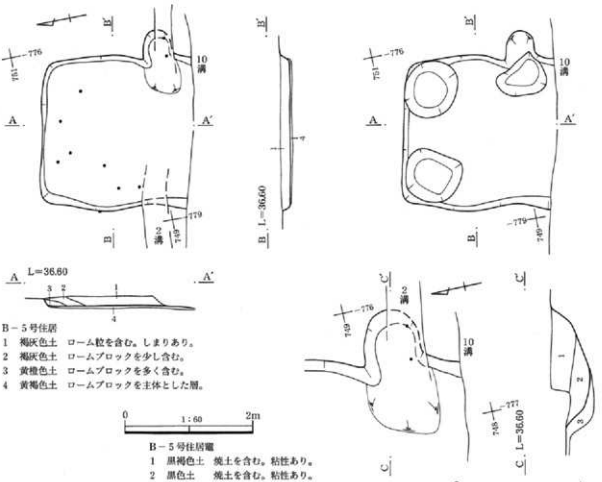
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

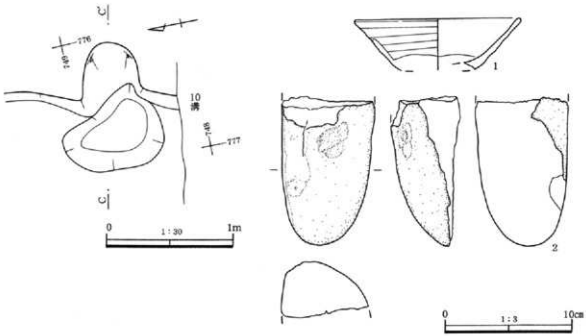
竈　住居東壁に造られている。長さ39cm、焚き口幅36cmである。埋土は焼土を含む黒褐色土である。焚き口周辺は、床面・掘方面ともに掘り窪められている。

遺物　報告できる遺物は少なく、須恵器坏1点と、敲石の破片1点のみである。その他、土師器片や須恵器片、焼成粘土塊が出土している。

所見　出土遺物と住居の形態から、時期は9世紀代であると考えられる。



第178図　B－5号住居・掘方・竈平・断面図



第179図　B－5号住居竈掘方平面図、出土遺物

B－6号住居（第180・181図、第8表、PL.62・63・73）
B区中央やや北東寄りにある。

位置　X＝29748～753、Y＝－42749～754

重複遺構　B－15号住居、B－37号土坑、B－18号溝と重複する。遺構平面確認と遺構断面観察から、本遺構はいずれよりも古い。

形態　B－15号住居によって東壁が壊されているが、方形か長方形であったと考えられる。

方位　東壁に竈を想定して　N－90°－E

規模　長軸（2.70）m×短軸3.92m

面積　（8.32）m²

壁高　上面からの削平により残存度に差が大きく、10～24cmである。

床面　掘方底面からローム・ブロックを含む暗褐色土を4～25cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　調査区内では未確認である。15号住居に破壊された可能性が大きい。

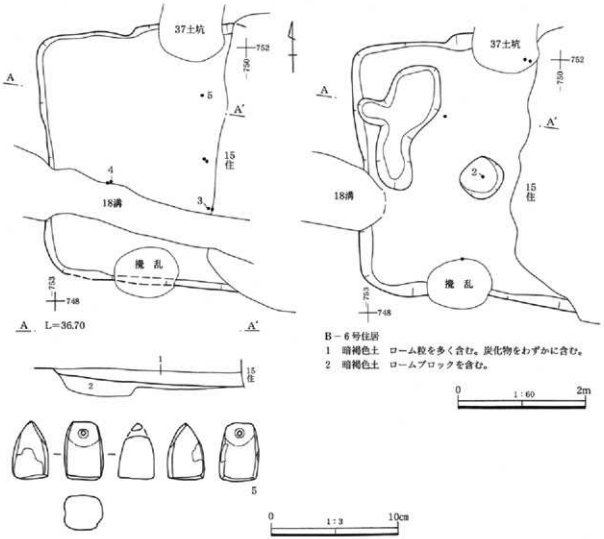
周溝　確認できなかった。

竈　本来は東壁に造られていたと考えられるが、B－15号住居によって壊されているために確認できなかった。

遺物　1は須恵器坏、2は灰釉陶器、3は土師器台付甕の台部、4は緑釉陶器片、5は砥石である。その他、土師器片や須恵器片多数が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀代であると考えられる。

第180図　B－6号住居出土遺物（1）



第181図　B－6号住居・掘方平・断面図、出土遺物（2）

B－7号住居（第182・183図、第8表、PL.61・73）

B区東部南寄りにある。

位置　X＝29727～732、Y＝－42740～744

重複遺構　なし

形態　ほぼ方形である。

方位　N－5°－E

規模　長軸3.28m×短軸2.80m

面積　7.45m²

壁高　16cm

床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含む暗黄褐色土を6～20cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　調査区内では未確認であり、北東隅の撹乱で破壊されている可能性もある。

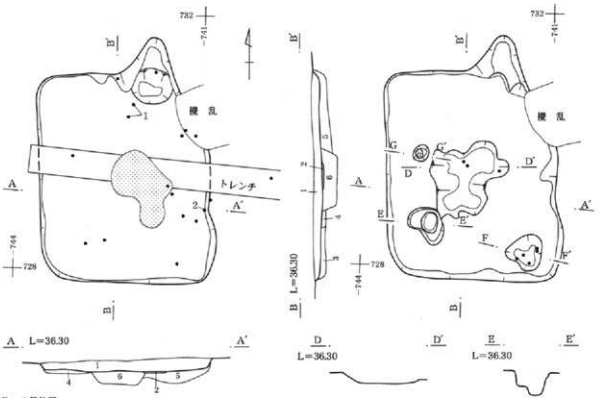
周溝　確認できなかった。

焼土　床面中央付近に径40cm～128cm、深さ1cmほどの焼土を検出した。この焼土は、本住居に伴うものであると考えられる。

竈　住居北壁のやや東寄りに造られている。焚き口幅74cm、長さ73cmである。床面の焚き口周辺には、径55～66cmほどの掘り窪みが検出された。覆土には焼土を含む。

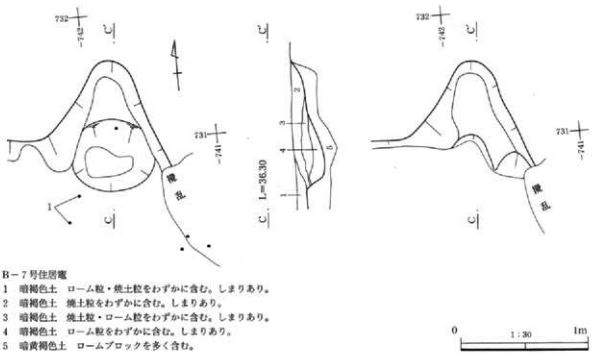
遺物　1は須恵器坏、2は土師器甕、3は砥石である。その他、多数の土師器片と少数の須恵器片が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀後半であると考えられる。



B－7号住居

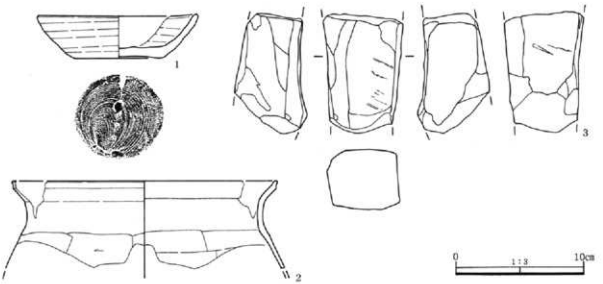
1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
2　赤褐色土　焼土を主体とした層。
3　暗褐色土　ロームブロックを少し含む。しまりあり。
4　暗黄褐色土　暗褐色土ブロックを少し含む。しまりあり。
5　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
6　暗黄褐色土　焼土を多く含む。しまりなし。



B－7号住居竈

1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
3　暗褐色土　焼土粒・ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
5　暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。

第182図　B－7号住居・掘方・竈平・断面図



第183図　B－7号住居出土遺物

B－8・10号住居（第184～187図、第8表、PL.61・73・74）

B区中央にある。北が8号、南が10号である。

位置　X＝29743～739、Y＝－42762～768

重複遺構　B－8・10号住居と名付けた2軒の住居が重複する。調査では、両住居の切り合い関係が判断できなかった。さらに整理作業においても、両住居から出土した遺物に時期差を認めることができなかった。2軒の住居ではなく竈を付け替えた1軒の住居の可能性もあるため、ここでは両住居を一括して報告する。

形態　B－8・10号住居の切り合い関係が不明であるため、それぞれの住居の形態は不明である。8号住居は北壁の方向が異なり、歪みがあるようである。

方位　N－11°－E（8号住居）
　　N－76°－W（10号住居）

規模　長軸5.14m×短軸3.80m

面積　16.82㎡

壁高　30cm

床面　掘方底面より10cmほど焼土を含む暗赤灰色土で埋め土を行い、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

8号住居貯蔵穴　調査区内では未確認。

10号住居貯蔵穴　住居南東コーナー付近にある。長径104cm、短径77cm、深さ20cmの楕円形である。

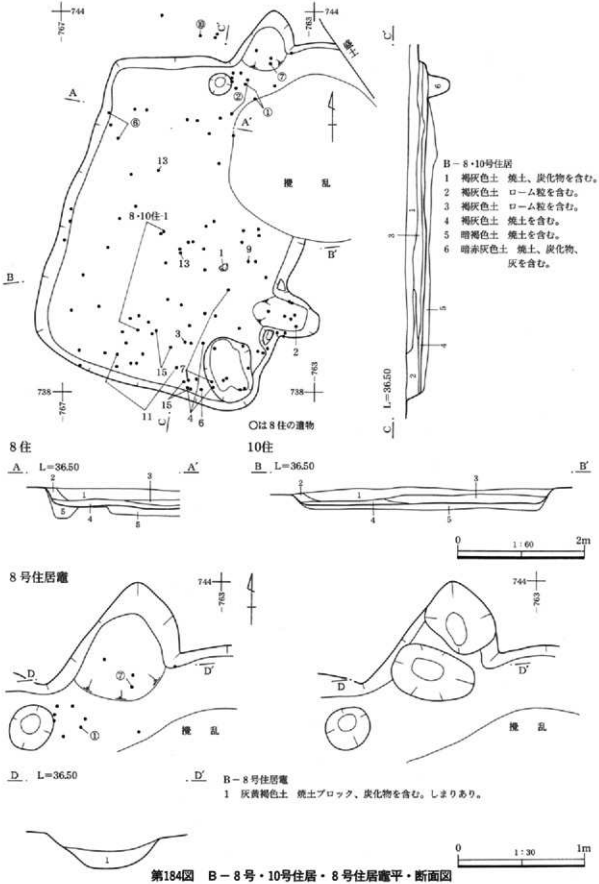
周溝　確認できなかった。

8号住居竈　発掘調査時では土坑としていたが、覆土に焼土ブロックと炭化物を含み、住居における位置から竈と判断した。住居東壁の中央やや東寄りに造られている。長さ48cm、焚き口幅89cmである。覆土には焼土・炭化物を含む。焚き口から燃焼部にかけては、床面・掘方面ともに掘り窪められている。

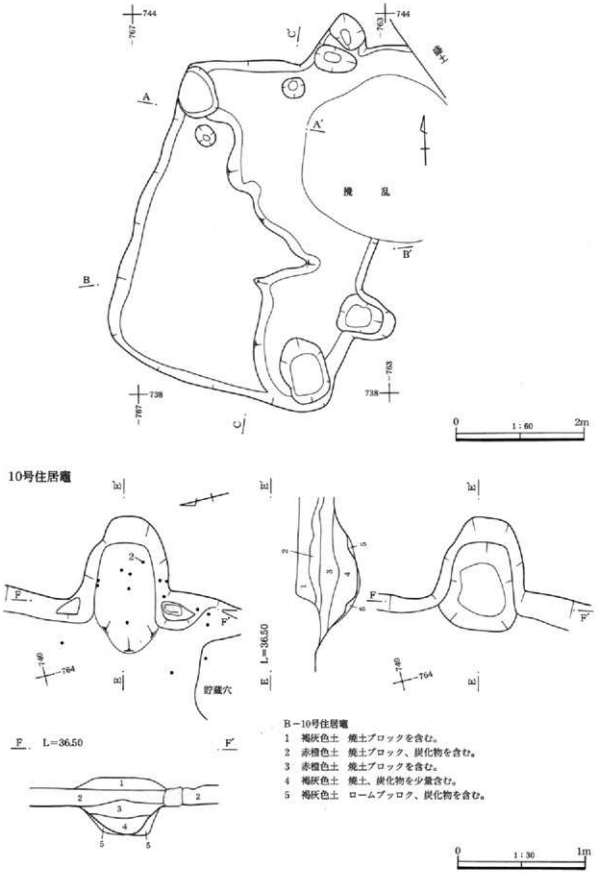
10号住居竈　住居東壁に造られている。長さ64cm、焚き口幅55cmである。右袖に袖石が認められた。焚き口から燃焼部にかけて、床面・掘方面ともに掘り窪められていた。

遺物　出土地点から、遺物の所属住居を判断した。8号住居からは土師器坏、須恵器高台付埦、土師器甕、灰釉陶器長頸瓶など13点、10号住居からは土師器坏、須恵器坏、灰釉陶器高台付埦、土師器甕など16点が出土し、1点の土師器高台付埦がどちらのものであるのか判断がつかなかった、その他、土師器片や須恵器片多数、灰釉陶器片、焼成粘土塊などが出土している。

所見　出土遺物から、両住居の時期はいずれも9世紀後半であると考えられる。

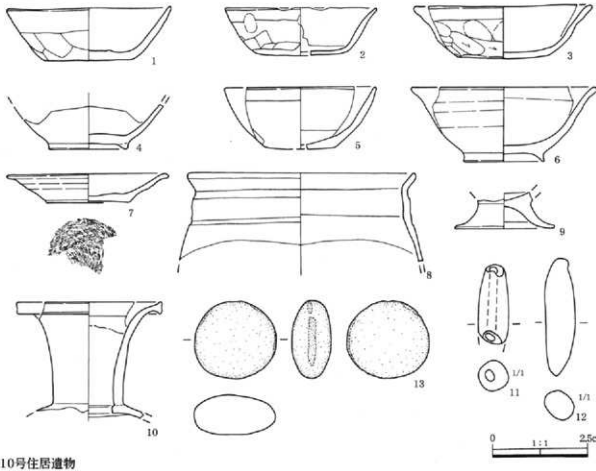


第184図　Ｂ－８号・10号住居・８号住居竈平・断面図

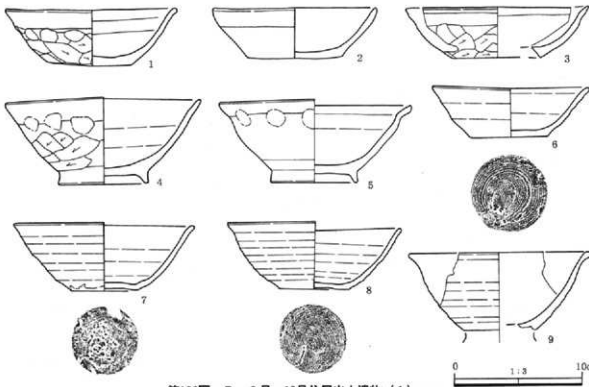


第185図　B－8号・10号住居掘方・10号住居竈平・断面図

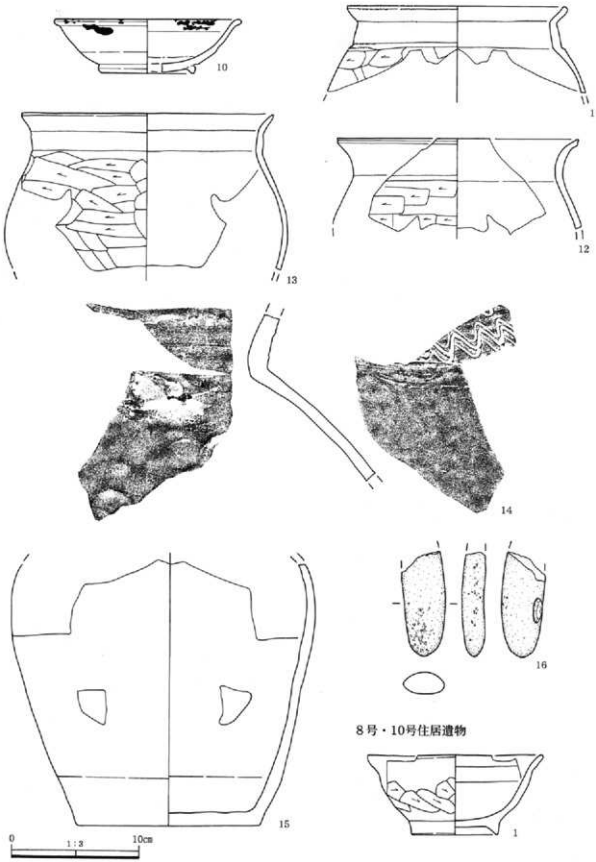
８号住居遺物



10号住居遺物



第186図　Ｂ－８号・10号住居出土遺物（１）



第187図　B－10号住居出土遺物（2）、8号・10号住居出土遺物

Ｂ－９号住居（第188･189図、第８表、PL.61･74）

Ｂ区中央南端近くにある。土坑・攪乱に大きく破壊され、残りがかなり悪い。

位置　Ｘ＝29728～733、Ｙ＝－42763～767

重複遺構　Ｂ－34・35号土坑、Ｂ－12号溝と重複する。遺構平面確認の状況により、本遺構はいずれよりも古い。

形態　土坑や攪乱によって西半部が壊されているため、全形は不明である。

方位　Ｎ－77°－Ｗ

規模　長軸（2.18）ｍ×短軸3.16ｍ

面積　4.93㎡

壁高　19cm

床面　地山のロームを直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。

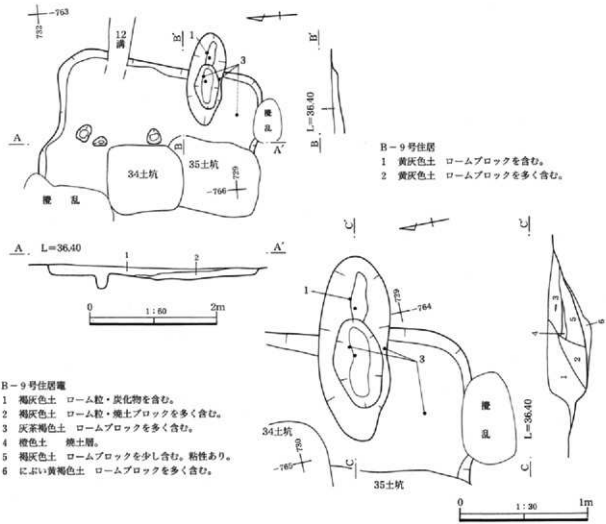
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

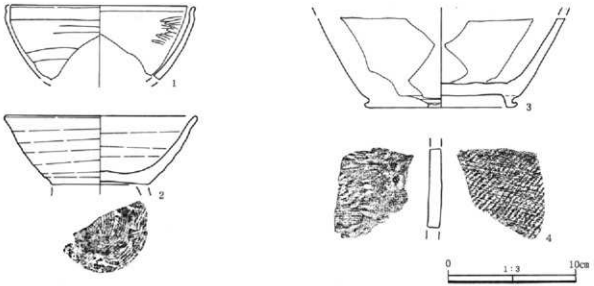
竈　住居東壁中央やや南寄りに造られている。長さ57cm、焚き口幅59cmである。焚き口手前から燃焼部にかけては、掘り窪められている。

遺物　遺物は竈付近を中心として出土しているが、量は少ない。１は土師器塊、２・３は須恵器高台付塊、４は須恵器甕である。その他、土師器片や須恵器片が出土している。

所見　出土遺物から、時期は９世紀代であると考えられる。



第188図　Ｂ－９号住居・竈平・断面図



第189図　B－9号住居出土遺物

B－11号住居（第190・191図、第8表、PL.62・75）

B区中央やや北寄りにある。電柱が設置されていたため、調査できない部分があった。

位置　X＝29747～751、Y＝－42761～766

重複遺構　なし

形態　電柱が設置されていたために、住居中央から南東隅にかけての範囲は調査できなかったが、全形は正方形に近い方形であると推定される。

方位　N－74°－E

規模　長軸3.34m×短軸3.34m

面積　(6.69) m²

壁高　20cm

床面　土層断面観察から、掘方底面より8cmほどロームブロックを含む黒褐色土で埋め土を行い、床面を構築していることが分かる。住居中央付近には床下土坑を確認した。

柱穴　確認できなかった。

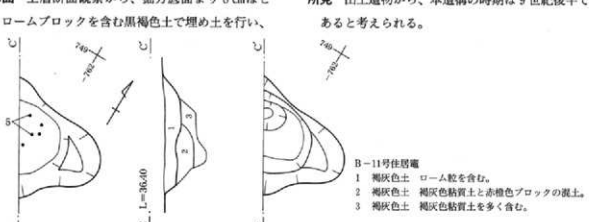
貯蔵穴　調査区内では未確認であり、調査できなかった南東隅付近にあった可能性が高い。

周溝　確認できなかった。

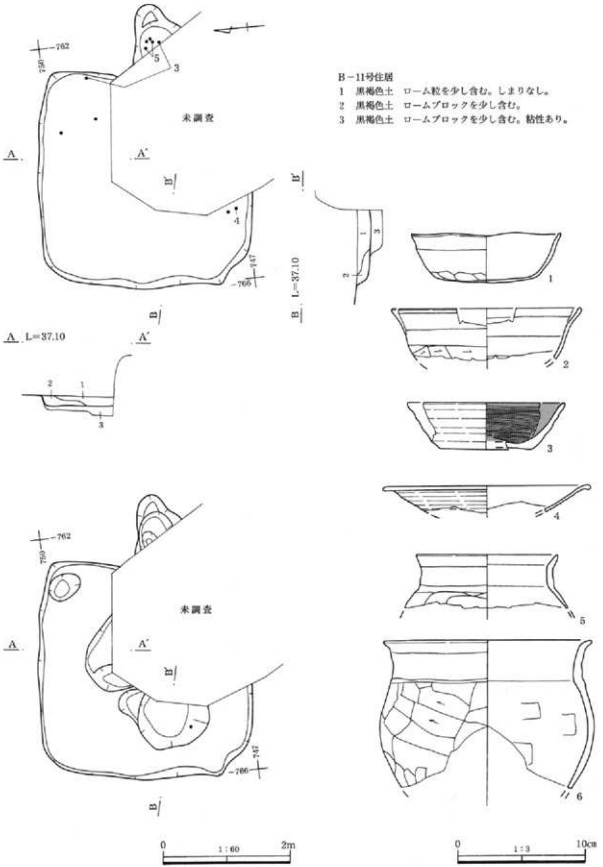
竈　住居東壁に作られている。焼土などは少なかったが、その位置から竈と判断した。煙道部分の調査しかできなかったため、全形は不明である。

遺物　1・2は土師器坏、3は須恵器坏、4は須恵器皿、5・6は土師器甕である。その他、土師器片や須恵器片がわずかに出土している。

所見　出土遺物から、本遺構の時期は9世紀後半であると考えられる。



第190図　B－11号住居竈平・断面図



第191図　B－11号住居・掘方平・断面図、出土遺物

Ｂ－12号住居（第192図、第８表、PL.62・75）

調査区中央南端近くにある。平成14・17年度の両年度調査区の境にあるが、平成14年度の調査では確認できなかったものである。

位置　Ｘ＝29727～732、Ｙ＝－42757～760

重複遺構　なし

形態　平成17年度調査で住居のおおよそ西半を確認したものの、平成14年度の調査では東半にあたる部分を確認できなかった。そのため、住居の全形は不明である。

方位　Ｎ－０°

規模　長軸4.20m×短軸（1.73）m

面積　（6.57）㎡

壁高　10～20cm

床面　地山のロームを直接床面としている。床面の高さは、住居の北側に向かって、ごくわずかに低くなっている。

柱穴　確認できなかった。

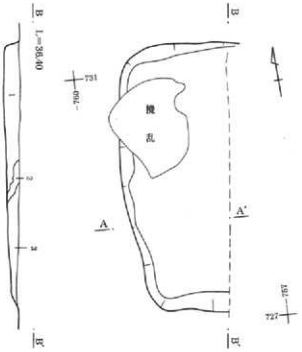
貯蔵穴　調査区内では未確認。

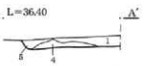
周溝　確認できなかった。

竈　調査区内では未確認。

遺物　遺物は非常に少なく、報告できるのは１の須恵器甕の破片のみである。その他、土師器片や須恵器片がわずかに出土している。

所見　住居の全形が不明であり、遺物の出土も少なかったため、時期は不明である。





Ｂ－12号住居
1　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含み、焼土粒を少し含む。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を多く含む。しまりあり。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。しまりあり。

第192図　Ｂ－12号住居平・断面図、出土遺物

B－13号住居（第193図、PL.62）

B区調査区南端の、中央やや西寄りにあり、大部分が調査区外となる。

位置　X＝29729～731、Y＝－42783～788

重複遺構　なし

形態　住居の大半が調査区外に位置しているため、全形は不明である。

方位　N－19°－E

規模　長軸（0.74）m×短軸3.23m

面積　1.68m²

壁高　24cm

床面　住居西側では、掘方底面より8cmほど焼土や炭化物を含む灰褐色土で埋め土を行い、床面を構築している。住居東側では、掘方底面より20cmほどロームブロックを主体とした黄橙色土で埋め土を行い、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

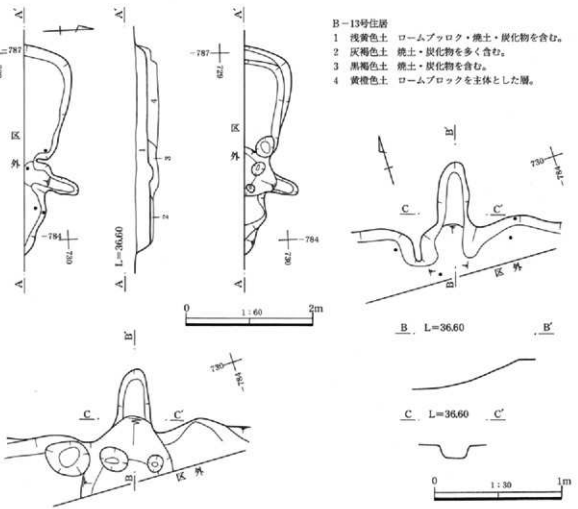
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

竈　住居北壁中央に造られている。燃焼部は住居内に、煙道部は壁から突出して構築されている。燃焼部長さ27cm、煙道部長さ42cm、焚き口幅17cmである。使用面の燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がっている。焚き口周辺は、床面・掘方底面ともに掘り窪められている。

遺物　土師器や須恵器の小破片がわずかに出土しているのみであり、報告できるものはなかった。

所見　住居の全形が不明であり、遺物の出土も少なかったため、時期は不明である。



第193図　B－13号住居・掘方・竈平・断面図

Ｂ－14号住居（第194・195図、第８表、PL.62・75）

Ｂ区東部北寄りにある。他の遺構と重複しており、一部分しか残っていなかった。

位置　X＝29748～753、Y＝－42749～754

重複遺構　Ｂ－17号住居、Ｂ－18号溝と重複する。遺構平面確認の状況により、本遺構はいずれよりも古い。

形態　南側をＢ－18号溝、北側をＢ－17号住居によって壊されているが、残存状況から方形か長方形であったと考えられる。

方位　N－78°－W

規模　長軸4.25m×短軸（2.00）m

面積　5.43m²

壁高　10cm

床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含むにぶい黄褐色土を10cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

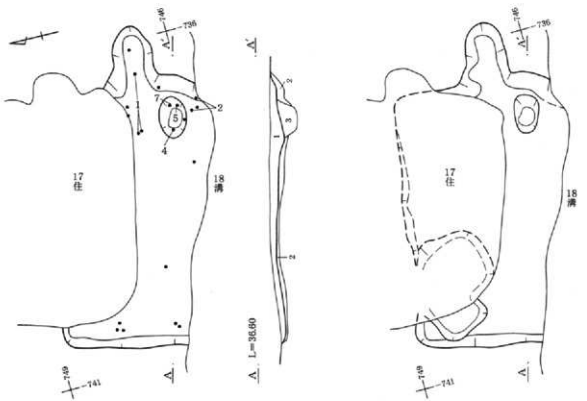
貯蔵穴　竈右脇の付近にある。長径66cm、短径44cm、深さ20cmの楕円形である。

周溝　確認できなかった。

竈　住居東壁に造られている。焚き口幅52cm、長さ94cmである。覆土には焼土を含む。

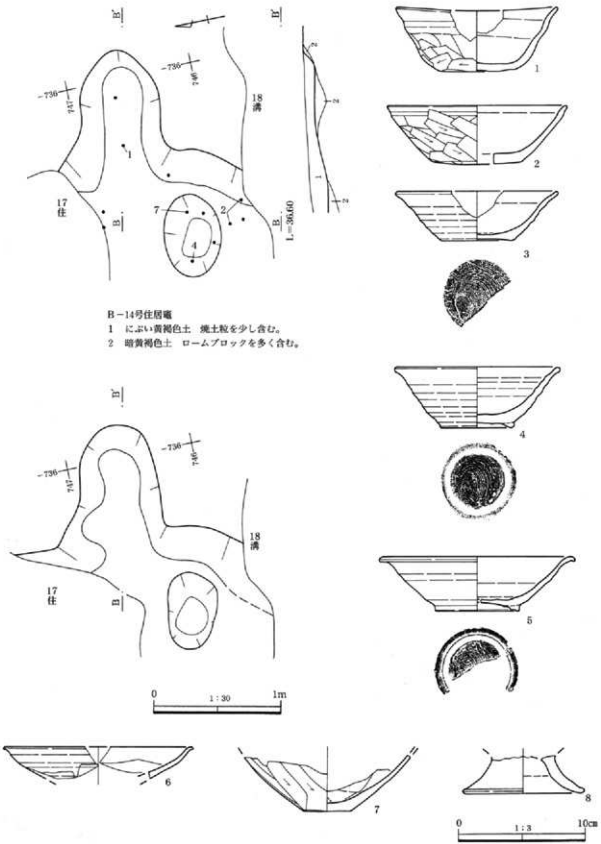
遺物　１・２は土師器坏、３は須恵器坏、４・５は須恵器高台付埦、６は灰釉陶器皿、７・８は土師器甕である。その他、土師器片や須恵器片、焼成粘土塊、灰釉陶器片、陶磁器片、縄文土器片、石が出土している。

所見　出土遺物から、時期は９世紀代であると考えられる。



Ｂ－14号住居
1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を少し含む。
2　にぶい黄褐色土　ロームブロックを主体とする。しまりあり。
3　暗褐色土　ロームブロックを含む。貯蔵穴の覆土。

第194図　Ｂ－14号住居・掘方平・断面図



第195図　B－14号住居竈掘方平・断面図、出土遺物

B－15号住居（第196～199図、第8表、PL.62・63・75・76・83）

B区中央北東寄りにある。

位置　X＝29747～758、Y＝－42745～751

重複遺構　A－6号住居、A－18号溝と重複する。遺構平面確認の状況により、本遺構はA－18号溝よりも古くA－6号住居よりも新しい。

形態　A－18号溝によって壊されているが、隅丸方形であると考えられる。

方位　N－80°－W

規模　長軸4.40m×短軸4.83m

面積　20.95m²

壁高　34cm

床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含む褐色土を18cmほど埋めて、床面を構築している。

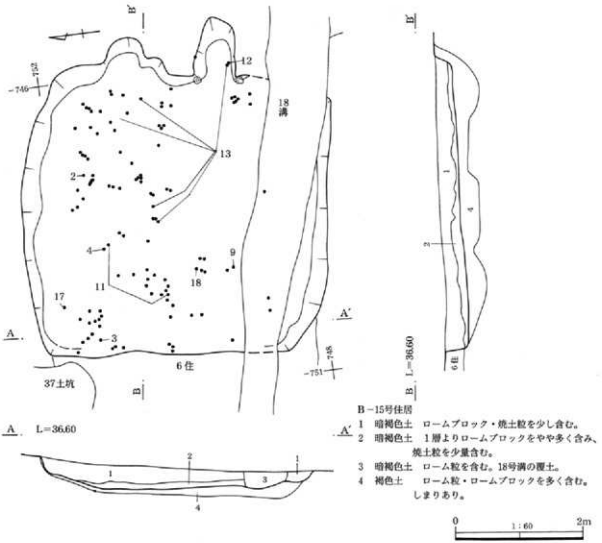
柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

竈　住居東壁のやや南寄りに造られている。焚き口幅58cm、長さ64cmである。両袖に袖石が残っていた。覆土には、灰や焼土、炭化物を含む。

遺物　遺物は全域から出土している。1～8・15は土師器坏である。4点には墨書があり、3・4は「内」、5・15は判読不能である。9・10は須恵器高台付埦、11・12は土師器甕、13は同台付甕、14は緑釉陶器坏、16は土錘、17・18は砥石である。



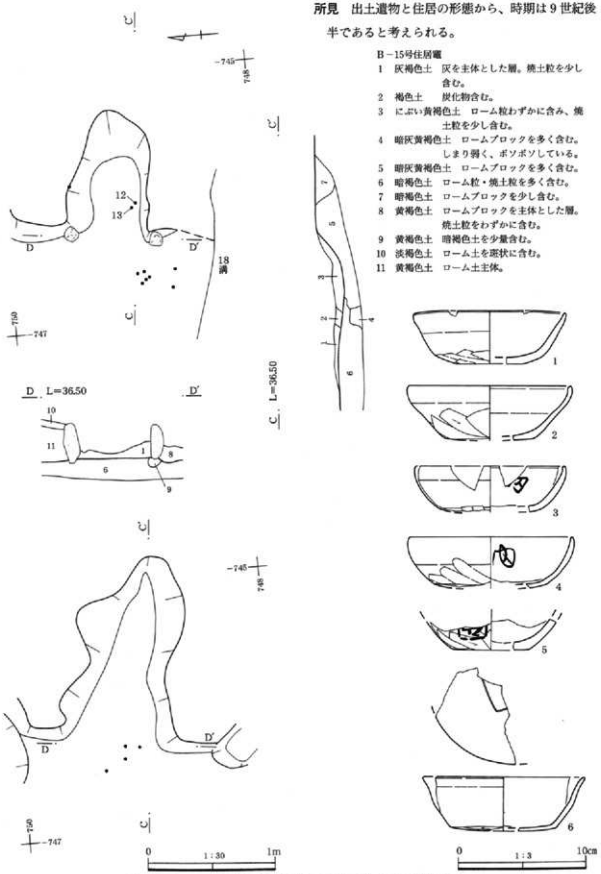
B－15号住居
1　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒を少し含む。
2　暗褐色土　1層よりロームブロックをやや多く含み、焼土粒を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。18号溝の覆土。
4　褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまりあり。

第196図　B－15号住居平・断面図

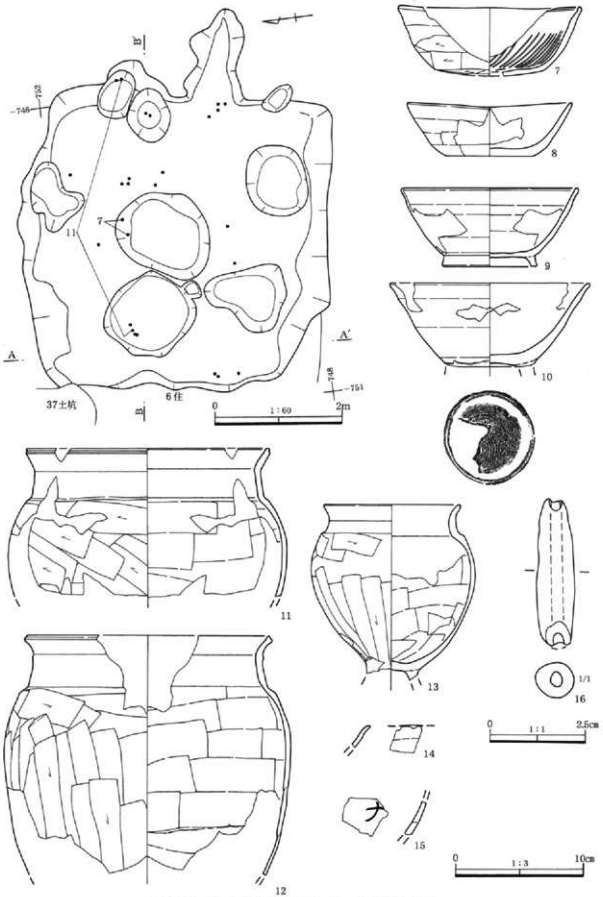
所見　出土遺物と住居の形態から、時期は９世紀後半であると考えられる。

B－15号住居竈

1　灰褐色土　灰を主体とした層。焼土粒を少し含む。
2　褐色土　炭化物含む。
3　にぶい黄褐色土　ローム粒わずかに含み、焼土粒を少し含む。
4　暗灰黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり弱く、ボソボソしている。
5　暗灰黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
6　暗褐色土　ローム粒・焼土粒を多く含む。
7　暗褐色土　ロームブロックを少し含む。
8　黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。焼土粒をわずかに含む。
9　黄褐色土　暗褐色土を少量含む。
10　淡褐色土　ローム土を斑状に含む。
11　黄褐色土　ローム土主体。



第197図　B－15号住居竈・掘方平・断面図、出土遺物（1）



第198図　B－15号住居掘方平面図、出土遺物（2）

第199図　Ｂ－15号住居出土遺物（３）

Ｂ－16号住居（第200図）

Ｂ区中央南端にあり、攪乱に大きく破壊され、大部分が調査区外となるため、ごく一部の調査にとどまった。

位置　Ｘ＝29725～727、Ｙ＝－42758～762

重複遺構　なし

形態　西側が攪乱によって破壊されるほか、住居の大半が調査区外に位置しているため、全形は不明である。

方位　Ｎ－87°－Ｗ

規模　長軸（3.32）ｍ×短軸（1.58）ｍ

面積　（3.92）㎡

壁高　10～24cm

床面　大部分の範囲で地山のロームを直接床面としている。調査した範囲の中央付近では、床下土坑が認められた。

柱穴　確認できなかった。

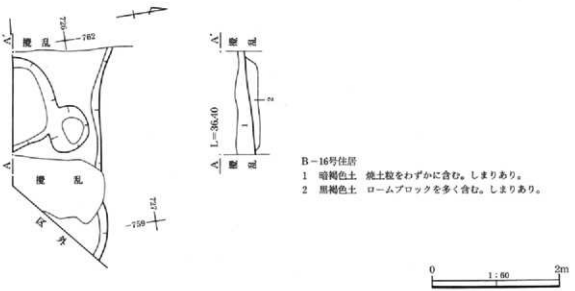
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

竈　調査区内では未確認。

遺物　土師器片や須恵器片がわずかに出土しているが、小破片のため図示できなかった。

所見　住居の大半は調査区外に位置し、調査区内の範囲にも広く攪乱が及んでいたため、全形が不明であり、さらに出土遺物もわずかであるため、時期は不明である。



第200図　Ｂ－16号住居掘方平・断面図

B－17号住居（第201・202図、第8表、PL.62・76）

B区東部北寄りにある。

位置　X＝29746～751、Y＝－42735～741

重複遺構　B－14号住居と重複する。遺構断面観察から、本遺構はB－14号住居よりも新しい。

形態　ほぼ方形である。

方位　N－79°－W

規模　長軸3.56m×短軸3.34m

面積　11.52㎡

壁高　16cm

床面　掘方底面からローム・ブロックを多く含む黄褐色土を8cmほど埋めて、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

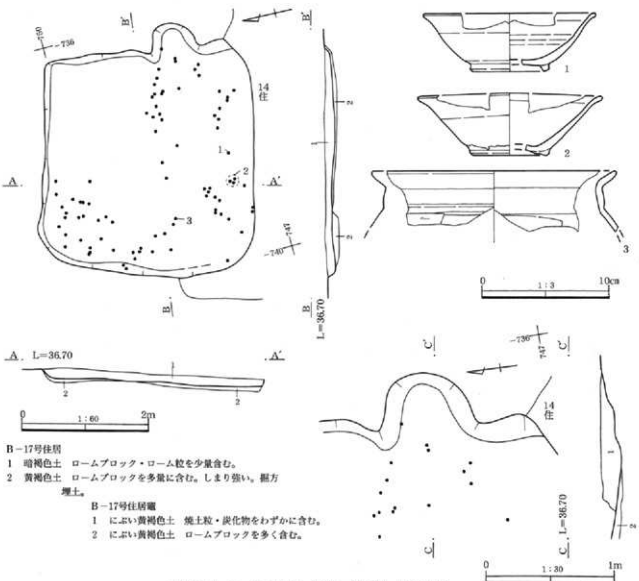
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

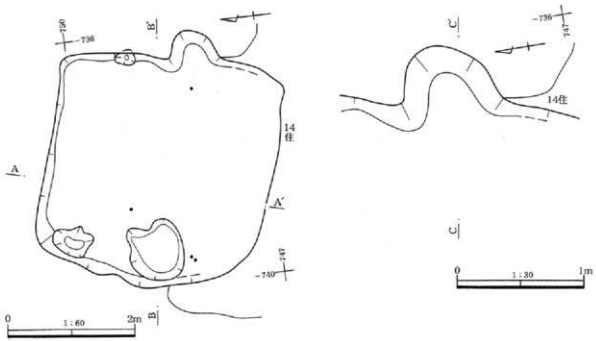
竈　住居東壁のやや南寄りに造られている。焚き口幅69cm、長さ47cmである。覆土には、焼土・炭化物をわずかに含む。

遺物　遺物は全域から出土している。1・2は須恵器高台付埦、3は土師器甕である。その他、土師器片多数、須恵器片、縄文土器片、陶器片、石が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀後半であると考えられる。



第201図　B－17号住居・竈平・断面図、出土遺物



第202図　Ｂ－17号住居・竈掘方平面図

Ｂ－18号住居（第203･204図、第８表、PL.63･76･83）

Ｂ区北東隅付近にある。大きく削平され、掘方しか残っていなかった。

位置　Ｘ＝29748～753、Ｙ＝－42725～730

重複遺構　なし

形態　南側が調査区外に位置しているため、全形は不明である。

方位　Ｎ－２°－Ｅ

規模　長軸3.70m×短軸（2.94）m

面積　（9.53）㎡

壁高　８cm

床面　上部からの削平が床面まで及び、遺存状態が悪い。かろうじて掘方面を検出するのみであった。

柱穴　確認できなかった。

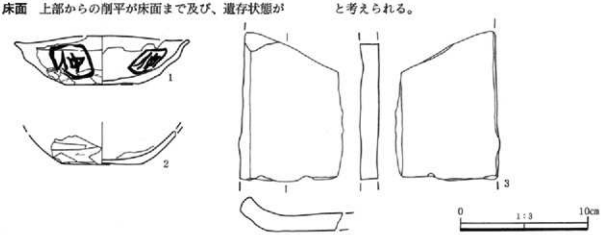
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

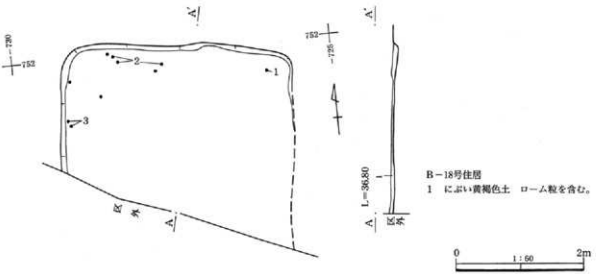
竈　調査区内では未確認。

遺物　１・２は土師器坏である。１には「仲」を□で囲んだ墨書がある。３は十能瓦で混入品である。その他、土師器片や須恵器片、焼成粘土塊が出土している。

所見　遺存状態が悪く、遺物もあまり確認できなかった。詳細は不明であるが、時期は古代であると考えられる。



第203図　Ｂ－18号住居出土遺物



第204図　B－18号住居掘方平・断面図

B－19号住居（第205・206図、第8表、PL.63・76）

B区北東隅付近にある。南側が調査区外となる。

位置　X＝29746～750、Y＝－42179～724

重複遺構　なし

形態　南半部が調査区外となるため、全形は不明である。

方位　N－61°－W

規模　長軸3.41m×短軸（2.54）m

面積　（8.46）m²

壁高　14cm

床面　掘方底面にはピット状に掘られた部分もあるがほぼ平坦である。その底面からローム・ブロックを含む黄褐色土を6～14cmほど埋めもどし、床面を構築している。

柱穴　確認できなかった。

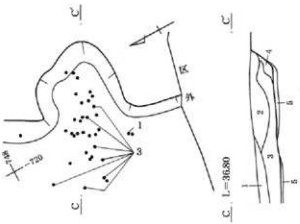
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

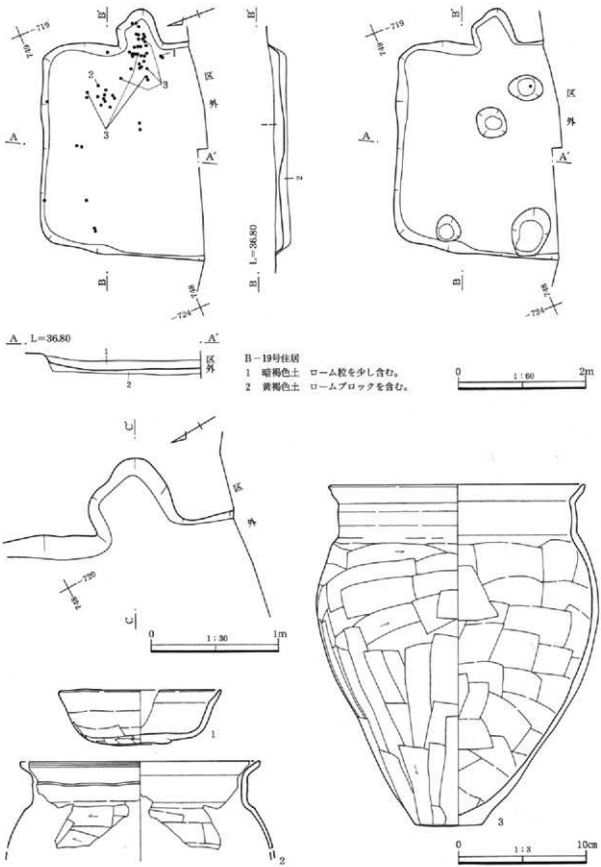
竈　住居東壁に造られている。焚き口幅68cm、長さ50cmである。覆土には焼土を含んでいる。床面の燃焼部から焚き口部にかけて、土器片が数多く出土した。

遺物　遺物は竈内とその前面、住居北西隅付近を中心として出土している。1は土師器坏、2・3は土師器甕である。その他、土師器片多数、須恵器片、焼成粘土塊、陶磁器片、縄文土器片が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀後半であると考えられる。



第205図　B－19号住居竈平・断面図



第206図　Ｂ－19号住居・掘方・竈掘方平・断面図、出土遺物

B－20号住居（第207・208図、第8表、PL.64・76・83）

B区北東隅付近にあり、北側が調査区外となる。

位置　X＝29750～754、Y＝－42717～722

重複遺構　なし

形態　北側の一部が調査区外となるが、ほぼ東西に長軸をとる長方形であると考えられる。

方位　N－72°－W

規模　長軸3.96m×短軸（3.00）m

面積　（10.28）㎡

壁高　10cm

床面　掘方該面からローム粒をわずかに含む黄褐色土を3～16cmほど埋めて、床面を構築している。部分的に地山のローム面を直接床面としているところがある。

柱穴　確認できなかった。

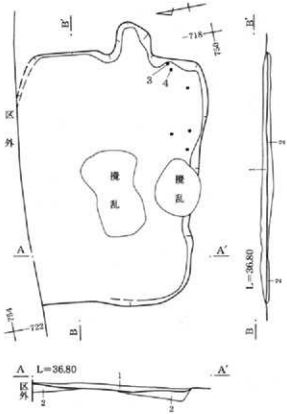
貯蔵穴　調査区内では未確認。

周溝　確認できなかった。

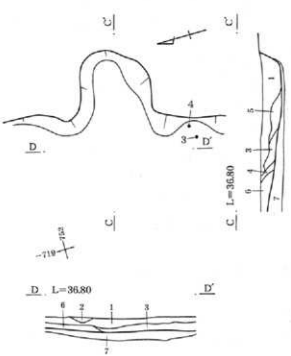
竈　住居東壁のやや南寄りに造られている。焚き口幅60cm、長さ57cmである。

遺物　遺物は住居南東隅付近を中心に出土している。1・2は土師器坏、3は土師器甕、4は土師器台付甕である。その他、土師器片多数、須恵器片、縄文土器片が出土している。

所見　出土遺物から、時期は9世紀代であると考えられる。



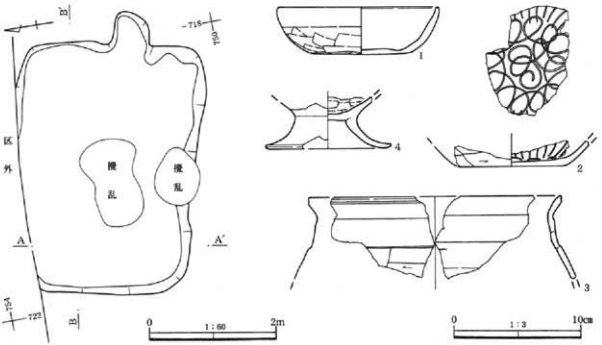
B－20号住居
1　暗褐色土　ローム粒を少し含む。しまりややあり。
2　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。



B－20号住竈
1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　灰白色土　粘土質の層。しまりあり。
3　褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
4　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
6　褐色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
7　黄褐色土　暗褐色土含む。しまりあり。

0　1:60　2m　　0　1:30　1m

第207図　B－20号住居・竈平・断面図



第208図　B－20号住居掘方平面図、出土遺物

B－21号住居（第209・210図、第8表、PL.64・77）

B区東端中央付近にある。18号溝で南半分が破壊されている。

位置　X＝29734～743、Y＝－42720～724

重複遺構　B－18号溝と重複する。遺構平面確認の状況により、本遺構はB－18号溝よりも古い。

形態　中央以南がB－18号溝によって壊されており、全形は不明である。

方位　N－3°－E

規模　長軸（1.00）m×短軸3.16m

面積　（2.82）㎡

壁高　10cm

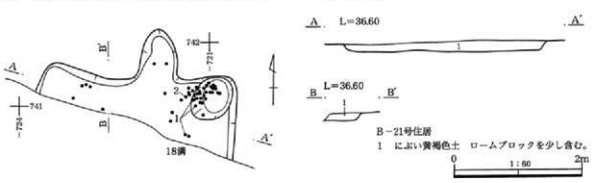
床面　残存状況がよくないため、掘方の調査のみとなった。多少の凹凸はあるが、掘方底面は概ね平坦である。

貯蔵穴　住居南東隅付近にある。長径76cm、短径60cm、深さ20cmの楕円形であり、周囲から多くの遺物が出土した。

竈　住居北壁のやや東寄りに造られている。焚き口幅63cm、長さ71cmである。覆土には焼土を多く含む。

遺物　1は須恵器高台付埦、2は土錘である。その他、土師器片多数、須恵器片、陶磁器片、焼成粘土塊、石、瓦が出土している。

所見　詳細は不明であるが、時期は古代であると考えられる。



第209図　B－21号住居平・断面図